

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 25

—更埴市内その4—

こうしょくじょうり やしろ 更埴条里遺跡・屋代遺跡群

おおざかい くぼがわら
(含む大境遺跡・窪河原遺跡)

—弥生・古墳時代編—



1998.3

日本道路公団東京第二建設局
長野県教育委員会
助長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 25

—更埴市内その4—

こうしょくじょうり 更埴条里遺跡・やしろ 屋代遺跡群
(おおごかい 含む大境遺跡・くぼがわら 窪河原遺跡)

—弥生・古墳時代編—

1998.3

日本道路公団東京第二建設局
長野県教育委員会
助長野県埋蔵文化財センター



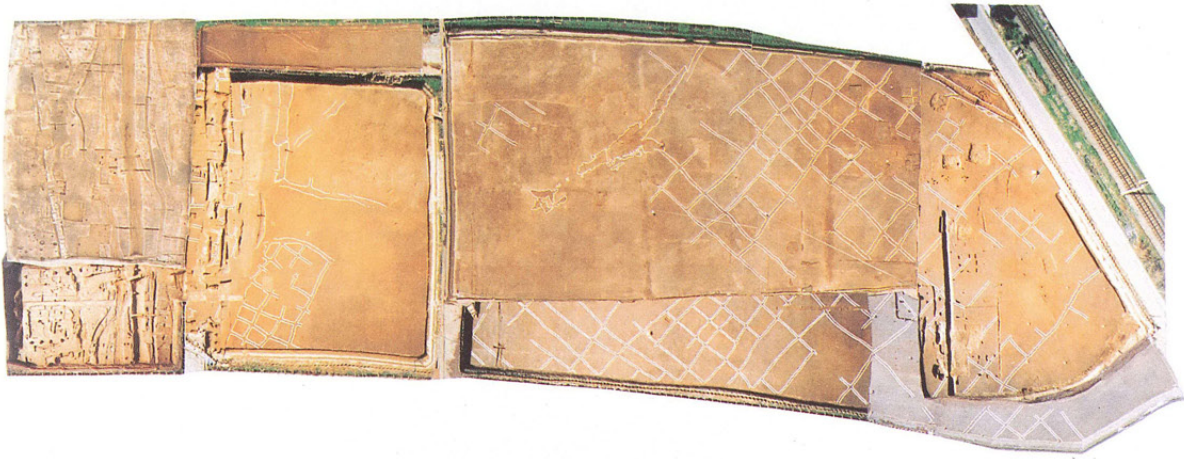
遺跡遠景 (株)協同測量社 提供



屋代遺跡群②区東壁 基本土層 (図54に対応)



屋代遺跡群②区 VI層下面検出遺構 (弥生時代)



屋代遺跡群①f～②区 VI層上面検出水田跡 (古墳時代)



屋代遺跡群⑤b区 VI層上面調査風景

序

上信越自動車道は群馬県境から新潟県境へと、東北信地域を縦断する形で建設が進められ、すでに新潟県・中郷インターチェンジまでの供用が開始されています。下り線を北へ向かい、坂城町から続くいくつかのトンネルを通過し終えますと、前方には善光寺平南部の広々とした平地が目飛び込んできます。本書に掲載される更埴条里遺跡と屋代遺跡群の範囲は、この有明トンネル北側出口直下の低地から更埴ジャンクションに至る全長約2.3kmの範囲にあたります。

この地区の発掘調査は平成3年度から6年度にかけて行われ、縄文時代から江戸時代にわたる遺構・遺物が発見されました。整理作業は平成7年度より開始しました。遺物収納箱で1万箱に達しようかという膨大な資料を公表するにあたり、報告書は時代別の4冊と、昨年度刊行しました『長野県屋代遺跡群出土木簡』、平成11年度刊行予定の『総論編』を加えた全6冊を予定しております。本書は第3分冊の『弥生・古墳時代編』にあたります。各時代別報告書では、2km以上にわたる範囲を全て発掘したことを踏まえ、それぞれの時代における屋代・雨宮地区全域の景観が復元できるよう努めました。特に、考古資料から導き出せる人々の生活の跡とともに、それらと密接な関わりを持つ環境復元にも力点を置きました。

今回の調査では、自然堤防上（主に屋代遺跡群）の集落と自然堤防背面から後背湿地（更埴条里遺跡）に広がる水田、といった現代にも通じる景観が弥生時代（約2,000年前）には成立していたことが解りました。特に、この地の水田開発は早く、弥生時代前期並行期（紀元前5世紀頃）には稲が持ち込まれていたと思われます。また、弥生時代中期に本格的に掘削された水路は、古墳時代にかけて改修や新設が繰り返され、水田開発技術が日増しに進歩して行く様子がうかがえます。古墳時代中期（5世紀）の水田跡が、この地域でははじめて見つかり、しかも広範囲に存在していた点も大きな成果の一つです。

このように、水田の開発が富を生み、有力豪族を育て上げて、県内最大最古の森將軍塚古墳（4世紀）をはじめとする前方後円墳の築造につながったと考えられます。古墳時代における有力者の存在は、屋代遺跡群の古墳時代集落の北側で発見された祭祀遺構（5世紀）からもうかがうことができます。大規模な導水施設を伴う祭祀場の発見は全国的にも注目され、日本考古学協会編『水辺の祭祀』（1966）に取り上げられました。また、昨年度報告されました木簡の記載内容からは、7世紀から8世紀にかけて、この地が「信濃国」の中心地の一つであったことが示唆されました。本編では、古墳時代に、すでにその基盤が形成されていたことを明らかにすることができました。

最後になりましたが、発掘調査開始から本報告書の刊行に至るまで、深い御理解と御協力をいただいた日本道路公団関東第二建設局、同上田工事事務所、長野県土木部高速道局、更埴市、同教育委員会、ちくま農業協同組合、地区対策委員会、地権者会等の関係機関、また、地元協力者の方々、発掘・整理作業に従事された多くの方々、直接御指導・御助言をいただいた長野県教育委員会文化財保護課、本書の刊行までにこぎつけた県埋文センター職員の努力に対し、心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成9年3月10日

財団法人 長野県埋蔵文化財センター

理事長 戸田 正明

例 言

1. 本編は、上信越自動車道建設工事にかかわる更埴条里遺跡、屋代遺跡群および屋代遺跡群に属する大境遺跡、窪河原遺跡の発掘調査報告書の第3分冊（更埴市内その4）である。

1. 本編は、上記の遺跡における弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物を中心としている。各遺跡の概要については、当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』8・9・10・11・12・13、日本考古学協会発行の『考古学年報47』、同『水辺の祭祀 資料集』などで紹介しているが、事実報告に関しては本書の記述をもって最終報告とする。ただし、全時期にまたがる分析などは現在も継続中であり、平成11年度刊行予定の『総論編』に掲載する予定である。

1. 本編で使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道倉科・雨宮地区平面図および更埴JCT～長野地区平面図（1:1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1:50,000、1:25,000）、更埴市発行の地形図（1:10,000）を使用した。

1. 航空写真は、更埴地区の全景写真については（株）共同測量社から提供を受けた。また、各調査区の写真は（株）新日本航業、（株）共同測量社に撮影を委託したものである。また、モザイク写真は（株）新日本航業に作成を委託した。

1. 本報告書には次の方々から玉稿を賜った。記して謝意を表す。

5章6節2 国立歴史民俗博物館助教授 辻誠一郎

4章3節1 流通科学大学助教授 南木睦彦

滋賀県多賀町教育委員会 福田美和

1章3節4(2)、4章2節2・4、3節2・3、5節、5章6節1

(株)パリノサーヴェイ 高橋 敦・田中義文・辻本崇夫

4章2節1・3 (株)古環境研究所 金原正子・松田隆二・脇元三郎

※1. 4章（上記分）については、環境復元検討会（辻・南木・辻本・松田・田中・白田・市川・河西・寺内）で討議を行っている。

4章4節 京都大学霊長類研究所教授 茂原信生

1. 執筆分担は次の通りである。

1章3節1・2 市川桂子

3章2節2(1)、5章2節 河西克造

3章5節1、5章3節 鳥羽英継

3章5節5 平出潤一郎

2章3節2、3章5節2 町田勝則

3章4節1、2(1)~(4)、5章4節 水沢教子

3章4節2(5)、3章5節3・4・6、5章5節 宮島義和

2章3節1 百瀬長秀

1章1・2節、3節3・4(1)、4節、2章1節、2節、3章1節、2節2(2)・(3)、3節、4章1節、5章1節、6章、その他 ※ただし2章1節と2節の内、更埴条里遺跡に関する部分は、河西の原稿を寺内が編集・改変した。

寺内隆夫

1. 遺物写真の撮影・焼き付けは田村 彬が、脆弱遺物の保存処理は県立歴史館 白沢勝彦・寺内貴美子、埋蔵文化財センター長野事務所 白田広之、上田事務所 相沢秀樹（平成7、8年度）が担当した。

1. 本編の編集・校正は担当者の合議の上、最終的には寺内が行い、小林秀夫・白田武正が校閲した。

1. 遺構記号・遺構番号は、すでに『屋代遺跡群出土木簡』などで公表されているものがある。それらを活かし混乱をさけるため、原則として発掘調査時の記号や番号を変更していない。そのため、欠番などが存在する。

1. 註・参考文献は各章あるいは節の末にまとめた。

1. 発掘調査・報告書作成にあたり下記の諸氏・諸機関にご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、五十音順）

青柳泰介、赤羽貞幸、飯島哲也、石川日出志、小野紀男、尾見智志、風間栄一、金田章裕、栗野克己、更埴市教育委員会、国立奈良文化財研究所、国立歴史民俗博物館、小平光一、小林高雄、小山岳夫、酒井潤一、笹沢 浩、佐藤信之、沢田 敦、茂原信生、下平博行、助川朋広、高橋 学、辰巳和弘、田中広明、辻誠一郎、辻本崇夫、寺島孝典、中沢道彦、長野県立歴史館、長野市教育委員会、長野市埋蔵文化財センター、長野市立博物館、福田美和、穂積裕昌、前島 卓、松井一明、松田隆二、南木睦彦、森島 稔、矢島宏雄、矢田 勝、山口 明、和田 萃

1. また、センター内の調査研究員、あるいは現地調査に携わった方々から多くの助言を得ている。

校閲・執筆者以外で、弥生・古墳時代の調査に関わった調査研究員は以下の通りである。

青木一男、井口慶久、市川隆之、出河裕典、伊藤克己、伊藤友久、稲場 隆、上田典男、上田 真、白居直之、大久保邦彦、岡沢康夫、奥原 聡、大和龍一、川崎 保、小林清人、桜井秀雄、澤谷昌英、島田正夫、清水 弘、下島浩伸、下平博行、武居公明、谷 和隆、田中正治郎、月原隆爾、常長虎徹、寺内貴美子、徳永哲秀、中沢道彦、中村 寛、夏目大助、贄田 明、西嶋 力、西山克己、馬場信義、広瀬昭弘、深沢重夫、藤沢袈裟一、藤原直人、淵井英知、福島正樹、本田 真、増村香子、町田勝則、松岡昭彦、松岡忠一郎、宮入英治、宮下祐治、宮脇正実、柳沢 亮、山極 充、吉江英夫、吉沢信幸、依田 茂、若林 卓

1. 本調査には、ベトナム文化・情報・スポーツ省のグエン・テ・フン氏が研修で参加している。

1. 本編で報告した記録および出土遺物は（財）長野県文化振興事業団が保管している。

凡 例

1. 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記のとおりで、該当箇所のスケールの上に記してある。

1) 主な遺構実測図

遺構平面図 1:500 建物跡個別平面図 1:80 溝・流路個別平面図 1:40~1:200

断面図 1:60 土坑個別平面図・断面図 1:60

2) 主な遺物実測図

土器拓本 1:3 実測図 1:3~1:4 土製品・石製品 1:1~1:2 石器 1:3 小型石器2:3

木製品 1:3~1:9 鉄製品・鉄滓・骨角製品 1:3

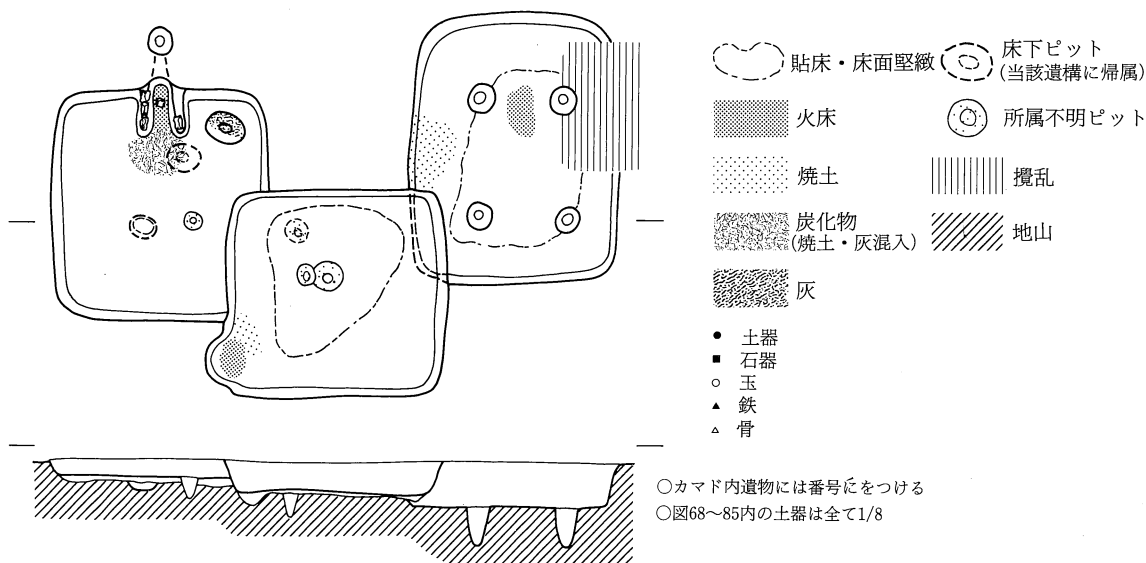
1. 本書に掲載した主な遺物写真の縮尺は、下記の通りである。

土器甕・壺類 1:4 杯・小型壺など 1:3 その他の製品は原則として実測図の縮尺に準じた。

1. 遺物の出土地点表記は、図版の表題に示すか、図版中の遺物の左上あるいは下に出土遺構名またはグリッド名を表記した。図中にないものは、観察表に示した。

1. 実測図中のスクリーンなどは下記のように用いた。これ以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。

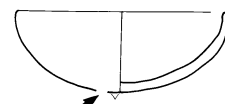
1) 遺構実測図



2) 遺物実測図の表現

土器 実測線の不連続の部分は、破片資料を回転実測した際の欠落部分を示す。

須恵器のみ断面を黒塗りした。土器の表面処理については以下のスクリーンで示した。



黒色処理を施した土器



赤色塗彩を施した土器



石器・木製品などについては、その都度図版に凡例を示した。

本文目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の概観と調査の概要

第1節 本編の範囲	1
1 報告書作成の方針	1
2 本編の範囲	2
第2節 歴史的環境と周辺遺跡	2
1 遺跡の位置	2
2 弥生・古墳時代の屋代地区	3
(1) 弥生時代 (2) 古墳時代	
第3節 地形・地質環境と基本層序	7
1 善光寺平南部の地形・地質環境	7
(1) 長野盆地南部の地形 (2) 遺跡周辺の地形 (3) 遺跡周辺の新第三系の地質	
2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の層序	10
(1) セツ石層 (2) 反町層 (3) 屋代層	
3 調査対象となった層序	12
(1) 層名 (2) 弥生・古墳時代対応層の特徴	
4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境変遷	13
(1) 検討会の設置 (2) 古環境変遷の概要 (予報)	
第4節 調査・整理の経過	16
1 調査の概要	16
(1) 調査の実施にあたって (2) 調査の手順 (3) 整理作業の経過	
第2章 弥生時代前期並行から中期 (VI層中～下面検出) の遺構と遺物	
第1節 概観	19
第2節 遺構と遺物出土状況	19
1 遺構各説	19
(1) 溝・自然流路跡(SD) (2) 焼土跡(SF) (3) 土坑(SK) (4) 遺物集中地点(SQ)	
第3節 遺物	44
1 土器・土製品	44
(1) 遺構出土土器 (2) 屋代③a区遺物集中地点出土土器 (3) 遺構外出土土器	
2 石器	60
(1) 概要 (2) 各器種の属性	
第3章 弥生時代後期～古墳時代 (VI層上面検出) の遺構と遺物	
第1節 概観	71

第2節 水田域の遺構と遺物出土状況	71
1 概要	71
2 遺構各説	72
(1) 水田跡 (2) 溝・自然流路(SD) (3) 土坑(SK)	
第3節 更埴条里遺跡微高地域(K地区)の遺構と遺物出土状況	76
1 概要	76
2 遺構各説	76
(1) 掘立柱建物跡 ST926 (2) 井戸跡 SK9512	
第4節 集落域および旧河道域の遺構と遺物出土状況	76
1 概要	76
2 遺構各説	77
(1) 竪穴住居跡(SB) (2) 掘立柱建物跡(ST) (3) 土坑(SK) (4) 溝(SD)	
(5) 祭祀関連施設(SH・SK・SD・SX)	
第5節 遺物	144
1 土器・土製品	144
(1) 概要	
2 石器・石製品	187
(1) 概要 (2) 各器種の属性	
3 玉類・石製模造品	197
(1) 概要 (2) 種類と変遷 (3) 玉造りの可能性	
4 木製品	204
(1) 概要 (2) 各説	
5 鉄製品・鉄生産関連遺物	208
(1) 概要 (2) 鉄製品 (3) 鉄生産関連遺物 (4) 小結	
6 骨角製品・獣骨	209
第4章 微化石分析と動・植物遺体	
第1節 弥生・古墳時代の自然科学分析	211
第2節 弥生時代における稲作の問題	211
はじめに	211
1 更埴条里遺跡VI・VII層におけるプラント・オパール分析	211
2 縄文時代晩期から弥生時代前期の古植生	214
3 更埴条里遺跡 SD881・SD882におけるプラント・オパール、花粉、珪藻分析	217
4 屋代遺跡群①・②区VI層下面で検出されたII群土坑中の炭化材の樹種と年代	220
第3節 古墳時代における古環境の復元と植物利用	222
はじめに	222
1 屋代遺跡群⑥区SD7068出土の植物種実	222
2 古墳時代中期祭祀関連施設SD7068周辺の古環境について	224
3 古墳時代中期の木製品および住居構築材の用材	225
第4節 上信越自動車道屋代遺跡群から出土した獣骨と人骨	229
1 出土獣骨の種類	229

2	出土獣骨の特徴	229
3	出土人骨	230
4	まとめ	230
第5節	古墳時代の赤色顔料の由来	233
第5章 成果と課題		
第1節	弥生時代の土地利用	235
1	弥生1期(水式土器段階)の土地利用	235
2	弥生・古墳時代の水路整備	236
3	弥生時代中期(3・4期)における自然堤防側の水田開発	237
	(1) 屋代遺跡群②区における低地林の開墾 (2) 屋代遺跡群②区の水田復元	
	(3) 弥生時代中期における大規模水田開発	
第2節	屋代遺跡群・更埴条里遺跡における古墳水田の様相	241
1	調査地点における古墳時代の水田	241
2	VI層水田と条里水田の水利形態	242
第3節	古墳時代の土器編年	246
1	器種分類	246
	(1) 土師器 (2) 須恵器	
2	各期の特徴	250
	(1) 屋代・古墳1期 (2) 屋代・古墳2期 (3) 屋代・古墳3期 (4) 屋代・古墳4期	
	(5) 屋代・古墳5期 (6) 屋代・古墳6期 (7) 屋代・古墳7期 (8) 屋代・古墳8期	
第4節	弥生・古墳時代の集落	256
1	遺構の特徴	256
	(1) 住居跡と施設 (2) 床面に焼土・炭化材などが残存する住居跡について	
	(3) 遺物廃棄パターンと廃絶遺構の用途	
2	集落の構造	261
	(1) 集落の出現 (2) 集落の発展 (3) 占地構造の変化	
第5節	古墳時代の祭祀	263
1	祭祀関連遺構	263
	(1) 祭祀に関するてがかり (2) 生活関連遺構と祭祀遺物 (3) 生産関連遺構と祭祀遺物	
	(4) 特殊な遺構	
2	湧水点祭祀と導水型祭祀	265
	(1) 類例から見たSD7068・SX7038 (2) 祭祀の性格	
3	まとめ	267
第6節	弥生・古墳時代の環境	268
1	水田開発と古環境	268
2	更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境史(1)	269
第6章 結語		
写真図版		
報告書抄録		

第1章 遺跡の概観と調査の概要

第1節 本編の範囲

1 報告書作成の方針

地域一括・時代別報告 平成7年度、上信越自動車道関係の整理が始まるにあたり、更埴条里遺跡と屋代遺跡群（含む大境遺跡、窪河原遺跡）については、遺跡別とはせず一括して報告する方針を立てた。

間断ない遺跡 その主な理由は、更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群・窪河原遺跡までの全長約2.3kmをほぼ全面発掘し、その間、遺跡が途切れなかったことによる。このことは、従来の遺跡別（地区別）報告では、同一時期の水田面や水路をみすみす分断してしまうこと。また、同時期の集落と水田との位置関係などといった、調査対象地域全体の様相がつかみにくくなってしまうこと。などを意味していた。

景観復元 さらに、例えばIII-2層とした洪水砂は、更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群⑥区の約2kmにわたって、9世紀末の水田や住居をパックしていた。この洪水砂を剥ぐことによって遺物・遺構の有無とは関係なく、一時期の「地表」を検出することが可能となった。これにより人間活動の痕跡を点（一定の範囲）でおさえる狭義の「遺跡」や、その集合・ネットワークとしての「遺跡群」をとらえる作業だけでなく、一時期の「景観」を復元しうる可能性が強まった。「景観」復元を目指すという課題を掲げるためにも、全地域を統合した報告書作成を選択した。

キー層による時代別分冊 時代別分冊方式をとった理由は、現地表面直下から地表下8mにわたって、江戸時代から縄文時代に至る遺構・遺物が層位別に検出できたことにある。膨大な資料をまとめるにあたり、大きな環境の変化をもたらしたと思われる層を「キー層」として、時代別の分冊方式を採用した。

自然環境分析 各時代別分冊では、「景観」を復元するにあたって狭義の考古資料以外の微化石や動・植物遺体の分析を重視し、多くの研究者に参加を願った。『総論編』では、それらを元に自然環境と人間の営みの相関関係とその変遷を主眼として、まとめてゆく方針を立てた。

長野自動車道関連 また、窪河原遺跡については、上記の方針から、平成2年度に調査を実施した長野自動車道分についても含めた。ただし、本編に該当する資料は上信越自動車道関連のみである。

分冊の区分 各分冊の表題と刊行予定年度は以下の通りである。

第1分冊 『長野県屋代遺跡群出土木簡』平成7年度刊行

第2分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡— 縄文時代（VII層～XIX層）編』平成11年度刊行予定

第3分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 弥生・古墳時代（VI層）編』平成9年度

第4分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 古代1（IV・V層）編』平成10年度刊行予定

第5分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 古代2・中世・近世（II・III層）編』平成11年度刊行予定

第6分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 総論編』平成11年度刊行予定

2 本編の範囲

本編は第3分冊にあたり、VI層上面からVI層下面で検出された弥生時代と古墳時代の資料を報告の対象としている(表1)。

氷式土器段階から 縄文時代晩期と弥生時代の境界は、西日本地域の弥生時代前期に並行する氷式土器の段階からを弥生時代に含めた。

これは、遺物包含層がシルト質のVI層であり、砂層を主体とした縄文時代晩期後葉のVII層との層相が大きく異なっていることを基準とした。

7世紀初頭まで 古墳時代と古代との境は、屋代遺跡群⑥区の旧千曲川と見られる流路を埋積した砂層を基準にした。

古墳時代の溝と同一面で検出されたS D7071最下層からは7世紀初頭の遺物が出土しており、その後、この流路は7世紀後半までの間に急速に埋積した状況を示している。一方、この時期は、土器などの遺物においても様相が大きく変化しており、この時期を『古代編』との境とした。

掲載の基準 検出面がVI層上面であっても、埋土が明らかに古代以後のものであると認められる遺構については『古代編』などに掲載した。また、遺物については、弥生・古墳時代のものと確実視できたものについては、VI層より上層で出土していても本編に掲載している。ただし、時期の決定が困難な鉄器片・石器片・獣骨などは、出土層を重視して掲載した。

時期区分 主に遺構のあり方の変化から、弥生時代・古墳時代を各々I～III期に大区分し、また、土器の特徴から弥生時代を1～5期に、古墳時代を1～8期に区分している。

層位	時代	大時期区分	中時期区分	小時期区分	遺構	備考
I	近・現代				水路	
II	中世後半～近世				集落・水田	
III-1	古代～中世前半				集落・水田・畠	
III-2	9世紀後半		古代8期			←全域を覆う洪水砂
IV・V	古代		古代0期		集落・水田・畠	←屋代⑥区旧河道の埋積始まる
VI	古墳後期	III	古墳8期	新相・古相	集落・水田?	※大時期区分は土器様相と遺構の変化で区分
			古墳7期	新相・古相		
	古墳6期	新相・古相				
	古墳中期	II	古墳5期	—	集落・水田	
			古墳4期	新相・古相		
	古墳前期	I	古墳3期	—	集落・水路など	
			古墳2期	—		
古墳1期			—			
弥生後期	III	弥生5期	—	水路など	※大時期区分は水路などの変遷を中心に区分	
弥生中期	II	弥生4期	—			
		弥生3期	—			
弥生前期	I	弥生2期	—	遺物集中など		
		弥生1期	—			
VII	縄文晩期後葉				焼土跡など	←全域で砂の堆積
VIII	縄文晩期中葉				掘立柱建物、焼土跡など	
IX	縄文後期～晩期				焼土跡など	
X	縄文後期前葉					
X I						
X II-1	縄文中期後葉～後期初頭				集落など	
X II-2						
X III	縄文中期中葉				焼土跡など	
X IV	縄文中期前葉					
X V	縄文中期前葉					
X VI	縄文前期後葉					
X VII～X IX	不明					大形礫出土
不明	縄文前期中葉					河道への遺物混入

表1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の時期区分 (太枠内は本編掲載)

第2節 歴史的環境と周辺遺跡

1 遺跡の位置 (図1・6)

更埴市・千曲川右岸 更埴市屋代から雨宮地籍にかけて、千曲川右岸の自然堤防上には多くの遺跡が立地している。それらを総称した名称が屋代遺跡群(・雨宮遺跡群)である。その内、古代以降に形成された新しい自然堤防上(II群)に立地するのが窪河原遺跡である。屋代遺跡群は古い自然堤防上(I群)を主体としており、一部が大境遺跡と命名されている。更埴条里遺跡との境は便宜的に五十里川に置いている。更

埴条里遺跡は、自然堤防の南側に広がる後背湿地を中心とした地区である。

調査対象地区の位置 上信越自動車道はこの地域を南北に縦断する形で計画され、発掘対象地区は更埴条里遺跡A地区（更埴市屋代字七ツ石）から窪河原遺跡（更埴市雨宮字窪河原）の全長約2.3kmにわたる。各調査地区の地籍名は、図7に示したとおりである。国土座標では、更埴条里遺跡A地区南端が第VII系X=58.8、北端の窪河原遺跡がX=62.0、東西は窪河原遺跡で広くY=-31.9から-32.10である。また、北緯36°31'50"~36°33'、東経138°8'付近にあたる。

2 弥生・古墳時代の屋代地区

ここでは、弥生・古墳時代の屋代地区に観点をしばって、歴史的環境を見ておきたい（図1・表2）。

(1) 弥生時代

<屋代・弥生1期=前期並行期>

水田稲作の導入 東海系条痕文土器の流入や篠ノ井遺跡群の壺棺再埋葬?の存在などにより、間接的に稲作波及を示す資料が増えつつある（中沢1990）。石川条里遺跡の低湿地では溝跡が見つかり、プラントオパール分析の結果を加味すれば、水田が存在していた可能性が指摘されている（白居1997）。ただし、石器の研究（町田1992ほか）などから、本格的な水田経営には至らなかったと考えられている。

遺跡立地 水田稲作の導入に関連して、遺跡の立地が丘陵地帯から沖積地へ移ると考えられたことがあった。しかし、本地域では縄文時代の遺跡が沖積地で認められており、沖積地=弥生時代の図式は当てはまっていない。水式土器を出土した遺跡の立地を見る（図1）と、①山麓=小坂西遺跡や鶴前遺跡（5-1）、②沖積地（山地裾部）=屋代清水遺跡（97）、③沖積地（自然堤防上）=城の内遺跡（92-2）、生仁遺跡（91-2）、篠ノ井遺跡群（2-7）に存在し、立地の多様性を見せている。

<屋代・弥生2~4期=中期>

居住施設の確認 中期前半（屋代・弥生2期）には、屋代遺跡群内の荒井遺跡（92-6）において竪穴住居跡が確認されており、前時期には不明確であった集落形成が自然堤防上で認められる。また、千曲川の対岸にあたる松節遺跡（3-3）と伊勢宮遺跡（3-5）では、近接して居住域と墓域が確認されている。特に、伊勢宮遺跡から発見された人骨の形質には渡来系弥生人の特徴が見られ、3期に下る篠ノ井遺跡群出土人骨（1997茂原・松村）とともに、外来系の集団が善光寺平の開発に関わっていることを示している。

集落の拡大 2期から遺構・遺物が増加傾向にあった善光寺平南部では、4期の栗林式土器の段階から遺跡数が激増する。松原遺跡（74）のような大規模な集落が自然堤防上に成立する段階である。屋代地区の自然堤防上にも屋代遺跡群や生仁遺跡で集落が見つまっている。また、崖錐地形に立地する大穴遺跡（99）や山地裾部の屋代清水遺跡など、水田可耕地を取り囲むように大小の集落が営まれるようになる。

水田遺構など 水田遺構は、対岸の石川条里遺跡（1-4）で確認されている。また、屋代遺跡群・荒井遺跡から炭化した麦などが、対岸の湯ノ入下遺跡（22）ではアズキの炭化種子が出土している。

<屋代・弥生5期=後期>

箱清水水式土器の段階には、大穴遺跡や屋代清水遺跡など、崖錐地形や山地裾部に存在していた小規模集落が姿を消し、自然堤防上の屋代遺跡群や生仁遺跡に収れんされる傾向が見られる。

(2) 古墳時代

<屋代・古墳1~3期=前期>

前期古墳と集落・水田の位置 4世紀に築造された森將軍塚古墳は、更埴条里遺跡・屋代遺跡群の扇の要



図1 周辺遺跡（弥生・古墳時代）

の位置に立地している。ここからの眺望がきく自然堤防上には、屋代遺跡群・城の内遺跡をはじめとする集落が展開している。そして、眼下には水田が広がっていたと予想される。

小地域ごとの発展 こうした関係は、対岸の川柳將軍塚古墳と塩崎・篠ノ井遺跡群（集落）、石川条里遺跡（水田）のように、善光寺平の各地で見ることができる。しかし、相違点も見られる。対岸では、篠ノ井遺跡群に見られるように自然堤防上に古墳時代初期の周溝墓群が見つまっているのに対し、屋代遺跡群では森將軍塚古墳に先行するか、あるいは並行する時期の周溝墓群は確認されていない（小林1992）。また、石川条里遺跡で発見された大規模な祭祀場も見つっていない。こうした点は、各々の小地域が独自に発展していった姿を示している可能性がある。

地域圏 一方、善光寺平南部と言った、より広い地域がまとまりを持った“クニ”を形成していた可能性も指摘されている。善光寺平全域における前方後円墳の分布と変遷からは、小地域の相違を越えた政治的連合が想定されている。古墳の変遷からは、首長権が小地域を越えて移動すると見る立場（岩崎1989）と、各小地域内における首長系列の変遷を重視する立場（小林1997）が存在する。

千曲川を挟んだ兩岸の関係は、奈良時代前半に埴科郡家（屋代・雨宮遺跡群内か？）へ荷を運んだ地域が兩岸にわたっているなど（平川ほか1997）、後々の時代の地域圏の問題にも関連してくる。

<屋代・古墳4～6期＝中期>

森古墳群の継続性 中期以降も、森將軍塚古墳周辺には古墳や小型の埋葬施設が造り続けられており（森古墳群）、この地域のシンボリックな存在としての森將軍塚古墳は生き続けている。

集落 自然堤防上を中心とする立地に大きな変化は認められない。ただ、同一自然堤防上内で集落が移動しているようである。また、森將軍塚古墳直下には屋代清水遺跡が立地している。

須恵器 この時期、須恵期の搬入などに畿内勢力との新たな関係構築がうかがえる。屋代遺跡群・城の内遺跡からは陶質土器が見つかっており、周辺の集落からは初期須恵器が比較的多く出土している。対岸では県内最古の須恵器窯である松ノ山窯跡（6期～）が発見されている。

<屋代7・8期＝後期>

後期の集落も近年調査例が増えつつある。基本的な立地は継承されていたと考えられる。また、周辺の山地の斜面部や谷部には群集墳が築造される。

参考文献

- 岩崎卓也 1989「第二章第二節 古代社会の基礎」『長野県史』通史編 第一巻 原始・古代
- 白居直之 1997「第4章第3節5(1)弥生・古墳水田の変遷」『石川条里遺跡』第1分冊（財）長野県埋蔵文化財センター
- 更埴市史編纂委員会 1994年『更埴市史』第一巻 古代・中世編
- 小林秀夫 1992「第2章第1節3 歴史的環境」『史跡 森將軍塚古墳』
- 更級埴科地方誌刊行会 1978『更級埴科地方誌』第二巻 原始古代中世編
- 茂原信生・松村博文 1997「第4章第8節1 篠ノ井遺跡群（長野県）出土の人骨（弥生時代～平安時代）」『篠ノ井遺跡群』成果と課題編（財）長野県埋蔵文化財センター
- 中沢道彦 1990「III 3(2) 遺物〔土器〕」『篠ノ井遺跡III』長野市教育委員会
- 平川南ほか 1997「第5章 考察」『長野県屋代遺跡群出土木簡』
- 町田勝則 1992「信濃に於ける米作りと狩り」『人間・遺跡・遺物』発掘者談話会
- 町田勝則 1993「信濃に於ける米作りと採集」『長野県考古学会誌』68号
- 町田勝則 1994「信濃に於ける米作りと栽培」『長野県考古学会誌』73号

第3節 地形・地質環境と基本層序

1 善光寺平南部の地形・地質環境

(1) 長野盆地南部の地形 (図2)

長野盆地は南北長さ40km、東西幅8～10km、標高330～400mの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地に明瞭に区分される。盆地の周辺は流入する中小河川の扇状地で埋められる。長野市街地の中心部は裾花川扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなる。盆地の中央部を南北に流れる千曲川は、それらの扇状地の発達に影響され自由蛇行している。

千曲川氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中州などの微高地と旧河道・後背湿地などの微低地があり、微地形を形成している。千曲川は更埴市稲荷山・八幡付近で河床勾配を1/1,000mと緩め、北西から北東方向へ流れの向きを変え、蛇行を始める。千曲川の左岸側には八幡、稲荷山、塩崎、平久保、旧篠ノ井(東篠ノ井・横田)、東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達し、その西側には後背湿地が発達する。右岸側も雨宮・清野・松代・牧島の自然堤防とその東側には後背湿地となる湾入低地が形成されている。

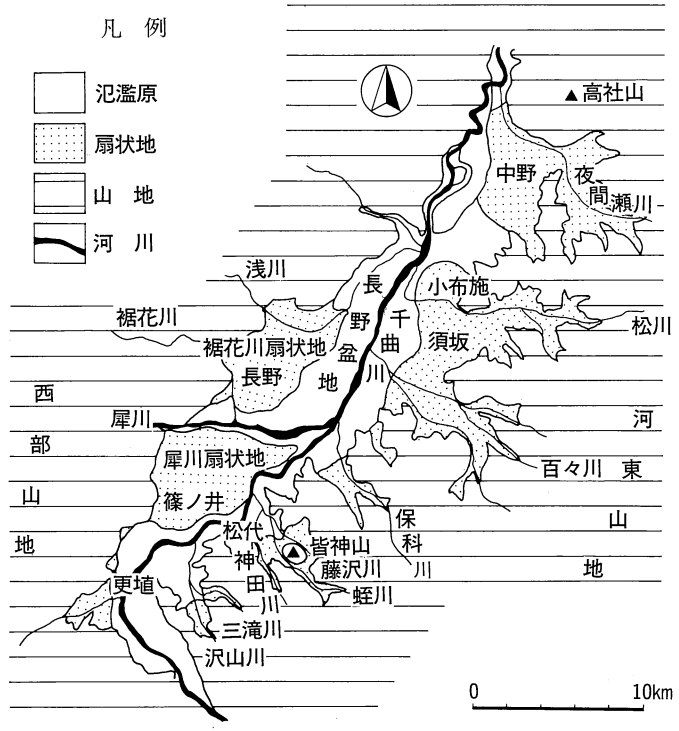


図2 長野盆地の地形(『中部地方I』赤羽・花岡1988に加筆)

(2) 遺跡周辺の地形 (図3)

長野盆地東側の河東山地は壮年期の浸食地形を呈する。北西-南東方向に主な山稜部が延び、枝状に尾根が広がる。山麓線は入り組んでおり、千曲川氾濫原を海面とするならばアス式海岸線のようにと例えられる。更埴条里遺跡はその枝状に広がる一重山と唐崎山の尾根に囲まれた大規模な後背湿地に位置し、屋代遺跡群は更埴条里遺跡の北側に形成されている雨宮の自然堤防上に位置する。

地形区分 自然堤防の頂部は、雨宮集落では長野電鉄河東線雨宮駅の南部にある雨宮坐日吉神社の辺りで標高355.9m、屋代工業団地周辺では長野電子工業辺りで標高356.7m、屋代高校北部で357.5mである。雨宮の自然堤防の北・西側には比高差約1～1.5mの明瞭な小崖が発達し、崖に沿って幅約50m～180m、長さ約5kmにわたって数本の明瞭な旧河道が確認できる。この小崖をもって氾濫原をI群・II群に区分した。更埴条里遺跡は後背湿地I群に、屋代遺跡群は自然堤防I群に、窪河原遺跡は旧河道に囲まれた自然堤防II群に位置する。

自然堤防上にも細流などの働きによってできた浅い帯状の凹地がみられる。後背湿地は全体的に北西部から南東部へ傾斜しており、標高は最も高いところで一重山の東側の358m、最も低いところで森、中河原の西側で356.6mである。また後背湿地の中にも埋没した帯状の凹地が認められる部分もある(本報告書では埋没微地形に関して検討出来なかったので詳しく区分していない)。

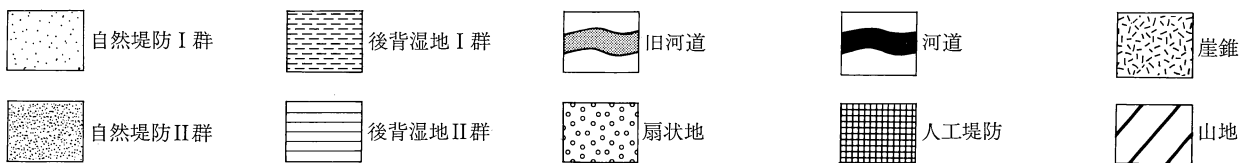
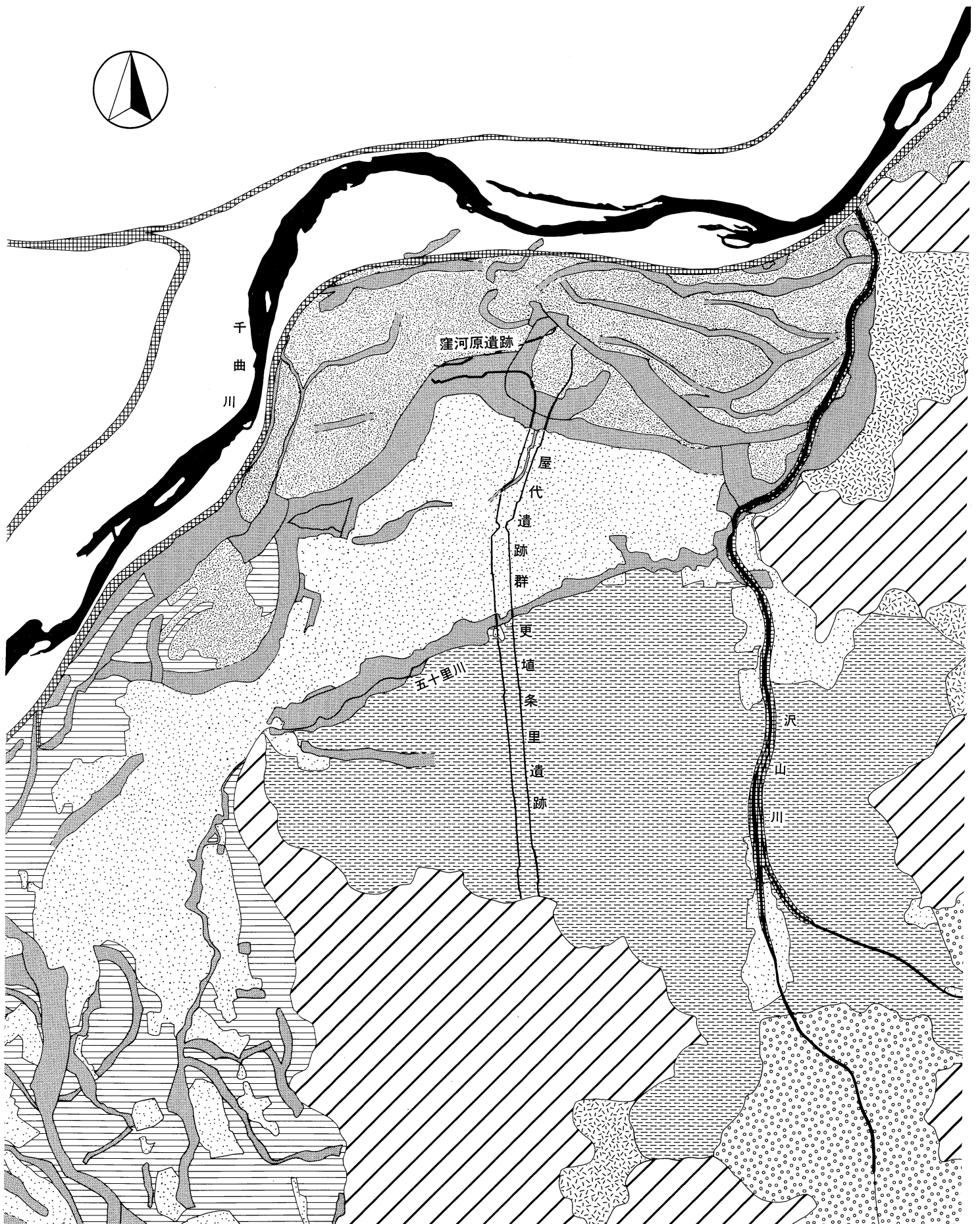


图 3 地形分類図 (遺跡周辺)



五十里川は戸倉町徳間地籍で屋代堰として千曲川から取水され、戸倉町内川の東方で戸倉用水と合わせて五十里川となる。中州状の微高地の間をぬうように旧河道の微低地の中を流れ、屋代の市街地を通り一重山で東西方向に流れを変えて雨宮の自然堤防と後背湿地とのほぼ境を流れる。唐崎山西方で沢山川と合流する。現在は河川改修が進み直線的であるが、かつては自然の姿で流れ小さな解析谷を形成していた。

森・倉科にはそれぞれ鏡台山・三滝山から流れ出る沢山川・三滝川による表面勾配36/1,000の急傾斜の崖錐扇状地が形成されており、集落はその斜面上に立地する。生萱・土口は崖錐性の堆積物が押し出し地形を作る。沢山川は三滝川と途中更埴東小学校辺り（かつては少し下流の生仁）で合流し、笹崎（薬師山の先）で千曲川と合流する。沢山川は天井川となり、周囲に微高地を形成している部分もある。

(3) 遺跡周辺の新第三系の地質 (図4)

河東山地には中新世の堆積岩と中新世貫入岩類が分布し石材として利用されている。下位より順に説明する。

中新世前期～中期の内村層上部に相当する横尾部層、森・豊栄部層は、緑色凝灰岩・凝灰角礫岩と黒色頁岩・砂岩からなる。

森部層 森部層の模式地は更埴市森の沢山川上流である。倉科周辺―大峰山周辺―沢山川周辺に分布する。黒色頁岩層を主とし新鮮な部分はかなり硬質である。部分的に熱水変質を受けて珪化し黄鉄鉱を晶出している。頁岩砂岩互層や、凝灰岩質砂岩・シルト岩層を挟む。部分的に緑色凝灰岩が優勢となる。デイサイト凝灰岩やデイサイト凝灰岩と頁岩の互層を挟む。

別所層 中新世中期の別所層は更埴市森將軍塚古墳付近採石場を模式地とし、主に河東山地から長野盆地へ鋸歯状に突出した尾根に分布する。黒色頁岩を主体とするが、最下部・中・上部は緑色凝灰岩が主である。森部層の黒色頁岩と肉眼では区別がつかないが、森部層の方が硬質であると感じられる。

一重山部層 中新世中期の青木層に相当する一重山部層は分布が局所的である。模式地は更埴市屋代一重山で、分布は他に長野市松代町薬師山、妻女山付近である。中～粗粒の砂岩、黒色泥岩を主とし、安山岩の岩床を数枚挟む。

貫入岩類 中新世貫入岩類は長野盆地底には分布しない。中～後期中新世に何回かにわけて貫入した石英閃緑岩は更埴条里遺跡・屋代遺跡群の東方、更埴市生萱、土口、倉科に分布する。生萱には大正時代に設置された採石場があり、石英閃緑岩は生萱石と呼ばれ主

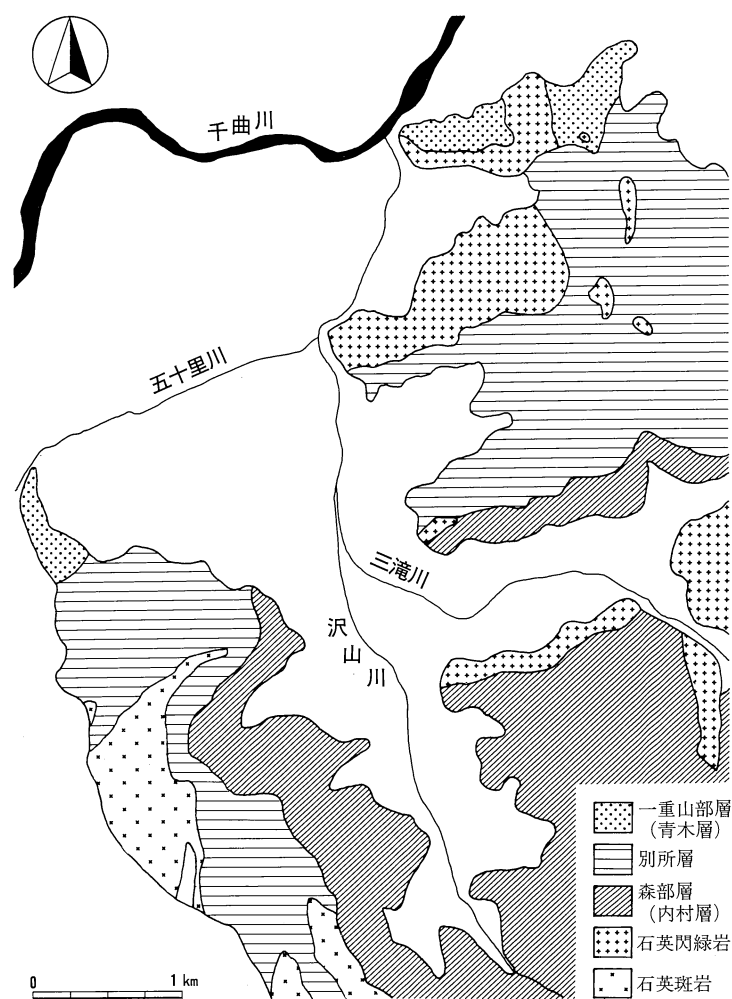


図4 遺跡周辺の地質 (加藤・赤羽1986に加筆)

に間知石や割栗石として利用されていた。石英斑岩、ひん岩類（角閃ひん岩―閃緑ひん岩）は横尾部層―別所層中に小規模な岩床や、岩脈状に貫入している。調査地南の有明山南東方には石英斑岩が分布し、白色―灰白色で少量の大型石英の斑晶がみられる。

2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の層序

更埴条里遺跡・屋代遺跡群に分布する堆積層を発掘調査・道路公団ボーリングの資料を基に七ツ石層、反町層、屋代層の3つに大区分し、さらに屋代層を細分した（図5）。屋代層は地層命名規約（日本地質学会 1952 地質雑誌58巻P112-113）に基づいているが、七ツ石層・反町層はボーリング調査位置の小字名であるため今後変更の必要があるかもしれない。ボーリング資料は既にサンプリングから時間が経過しており、保存状態も悪く肉眼観察に耐えられないため、全て道路公団のボーリング調査報告書の結果を使用している。下位より順に説明する。

(1) 七ツ石層

模式地 更埴条里遺跡A・B地区 ボーリング資料

分布 更埴条里遺跡A・B・C・D・E地区

有機質の粘性土を主体とし砂質土、砂礫土との互層である。地表面下22.2～25.2m以深から50.5m（標高332～304m付近）までは確認されている。層厚約27mである。下限は不明である。上位の反町層との間には不整合があると考えられる。

粘性土はDc 1、Dc 2、Dc 3、Dc 4に区分されている。Dc 1は茶褐色の有機質粘土～腐植土で若干炭化した木片が点在する。Dc 2は帯黒褐色～茶褐色の有機質粘土～シルトである。Dc 3は茶褐色～灰色の有機質粘土～粘土である。Dc 4は帯緑灰色の径1～2cmの角礫を混入する粘土である。Dc 1～Dc 3は腐植物を多量に混入する。粘土は部分的に含水大でやわらかい層準もあるが、全体的に含水少なく硬い。

砂質土は青灰色～黒灰色の中～粗粒砂、礫混じり中～粗粒砂である。礫は径5mm～2cm大の軽石を主とする。スコリアを多量に含み、まれに凝灰岩礫も含む。上位の反町層と比較すると相対的に高いN値が測定された。

砂礫土は帯灰青色の径5～10mmの垂円～円礫を主とし、マトリックスは粘土である。含水は少ない。

ボーリング調査結果に地質時代は更新世、地層区分は古期氾濫原堆積層と記載があることから、七ツ石層の堆積時期は20,000年以前と推定した。年代測定を行っていないので詳しいデータはない。

(2) 反町層

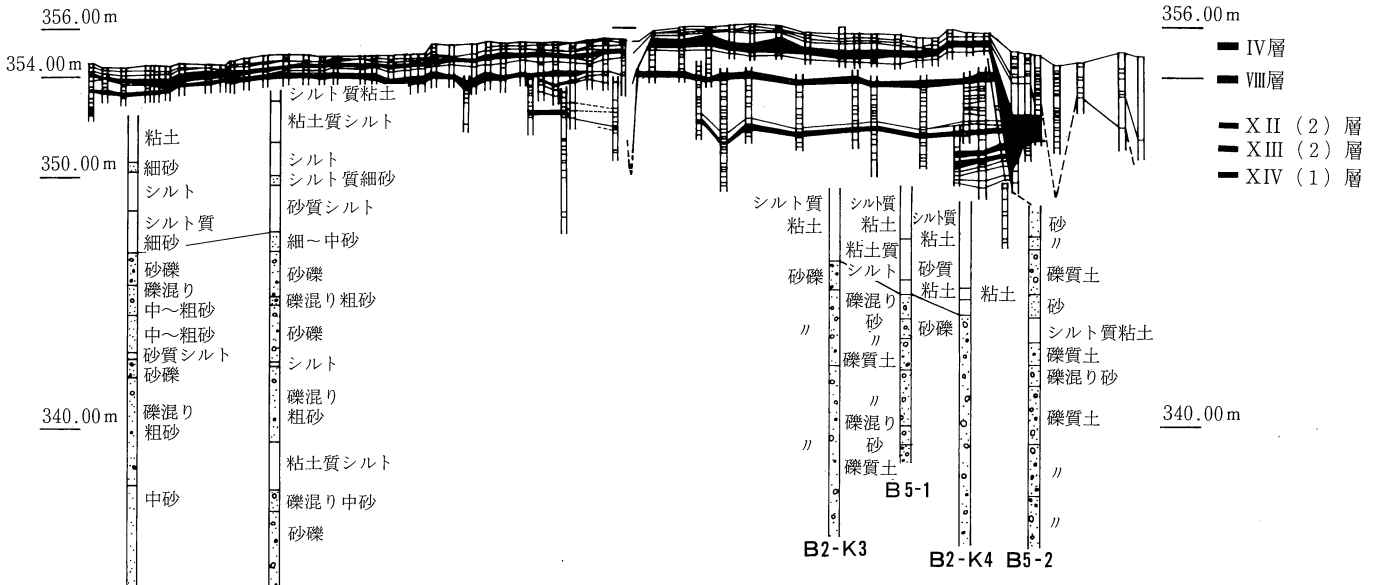
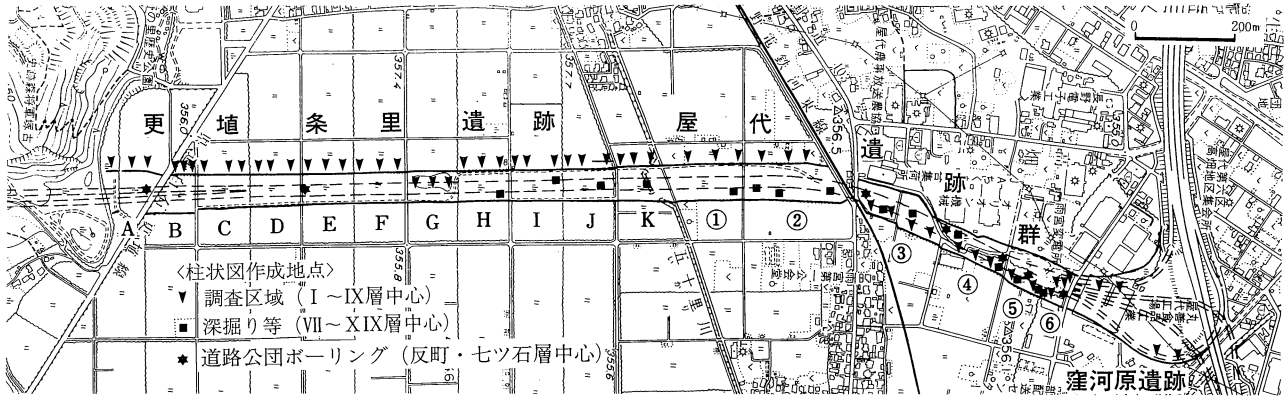
模式地 更埴条里遺跡F・G地区 ボーリング資料

分布 更埴条里遺跡・屋代遺跡群全体に確認される。

層相は変化し更埴条里遺跡A・B地区は砂を主体とし砂礫層を挟み、他の地区は礫を主体とする砂礫層である。地表面下5.8m～11mから22m（標高348～332m付近）に分布し、層厚約9～16m程度である。下位の七ツ石層を不整合で覆い、上位の屋代層に不整合で覆われると考えられる。

公団資料では更埴条里遺跡F～G地区付近を主な分布としており、記載は以下の通りである。帯緑灰色、帯黒灰色、茶褐色の礫径2～5cmの垂円～円礫を主とした砂礫層である。径7～10cmの礫を点在し、砂をブロック状・縞状に取り込むこともある。マトリックスは中～粗粒砂で粘土分も多く認められる。更埴条里遺跡A・B地区～E地区にかけては層相変化し砂質土に漸移していると考えられる。

屋代遺跡群③・④区となると、帯青黒灰色、帯緑黒灰色、帯茶褐色の径2～5cmの垂角～円礫を主体と



地質時代	層序	模式柱状図	層厚 (m)	岩相	考古時代	遺構・遺物	
完 屋 第 四 紀	上 部 層 III		0.1~0.4 0~0.3 (~3.1)	灰褐色、砂質シルト層	現代		
	層 III		0.1~0.5 (~1.6)	1は黒褐色、2はにぶい黄褐色~灰黄褐色~灰褐色、細粒砂層	平安~中世	水田・島・集落	
	中 部 層 IV・V		0.05~0.6 (~2.7)	IVは黒褐色~暗褐色~褐灰色、粘土質シルト Vは灰黄褐色~オリブ黒色、シルト混じり粘土層	飛鳥~平安	水田・島・集落	
	層 VI		0.04~0.3	黒褐色、粘土質シルト層	弥生~古墳	水田・集落	
	層 VII		0.1~1.2	にぶい黄褐色~褐色、砂質シルト層	縄文晩期後葉	焼土跡・土器・石器	
	下 部 層 VIII		0.1~0.3	黒褐色~暗褐色シルト層	縄文晩期中葉	集落	
	層 IX		0.8~1.1	にぶい黄褐色~黄褐色、シルト層、砂層を挟む	縄文後期後半	焼土跡・土器・石器	
	層 X		0.2~0.5	にぶい黄褐色~暗褐色、シルト層	縄文後期前半	焼土跡・土器・石器	
	層 XI		0.2~0.5	にぶい黄褐色~暗褐色、シルト~細粒砂層		焼土跡・土器・石器	
	層 XII		0.3~0.6	1 にぶい黄褐色、シルト層 2 黒褐色、シルト層 3 にぶい黄褐色、シルト層	縄文後期前半 縄文中期後葉	焼土跡・土器・石器 集落	
	層 XIII		0.5~0.8	暗褐色、シルト層 灰褐色~にぶい黄褐色、シルト層 灰黄褐色~暗オリブ褐色、シルト層	縄文中期中葉	焼土跡・土器・石器 焼土跡・土器・石器	
	層 XIV		0.7~0.9	暗灰黄褐色、シルト層 オリブ黒色、シルト層、砂層を挟む	縄文中期前葉	集落 焼土跡・土器・石器	
	層 XV		0.2~0.5	にぶい黄褐色~暗灰黄褐色、シルト層 にぶい黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器 焼土跡・土器・石器	
	層 XVI		0.6	黒~灰色、シルト層	縄文前期後葉	焼土跡・土器・石器	
	層 XVII		0.6	黒~灰色、シルト層、しまりよい			
	層 XVIII		0.9	オリブ黒~灰色シルト層、しまりよい	?	大形礫1点	
	層 XIX		0.4以上	オリブ黒色、シルト層、しまりよい			
	更 新 世	反町層		14.7 ~ 17.6	砂礫層 砂主体 (BKS) 礫主体 (BYS)		
	七ツ石層			28.3以上	有機質粘土層		

図 5 総合柱状図

する。径6～10cmの礫を点在する。マトリックスはシルト～粗粒砂である。

年代測定は行われていないが、約10,000年前から20,000年前までと推定される。その理由として上位の下部屋代層の下部の層準であるXVI層が縄文時代前期後葉の諸磯式土器を包含するため約5,000年前の年代が与えられること、ボーリング資料と調査での所見を合わせると反町層の最上部と下部屋代層のXVI層とのレベル差が5m程度であることから、堆積物の砂礫からシルトへの急激な変化を不整合面としてとらえるなら更新世～完新世の境?とするのが適当と思われる。

(3) 屋代層

更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡全域に分布する完新世の堆積物である。発掘調査により上部・中部・下部の3つに分け、さらに色調・粒度、遺物の包含の有無などによってI層からXIX層に細分した。上部屋代層はI層からIII層、中部屋代層はIV層からVI層、下部屋代層はVII層からXIX層である。窪河原遺跡での中部屋代層が砂礫層であることを除けば屋代層はほとんどシルト～粘土質で、細粒の堆積物から構成されていることが大きな特徴である。更埴条里遺跡A地区と屋代遺跡群⑥区とは同一の層準でも層相の変化はあるが、自然堤防の堆積物・後背湿地の堆積物といった明確な区分はできない(更埴条里遺跡A・B地区に分布するV層のみIV層と同時異相の関係にある)。一般的に自然堤防と背後の後背湿地との境は不明瞭なことが多いが、本遺跡では堆積物からの区分もできないのでより不明瞭になっている。

引用・参考文献

- 更科・埴科地方誌刊行会 1986『更科・埴科地方誌 自然編』
建設省北陸地方建設局千曲川工事事務所 1993『信濃の巨流 千曲川』
加藤碩一・赤羽貞幸 1986『長野地域の地質』地域地質研究報告(5万分の1地質図幅) 地質調査所
大矢雅彦編 1983『地形分類の手法と展開』古今書院
赤羽貞幸 1995「最終氷期以降における長野盆地の古環境」『第四紀研究』27, 37-44
井関弘太郎 1983『沖積平野』東京大学出版会
日本道路公団関東第二建設局上田工事事務所 1989『上信越自動車道 更埴地区第二次土質調査報告書』日本物理探査株式会社
日本の地質『中部地方I』編集委員会 1988『中部地方I』共立出版
更埴市史編纂委員会 1994『更埴市史 第1巻 古代・中世編』
(財)長野県埋蔵文化財センター 1992『長野県埋蔵文化財センター 年報』8
(財)長野県埋蔵文化財センター 1993『長野県埋蔵文化財センター 年報』9
(財)長野県埋蔵文化財センター 1994『長野県埋蔵文化財センター 年報』10
(財)長野県埋蔵文化財センター 1996『長野県屋代遺跡群出土木簡』
長野県教育委員会 1968『地下に発見された更埴条里遺構の研究』

3 調査対象となった層序

(1) 層名

屋代層(I～XIX層) 屋代層のうち、発掘調査の手が届いた層までをI～XIX層に区分した。XVII・XIX層を除く各層からは、遺物や遺構が確認されており、人々の営みの痕跡が刻まれている。

層名の統一 更埴条里遺跡から屋代遺跡群・窪河原遺跡を同一テーブル上で論じるため、層名の統一を行った。全遺跡を通じて統一名称としたのは、ローマ数字で表示したI～XIXである。主に洪水砂層などの層理面を基準とした。例えば、窪河原遺跡の旧千曲川上に堆積したII層と更埴条里遺跡のII層は層相が

大きく異なっているが、ほぼ全域を覆うⅢ層（洪水砂）の上位にあることからⅡ層に統一してある。

各遺跡、各地点特有の層については、それぞれの地区名と層番号を統一層名の後に記した。例えば、Ⅵ層の内を、屋代遺跡群②区（Y2）で分層できた場合、Ⅵ-Y2-1層やⅥ-Y2-2層とした。この細別番号はあくまで当該地区内での分層であって、他地区の1・2層とは必ずしも同一層を現してはいない。

（2）弥生・古墳時代対応層の特徴（付図1）

Ⅵ層の形成時期 弥生・古墳時代の遺構・遺物の検出・包含された層はⅥ層である。Ⅵ層は更埴条里遺跡D地区～屋代遺跡群⑥区までの広範囲で確認できる（図5）。この層は、縄文時代晩期後半を通じて続いた砂の堆積（Ⅶ層）が止んだ後、その上位に堆積したシルト層であり、一部を除いて黒色化している。弥生時代前・中期の遺構埋土は黒色化しておらず、黒色化が進む時期は弥生時代後期以降と考えられる。

地区の特徴 広範囲にわたって類似した特徴を示すが、土地利用の差によって違いが認められる。一つはⅥ層上面が水田化した地域と集落域の違い。もう一つは上層水田などの影響による変質である。

Ⅵ層の起伏 Ⅵ層は、全体的には更埴条里遺跡南側に向かって低くなる。D地区以南は平安時代の層によって攪乱されるか、あるいは削平されるかしたために存在していない。また、更埴条里遺跡K地区から屋代遺跡群①区にかけてと、屋代遺跡群⑤・⑥区に微高地が存在し、この微高地と微高地の間が低くなっている。

弥生時代の遺構 流路は上記の微高地を避け、微低地を西から東に向かって流れている。また、Ⅵ層下面検出の植物根痕の分布を見ると、更埴条里遺跡J区以北（主に自然堤防上）に径が1mを超える根痕が多く存在し、それ以南の後背湿地では径数10cmが大半を占めるようになり、植生の違いがうかがえる。弥生時代中期には、屋代遺跡群②～③区の微低地部で自然流路とは方向の異なる水路が掘削される。

古墳時代の遺構 古墳時代には屋代遺跡群⑤・⑥区の自然堤防上に集落が展開し、更埴条里遺跡K地区の微高地にも、井戸跡が認められる。基幹水路が屋代遺跡群①区の高まりに敷設され自然堤防側を灌漑し、更埴条里遺跡南部の後背湿地にも水路が新設される。

4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境変遷

（1）検討会の設置

環境復元検討会 本報告書では、自然環境を含めた景観の復元を重視することとした。ただし、発掘調査時点では各地区の担当者の視点によって分析項目が設定され、委託先も複数に分散していた。今回、長大な調査地区を一冊にまとめる編集方針を受け、改めて全域を通じた課題の設定と各種分析内容の総合化が必要となった。そのため、環境復元に関する指導をいただいていた国立歴史民俗博物館の辻誠一郎助教授、各分析を担当していただいた南木睦彦（流通科学大学助教授）、松田隆二（古環境研究所）、辻本崇夫・田中義文（パリノ・サーヴェイ株式会社）、それに発掘調査担当者（主に市川・白田・河西・寺内）を加え、「環境復元のための検討会」を設置した。

分析の進行状況 各種分析は、①「検討会」発足以前にデータが寄せられたもの、②現在も分析を継続中のもの、③「検討会」によって新たに追加されるもの、が存在する。

現状では、分析途上の項目も多い。そのため、本編では、平成8年度末までに結果が得られたデータに基づいて、更埴条里遺跡・屋代遺跡群の自然環境の変遷を描くこととする。今後のデータの蓄積によって若干の修正が加えられると考えられるが、長期の環境変遷の中に「弥生・古墳時代」を位置づけるため、あえて概観を示すこととする。最終的な結論は、平成11年度刊行予定の『総論編』にゆだねたい。

(2) 古環境変遷の概要（予報）

バリノ・サーヴェイ株式会社

田中義文・辻本崇夫

更埴条里遺跡・屋代遺跡群の発掘調査では、縄文時代前期以降現代までの地層が確認された。環境復元検討会では、発掘調査所見に基づき基本層序をⅠ層～ⅩⅨ層に整理し、各地点間の層序対比を行った。また、これまで得られた自然科学分析調査の結果をこの基本層序・層序対比に従って再検討し、時空的な古環境変遷を捉えつつある。現状では、分析調査を補足すべき地点や考古学的事実とのすりあわせが必要な地点も残されているが、その概要を予報として示しておきたい。

地形・土地利用状況・古環境の変遷を捉える 本遺跡の地形発達と基本層序については、前節に詳しい（市川1998）。この成果に基づき、地形・土地利用状況と古環境の変遷を整理したのが表3である。特に、出土遺物などから時代観の明確な縄文時代前期（ⅩⅥ層）から近世（Ⅱ層）までの変遷がよく捉えられている。以下に、その概要を述べる。

縄文時代の環境変遷と土地利用 縄文時代は、河川作用の影響を受けながら自然堤防Ⅰ群が徐々に形成され、その休止期に人間生活の跡が遺された時代である。縄文時代前期に屋代遺跡群⑥区は氾濫原上の微高地として徐々に安定し、前期後葉には人間生活の跡がこの微高地上に遺されるようになる。その後、縄文時代中期前葉から中期後葉には旧千曲川の流路が安定し、屋代遺跡群④～⑥区は自然堤防として固定化され、自然堤防Ⅰ群の原形が成立した。この時期、微高地上に規模の大きい集落が営まれるようになる。また中期後葉には後背湿地を含む集落外の各地点から遺物が出土するようになり、地形の安定化に伴い生活領域が広がったことが示唆される。縄文時代後期から晩期にかけて、比較的高所である④・⑤・⑥区にも粗粒な堆積物がみられることから、再び河川作用が活発になりたびたび大規模な洪水が起こったと考えられる。縄文時代晩期中葉頃一時的にやや安定するが、晩期後葉には再び洪水にみまわれる。このように洪水を頻繁に受けていたにもかかわらず、自然堤防Ⅰ群には土坑や焼土などの生活の跡が遺されており、洪水の合間には後背湿地を含め生活領域として利用したことが示唆される。縄文時代晩期までに堆積した粗粒な堆積物によって、自然堤防Ⅰ群が地形単位としてほぼ確立したと考えられる。

縄文時代の古植生と稲作の出自 縄文時代前期から晩期にかけて古植生の変化は顕著ではなく、周辺にはクルミ属・ニレ属・ケヤキ属・シデ類・ナラ類等の河畔林や、ヨシ属を中心にした草本類主体の湿原植生が発達していたと考えられる。なお、更埴条里遺跡では、E・H・Ⅰ地区など局所的にイネ属の高い場所がみられた。その比率は後代の水田層に匹敵するほどであったが、本遺跡の立地する善光寺平では当時の稲作を支持するような遺構・遺物の検出例が見られず、また分析調査例も蓄積段階にあることなどから、今のところ稲作の存否について慎重な評価をしている。

弥生・古墳時代の古環境と土地利用 弥生・古墳時代は、自然堤防Ⅰ群を中心とする地形がほぼ安定・確立し、主に後背湿地で水田開発・経営が行われた時代である。黒色の表土（Ⅵ層）が形成され、河道・流路付近を除けば比較的安定していたと考えられる。弥生時代前期（弥生1・2期）には屋代遺跡群③a区や更埴条里遺跡E地区に小規模な居住・滞在の跡がみられるが、水田は確認されていない。この時期更埴条里遺跡側を中心に自然流路がみられるが、大きく改修したような痕跡は見られない。弥生時代中期（弥生3・4期）には、水田開発が始まる。屋代遺跡群②区では、ケヤキ・カツラなどの樹木が伐採・焼却され平坦地が確保された痕跡がみとめられ、既存の自然流路の改修が行われるとともに、自然堤防上に水路が開削され、水路体系が整備された。本格的な水田経営は、この時期に始まったといつてよい。その後古墳時代中期（古墳3・4期）に水路体系の再編はあったが、基本的に自然堤防上は集落、後背湿地は水田とし

層位	時代	土地利用状況			地形・土地利用変遷の概要	古植生	
		後背湿地 (更埴条里遺跡)	自然堤防I群 (屋代遺跡群)	自然堤防II群 (窪河原遺跡)		栽培種の 初出時期	周辺植生
I	現代	水田、富栄養化	水田、畠、集落	畠(高所)、水田(旧河道)	現状の村落景観。	ワタゴマ	人間の植生干渉によるマツの増加
II	中世後半～近世	水田?、富栄養化	畠、高所に集落	畠・墓域(高所)水田(旧河道)	自然堤防I群上では集落域・墓域・畠、後背湿地は水田域として利用される。水田の富栄養化始まる。自然堤防II群は安定化し、地形単位として成立。	不明	
III-1	平安後期～中世前半	水田?、富栄養化、K・J地区に集落	畠、高所に集落	畠・集落(高所)水田(旧河道)			
III-2	平安時代(9世紀末)	洪水層	洪水層	洪水層	洪水(仁和?)により、遺跡全体が砂層に覆われる。		
IV・V	飛鳥・平安時代	水田(A・B地区は9地区まで泥炭地)、K地区に集落	水田・畠、高所に集落	旧河道	自然堤防I群上まで条里水田が拡大する。そのなかでも、高所に集落が形成される。洪水の起きた可能性があるが断面では不明瞭。自然堤防II群付近は河川作用を強く受けており、地形単位としては成立していない。	マメ類 オオムギ ソバ	イネ科を中心とした草地の拡大 渡来種の出現 モミ属・ツガ属などの分布拡大
VI	弥生～古墳時代	水田、K地区に集落?	水田、高所に集落	不明	自然堤防I群が安定化し、地形単位として成立。弥生時代中期に森林を伐採した痕跡があり、新たな水路も開削される。この時期に水田開発が本格化し、それ以降耕地が拡大していく。基本的に自然堤防I群上は集落、後背湿地は水田として利用される。	モモ イネ	
VII	縄文時代晩期後葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり	不明	前半にやや安定するが、後半は河川作用が活発になり、大規模な洪水がたびたび起こる。自然堤防I群上には洪水の合間に生活の痕跡が遺される。		
VIII	縄文時代晩期中葉	集落?、焼土跡、建物	生活痕跡あり	不明			
IX	縄文時代後期中葉以降	生活痕跡あり	生活痕跡あり	不明			
X	縄文時代後期前葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり	不明			
XI	縄文時代後期前葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり	不明			
XII-1	縄文時代後期前葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり	不明			
XII-2	縄文時代中期後葉	生活痕跡あり	高所に集落、他地点にも遺物	不明	流路が安定し、自然堤防I上に集落が形成される。徐々に活動域拡大する。	不明	クルミ属、ニレ属、ケヤキ属、シデ類、ナラ類など河畔林の発達 ヨシ属を中心とする、草本類主体の湿原植生の発達
XIII	縄文時代中期中葉	不明	高所に集落	不明			
XIV	縄文時代中期前葉	不明	高所に集落	不明			
XV	縄文時代中期前葉	不明	生活痕跡あり	不明			
XVI	縄文時代前期後葉	不明	生活痕跡あり	不明			
XVII	不明	不明	不明	不明	氾濫源上の微高地として徐々に安定化してくる。最初の生活の痕跡が遺される。		
XVIII	不明	不明	不明	不明			
XIX	不明	不明	不明	不明			不明

表3 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の土地利用変遷と古環境

■ 本編の範囲

て利用されていた。弥生・古墳時代を通して、低地や河川周辺で小規模な洪水を受けた可能性はあるが、自然堤防上を覆い尽くすような大規模な洪水は受けなかったと考えられる。なお、古墳時代中・後期頃、屋代遺跡群⑥区には旧千曲川の流路があり、⑤区の集落との境は急崖であった。

弥生・古墳時代以降の古植生 遺跡周辺では、近世までイネ科を中心とした草本主体の植生が広がっていたと考えられる。このような状態は、上記したような水田開発・経営の開始が原因と考えられる。一方、後背の森林には、モミ属・ツガ属が分布するようになったと考えられる。なお、栽培種は、イネ・モモが弥生時代以降、マメ類・オオムギ・ソバが飛鳥・平安時代以降出現する。

飛鳥・平安時代以降近世までの古環境と土地利用 飛鳥・平安時代には条里水田が自然堤防上まで拡大され、更埴条里遺跡K地区などの高所には集落が形成された。一方、更埴条里遺跡A・B地区では泥炭(V層)が発達したが、9世紀頃には水田化された。この間、自然堤防I群上は小規模な洪水を受けたが、耕作などによってその痕跡は消滅している。また、自然堤防II群(窪河原遺跡)付近に旧千曲川の流路があり、地形的には安定していない。9世紀末になると、自然堤防上を含め、遺跡全体を砂層が覆うような非常に規模の大きい洪水が起きた。この洪水は「仁和の洪水」に比定される可能性がある。文献によればこの洪水以後も中世～近世に大洪水があったとされるが、自然堤防I群上の断面にその形跡は明瞭でない。平安時代後期～近世にかけて基本的には、自然堤防上は集落や畠、後背湿地は水田として利用された。水田内の水域の水質は富栄養化しており、水利や施肥の方法が変化した可能性がある。この時期には自然堤防II群が安定化し、地形単位として確立する。自然堤防II群に立地する窪河原遺跡では旧河道の名残の低地が水田、高所は集落・畠として利用された。現代につながる村落景観はこの時期に成立したものとみられる。

第4節 調査・整理の経過

1 調査の概要

(1) 調査の実施にあたって

調査期間と調査範囲 本地区の上信越自動車道の供用開始時期と工事期間との兼ね合いから、発掘調査期間は平成3年度から平成6年度の4年間に限定された(図6 窪河原遺跡H2地区は、平成2年調査の中央自動車道関連分である)。上信越自動車道用地の約2.3km区間はほぼ全域が調査対象となっている上、沖積地であるため遺構が地下深く重層的に存在することが考えられた。そのため、当初より遺跡の内容に見合った調査の遂行には困難が予想された。詳細については『総論編』に掲載する。

調査体制 広範囲の遺跡を短期間で調査し終えるため、調査班を複数作り、大量動員をはかり、数カ所を同時に調査を実施した。詳細は『総論編』に掲載する。

(2) 調査の手順

調査の手引き 調査の手順、地区設定、遺跡・遺構記号などは、(財)長野県埋蔵文化財センター『発掘調査の手引き』に則って進めた。地区設定は図7に、分割調査のために設定した仮地区は図6に示した。

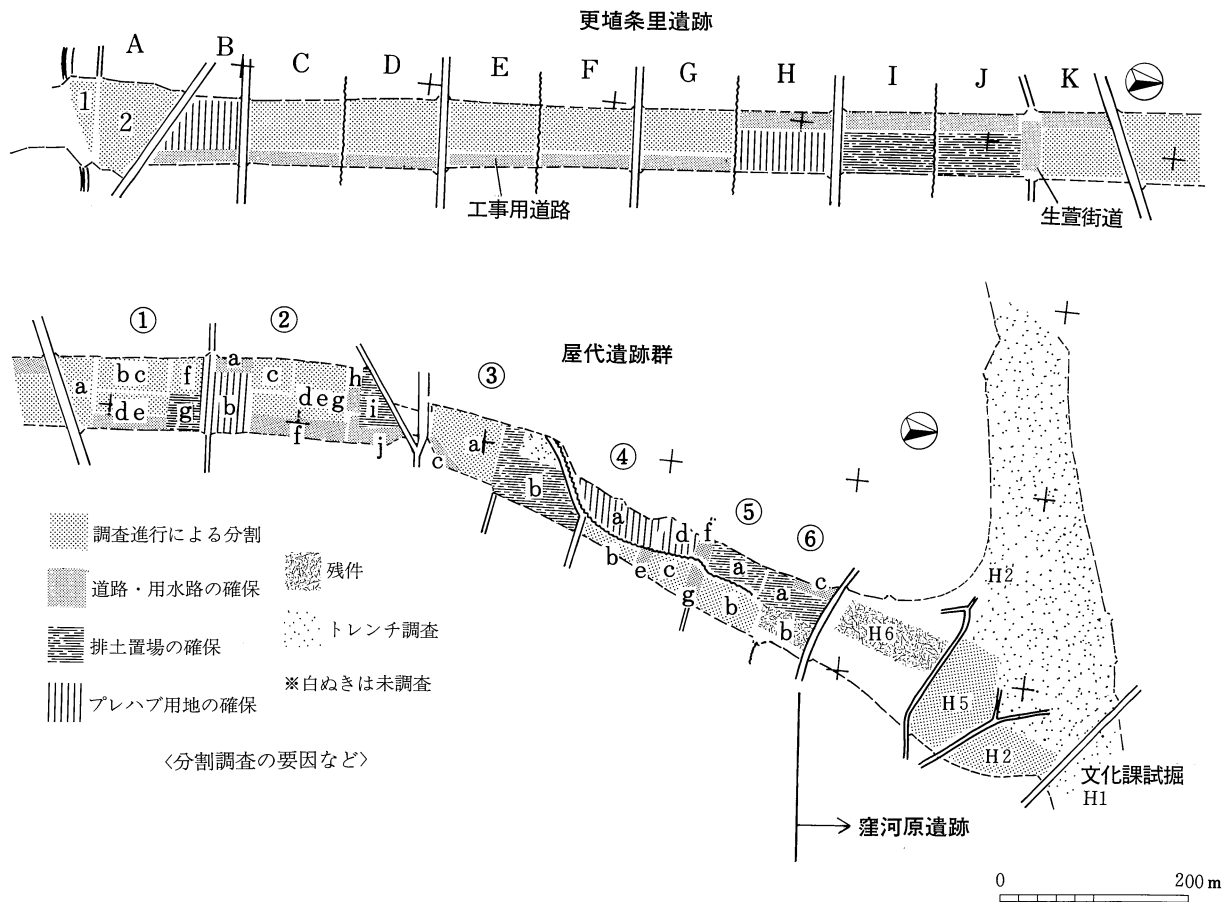
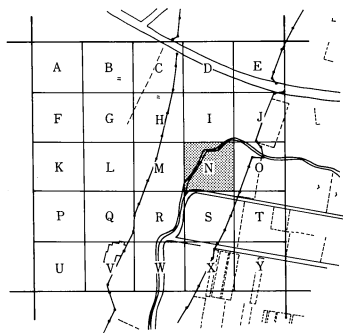


図6 仮地区名と分割調査



窪河原遺跡
屋代遺跡群
更埴条里遺跡

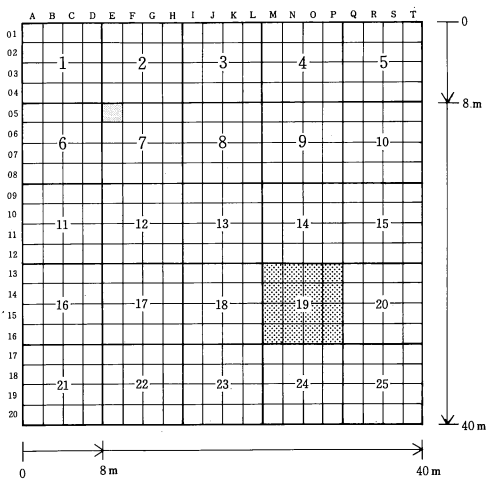
A 発掘調査対象範囲



大地区 I N 区
(D 図対応)

0 40m 200m

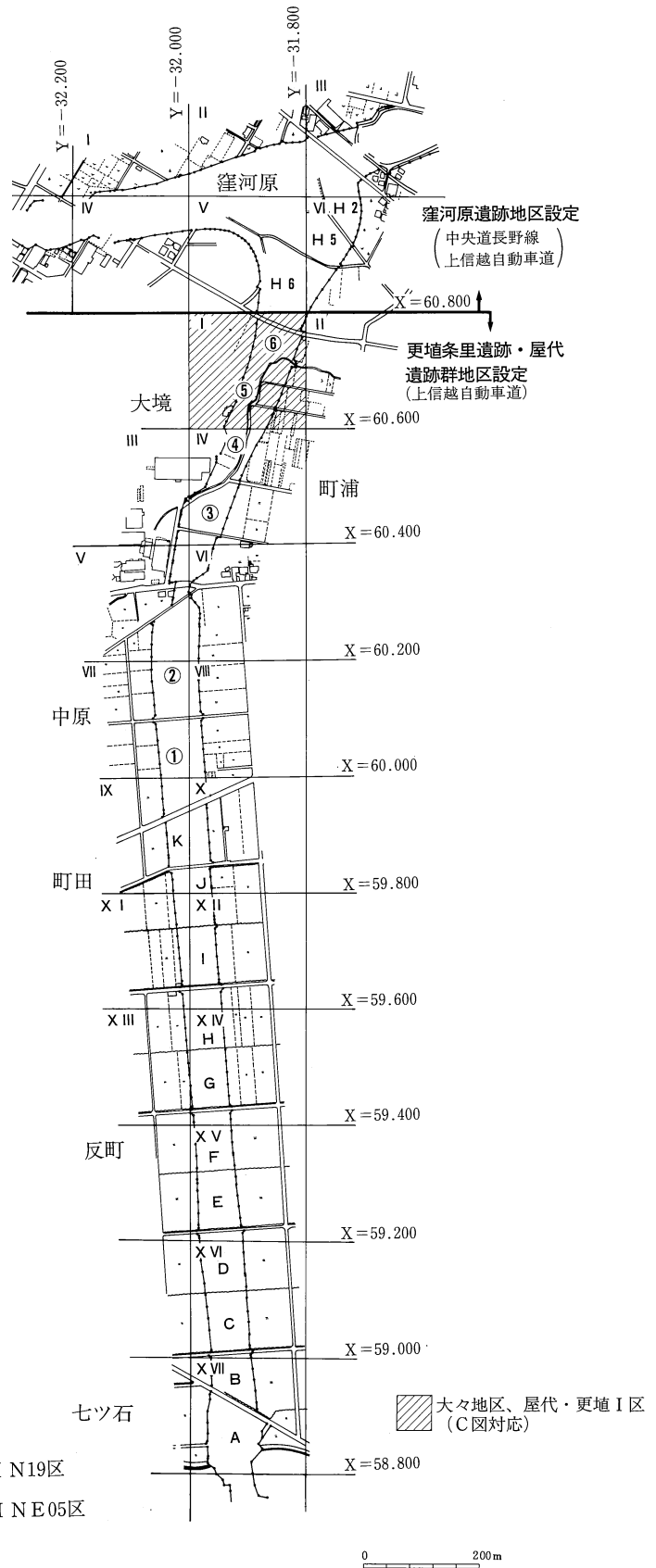
C 大地区設定図



中地区 I N 19 区
小地区 I N E 05 区

0 8m 40m

D 中・小地区設定図



窪河原遺跡地区設定
(中央道長野線
上信越自動車道)

更埴条里遺跡・屋代
遺跡群地区設定
(上信越自動車道)

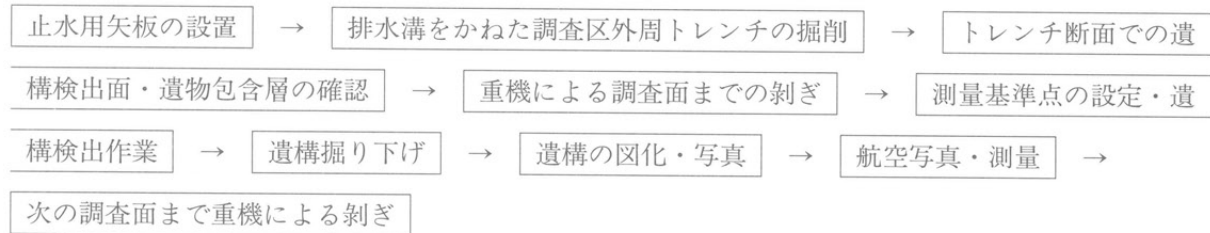
大々地区、屋代・更埴 I 区
(C 図対応)

0 200m

B 地区設定図

図7 地区設定図

基本的な調査進行 基本的な調査の進め方は、次の通りである（下段写真）。



また、各地区の特殊な事情によって調査法を多少変えている。

さらに、時間短縮のため、重機等の機械力や航空測量・航空撮影、8mmビデオカメラを多用した。

(3) 整理作業の経過

整理経過 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の本格的な整理作業は、平成7年度から上田調査事務所において実施している。『弥生・古墳編』に関しては、平成7・8年度は主に遺物の洗浄と保存処理に費やし、8年度後半から9年度にかけて遺構図の確定、遺物の実測・写真撮影を行い、9年度半ばから報告書に向けての執筆・版組などを行った。整理作業に関係した方々や整理体制などについては、平成11年度刊行予定の『総論編』を参照していただきたい。



外周トレンチの掘削（更埴条里遺跡J地区）



VI層下面までの剥ぎと検出作業（同左）



遺構の掘り下げ（同上）



遺構の図化（更埴条里I地区）

第2章 弥生時代前期並行から中期（VI層中～下面検出） の遺構と遺物

第1節 概観

本章に掲載した遺構や落ち込みは、溝・流路67条、土坑（根痕を含む）158基、焼土（炉）跡6基である。VI層下面検出遺構の時期は、弥生前期並行期（水式土器期）から4世紀代の溝を含んでいる。ただし、自然堤防上の屋代遺跡群⑤区集落域では、弥生時代後期（箱清水式土器期）と古墳時代の遺構検出面が同じであり、埋土の分離も困難であった。ここでは集落の変遷と水路の関係を優先したため、埋土が黒色化した弥生時代後期～古墳時代の溝は、VI層下面検出であっても全て第3章に掲載した。したがって、本章に掲載した遺構は弥生1期（弥生時代前期並行）から弥生4期（弥生時代中期後半）に属するものである。

上記の時期の遺構は更埴条里遺跡から屋代遺跡群③区までで確認されたが、自然堤防が最も高まる屋代遺跡群④～⑥区では発見することができなかった。

弥生1期 後背湿地側の更埴条里遺跡で自然流路が認められ、流路付近の焼土跡（E地区）がこの時期の可能性を持つ。自然堤防側の屋代遺跡群③区では土坑とともに土器・石器の集中が認められる。

弥生2期 更埴条里遺跡のS D 881b（I地区）から石包丁が出土し、水田の存在をうかがわせる。屋代遺跡群①区で土坑1基が確認されているが、本格的な開発の痕跡は見つかっていない。

弥生3～4期 更埴条里遺跡では、自然流路を水路として改修する動きが見られる。一方、屋代遺跡群ではケヤキやカツラの低地林を開墾し、大規模な水路網を新設し、本格的な水田開発が始まる。

第2節 遺構と遺物出土状況

1 遺構各説（図8～22）

(1) 溝・自然流路跡（SD）

① 概要

掲載方法 SDで表示した溝や流路は、人工・自然を問わず掲載している。個々の記述は一覧表に示し、個別図は原則として断面図のみを掲載し、平面図は1/500のみである。

分類基準 溝・自然流路は、流れの形状、平面形、断面形、底面の形状などから4群に分類し、個別の説明を極力省いた。また、それにより、人工的に掘削された溝であるか、自然流路であるかの可能性を示しておいた。各類型の分布、変遷により、弥生時代の開発についての見解を第5章1節に示した。

分類基準は以下の通りである。

I群 直線的で、深さや幅が安定したもの→人工的に掘削されたと考えられるもの

1類 直線的な流路をとり、深さや幅が比較的安定したもので、II・III群に比べ微低地の方向（地形）に左右されていない。堆積土中（主に溝底付近）に砂を多く含む

→水田への給排水のために人工的に掘削された水路と推定できるもの

- a 溝幅は3 m以上と広く、1-b類を分岐する
→屋代・更埴全域をカバーする基幹水路 弥生時代では確定できず
- b 溝幅が1～2 mと比較的広く、分岐する小溝を伴う。
→水田への給・排水を行う幹線水路と思われる。 例>屋代SD2271ほか
- c I-b類に比べ溝幅が狭く、I-b類溝に接続する。分岐する小溝を伴う。
→幹線水路から分かれた支水路と思われる。 例>屋代SD2288
- d 溝幅が狭く、1-bやc類と平行、あるいは独立して存在する。
→水がかりの悪い部分への補助的水路か？
- e I-a～c類に比べ、幅30cm前後と狭く、長さや深さも小規模。溝底に砂を含まない例があり、水流が穏やかであったと思われる。
→水田への直接的な給・排水路（水口）と考えられる。 例>屋代SD2294

2類 直線的で、深さや幅が安定したもの。堆積土中に砂を全く含まないもの

- a VI層を埋土に持つ場合が多い。水の流れがひじょうに遅いか、水路ではないもの
→区画溝など 例>屋代SD2267・古墳SD4051
- ※ 現場段階で溝とされた2類の内、土質や位置から畦畔状遺構・畦畔下部施設に変更した例がある。
ここで2類としたものは、それらを除いてある。
- b VI層を埋土に持つ。数条の溝が企画性を持って並ぶ。
→畝跡の可能性を持つもの 例>屋代・古墳SD4054

3類 湧水点から祭祀施設などへ水を導くために掘削された溝

→古墳時代以降見られる。 例>屋代・古墳SD7068

II群 自然流路上、あるいは隣接して存在し、やや蛇行するが、深さや幅が安定したもの

→自然流路を改修した可能性を持つもの。 例>更埴SD882

III群 流路方向・深さ・幅などが一定しないもの→自然流路と考えられる例

1類 大きく蛇行し、溝幅や深さが安定せず、近接して流路変更に伴う小流路や流路の“深み”が残存する。堆積土中に砂を含む。

→基本的には、自然流路と考えられる。明確な形では現れていないが、一部人手が加わっている可能性もある。 例>更埴SD403、屋代SD2275・2263

2類 1類に近接して存在する不整形の落ち込みで、堆積土中に砂を含む場合が多い。

→自然流路に伴う“深み”の部分と考えられる。現場段階の記号のままSKで表示してある。

例> 屋代SK1080

IV群 上記以外、もしくは詳細なデータがとれず判断できないもの

概 略 人工的な水路と考えられるI群は、比較的乾燥した自然堤防側（屋代遺跡群）に存在し、自然流路と考えられるIII群が少ない地区である。時期は弥生（3）～4期以降に限定される。これに対し、更埴条里遺跡側の比較的湿潤な後背湿地では、自然流路と思われるIII群が西から東へ向かって蛇行しており、それらを改修したと考えられるII群が認められる。時期は、弥生2期以降と考えられる。

遺跡番号	仮地区	番号	旧遺構名・番号	時期	遺構図	大地区	中地区	平面形	流路方向	分類	全長(m)	最大幅(m)	深さ(m)	色調	土性	堆積状況	遺物	掲載遺物	切合関係古→新	備考
BYS 2		2281		3・4期	図15	VII	D19	直線的	西北西→東南東	III-1	(6)	0.3	0.12	にぶい黄褐色	細砂~中粒砂		土器・石器	図24	SD2271・2284新田不明→SD2288	SD2279などへつながる、自然流路盛部付近の残存と思われる。=2279・2364
BYS 2		2282	SD2282・2283	3・4期	図15	V・VIII	S25~E2	直線的	北北西→南南東	I-1-b	27.8	0.88	0.15	にぶい黄褐色	細砂~中粒砂		土器・石器	図24	SD2271・2284新田不明→SD2288	SD2287を分岐。SD2288へ接続
BYS 2		2283	SD2282	3・4期	図15・20	V	S25~Y11	直線的	北北西→南南東	I-1-b	(7.8)	0.46	0.14	にぶい黄褐色	細砂~中粒砂		土器	図24	SD2283・2288新田不明→SD2288	SD2285・2286へつながる。SD2288へ接続。SD2282の付け替えか
BYS 2		2284		3・4期	図15	V	Y6	直線的	北北西→南南東	I-1-b	5.1	0.5	0.05	にぶい黄褐色	細砂~中粒砂		土器	図24・36	SD2283・2288新田不明	SD2284・2286へつながる。SD2288へ接する
BYS 2		2285		3・4期	図15	V	X5~Y1	不整形	北北西→南南東	I-1-b	5.2	0.42	0.05	にぶい黄褐色	細砂~中粒砂		土器・石器	図24・36	SD2283・2288新田不明	SD2284・2285へつながる。SD2288へ接する
BYS 2		2286		3・4期	図15・20	V	S25~X5	直線的	北北西→南南東	I-1-b	6.2	0.49	0.18	にぶい黄褐色	細砂~中粒砂		土器・石器	図24・36	SD2271新田不明	SD2282の付け替えか
BYS 2		2287		3期	図15・20	V	S25~X5	直線的	北北西→南南東	I-1-b	(16.2)	1.08	0.1	灰黄褐色	細砂		土器・石器	図24・36	SD2289→	幹線水路SD2271へ排水する溝と考えられる。SD2289の付け替えの可能性あり。SD2387・2388へつながる
BYS 2		2288		3期	図15	V	T16~S25	直線的	東北東→西南西	I-1-c	4.6	0.76	0.06	にぶい黄褐色	細砂		石器	図36	→SD2288	SD2288に先行する溝か。SD2286・2287へ分岐
BYS 2		2289		3・4期	図15	V	T16~S25	直線的	東北東→西南西	I-1-c	8.3	1.57	0.05	にぶい黄褐色	細砂		なし		SD2271より古い可能性あり	SD2271に先行する幹線水路の一部と考えられる
BYS 2		2290		3・4期	図15	V	S19-24	直線的	北北西→南南東	I-1-b	7.2	7.1	0.08	にぶい黄褐色	細砂					流路と根痕が重複している可能性あり
BYS 2		2292		弥生	図15	V	S23~X4	不整形	不明	-	5.3	4.21	0.12	灰黄褐色	細砂		石器		幹線水路SD2271がSD2288と接する結節点に関連する何らかの施設か。あるいは、洪水時に決裂したのか等々、性格不明。	
BYS 2		2293		3・4期	図15	V	S24	輪状	不明	-	2.1	0.34	0.08	にぶい黄褐色	細砂		石器		幹線水路から水を水田へ小分けする分岐水路か	
BYS 2		2294		3・4期	図15・20	V	X10	直線的	北東→南西	I-1-e	0.24	0.24	0.12	にぶい黄褐色	細砂~粗砂		土器	図23		SD2275や2279につながる自然流路と思われる
BYS 2		2363	SD2279~	3・4期	図15	VII・VI	E15~U12	やや蛇行	南西→北東	III-1	(22.4)	0.5	0.12	褐色	細砂~中粒砂		土器・石器	図24・36	SD2271新田不明	同上
BYS 2		2364		3・4期	図15	VII・VI	E10~U2	やや蛇行	南西→北東	III-1			0.1							
BYS 2		2365	→SD2278として表	3・4期	図15	V				III-1			0.2							
BYS 2		2385	→SK1205へ改変	弥生	図15	V	S5	不整形	不明	-			0.14							
BYS 2		2387		3期	図15	V	T12	屈曲	北→南西	I-1-c	6.8	1.08	0.14	灰黄褐色~にぶい黄褐色	シルト		石器			SD2288につながる溝
BYS 2		2388		3期	図15	V	T2~7	直線的	北→南	I-1-c	(6.6)	1.02	0.08	にぶい黄褐色	シルト		土器			SD2387・2288につながる溝
BYS 2		2389	→SK1206へ改変	弥生	図16	VI	K21			-			0.2							
BYS 2		2390	→SK1207へ改変	弥生	図16	VI	K21			I-1-c?			0.14							
BYS 2		2391	→SK1117に統合	弥生	図15	V	S4~9			-			0.52							
BYS 2		2392	SD2271~統合	3・4期	図15	V	S13~19			I-1-b			0.38							SD2271から分岐
BYS 2		2393		弥生	図15	V	S14~19	直線的	北→南	I-1-b	3.8	0.36	0.1	灰黄褐色	シルト~細砂		土器			=SD2271
BYS 2		2397		弥生	図16	VI	K12~17	直線的	北北西→南南東	I-1-b	7	0.64	0.12	にぶい黄褐色	シルト~細砂		土器	図24	SD2398新田不明	SD2398に先行、あるいは後続する付け替え溝と思われ
BYS 2		2398		弥生	図16	VI	K11~22	直線的	北北西→南南東	I-1-b	20.6	3.92	0.21	にぶい黄褐色	シルト~細砂		土器・石器	図36	SD2397新田不明	幹線水路である可能性あり

表4-(2) VI層下面検出自然流路・水路一覧

遺跡番号	坂地区	番号	旧遺構名・番号	時期	遺構図	大地区	中地区	平面形	流路方向	分類	全長(m)	最大幅(m)	深さ(m)	色調	土性	堆積状況	遺物	掲載遺物	切合関係古→新	備考
BYS 2		2399		弥生	図15	VI	P2	蛇行	東西	I-1-c	4.1	1.96	0.25	にぶい黄褐色	シルト～細砂		石器		SD2398からの分岐溝の可能性あり	
BYS 2		2400		弥生	図15	VI	P16	蛇行	東西	I-1-c ?	4.5	1.88	0.11	にぶい黄褐色	シルト～細砂				SD2401へつながる	
BYS 2		2401		弥生	図15	V	T20	蛇行	東→西	I-1-c ?	2.5	0.76	0.22	にぶい黄褐色	シルト～細砂				SD2400へつながる	
BYS 2		2469		弥生	図14	VIII	F1・2	直線的	東→西	IV	3.5	0.5	0.28	灰黄褐色	シルト				弥生後期～古墳前期の可能性あり	
BYS 2		2475		弥生	図14	VIII	F21～K1	直線的	西南西→東北東	IV	2.6	1.03	0.18	灰黄褐色	シルト				弥生後期～古墳前期の可能性あり	
BYS 2		2477		弥生	図14	VII	O4～10	直線的	東→西	IV	(12.2)	0.52	0.14	灰黄褐色	シルト				弥生後期～古墳前期の可能性あり	
BYS 2		2480		弥生	図15	V	S20	直線的	北西→南東	I-1-c ?	3.3	0.3	0.15	?					SD2288へつながる分岐溝	
BYS 2		3085		弥生	図17・20	III・IV・VI	Y15～A2	一ヶ所で屈曲、直線的	北→南→南東	I-1-b	24.8	3.38	0.15	灰黄褐色	シルト～細砂			→SD3086	SD3090に分岐	
BYS 2		3086		弥生	図17・20	III・IV	U21～Y25	直線的	北東→南西	I-1-c	11.5	0.32	0.08	灰黄褐色	シルト				SD3088より分岐した水路と考えられる	
BYS 3		3088		3・4期	図17・20	IV・VI	U16～A15	一ヶ所で屈曲し、直線的	北→南南西→南西	I-1-b	52.3	2.66	0.2	褐灰色	シルト～粗砂		図24・37		SD3086・3094・3301に分岐	
BYS 3		3090		弥生	図17・20	III・V	Y20～E4	やや蛇行	北北東→南南西	I-1-c	15.4	1.28	0.1	にぶい黄褐色	シルト～細砂				SD3085より分岐した水路と考えられる	
BYS 3		3092		弥生	図17	III	Y24	やや蛇行	北北東→南南西	I-1-c	3.5	0.66	0.09	灰黄褐色	シルト			→SD3090		
BYS 3		3094		3・4期	図17	VI	A8・9	直線的	西北西→東南東	I-1-b	10.6	1.76	0.17	灰黄褐色	シルト～細砂			SD3088との新旧不明	SD3088から分岐、または付け替えられた溝か	
BYS 3		3200		弥生	図17	V	J2～9	一ヶ所で屈曲、直線的	西北西→東南東→東	IV	13.3	3.12		褐灰色	シルト			SD3201→	砂の混入が無く、水の流速が遅いか水の流れが異なかつた可能性があり、他の水路とは性格が異なる。	
BYS 3		3201		弥生	図17	V	J2・7	一ヶ所で屈曲、直線的	西北西→東南東→東	IV	3.3	0.72							砂の混入が無く、水の流速が遅いか水の流れが異なかつた可能性があり、他の水路とは性格が異なる。	
BYS 3		3294		3・4期	図18・20	IV	L14～24	直線的	北→南	I-1-b	32.7	1.6	0.08	にぶい黄褐色	シルト			SD3295との新旧不明	SD3297と直交する	
BYS 3		3295		弥生	図18・20	IV	L14～Q2	直線的	北→南	I-1-b	33.7	0.98	0.18	黄褐色	シルト			SD3294との新旧不明	SD3297と直交する	
BYS 3		3296		弥生	図18・20	III	P14～Q21	直線的	北西→南東	I-1-b	21.9	0.14	0.14	にぶい黄褐色	シルト					
BYS 3		3297		弥生	図18	IV	Q2～9	直線的	西→東	I-1-b	12.4	0.9	0.2	にぶい黄褐色	シルト				SD3294・3295と直交する	
BYS 3		3298		弥生	図18・20	IV	L13～18	直線的	北→南	I-1-b	7.9	1.06	0.34	にぶい黄褐色	シルト				炭化樹種同定＝ケヤキ	
BYS 3		3299		弥生	図18・20	V	Y4・9	一ヶ所で屈曲、直線的	北→南→南西	I-1-b	10	1.5	0.14	暗褐色	シルト					
BYS 3		3300		弥生	図18・20	V	Y9	直線的		IV	3.9	1.27	0.2	にぶい黄褐色	シルト				古墳時代の可能性あり	
BYS 3		3301		弥生	図17	III	Y20	直線的	北東→南西	I-1-c	0.9	0.4		不明	不明				SD3088から分岐する溝	

※ BKSは更地桑里遺跡、BYSは屋代遺跡群

表4-(3) VI層下面検出自然流路・水路一覽

② 溝・自然流路の変遷（個別例）

個々の溝の特徴については、表4を参照していただき、ここでは、ほぼ同じ地点において検出された溝・自然流路の変遷について、代表的な例を取り上げておく。

更埴条里遺跡 SD828.830.881a.881b.882溝群（図10・19）

初源：縄文晩期後半の砂層堆積（VII層）が一段落した後、低地部（I地区）を、西から東へ流れる自然流路SD881bが初源となる。弥生2期の土器蓋と石包丁が出土しており、水田への水利用が推定される。しかし、人の手が加わった明確な痕跡は見られない。**水路改修：**SD882は、この流路を直線的に整えた溝であり、蛇行するSD881bに比較して、本格的に改修工事がなされたものと推定できる。遺物がなく、細別時期は特定できない。両溝は灰褐色の砂を基本としており、他地区の弥生時代の溝の堆積土と類似している。**上層水路：**これに対し、両溝の上部に存在するSD881aはやや黒色化した砂層となる。これのみでは断定はできないが、屋代遺跡群の古墳時代溝SD3078最下層と類似している。SD881aは古墳時代中期以前に黒色化する基本土層（VI層）に覆われている。現代の堰も隣接しており、古代以降も水路は隣接して存在し続けていたと考えられる。

屋代遺跡群 SD2271.3088.3294ほか溝群（図15～18、20）

新設水路：自然堤防側に入り、比較的乾燥した地区に存在する溝群である。これらの溝は②区、③a区、③b区に離れているが、自然堤防の高所に設置した水路から自然堤防内の水田可耕地へ向かって掘削された一連の溝と考えられる。そのため、微低地を流れる更埴条里の自然流路・溝とは方向が異なる。**改修：**いずれの地区でも最低2条の溝が平行して流れ、切り合っていることから、初期の掘削後、改修されていることがわかる。SD3088から弥生3～4期の土器がまとまって出土しており、弥生時代中期の栗林期直前段階頃に掘削が始まったと考えられる。**供給源：**自然堤防上の本線水路が特定できていない。位置的には、屋代遺跡群④区で検出されたSD4530が有力な候補である。しかし、この溝からは古墳時代前期の土器が出土しており、弥生時代からの継続か否かは断定できない。**上層水路：**継続せず、弥生時代の幹線水路とは全く異なった方向の水路が古墳時代に掘削される。

屋代遺跡群 SD2363.2272他溝群（図14・15、20）

初源：自然流路SD2363・2364に平行する流路が初源であろう。III群2類のSD2280、SK1077などから石包丁や弥生3期の土器が出土している。SD2363には弥生4期の土器が含まれており、栗林期まで自然流路が存在していた可能性が高い。**改修：**SD2272に混入している土器は弥生4期の中でも、SD2363より若干古い。しかし、切り合い関係からはSD2363を改修した水路と考えられる。このことは、屋代遺跡群②区の水田開発の時期を特定する上で、重要な点となろう。

(2) 焼土跡（SF）（図21・表5）

概要 VI層下面で検出された焼土跡は、更埴条里遺跡E地区と屋代遺跡群①区の2カ所のみである。両地区の焼土跡ともに遺物の出土はなく、時期を限定できる根拠は存在していない。

更埴条里遺跡E地区 弥生1期の氷式土器が散在し、SD403内からも同時期の土器が出土している。想像を逞しくすれば、SD403河畔での一時的な逗留に伴う焼土跡とも考えられる。

屋代遺跡群①区 SKの項で取り上げるII群土坑（焼土・炭化材を伴う倒木根）の可能性もある。炉（焼き火）跡とした場合、1. 土器や石器の散在する弥生1・2期の一時的な逗留地に伴う。2. この地区の開墾（水路掘削と低地林伐採）が盛んに行われる弥生3・4期、開墾に伴う一時的な逗留地に伴う。などの可能性が推測されるが、現段階では確定できる資料はない。

(3) 土坑 (SK) (図21・表5)

① 概要

掲載方法 調査時にSKとした例には、人為的に掘り込まれた土坑のほかに、根株跡や流路の“深み”などが存在する。これらは、調査の手順上、主に平面図のすべてを航空測量に委託した地区において、手取り断面図との照合の都合上SKと命名した例。あるいは、当初、根株跡か否かの判断が難しかった例などが大半を占めている。ここでは、沖積地の開発過程を知る上で重要となる根株跡や流路の深みについても、一部SK表示のまま掲載する。

分類基準 土坑は上記の例を含め、5類型に分類し、その代表的な例のみ個別図を掲載した。個々の説明は極力省き、一覧表に掲載した。

各類型の分類基準は以下の通りである。

- I群 人為的な掘り込みと考えられるもの 弥生時代では、性格の明確でない例が2例のみである。
- II群 植物痕などの自然物に人手が加わったもの
 - 不整形で、凹凸の激しいものの内、焼土塊や炭化物片を多く混入するもの
- III群 自然の営力で落ち込みとなり、直接的な人手の介入が認められないもの
 - 1類 不整形で、凹凸の激しいものの内、焼土や炭化物をほとんど含まないもの (根痕か)
 - 2類 自然流路跡に隣接し、凹凸が見られる。埋土中に砂が混入する (流路の“深み”か)
- IV群 上記以外、あるいはデータが少なく判断できないもの

② 各群別資料の代表例

< I群 >

屋代遺跡群に2基存在するのみである。

SK154 屋代遺跡群①区で単独で検出。掘り込みは浅く、壺形土器が1個体 (図25-76) 出土した。

SK3212 屋代遺跡群③区の遺物集中地点のほぼ中央に存在する。垂直に近い掘り込みを有し、覆土中から1cmほどの焼骨 (同定不可) が1点出土している。

< II群 >

屋代遺跡群②区に集中し、隣接する①区北や③区に散在する。これ以外の地区では確認されていない。

SK1055ほか 平面・断面形ともに安定していない。特にSK1159例のように、シミ状に黒色化した部分があるが、たこ足状に延び、底面にも凹凸を作る例が典型で「根痕」と考えられる。焼土と炭化物を混入していることがII群の前提となる。焼土は、SK1057例のように、こぶし大～やや小さめの焼土塊がブロック状に集中する箇所があり、炉跡のような平面的に火を焚いた跡とは考えられない。根に絡んだ土塊が焼けたものであろう。炭化物は人頭大の根株状のものほか、棒状のものが多く、板状のものは含まれていない。炭化物はケヤキ・カツラ・広葉樹に限定されており、この地区に低地林が存在していたことを示している。

< III群 1類 >

多くは「根痕」と考えられる。古墳時代以降の遺構が密集しているため検出できなかった屋代遺跡群④～⑥区を除き、ほぼ全域で見つかっている。ただし、比較的規模の大きい例は、更埴条里遺跡K地区～屋代遺跡群③区に見られ、更埴条里遺跡J地区以南では、直径が数10cm以下のものが大半を占めるようになる。更埴条里の低湿地側には本来大木がなかったのか、あるいは、砂の堆積が終了した直後から生産域としての土地利用がはじまったため、大木が育たなかったのか、今後の課題である。

遺跡記号	仮地区	遺構記号	遺構番号	旧遺構名・番号	遺構図	大地区	中地区	平面形	類型	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	特徴	色調	土色帳記号	堆積状況	遺物	遺物掲載図	備考
BKS	E	SF	401		図8	XV	K8	不整形		0.63	0.55		掘り込みなく、IV層上面被熱			中央に焼土塊、周囲に炭化物散在	なし		
BKS	E	SF	402		図8	XV	K13	不整形		0.45	0.3		掘り込みなく、IV層上面被熱			焼土のみ	なし		
BKS	E	SF	403		図8	XV	Q3, L23	不整形		1.2	0.8		掘り込みなく、IV層上面被熱			焼土・炭化物が面的に広がる	なし		
BYS	1	SF	5	SK656	図14, 21	VII	T4	不整形楕円形	II	0.68	0.32	0.06	SF6・7よりよく焼けている		10YR4/6	焼土粒子多量混入、底面に炭化物			
BYS	1	SF	6	SK657	図14	VII	T4	不整形楕円形	II	0.45	0.33	0.07				焼土粒子混入			
BYS	1	SF	7	SK658	図14	VII	T1	不整形楕円形	II	0.41	0.28	0.11				焼土粒子混入			
遺跡記号	仮地区	遺構記号	遺構番号	旧遺構名・番号	遺構図	大地区	中地区	平面形	類型	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	特徴	色調	土色帳記号	堆積状況	遺物	遺物掲載図	備考
BKS	G	SK	6488	P6058	図9	XIV	P2	不整形	III	0.25	—	0.27		極暗褐色	7.5YR2/3		土器	図25	
BKS	K	SK	9504		図12	IX	T7・8	不整形	III	1.3	0.9	0.12		にぶい黄褐色	10YR5/4	VII層土微量混入			
BKS	K	SK	9505		図12	IX	T6・7	不整形	III	2.1	1.2	0.12	凹凸あり	にぶい黄褐色	10YR5/4	VII層土微量混入			
BKS	K	SK	9506		図12	IX	O17	不整形	III	1.3	1.4	0.08	凹凸あり	暗褐色	10YR3/3				
BKS	K	SK	9510		図12	IX	O7	不整形	III	1.25	0.7	0.15	凹凸あり	暗褐色	10YR3/3	VII層土微量混入			
BKS	K	SK	9511		図12	IX	O7	不整形	III	2.8	2.1	0.24	凹凸あり	黒褐色	10YR3/2	暗褐色土がブロック状に混入			
BKS	K	SK	9513		図12	IX	O2・7	不整形楕円形	III	1.3	1.2	0.34	凹凸あり	暗褐色	10YR3/3				
BKS	K	SK	9514		図12	IX	O2	不整形	III	0.8	0.6	0.3	凹凸あり						
BKS	K	SK	9517		図12	IX	O3	不整形	III	1.6	1.5	0.17	凹凸あり	暗褐色	10YR3/3				
BKS	K	SK	9518		図12	IX	O9	不整形	III	1.5	1.4	0.18	凹凸あり	黒褐色～暗褐色	10YR3/2～3/3	炭化物片混入			
BKS	K	SK	9519		図12	IX	J23・24・O3	不整形	III	2	1.9	0.12	凹凸あり	暗褐色	10YR3/3				
BKS	K	SK	9520		図12	IX	J21・O1	不整形	III	1.4	1.1	0.11	浅い窪み込み	暗褐色	10YR3/4				
BKS	K	SK	9521		図12	IX	O1	円形	III	0.6	0.6	0.2	凹凸あり	暗褐色	10YR3/4				
BKS	K	SK	9527		図12	IX	J22	不整形楕円形	III	0.9	0.6	0.25	凹凸あり	暗褐色	10YR3/4				
BKS	K	SK	9529		図12	IX	J22	不整形楕円形	III	0.5	0.5	0.08	凹凸あり	黒褐色	10YR3/2				
BKS	K	SK	9532		図12	X	K1	不整形楕円形	III	1.1	1	0.07	凹凸あり	暗褐色	10YR3/3				
BKS	K	SK	9533		図12	X	F21・K1	不整形楕円形	III	2.8	2.4	0.13	凹凸あり	黒褐色～暗褐色	10YR3/2～3/3	VII層ブロック微量混入			
BKS	K	SK	9534		図12	X	F21	不整形楕円形	III	1.7	1.2	0.12	凹凸あり	黒褐色～暗褐色	10YR3/2～3/3	VII層ブロック微量混入			
BKS	K	SK	9535		図12	X	F21	不整形楕円形	III	0.8	0.7	0.1	比較的整った掘り込み	暗褐色	10YR3/3～3/4				
BKS	K	SK	9536		図12	X	F21	不整形	III	1.1	0.8	0.16	凹凸あり	黒褐色	10YR3/2	VII層ブロック微量混入			
BKS	K	SK	9540		図12	X	K2	不整形	III	1.5	1.4	0.44	凹凸あり	黒褐色～褐色	10YR3/2～4/4				
BKS	K	SK	9541		図12	X	K8	不整形	III	1.4	0.8	0.26	凹凸あり	黒褐色	10YR3/2				
BKS	K	SK	9542		図12	X	K8	不整形	III	0.8	0.6	0.32	—	黒褐色～褐色	10YR3/2～4/4				
BKS	K	SK	9544		図12	X	K8	不整形	III	0.6	0.8	0.27	凹凸あり	暗褐色	10YR3/4				
BKS	K	SK	9545		図12	X	K8	不整形	III	0.5	1.2	0.35	凹凸あり	暗褐色	10YR3/4				
BKS	K	SK	9546		図12	X	K7	不整形	III	1.2	0.7	0.3	凹凸あり	黒褐色	10YR3/2				
BKS	K	SK	9547		図12	X	K7・8	不整形	III	0.5	0.9	0.18	凹凸あり	暗褐色	10YR3/4				
BKS	K	SK	9548		図12	IX	O18	不整形	III	0.9	0.9	0.04	浅い掘り込み	黒褐色	10YR3/2	暗褐色土ブロック微量混入			
BKS	K	SK	9549		図12	IX	O18	不整形	III	1.3	1.2	0.07	浅い掘り込み	黒褐色	10YR3/2	暗褐色土ブロック微量混入			
BKS	K	SK	9550		図12	IX	O13	不整形	III	1.2	1.1	0.25	凹凸あり	黒褐色～暗褐色	10YR3/2～3/4	暗褐色土ブロック微量混入			
BKS	K	SK	9551		図12	X	K2	不整形	III	1.4	0.5	—	—						
BYS	1	SK	154		図19, 21	VII	Y2・7	不整形楕円形	I	1.83	1.36	0.14	なだらかな窪み		10YR3/3	炭化物混入	土器	図25	
BYS	1	SK	457		図14	VII	T7	不整形楕円形	II	(0.55)	0.4	0.1	—		10YR4/4	炭化物層をほさみ焼土混入			
BYS	1	SK	458		図14	VII	T7	不整形楕円形	II	(0.62)	0.33	0.08	—		10YR4/4	焼土多量混入、炭化物混入			
BYS	1	SK	605	なし	図13	VII	X25	不整形楕円形	II?	0.75	0.36	0.05	—		—	焼土多量混入、炭化物混入			
BYS	1	SK	619	なし	図13	VII	Y11	不整形	III	1.74	1.42	0.04	凹凸あり		10YR4/3	—			
BYS	1	SK	632	なし	図13	VII	T21・22	不整形	III	1.5	1.1	—	—		10YR4/3	—			

表5-1(1) 更埴系里遺跡・屋代遺跡群 弥生時代SF・SK一覧

遺跡 記号	仮地 区	遺構 記号	遺構 番号	遺構名 ・番号	遺構 図	大地 区	中地区	平面形	類型	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	特 徴	色 調	土色・曜記号	堆積状況	遺物	遺物揚 截面	備 考
BYS 1	1	SK 633		なし	図13	Ⅶ	T23	不整形円形	Ⅳ	1.4	0.93	0.06	-	-	10YR4/3	-			
BYS 1	1	SK 634		なし	図13	Ⅶ	T21	不整形円形	Ⅲ	0.97	0.78	-	-	-	10YR4/3	-			
BYS 1	1	SK 637		炭化物集 中3	図14	Ⅶ	T2	不整形円形	Ⅱ	1.48	0.86	0.22	凹凸あり		10YR4/3	炭化物混入			樹種同定・継文・晩期
BYS 1	1	SK 638		炭化物集 中1	図14	Ⅶ	T2	不整形	Ⅱ	1.28	0.8	0.16	なだらかかな窪み		10YR4/3	炭化物混入			
BYS 1	1	SK 639		炭化物集 中2	図14	Ⅶ	T3・4	不整形	Ⅱ	1.38	0.36	0.15	なだらかかな窪み		10YR4/3	炭化物多量混入			
BYS 1	1	SK 640		炭化物集 中6	図14	Ⅶ	O16	不整形	Ⅱ	3.42	2.56	0.14	なだらかかな窪み		10YR4/3	炭化物多量混入			樹種同定
BYS 1	1	SK 641		炭化物集 中4	図14	Ⅶ	N19	不整形	Ⅱ	1.2	0.98	0.03	なだらかかな窪み		10YR4/3	炭化物多量混入			
BYS 1	1	SK 642		炭化物集 中5	図14	Ⅶ	N20	不整形	Ⅱ	0.92	0.74	0.32	なだらかかな窪み		10YR4/3	炭化物混入			
BYS 1	1	SK 643		なし	図14	Ⅶ	N14・15・19 ・20	不整形	Ⅳ	5.17	2.89	-	なだらかかな窪み		10YR4/3	-			
BYS 1	1	SK 652		炭化物集 中7	図14	Ⅶ	T8・9	不整形	Ⅲ	1.95	1.3	0.14	-		10YR4/3	炭化物混入			
BYS 1	1	SK 653		WIS4-P2	図14	Ⅶ	S4・5	不整形円形	Ⅳ	0.74	(0.26)	0.16	-						
BYS 1	1	SK 654		WIS4-P1	図14	Ⅶ	S4	不整形	Ⅳ	0.82	0.8	0.2	凹凸あり		10YR4/3	焼土、炭化物混入			
BYS 1	1	SK 655		なし	図14	Ⅶ	S4	不整形	Ⅳ	1.58	0.92	0.15	-						
BYS 1	1	SK 659		SX12	図14	Ⅶ	S4	不整形	Ⅳ	3.06	(1.22)	0.29	-		10YR4/3	焼土、炭化物混入			
BYS 1	1	SK 660		I区炭化物集中	図14														樹種同定
BYS 2	2	SK 1038			図14	Ⅶ	N9	不整形円形	Ⅴ	(0.46)	(0.52)	0.09	-						
BYS 2	2	SK 1039			図14	Ⅶ	N9	不整形	Ⅴ	(0.8)	(0.32)	0.09	-						
BYS 2	2	SK 1042			図15	Ⅶ	E23	不整形	Ⅳ	1.84	1.27	0.28	凹凸あり		10YR4/3	焼土、炭化物混入			
BYS 2	2	SK 1043			図15	Ⅶ	E16	不整形円形	Ⅲ	1.18	0.6	0.23	凹凸あり		10YR4/3	炭化物微量混入			
BYS 2	2	SK 1045		SK 1044 を含む	図15	Ⅶ	E16	不整形	Ⅲ	0.94	0.87	0.39	-		10YR3/3~4/3	焼土、炭化物微量混入			
BYS 2	2	SK 1046			図15・ 21	Ⅶ	D8	不整形	Ⅱ	1.42	1	0.33	わずかに凹凸あり		10YR4/3	焼土、炭化物混入	石器	図37	
BYS 2	2	SK 1047			図15	Ⅶ	D5	不整形	Ⅲ	3.74	3.45	0.56	凹凸あり		10YR4/3	焼土、炭化物微量混入			
BYS 2	2	SK 1048			図15	Ⅶ	D5	不整形	Ⅱ	1.77	1.02	0.39	凹凸あり		10YR4/3	炭化物混入			
BYS 2	2	SK 1049			図15	Ⅶ	E1・2・6・7	不整形	Ⅱ	3.8	3.7	0.58	凹凸あり		10YR3/3~4/4	焼土、炭化物混入			
BYS 2	2	SK 1050			図15	Ⅴ	Y3	不整形	Ⅱ	1.18	0.74	0.19	凹凸あり		10YR4/3	焼土、炭化物混入			
BYS 2	2	SK 1051			図15	Ⅴ	X24	不整形円形	Ⅱ	1.5	0.85	0.16	凹凸あり		10YR3/3	焼土、炭化物混入	石器	図37	樹種同定
BYS 2	2	SK 1052			図15	Ⅴ	X20・25 Y16・21	不整形	Ⅱ	2.68	1.9	1.3	凹凸あり		10YR4/3~4/4	焼土、炭化物混入			
BYS 2	2	SK 1053			図15	Ⅶ	E14	不整形	Ⅳ	1.74	0.87	0.53	凹凸あり		10YR3/3	炭化物微量混入			
BYS 2	2	SK 1054			図15	Ⅶ	E7	不整形	Ⅱ	0.78	0.64	0.33	-		10YR4/3	焼土、炭化物多量混入			樹種同定
BYS 2	2	SK 1055			図15・ 21	Ⅴ	Y7・12	不整形	Ⅱ	2.5	2.26	0.33	凹凸あり		10YR3/3~4/3	焼土、炭化物混入			樹種同定
BYS 2	2	SK 1056			図15	Ⅴ	X14・19	不整形円形	Ⅱ	2.68	2	0.1	凹凸あり		10YR3/2~3/3	焼土、炭化物少量混入			
BYS 2	2	SK 1057			図15・ 21	Ⅶ	E13	不整形	Ⅱ	1.82	1.2	0.15	凹凸あり		10YR4/3	焼土多量混入、炭化物混入			
BYS 2	2	SK 1058			図15	Ⅴ	Y19	不整形	Ⅱ	1.76	0.7	0.32	凹凸あり		10YR4/3	焼土、炭化物多量混入			
BYS 2	2	SK 1059			図15	Ⅴ	X4	不整形	Ⅱ	3.34	1.02	0.26	-		10YR5/2	焼土、炭化物混入			
BYS 2	2	SK 1072			図15	Ⅴ	Y15・20	不整形	Ⅲ	4.6	2	0.25	凹凸あり		10YR3/4	炭化物微量混入	土器	図25	
BYS 2	2	SK 1073			図15	Ⅵ	U16	不整形	Ⅳ	1.6	1.35	0.11	凹凸あり		10YR4/3	炭化物混入 (SK1081より 黒色気味)		図25	
BYS 2	2	SK 1074			図15	Ⅵ	U21	不整形円形	Ⅱ	0.7	0.55	0.1	-		10YR3/4	焼土、炭化物少量混入			樹種同定・C 14年代測定
BYS 2	2	SK 1075			図15・ 21	Ⅷ	A1・2	不整形	Ⅱ	4.1	2.44	0.5	凹凸あり		10YR2/3~4/3	焼土、炭化物混入		図25	
BYS 2	2	SK 1077			図15	Ⅶ	E10・15	不整形	Ⅳ	4.9	3.89	0.12	凹凸あり		10YR3/4	炭化物微量混入	土器	図25	
BYS 2	2	SK 1078			図15	Ⅷ	A6	不整形	Ⅲ	2.16	1.06	0.1	わずかに凹凸あり		10YR4/4	-			樹種同定・C 14年代測定
BYS 2	2	SK 1080			図15	Ⅶ・ Ⅷ	E15・A11	不整形	Ⅳ	5.04	3.4	-	凹凸あり		10YR4/4	-			樹種同定・C 14年代測定

表 5-(2) 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 弥生時代SF・SK一覽

遺跡 記号	仮地 区	遺構 記号	遺構 番号	旧遺構名 ・番号	遺構 図	大地 区	中地区	平面形	類型	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	特 徴	色 調	土色帳記号	堆积状況	遺物	遺物掲 載図	備 考
BYS 3	3	SK 3054			図17	V	E8・I3	不整形	III	2.14	0.8	0.11	なだらかな窪み		10YR5/3~5/6	焼土粒微量混入			
BYS 3	3	SK 3204			図17・21	V	E19	不整形	II	2.27	0.9	0.25			10YR4/1~5/3	炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3206			図17	V	E19	不整形	V	0.42	0.31	0.18			10YR4/2	炭化物粒子少量混入			
BYS 3	3	SK 3207			図17	V	E19	不整形	V	0.48	0.4	0.1			10YR4/2	炭化物粒子少量混入			
BYS 3	3	SK 3208			図17	V	E19	不整形	V	0.64	0.4	0.08			10YR4/2	炭化物粒子少量混入			
BYS 3	3	SK 3209			図17	V	E19	不整形	V	0.77	0.58	0.17			10YR4/2	炭化物粒子少量混入			
BYS 3	3	SK 3210			図17	V	E19	不整形	V	0.38	0.27	0.12			10YR4/2	炭化物粒子少量混入			
BYS 3	3	SK 3211			図17	V	E14	不整形	V	0.26	0.25	0.05			10YR4/2	炭化物粒子少量混入			
BYS 3	3	SK 3212			図17・21	V	E14	不整形	I	0.92	0.72	0.56	明確な掘り込みあり		10YR2/3~4/3	焼土微量混入、炭化物 粒子少量混入			
BYS 3	3	SK 3213			図17	V	E14	不整形	V	0.52	0.4	0.22			10YR4/2	炭化物粒子少量混入			
BYS 3	3	SK 3214			図17	V	E13	不整形	V	0.42	0.4	0.09			10YR4/2	炭化物粒子少量混入			
BYS 3	3	SK 3228			図17	VI	A16	不整形		3	1.84	—							
BYS 3	3	SK 3321			図18	IV	P18	不整形		3.18	2.26	0.52	凹凸あり		10YR4/2~4/3	炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3322			図18	IV	P22・23・ U2・3	不整形	III	4.94	3.14		凹凸あり		10YR4/2~4/3	—			
BYS 3	3	SK 3323			図18	IV	V1・2	隅円長方形	II	3.88	3.4	0.44			10YR4/2~4/3	焼土、炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3324			図18	IV	P23	不整形	II	2.37	1.8	0.57			10YR4/2~4/3	焼土、炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3325			図18	III	Y10	不整形	V	1.14	1	0.27			10YR4/3~5/3	焼土、炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3326			図18	III	P19	不整形	II	0.94	0.57	0.18	凹凸あり		10YR4/3	炭化物微量混入			
BYS 3	3	SK 3327			図18	III	M15	不整形	—	0.64	0.6	—			10YR4/2	炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3328			図18	III	M15	不整形	—	1.27	(1.04)	—			—	—			
BYS 3	3	SK 3329		SF3001	図17	IV	U20	不整形	II	3.1	(1.28)	0.35	凹凸あり		10YR4/2~3/3	焼土多量混入			
BYS 3	3	SK 3330		SF3002	図17	IV	U21	不整形	II	1.74	1.02	0.04			10YR3/3	焼土、炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3331		SF3003	図17	V	E4	不整形	II	1.27	0.55	0.7			—	炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3332		SF3004	図17	V	E8	不整形	II	—	—	—			—	—			
BYS 3	3	SK 3333		SF3005	図17	IV	U22	不整形	II	2.24	0.7	3.5			10YR3/4	炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3334		SF3006	図17	IV	U20	不整形	II	2.04	(1.0)	0.13			10YR3/4	炭化物混入			
BYS 3	3	SK 3335		SF3013	図17	VI	A11	不整形	II	4.4	1.2	0.24			10YR7/3	焼土、炭化物微量混入			
BYS 3	3	SK 3336		SF3014	図17	VI	A16・21	不整形	II	2.58	1	0.07			10YR7/3	焼土、炭化物微量混入			
BYS 3	3	SK 3337		SF3015	図17	VI	A18	不整形	II	1.97	1.27	0.59			10YR6/3~7/3	焼土微量混入、炭化物 多量混入			
BYS 3	3	SK 3338		SF3016	図17	VI	A18	不整形	II	1.7	0.67	0.07			10YR7/3	焼土微量混入			
BYS 3	3	SK 3339		SF3017	図17	VI	A17	不整形	II	0.76	0.58	0.03			10YR7/6	焼土、炭化物微量混入			

表 5-(4) 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 弥生時代SF・SK一覧

※ BKSは更埴条里遺跡、BYSは屋代遺跡群

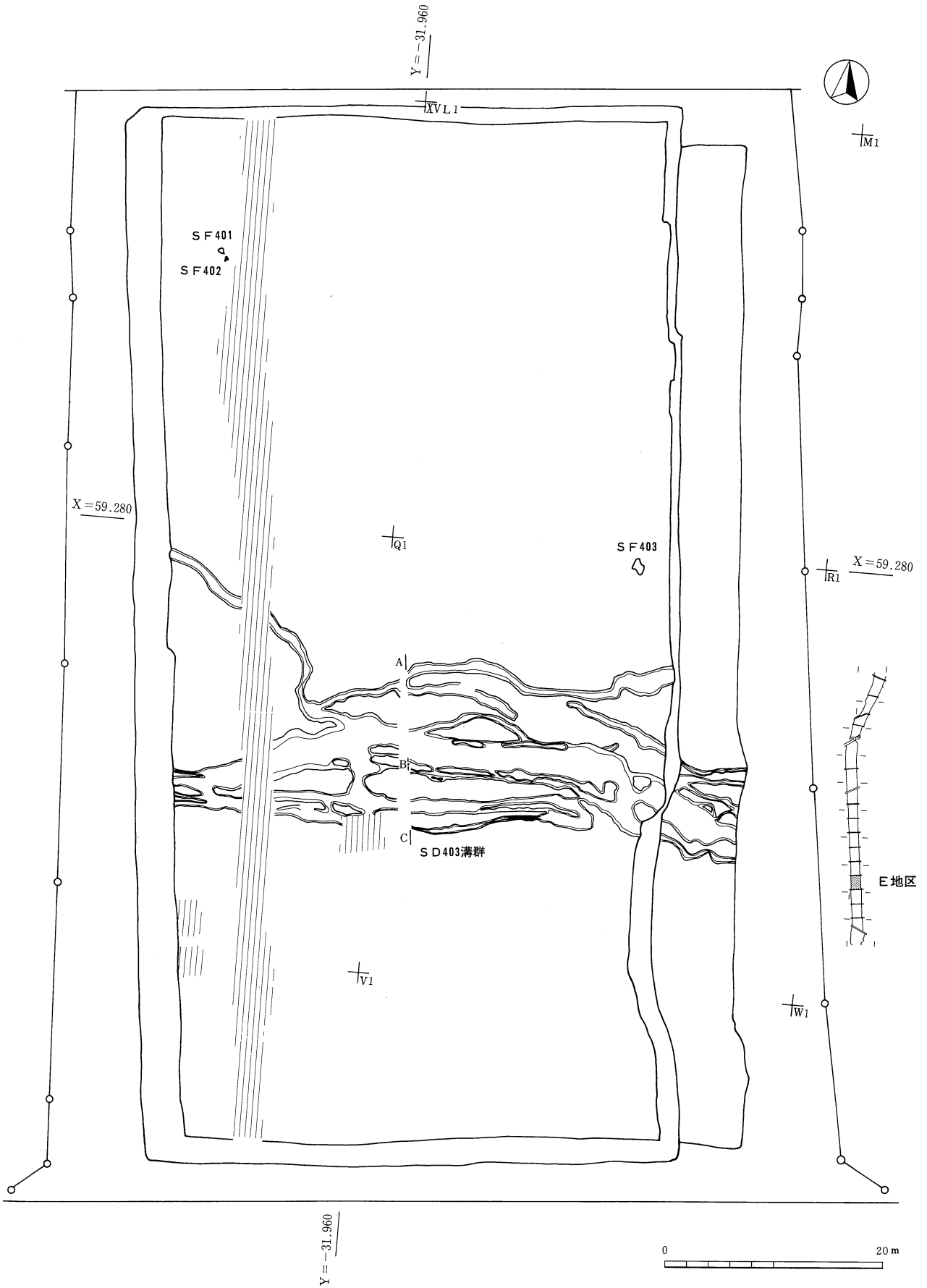


図8 弥生時代遺構分布図 1 (更埴条里遺跡E地区)

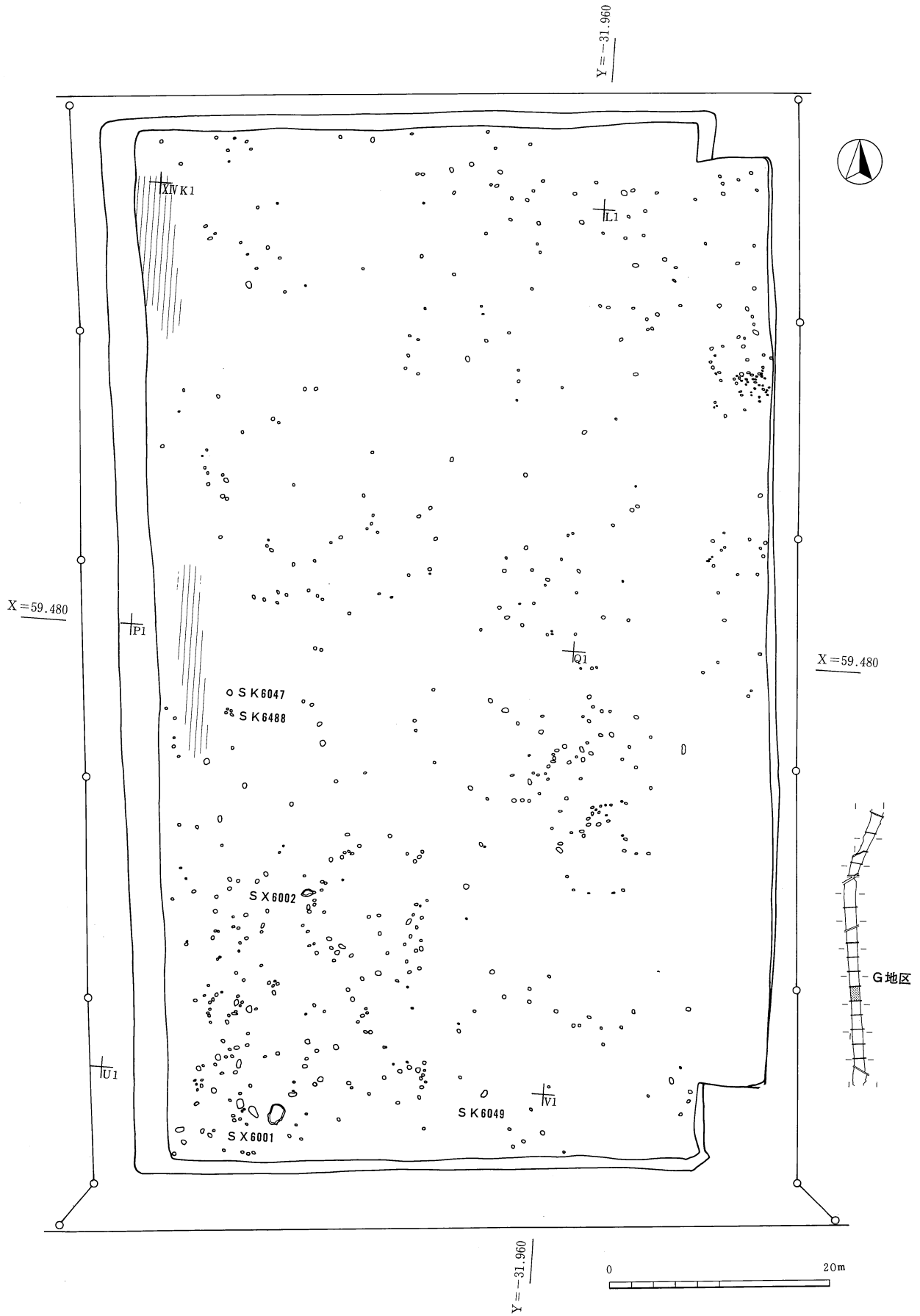


图9 弥生時代遺構分布图 2 (更埴条里遺跡G地区)

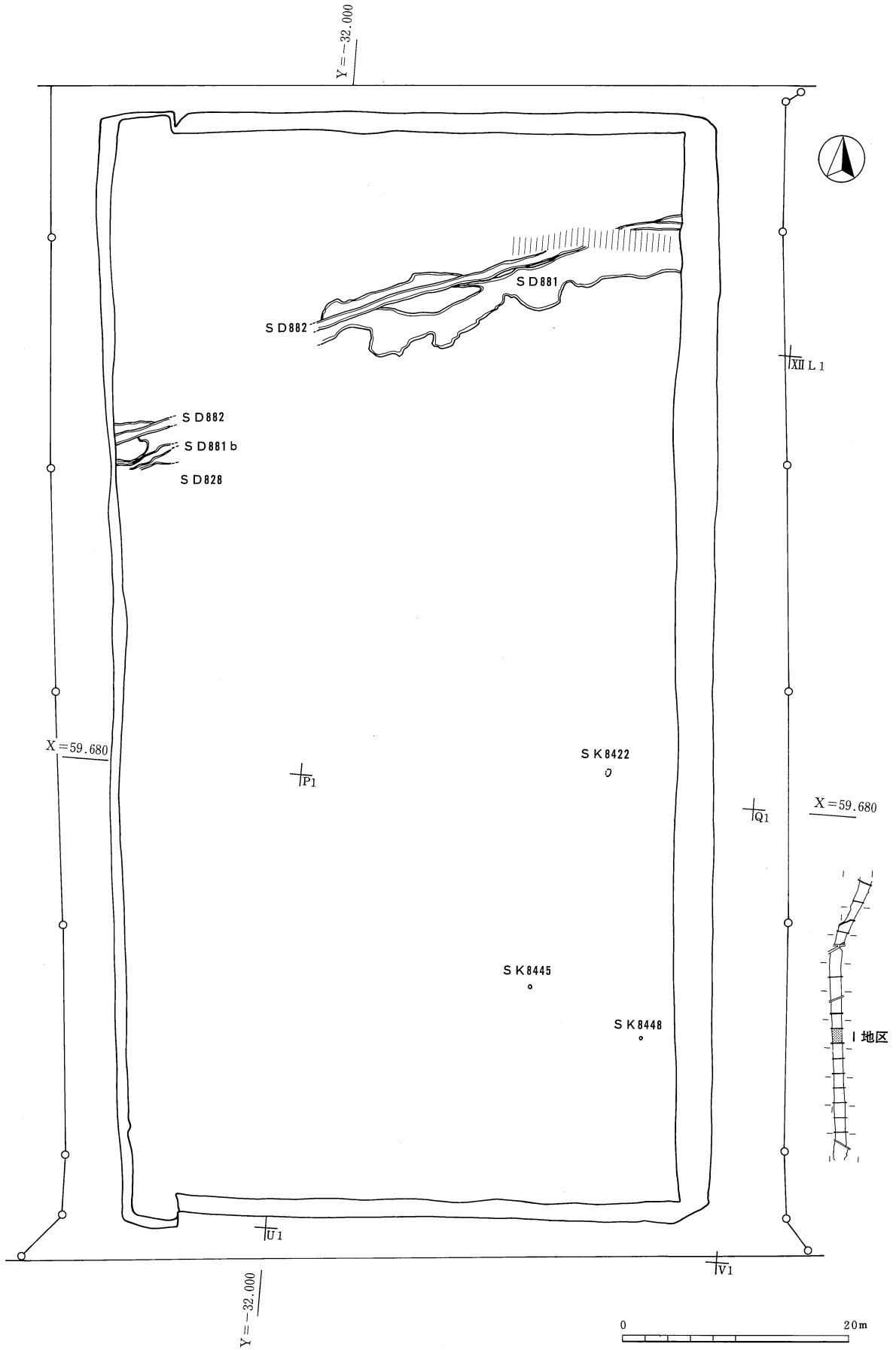


図10 弥生時代遺構分布図 3 (更埴条里遺跡 I 地区)



図11 弥生時代遺構分布図 4 (更埴条里遺跡J地区)

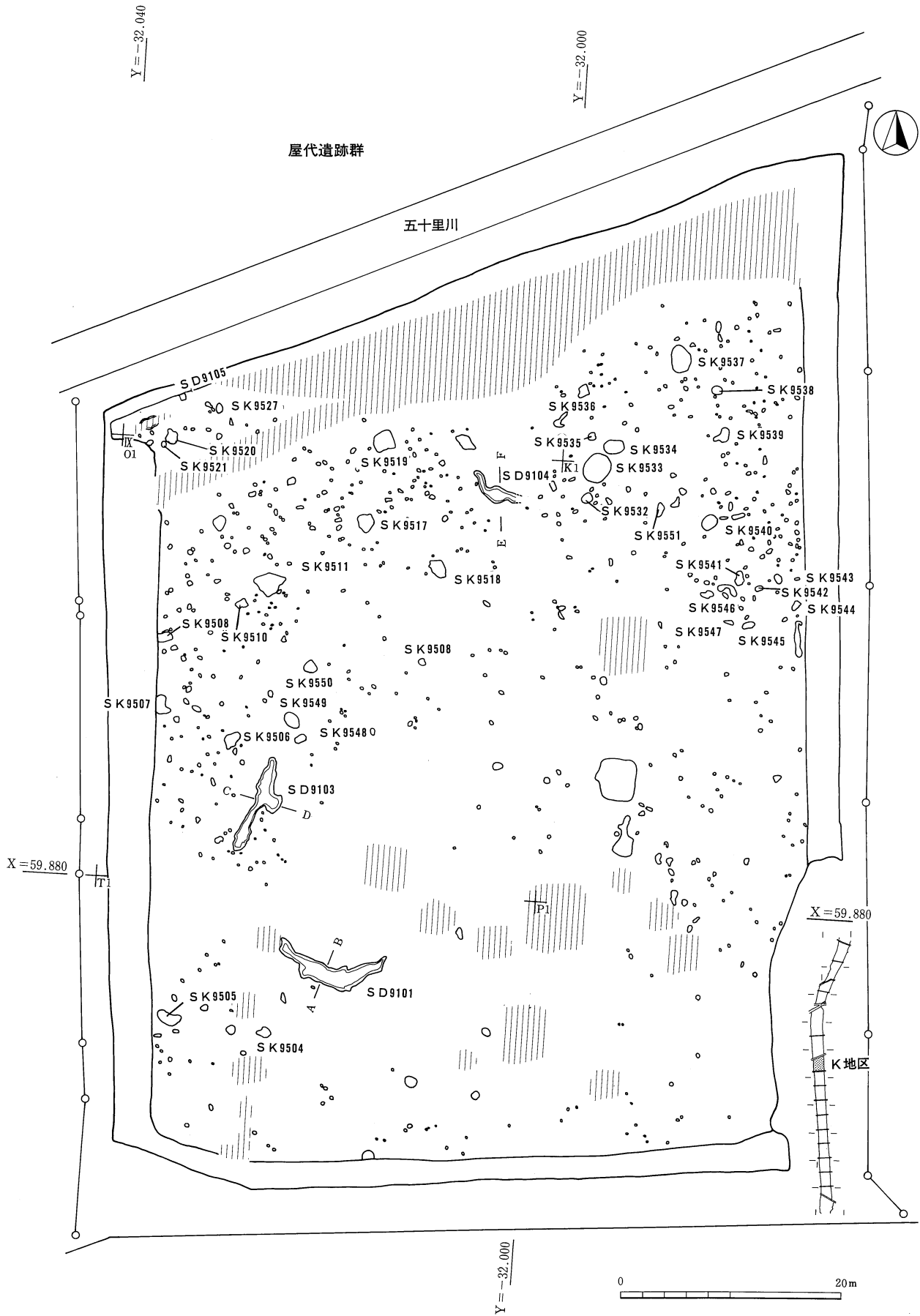


図12 弥生時代遺構分布図 5 (更埴条里遺跡K地区)

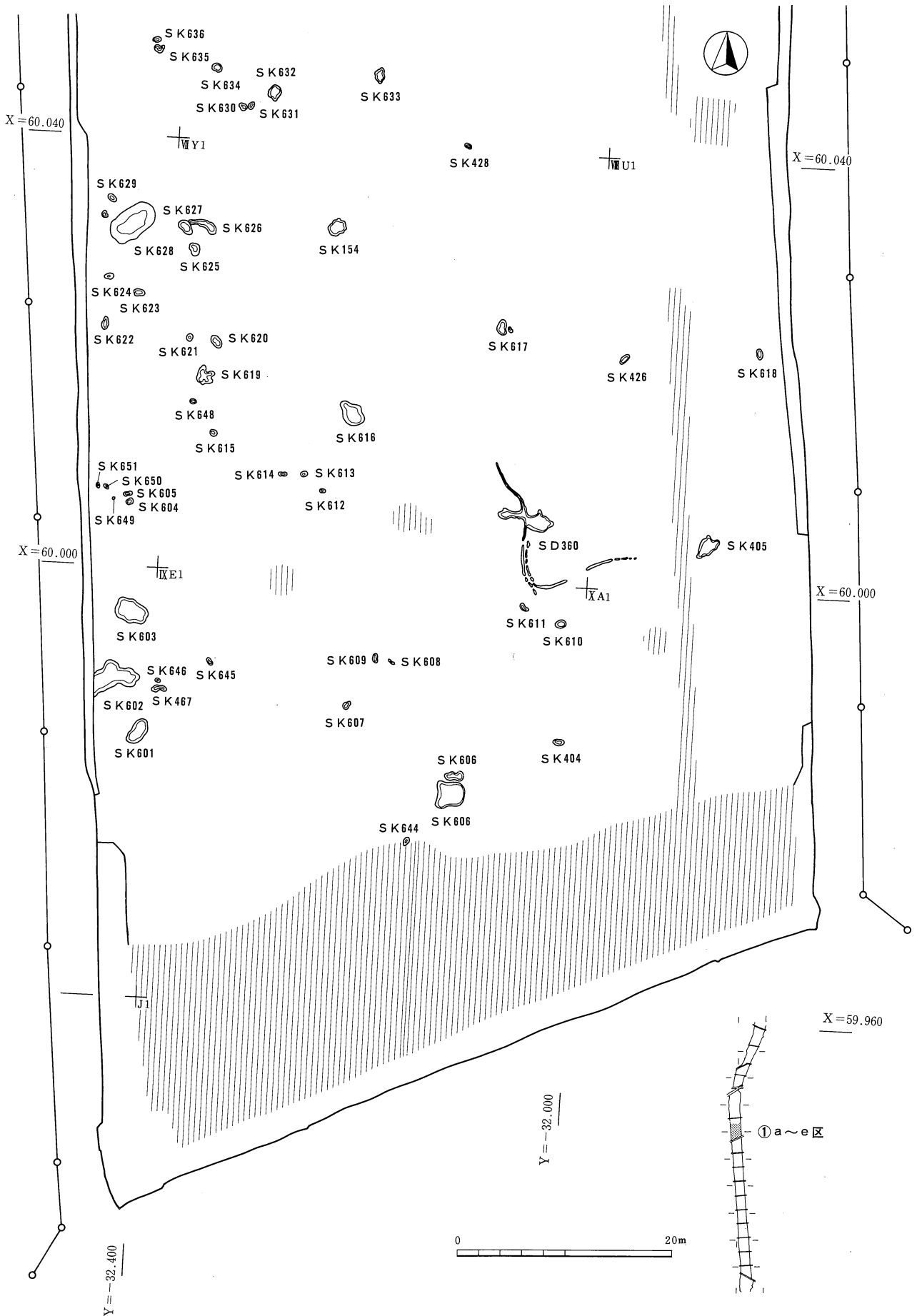


図13 弥生時代遺構分布図 6 (屋代遺跡群①区)

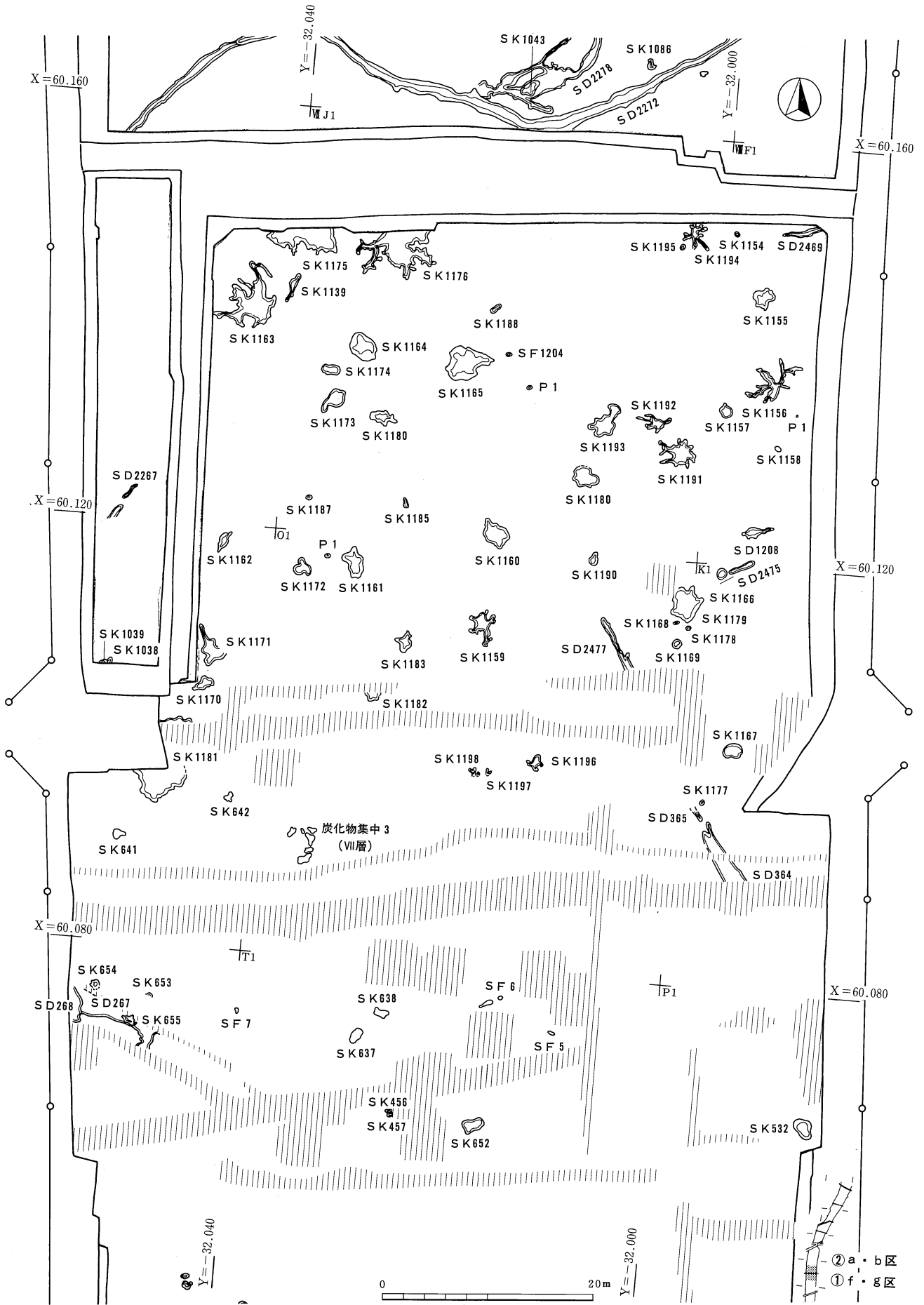


図14 弥生時代遺構分布図 7 (屋代遺跡群①・②区)

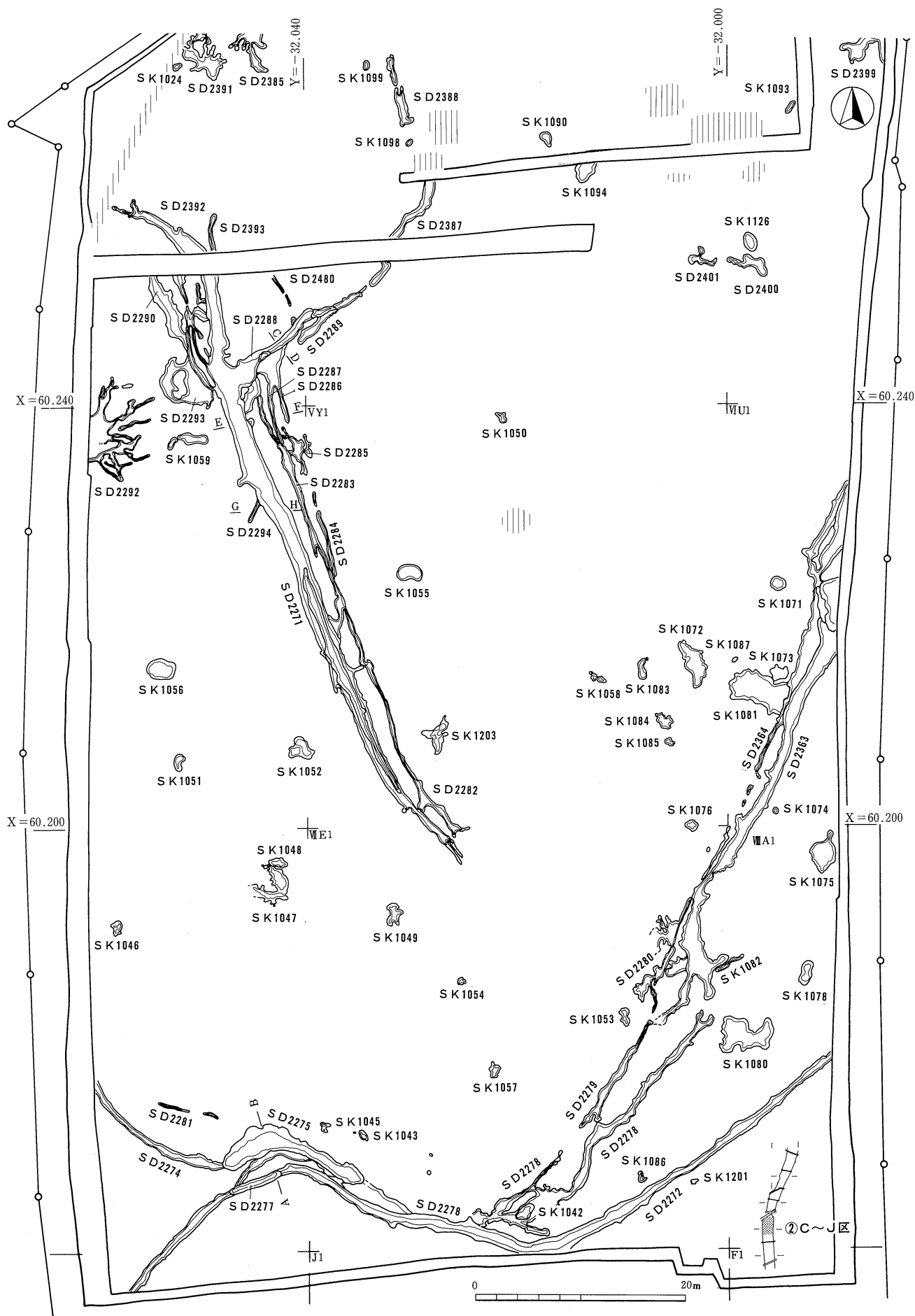


図15 弥生時代遺構分布図 8 (屋代遺跡群②区)

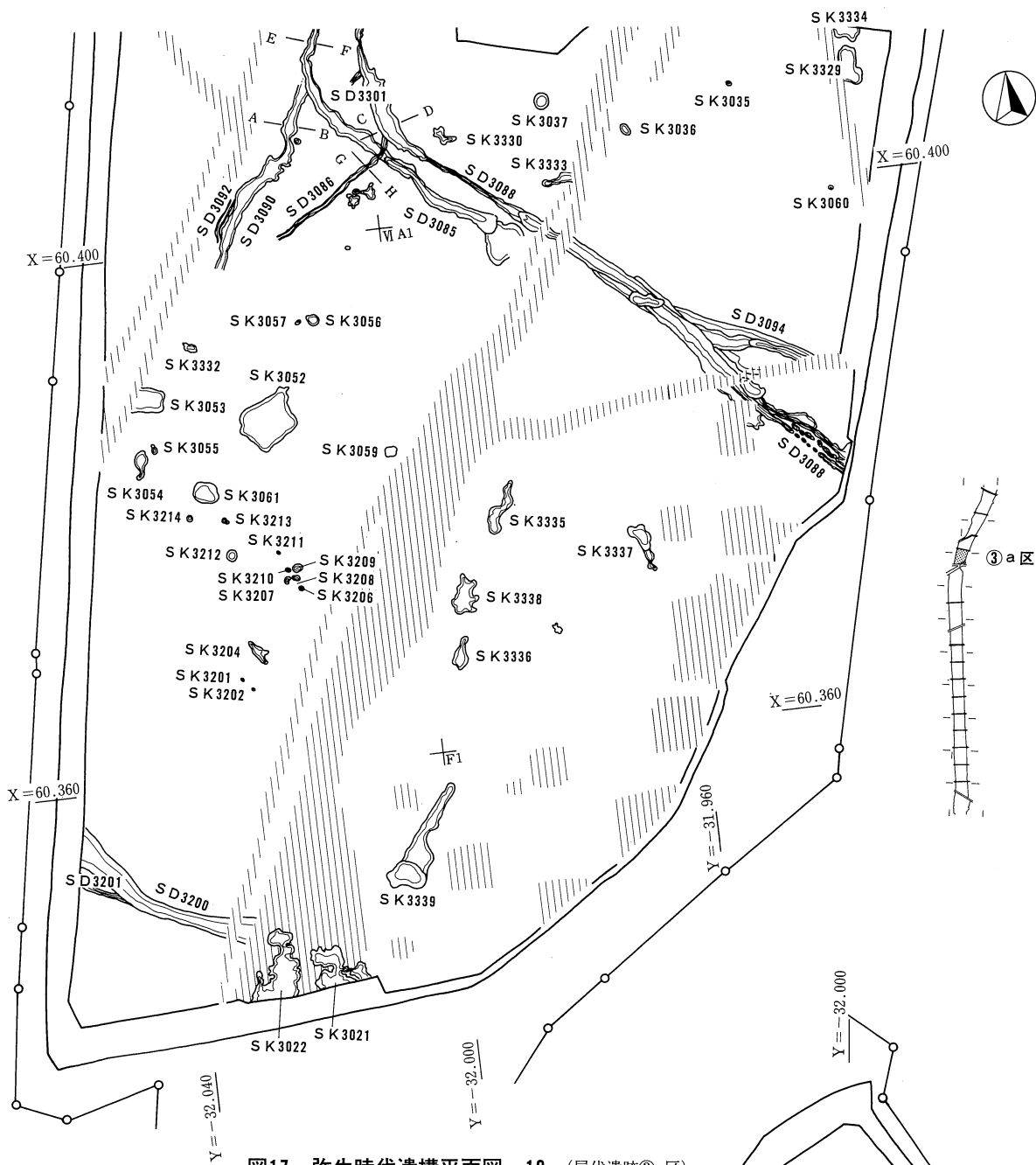


図17 弥生時代遺構平面図 10 (屋代遺跡③a区)

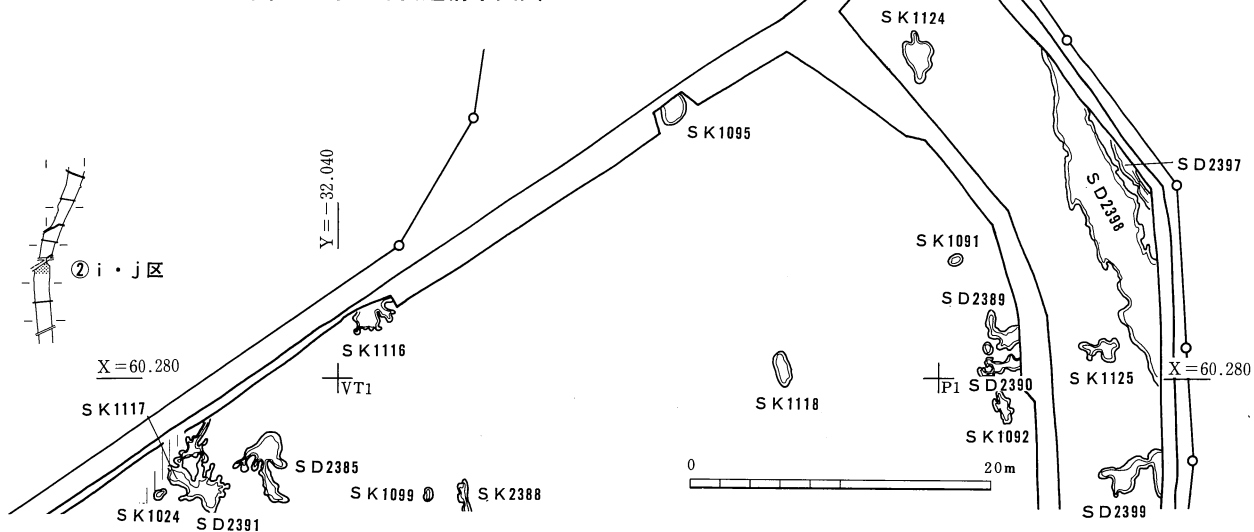


図16 弥生時代遺構分布図 9 (屋代遺跡群②i・j区)

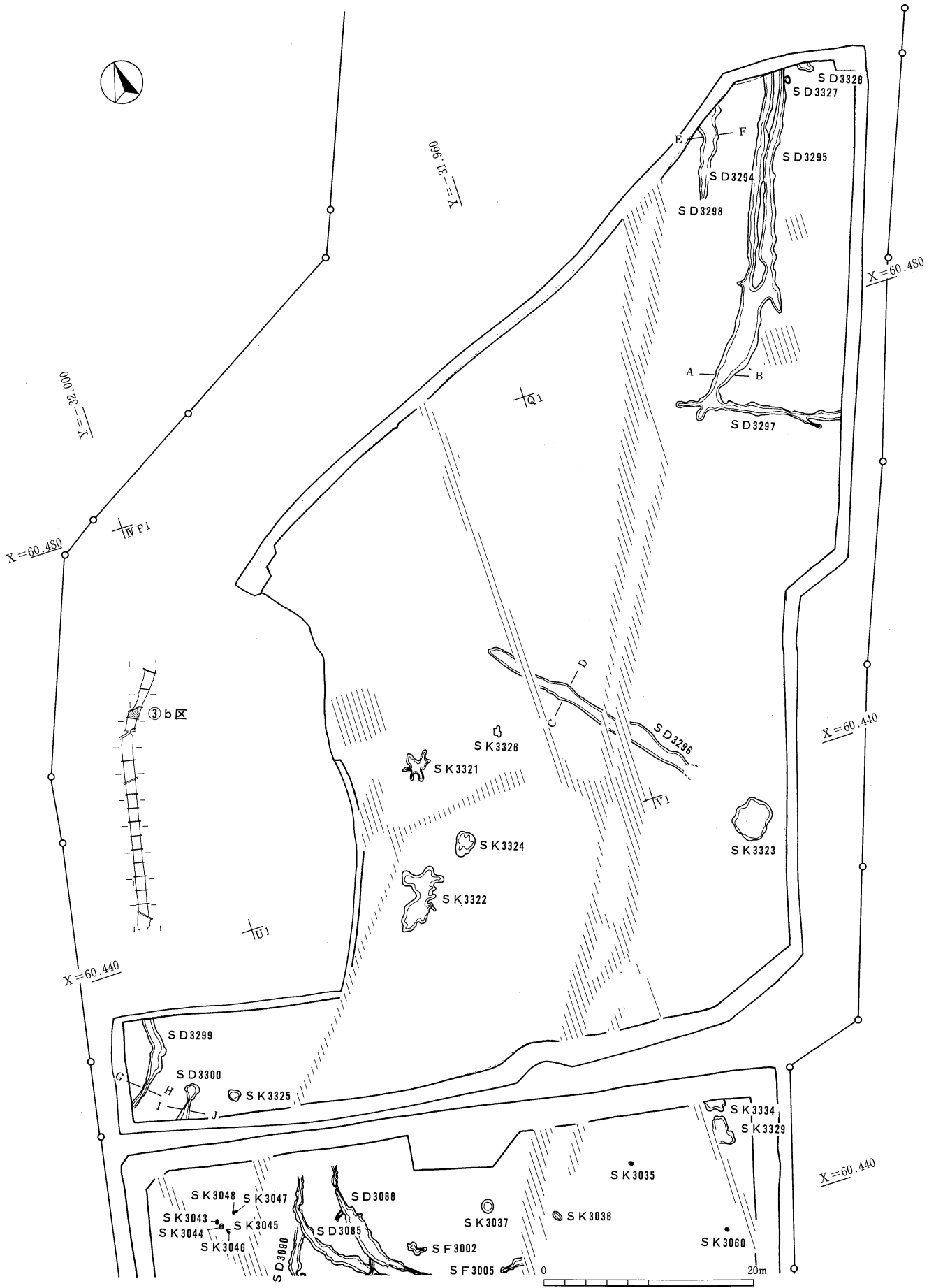


图18 弥生時代遺構分布图 11 (屋代遺跡群③区)

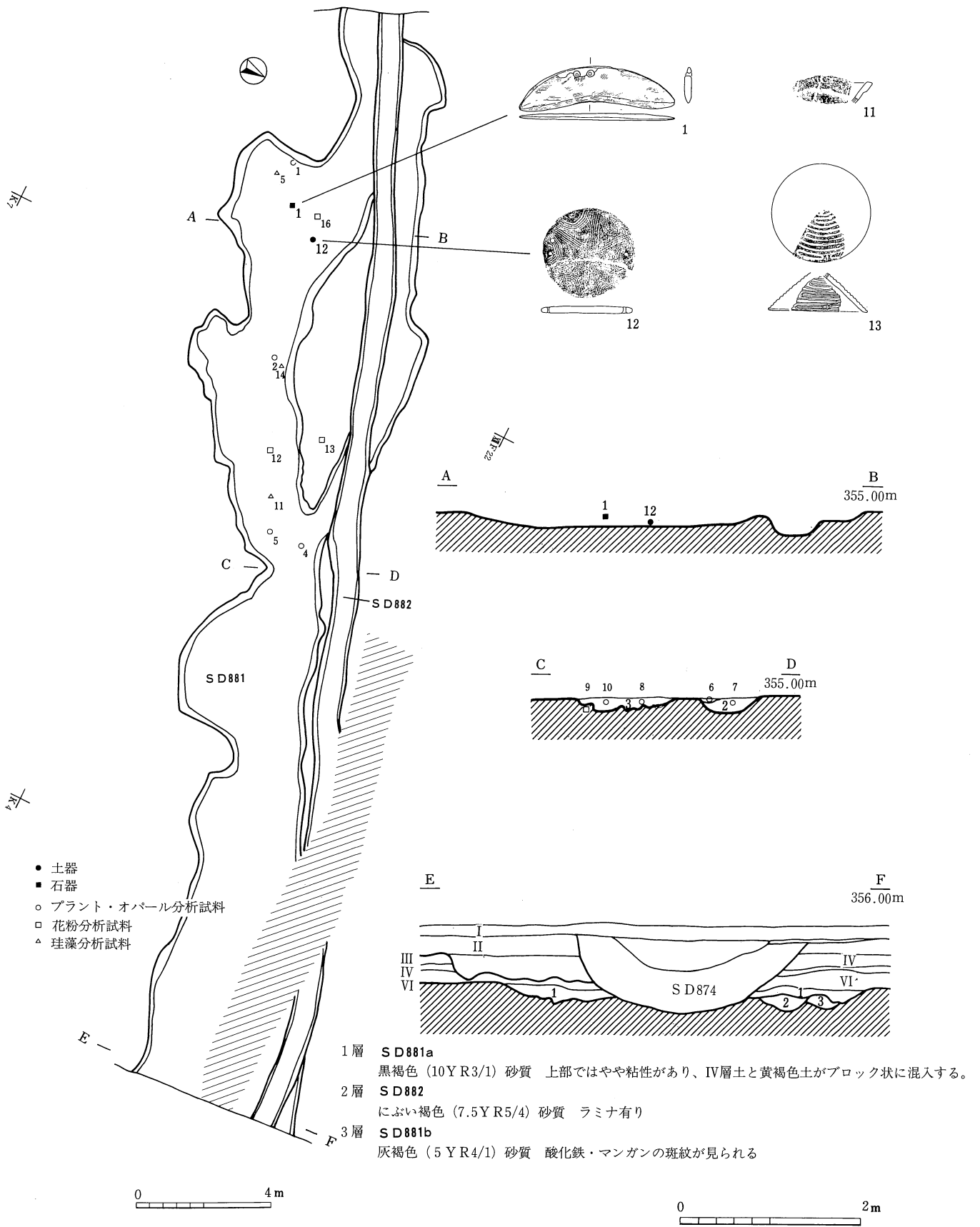


図19 弥生時代個別図 1 (更埴条里遺跡SD)

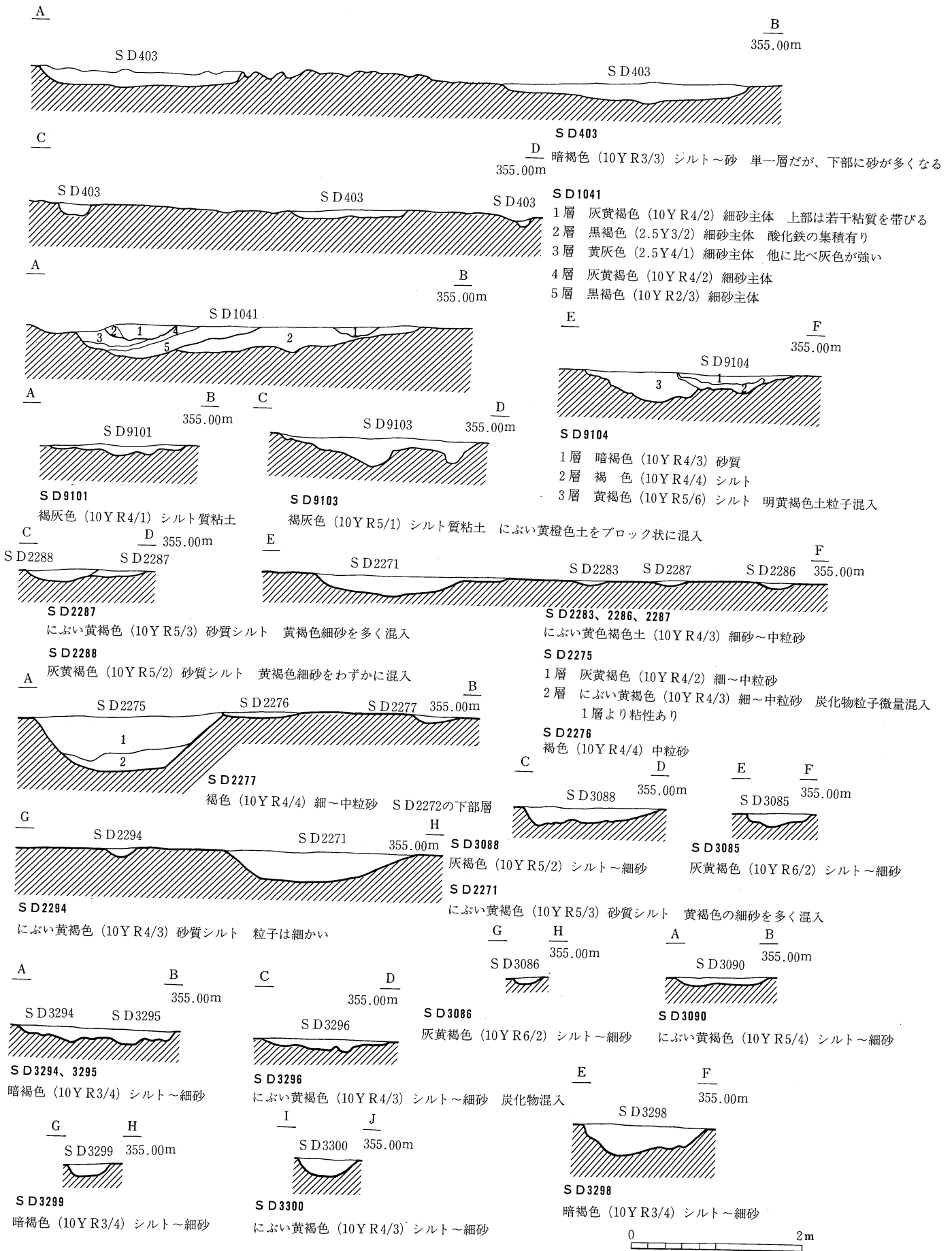


図20 弥生時代個別図 5 (更埴条里遺跡、屋代遺跡群SD)

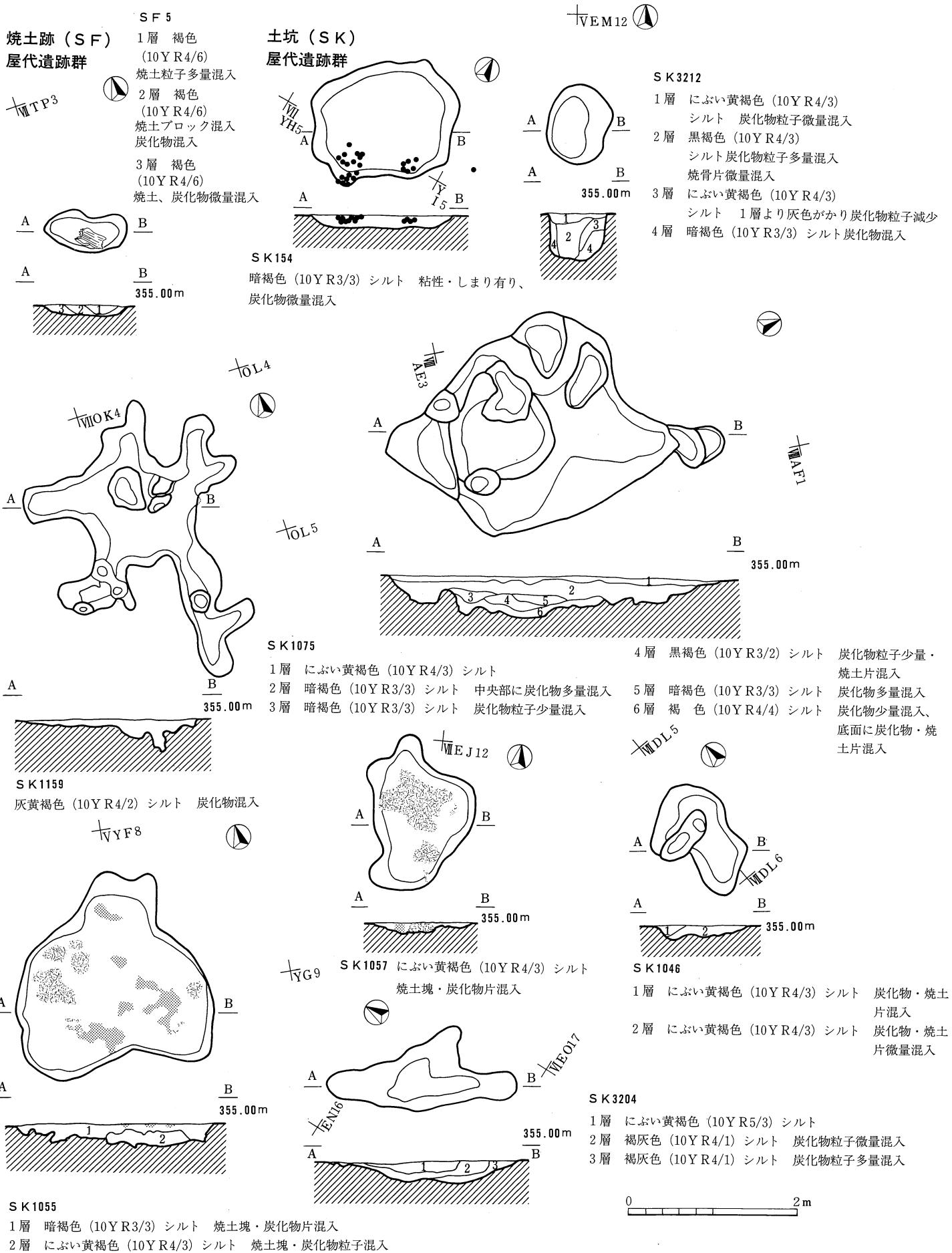


図21 弥生時代個別図 3 (屋代遺跡群SF・SK)

遺物集中地点 (SQ) 屋代遺跡群③a区

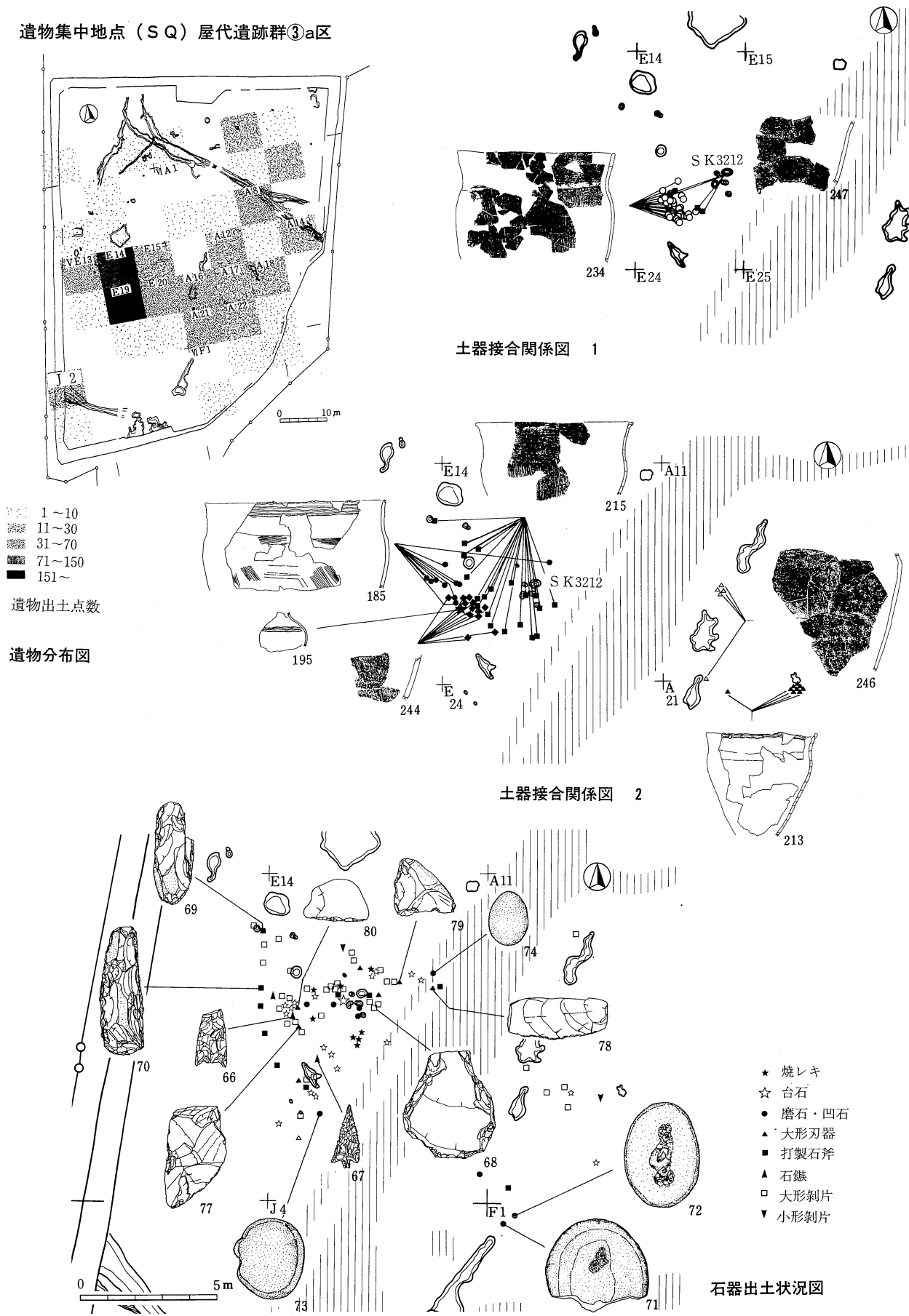


図22 屋代遺跡群③a区 遺物出土状況図

< III群2類 >

自然流路に沿って見つかる例が多く“深み”の残存と考えられる。遺物を混入している例が比較的多い。S K1077では完形の蓋が出土している。自然流路の“深み”から土器や石包丁が出土する例には更埴S D881bがあり、ほぼ完形の石包丁を出土する例には、屋代S D268、1080、2397などがある。

(4) 遺物集中地点（S Q） 屋代遺跡群③a区（図22）

概要：屋代遺跡群③a区において、弥生1期のうち氷I式の末期にほぼ限定される土器、石器、剥片などがまとまって出土した。図22-Aのうち、VIA 8・A14グリッドの出土遺物はS D3088に伴うもので除外できる。とすると、この時期の分布はVE13～VIA18グリッドにかけて、南北約20m、東西約50mの範囲に限定される。遺物数は約800点ほどである。**出土層位：**VI層下面～中位である。**土器分布：**最も多く出土したのは、VE19グリッドであり、この地点は焼骨を出土したS K3212の南西5m以内である。土器の大半は煮沸具の甕で占められており、特殊な遺物の集中や特別な廃棄行為は見られず、日常的な生活空間であったと考えられる。また、接合関係の距離は近く、後世の影響が少ないことを示している（第5章第1節）。このことから、廃棄地点を押さえることによって、生活空間を類推することが可能であろう。**石器など分布：**石器は、量が少ないものの日常必要となるべき器種がそろっている。台石？、磨石、各種の大形刃器、打製石斧、石鏃が、S K3212を中心に、やや南西側に多く集中して出土している。これに対し、打製石斧の石材と共通する大型剥片は、S K3212から北西側に集中する傾向を示している。土器・石器といった日常の道具類とは若干離れて、石器製作が行われていたことが推定できる。**焼礫・炭化物の分布：**S K3212に隣接して焼礫が出土している。また、この周囲には、炭化物が比較的多く分布している。S K3212から出土した焼骨が獣骨とすれば、この近辺で獣肉が調理されていた可能性が高い。また、この遺物集中地点にイネが持ち込まれていた可能性を考え、プラント・オパール分析などを実施した。イネ属の割合が高かったが、組織片は比較的少なく、イネの持ち込みであるのか、あるいは上層水田の影響であるのか、検討会においても明確な結論には至っていない。**遺構との関連：**竪穴住居などの明確な遺構は存在していない。ただし、上記の遺物の内容やその分布傾向から、S K3212を中心とした範囲に簡単な小屋掛けが存在していた可能性は高い。

第3節 遺物

1 土器・土製品（図23～31、P L 3～8）

(1) 遺構出土土器

更埴条里遺跡S D881b・882（図23 11～13）

壺1点と蓋2点がある。11はおそらく細頸壺で、折り返した口縁部に縄文を施す。器面が風化しているがRLrかと思われる。12は全く湾曲のない板状の蓋で、表面・裏面ともナデ整形されるが、土製品に見られる整形である。円盤状の表面は5条の櫛状工具を用いて扇形に6分割され、縁辺には半円が描かれる。この半円にかかる位置に2個1対で焼成前穿孔の小孔2組が点対称になる位置に穿たれる。以後の蓋に伝統的な構図である。13は断面山形の蓋で、内面はナデ、外面はタテナデの後、変形工字文を細いへら状工具で描き、赤色塗彩される。破片がやや小さくモチーフが読み取れないが、一部には点刻が使用される。縄文は併用されない。3点とも弥生2期^(註1)あたりに置けそうである。

屋代遺跡群 S K 154 (図25 76)

76はおそらく同一個体で口縁部が外反する広口の壺。肩部～体部の器形は不明である。かすれたような浅い沈線で施文されるが、先端が崩れたヘラのような工具である。口縁部に2条の横走文、肩部は多段の文様帯構成となり、多条の横走文帯の間に縦方向の短線帯が配置される。体部下半は欠損して、条痕の有無は不明である。北信にはあまり多くない庄ノ畑式に特徴的な文様で、弥生2期と判断される。

屋代遺跡群 S D 2288-S D 2387-S K 1098 (図24 53～55、図25 84)

53は屈曲する口縁部内外面に文様帯をもつ広口壺か鉢で、屈曲部内面側は鋭い稜をなす。外面は2条の弧線文がヘラ状工具で描かれ、屈曲部には中央が窪んだボタン状の貼付がなされる。内面文は変形工字文の系統と思われる鍵状のモチーフが4条ヘラで描かれ、構図の中に縄文が取り込まれている。口唇部は縄文。沈線紋系土器(いわゆる大地式)で、永井宏幸の年代観に当てはめれば、第3段階(弥生2期後半)以降と見られる。54はヘラ状工具の沈線をもつ壺、55は木葉痕の底部。84は単純口縁の壺で図が不鮮明だが下端に沈線もしくは段があり、口縁部に LRL の縄文帯が形成される。84と53はほぼ同様の年代観を与えられそうで、縄文の在り方から見て、弥生2期よりも弥生3期におきたい。

屋代遺跡群 S D 2282～S D 2286 (図24 45～49・51・52)

46は壺の体部下半で、外面はハケの後ミガキ。条痕ではないので、栗林式に下る可能性がある。52は細頸の壺かと思われるが器形は不明。文様帯構成も読み切れないが、頸部～体部上半にかけて2単位1組の櫛描横走文と縄文を多段に配列する。器表が荒れて櫛・縄の原体は十分観察できない。器形や文様帯構成から弥生3期に置けそうだ。47と51はよく似た甕。47は直立気味の口縁部をもつ甕で、口唇部は丸く外端部には斜めの圧痕が付加される。3条1単位の櫛描き文だが、小破片でモチーフは不明。51は口縁部は大きく外反し、肥厚気味となる端部外面側に大きめの圧痕が付加される。口縁部直下に櫛描き横走文、その下に5条1組の櫛描き波状文を施す。波状文と記したが実際は拓影左側の波頂部とその右の波底部では途切れ、右側の波頂部だけがつながっている。縦位羽状条痕の手法では右波頂部がつながることは考えにくいので、櫛状工具の動き方を考えれば波状文の変形だと思われる。他の土器は小破片で条痕をもつようだが時期不明。全体的に栗林式の範疇に属するかと思うが、古相を示しているようだ。

屋代遺跡群 S D 2271-S D 2392-S D 2294 (図23 18～33)

32は浮線文系の甕で、口唇部が外面を向くようにくっきりと面取りされ、以下はヨコケズリ・ヨコナデで整形される。28も浮線文系の可能性がある細かい網代底で、底部直上はタテケズリされるが、ヨコケズリ技法の変形なのかどうか。ともに弥生1期に置く。33はゆるく外反する甕で、拓本下半は櫛状工具のヨコ条痕、上半はヨコナデで整形している。浮線文系の規制を踏襲している可能性があるものの、条痕は新しそうだ。19はごく小形の壺で縄文もしくは条痕をもつ。器面が荒れて判別できないが、縄文の可能性が高い。20は細頸壺で、頸部中程に3条のヘラ描き沈線、その上下に縄文もしくは斜条痕を施す。やはり風化して判別できないが、縄文の可能性が高い。この2点は弥生3期の可能性がある。21は壺の肩部で太い沈線と同様の工具の点列が施される。26も太い沈線と縄文を組み合わせる壺でともにやや古そうだが栗林式の範疇に入るだろう。23は小形の鉢で大きく外反する口縁部は強くヨコナデし、頸部には縄文を地文にしたヘラ描き波状文、それ以下には「コ」の字重ね文を施す。27は靱の圧痕が残る壺の底部と思われ、胎土からみて栗林式に入るだろう。そのほかは甕らしく、櫛条痕を主体とし一部ヘラ条痕を含む。いずれも栗林式の範疇でよさそう。

全体的には時期幅があるものの、SD2282～SD2286よりは新しいのではないか。

屋代遺跡群 S D 2272 (図23 34～37)

36は細頸の壺か。肩部上半が大きく張り出し、体部下半は丸いようだ。肩部との境界を2条の太い横走

沈線で区画し、体部上半は縄文地に太沈線で3～4条の縦方向の沈線を描く。弥生3期とみたい。34は装飾性の高い壺の肩部で、太い沈線で三角形区画を構成し、その中を押引で埋める。35は口縁部をヨコナデする甕で、口唇部には縄文が付加される。37を含めた3点は栗林式と見られる。36を重視するとSD2363より古く、SD2280などとは同時期だが、34・35を重視すればSD2363と同時期で、SD2280などより新しくなる。

屋代遺跡群SD2363 (図23・24 38～42)

体部破片ばかりで時期判断は難しい。38は横位羽状櫛条痕の甕、39は縦位羽状櫛条痕の壺の肩部、40は横走沈線と縄文の壺の頸～肩部、42は横走へら条痕の甕で、39・42などのへら状痕はやや古そうだが、全体としては栗林式の範疇に収まるかもしれない。SD2280などより明らかに新しい。

屋代遺跡群SD2280-SK1077-SK1073 (図24・25 43・78・81～83)

81は細頸で小形の壺。肩部の張りは強くなく、全体に丸い器形らしい。肩部には中央に1条の沈線を配した楕円文を位置をずらしつつ2段に施す。肩部と頸部の境界にはかすかな段を設け、楕円文との間にRLr縄文を施す。変形工字文の系譜を引き、モチーフの中に縄文が組み込まれる段階だ。83は体部が丸い壺で、81とよく似た器形ようだ。全体にへら状工具で浅い沈線もしくは条痕を施す。肩部以上は縦方向、肩部直下は右下がり斜め方向、それ以下は縦位羽状である。43は83と同一個体か？。82は断面形が丸い蓋で、端部には2個1対の小突起が4単位付加される。また図下側の端部近くに2個1対の小孔が穿たれる。外面は全面撚糸文で、中心に向けて逆時計回りに巻き込む方向を取る。内面側端部付近はヨコミガキがなされる。全体としては弥生3期の様相をもつと見たい。

屋代遺跡群SD3088-SD3094 (図24・25 57～71)

62は浮線文系で細密条痕をもつ甕か深鉢。工具が整っており氷I式の可能性が高い。

63は壺の体部上半で、櫛描き横走文の上に櫛状工具の連続圧痕を施す。67は壺の体部上半で、縄文を地文とし、細めのへら状工具で変形工字文系統の楕円もしくは長方形のモチーフを描く。69は細頸の壺で、肩部にかなり強い張りを残す。右下がりのハケメがところどころに残っており、恐らく全面ハケメ整形しているだろう。口縁部を欠くが、頸部文様帯、肩部文様帯2段、体部上半文様帯2段に分かれ、それぞれの境界は2条のへら描き沈線で画される。頸部文様帯は全体像は不明だが、LRl縄文帯が確認できる。肩部文様帯は2段とも同一の構図で三角連繫文系の図柄を2条1組の沈線で描く。割り付けは追い込み型で図正面はその終点らしく、構図が乱れている。三角形の上端に円板状の貼付文を付し、中央に1条沈線の円形構図を描くのが原則らしいが、少々乱れがある。文様帯全体にLRl縄文が施されるが、場所によっては縦方向に回転させている。施文順は、縄文⇒沈線文⇒貼付文である。体部上半文様帯は上段は2条、下段は3条のへら描波状文で、上段だけ縄文を地文とし貼付文も付加される。体部下半はヨコハケをナデ消している。71は壺の可能性があり、へら状工具を使用して浅い横位羽状条痕を施す。以上の4点は栗林式直前に位置づくのではないか。

57は口縁外端部に丸い圧痕をもつへら条痕の甕。58～61は櫛条痕をもつ甕の体部で、櫛状工具の圧痕列またはへら状工具のD字状圧痕列をもつ。甕の破片は栗林式に属し、壺との間にやや隔たりがある。65は右上がりのナデで整形した体部下半で、底部には布目圧痕がつく。

総体的には栗林式直前～栗林式古相あたりに位置づくかと思う。

(2) **屋代③a区遺物集中地点出土土器** (図28～31 185～260)

概観 時間幅が限定され、大変良好なひとまとまりの資料である。浮線文系が圧倒的多数を占め、条痕文系は2片あるだけである。粘土・シルト質の土中から検出されたためか器表面の遺存状態が悪く、ナデや

ミガキなどの整形技法はあまり観察できない。

浮線文系土器 浮線文系土器には浅鉢・壺・甕・深鉢がある。胎土には大粒の鉱物粒子が目立ち、透明の石英粒も珍しくない。

浅鉢 7片(186~189・193・194・200)で、甕・深鉢に比べ著しく少なく、すべて口縁部を欠失する。186~189・194は、体部に網状文または変形工字文をもつ。186~188は体部上半の破片で、肩部の屈曲と発達した頸部無文帯が確認できる。189・193・194は体部下半の破片である。文様モチーフは、186は楕円らしく、187~189は網状文というよりはむしろ直線的で変形工字文系統、194も同類のようだ。施文手法をみると188などは細隆線手法ではなく、幅の広い隆起面にかなり省略されたモチーフが沈刻されているが、他は細隆線手法で文様を描出している。こうした在り方からみて、氷I式の末期に位置付けるのが妥当だろう。無文浅鉢は存否が定かでない。

甕・深鉢 深鉢形の器形で、肩部で屈曲しその上下で整形手法や整形方向を変化させて屈曲を強調するものを「甕」とする。またこうした屈曲をもたないものを「深鉢」とする。図示した土器の大半を甕・深鉢が占めるが、小破片では両者を区別することができない。識別ができる大形破片はほとんど甕なので、深鉢は少量に留まるのではなかろうか。

185・190・191・203は口縁部に多条の隆線・沈線をもつ甕だが、肩部の装飾を欠き、装飾性は相対的に低い。199~202・204~207・213は口縁部に1~2条の隆線・沈線をもつ甕、196・208~212・214・215・223~225・229・232~237は口縁部無文の甕である。甕は以上の3者に大きく区別する。240・243~246・248・249は口縁部を欠失するが、甕だと思われる。

203を除いて2条以上の隆線・沈線帯は隆線手法で施文され、1条の場合は凹線風になる。203は口縁部からやや下がった位置に4条の幅狭沈線を引き、口縁部の2山の突起に向かって「ハ」の字形の沈線が加えられる。213は口縁部直下に1条の凹線を引き、はみ出した粘土を短い間隔で凹部に寄せており、口端部には圧痕のない小突起を付加している。

口外帯は無文甕を除いては斜め上方に小突起を突出させ、その中央に圧痕を加えることが多い。無文甕の口外帯は小突起中央の圧痕が省略されるようで、234は口外帯をもたないかもしれない。さらに203・229の2山の平板な小突起は小さい波状口縁に近く、210・224・225は口唇外端部に丸い圧痕を付すなど、もはや口外帯とは呼べないほどの変形をみせる。肩部の屈曲はかなりあいまいな例が少なくない。185・196・213・232・234・246・248・249などは一応は屈曲し、中にはシャープなものもあるが、191・233・240・245などは屈曲を失い、整形の手法や方向性の差で辛うじて稜を表現している。

外面の整形はケズリ・ナデ技法と細密条痕とがある。ケズリ・ナデ技法は「器面の凹凸をならす程度の軽いケズリ」、「ナデ」、「ミガキに近いナデ、あるいはミガキ」といった手順で行う整形を指す。その方向には規則性があり、底部から順に「下⇒上」、「右下⇒左上」と方向を変え、肩部以上では「右⇒左」となる「定型的なケズリ・ナデ技法」である。247・249などで明瞭に観察できる。一方、213は器壁が薄く、オサエ痕が顕著でケズリが省略されている。246は定型的なケズリ・ナデ技法が読み取れるのに器面の凹凸が著しく、ケズリが本来の目的を果たしていない。224・225・228なども同様で、全体的にケズリの退化傾向が窺われ始める。

細密条痕は甕の肩部以下に施される。工具は氷遺跡では「針葉樹材の木口板に似た工具」とされたが、192はよく整えられてその可能性があり、234や240なども整っている。しかし、191はかすれたような条痕で板状工具とはいえ、215は2条1単位であることが観察できるのでおそらく竹を使用しているなど、工具にはかなりヴァリエーションがある。細密条痕の方向性は、肩部から一方的な縦方向の「タテ型」とケズリ・ナデ技法と同一の「ヨコ・ナナメ型」がある。後者には191・192・196・214・238・239が該当し、

肩部付近の方向に乱れがある185・240・245もこの仲間だろう。前者には215・234が該当する。

内面の整形は口縁部から底部まで、「横方向のケズリ」⇒「横方向のナデ」が原則的のようだ。なお210は内面に接合痕を顕著に残し、整形の手抜きが目立つ。

確実な深鉢はないが、227は口唇部に丸い圧痕が付加されており、この手法が甕よりも深鉢の方に古くから採用されると見られることと、口縁部断面形が直立的なことからその可能性があろう。

壺 195・197・198の3点だけである。195は口縁部は欠損するが、丸い体部の小形壺である。整形はナデ・ミガキによっているが方向や単位は観察できない。肩部に3条の細い沈線を巡らし、1条目と2条目の中間および3条目にかかるようにへら状工具の先端の圧痕が付加される。よく似たつくりの無文口縁部が1点あり、同一個体かと思われる。197は無文で口唇部に斜位の条痕原体圧痕を付し、198も無文で口縁部外端を肥厚させる。

甕か深鉢か区分できないがいずれかの底部がかなりある。ケズリやナデは、幅がかなり狭く底部真近に限定されるか、施されない場合もある。底部外面は網代、木葉、ケズリやナデの3者がほぼ同数ある。

甕の口外帯の消失と関連する小波状口縁や口端部の圧痕、口縁部隆線帯から変化した幅狭沈線帯、屈曲を失って整形だけで作出した肩部などは、相対的に新しい要素で、191、203、210、224、225、229、233、240などにそれが目立つ。口外帯を失って口唇部に圧痕が付加される甕は、氷遺跡既報資料や石行遺跡には存在せず、中島A遺跡にはある程度存在し、苜谷原遺跡では屈曲を失った肩部と組み合わせって普遍的であった。屋代遺跡の口唇部圧痕付きの甕は小破片で肩部の状況は不明、口唇部圧痕も苜谷原遺跡のように口唇部中央ではなく、口唇外端部に付加されるなど少々異なっている。中島A遺跡の様相に近く、それと同一段階に属すると考える。

条痕文系土器 2片のうち1片を図示した。242は胎土に白色の長石大粒が顕著で、器壁が薄く、オサエ痕が顕著なので搬入品の可能性がある。貝殻状工具を用いて荒々しい縦位羽状条痕が施される壺または甕の体部である。水神平式だと推測する。もう1片も搬入品の可能性があり横位の粗い条痕が施される。

器種構成 口縁部で数えた器種別構成比は、浮線文系浅鉢0：甕33：深鉢1：壺3：不明8：条痕文系0である。なお、浮線文土器の整形技法は「細密条痕小考」[百瀬1998]に従って記述した。

(3) 遺構外出土土器 (図23～28、31)

(1)・(2)で取り上げなかった不明瞭な遺構から出土した土器も含めて記述する。

浮線文系土器 浅鉢、甕、深鉢、壺があり、土偶と環状土製品も1点ずつある。胎土・整形等は③a区遺物集中地点の土器と同様である。

浅鉢はわずかしかない。89・90・98は頸部無文帯が発達する網状文浅鉢で、細隆線手法で描かれる。88は体部が丸く上げ底となる無文浅鉢、275は口縁部が外屈する浅鉢で例を見ない器形だが、別の時期の産とも思えない。

甕・深鉢のうち、肩部が確認できる4片は確実に甕、残りは小破片だがほとんどが甕だろう。口縁部の隆線・沈線は1を除けば隆線手法のようだ。隆線・沈線をもつ甕には口外帯が確認できないかわり、無文甕129には定型的な口外帯があり、161や297には上方に突出する小突起が付加される。肩部屈曲は痕跡的な場合が多く、79・80では痕跡的又は外屈して沈線1条で強調され、かなり変形している。細密条痕のつく体部小破片は多いが、工具はさほど整ってはいない。方向性にはタテ型、ヨコ・ナメ型双方がある。網代圧痕のつく183は浮線文系甕の底部だろう。

134はナデ仕上げのミニチュア壺で体部に稲妻状沈線を描く。91は口縁部が外屈する短頸の壺かと思われ、肩部には2条の沈線、口唇部には小突起が付加される。

土製品 299は環状の土製品で、完形、断面形は楕円である。器表面はミガキがなされる。類例は御社宮司遺跡などにある。300は黥面土偶である。顔面は平板で、T字状の隆帯で眉鼻を一体表現し、鼻孔、目、口は彫り込む。頬から顎にかけて1～2条の沈線を入墨を表現し、耳は貼付し耳孔または耳朵孔を貫通させる。頭部前面は欠損し、頭頂部～後頭部は帯状に隆起させて、全面に円形の管で直角に刺突する。

変形工字文系土器 非在地的胎土と在地的胎土がある。9、120、121は同一個体と思われる壺または鉢。胎土に大粒でローリングを受けたチャートを含み、内面はケズリとナデが見られるが器壁が薄い。当地域の胎土・整形ではなく、搬入品か。肩部に1帯の変形工字文、その上下は縄文帯となる。変形工字文は3条の深めの沈線間の隆起部をつまみ寄せて作出し、ナデで仕上げる。縄文はLR ℓ だが当地域ではまず見かけないほど撚りが細かい。底部側面は突出してナデ、底面は木葉痕が残る。緒立式かと思われ、弥生1期に属するだろう。この3点以外は在地の胎土だと思われる。

94は壺の肩部らしく、縄文帯の中に2条の細めの沈線が引かれる。155は小形の壺の肩部。丸く大きめの瘤を中心に楕円文もしくは変形工字文を1帯配し、瘤の上方にはスリットを、下方には円形のモチーフの中に沈線を加える。瘤の下半にはLR ℓ 縄文を付加する。構図は幅が狭く、縄文が中に入らない。以上の2点は弥生1期でもよいかと思う。

286は壺の肩部に三角連繋文の変形かと思われる構図を描き、縄文は併用されない。92は壺か鉢で、長方形モチーフが描かれるが詳細は不明。123は細頸壺の肩で、長方形または楕円形のモチーフを多段に配置し、縦短線化したスリットが継承される。146は丸い体部の小形壺又は鉢。体部に縄文(LR ℓ)を施し、その上半は無文帯となる。これらは弥生2～3期に属すると思う。

条痕文系土器 在地的な胎土と非在地的な胎土があり、後者にはさらに2つのグループが存在する。第1のグループは87、104、105、112、113、173、174で、灰白～灰褐色、大粒の長石が目立つ。東海的な胎土の範疇に入るだろう。条痕の工具は一様ではないが、貝殻に似た荒々しいものが含まれ、縦位羽状条痕が多い。水神平式との関連が考えられる土器が含まれる。第2のグループは106～111、115、122、135、136、140、142で、雲母や長石粒子を含むが色調は在地の土器と変わらない。条痕はくっきりとして深めだが荒々しさには欠け、工具は貝殻ではないだろう。142は茎束状工具である。122は壺の頸部で跳ね上げ文らしく、140は壺で肩部以上には振幅の大きな波状文帯と横走文帯、以下には縦位羽状条痕が施され、横走文帯から1帯の櫛描線が流れ出るように垂下する。このグループには岩滑式との関連が考えられる土器が含まれる。

当地域の標準的な胎土で条痕を持つ土器は大変多い。156は条痕模倣壺で口縁部に1条の太い隆帯を貼付し、その上にユビ圧痕を付加する。口端部には同様の圧痕を、隆帯より下には条痕を加えるのだろう。弥生1期に位置づくのではないか。

137～139、143は沈線とも条痕ともとれる浅い工具で文様を描く。何条かが1単位となっているが櫛状工具とは呼びにくい。138は壺の肩部で最上部に振幅の大きな波状文もしくは跳ね上げ文、その下に横走文が配され、構図不明の弧線文が上描きされる。139も同様の器形で複線鋸歯文に似た構図を取る。143は壺の頸部で横走文の上方に縦羽状文が描かれる。これら4点は弥生2期に帰属するのではないか。

17、149、289、290などは細かく整った条痕をもつ。149は壺の肩部で頸部近くに横走文、肩部には波長の長いゆったりした波状文を描く。17も壺の肩部で横走文の上方に縦羽状文を描く。289、290は同一個体の甕らしく、体部上半に横走文、その下に6条1単位の櫛状工具で縦羽状文を描く。これらは弥生1期に遡ることはなさそうだが、下限は何とも言えない。

へら状工具で1条ずつ条痕を描くのは171で、甕の体部下半に全面ヨコ条痕が施される。72はへら描き沈線の鉢で、口端部は極度に外反する。肩部以下に横走文、その上方に横羽状文が描かれる。弥生3期ま

で下るのではないか。

295は口縁部が外屈する壺らしく、屈曲部に隆帯を巡らす。隆帯上には櫛状工具の先端刺突、屈曲部以下には櫛描きの簾状文が見られる。位置付けは不明。

遠賀川式に関連しそうな土器 1点、100は壺の肩部で、多条の沈線を彫り深く立体的に描く。施文手法や整形は読み取れない。胎土には当地域で一般的な透明石英粒や茶褐色粒子が含まれる。遠賀川式模倣の可能性はあるが、断定は避ける。

弥生2～3期の地域色の強い土器 当地域の土器は系譜や時間的な位置付け等不明な点が多い。125は広口壺で口縁部が屈曲し、279は細頸壺で口縁部を外側へ折り返し、ともに口唇部には縄文が付加される。屈曲部や折り返し部の直下には強いヨコナデが施される。176は壺の肩部で、下端を櫛描横走文で区切り、その上は縄文、下は条痕となる。175と298は鉢らしく、横走沈線と縄文帯を組み合わせる。127、262は壺の頸部～肩部で、太いへら描沈線文と櫛描横走文が特徴的である。127は太いへらで押引文を施し、262は櫛描文帯を太いへらで縦に区切る。93は太頸壺の肩部で、4～5条の沈線を横走させ、その下に斜沈線を施す。

栗林式土器 胎土は大粒の鉱物粒子をほとんど含まず、風化するとザラつくという共通性がある。

56は頸部に縦区画文様をもつ装飾性に富んだ壺で、95、180、269、273、280、285なども同類。太いへら描き沈線の区画の中に、櫛描き文やD字圧痕を加え、縄文を併用する。肩部に多様な文様を描く壺と思われるのは73、148、150、179、261、263、267、270、271、274、278、282～284などである。モチーフは弧線文を基本にして横走文や「コ」の字重ねモチーフの変形などもある。一方櫛描き文だけで構成される壺もあり、74、181などは簡素な印象を与える。壺の口縁部は16のみで、ゆるい受口状を呈し、外面はヨコナデ、内面はハケメで仕上げる。底部は119、184の2点で、内外とも櫛状工具の軽い条痕が残され、底面はナデている。

126は装飾に富んだ鉢で、D字形の列点を間に挟んだ2条の沈線で弧線モチーフを描く。296も同類だが、体部には「コ」の字重ねモチーフを描く。153は口縁部が屈曲する鉢で、体部にはへらで弧線文の変形した波状文を描く。268は単純に開く鉢で、外反する口端部内面に縄文、底部に布目圧痕が付される。

128、152は頸に4条1単位の簾状文をもつ甕で、体部は変形した羽状条痕か波長の長い波状文、口唇部には縄文が付されるようだ。甕の口縁部は何点かあり、口唇部の縄文と外端部の圧痕を組み合わせた147や291、口唇部の縄文だけの75、外端部に斜短線を加える178、口唇部に櫛条痕を加える287など多様である。体部は櫛状工具を用いた縦羽状条痕か斜条痕が基本だが、体部最大径付近に圧痕列をもち、その上下の一方は条痕で他方はミガキで仕上げる99、124、292、293などが目立つ。154は左上がりのケズリの後、左下がりの櫛条痕を施す甕の体部、276は外面ナデ仕上げの甕である。

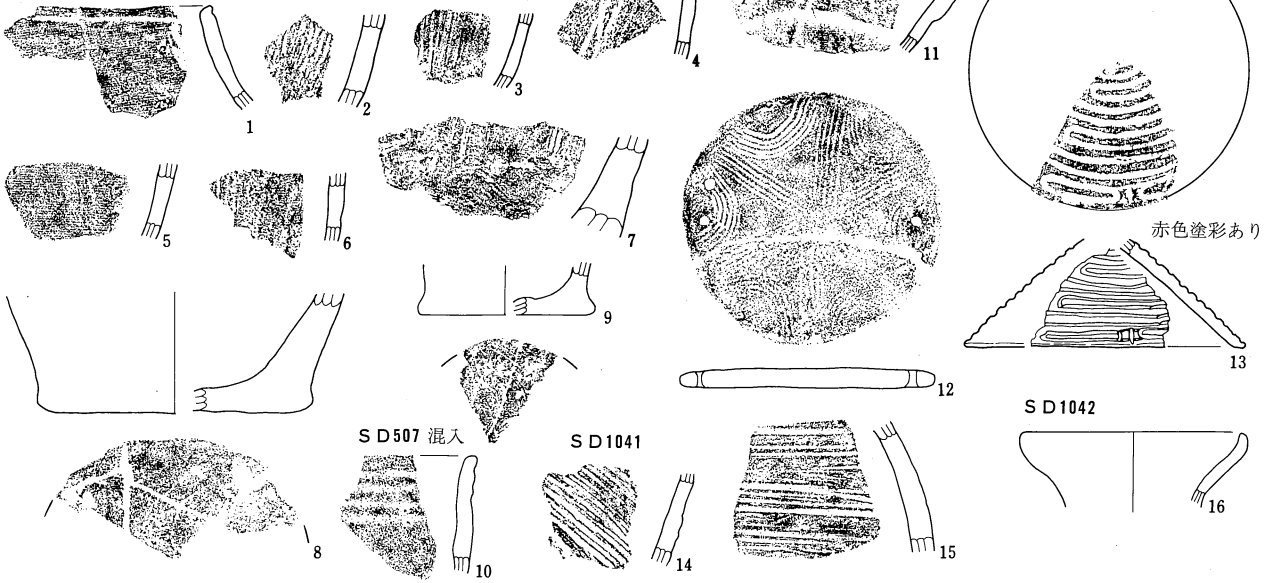
註1 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群』全編を通しての時期区分に従い、中時期区分は算用数字とした。

参考文献

- 永井宏幸 1994「沈線紋系土器について」『朝日遺跡V』（財）愛知県埋蔵文化財センター
百瀬長秀 1998刊行予定「細密条痕小考」『水遺跡図譜』水遺跡図譜刊行会

自然流路・水路 (SD) 更埴条里遺跡

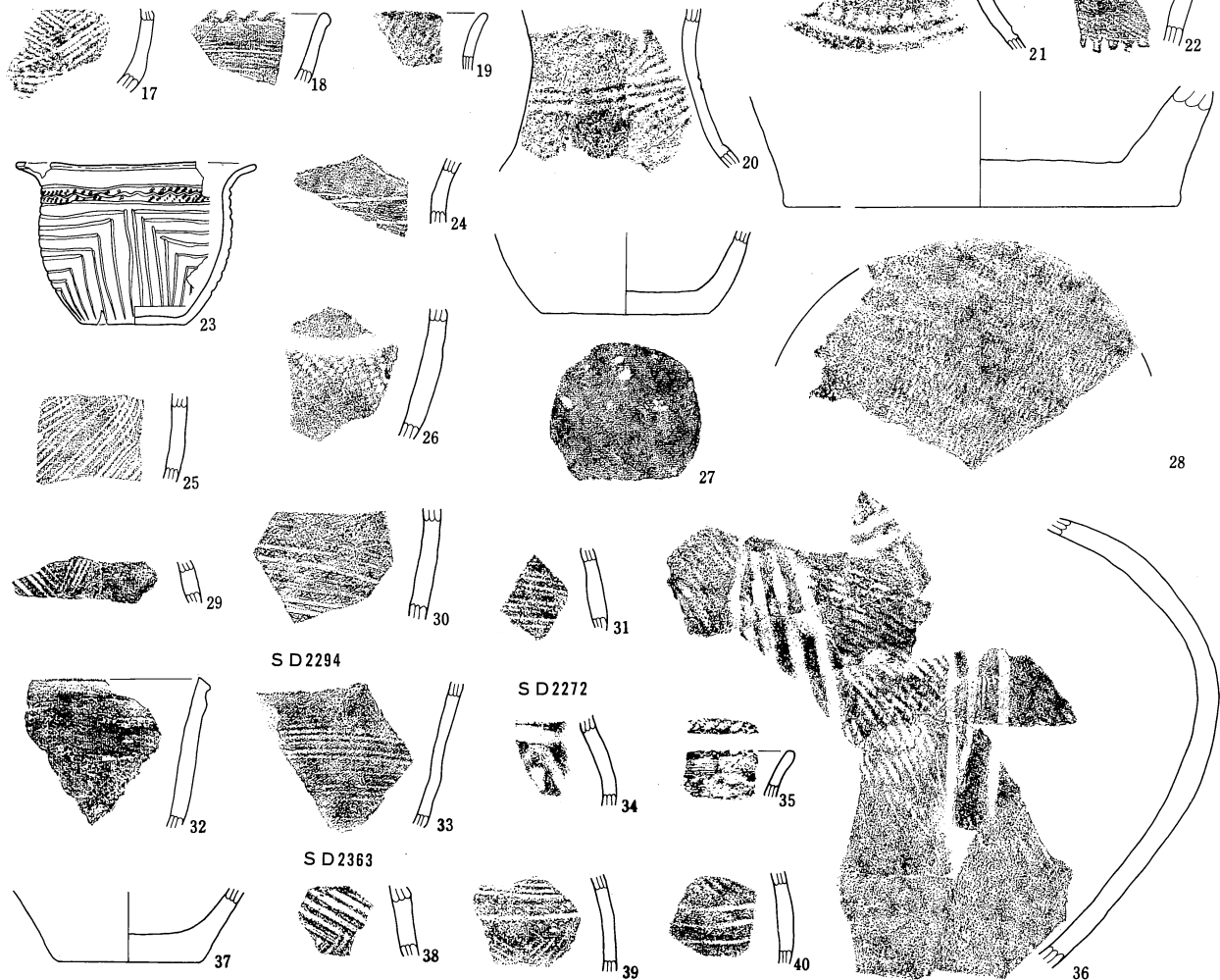
SD403



屋代遺跡群

SD2267

SD2271



0 (16・23) 10cm

0 (拓本) 10cm

図23 弥生時代の土器 1 (更埴条里遺跡・屋代遺跡群SD)

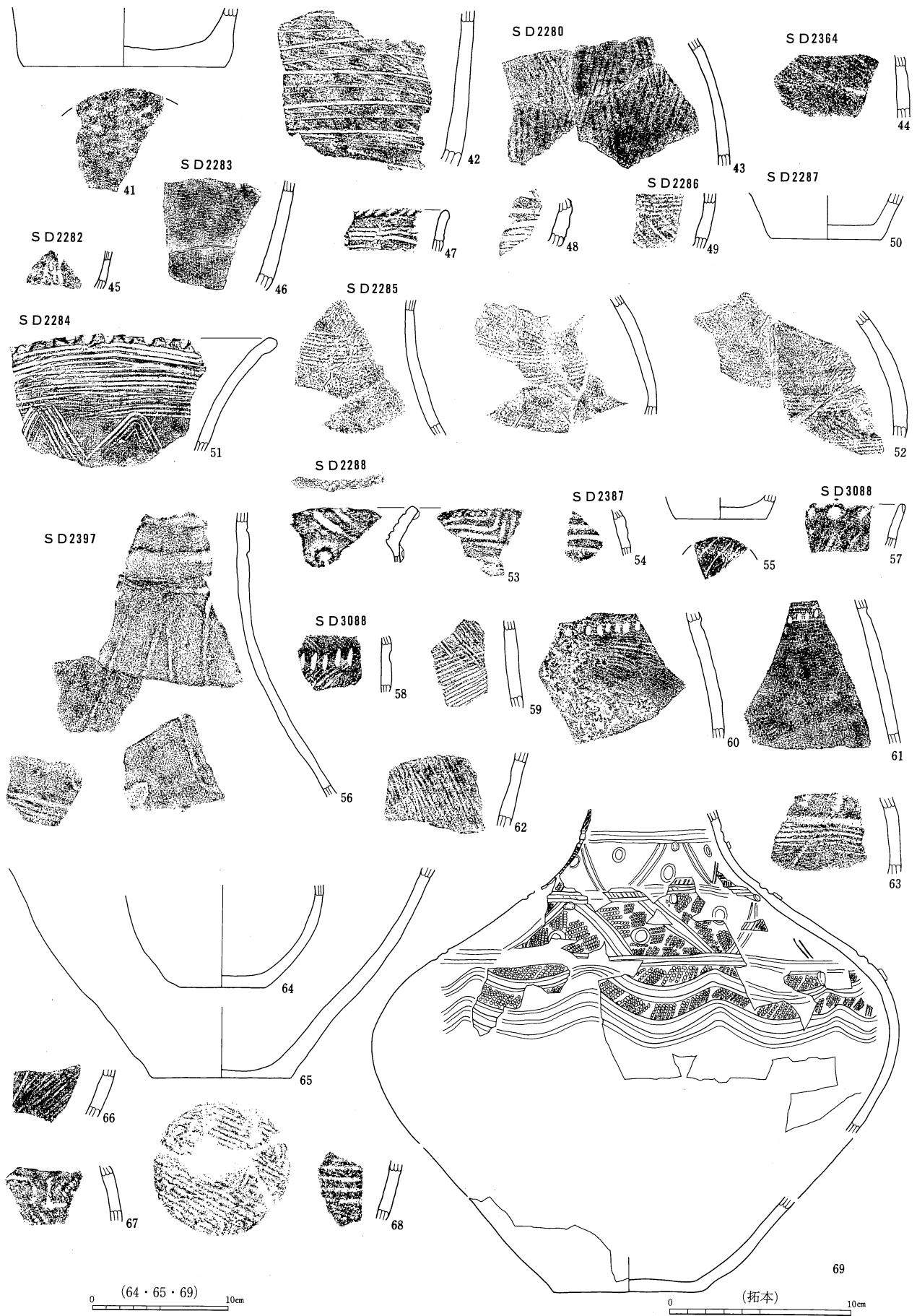


図24 弥生時代の土器 2 (屋代遺跡群SD)

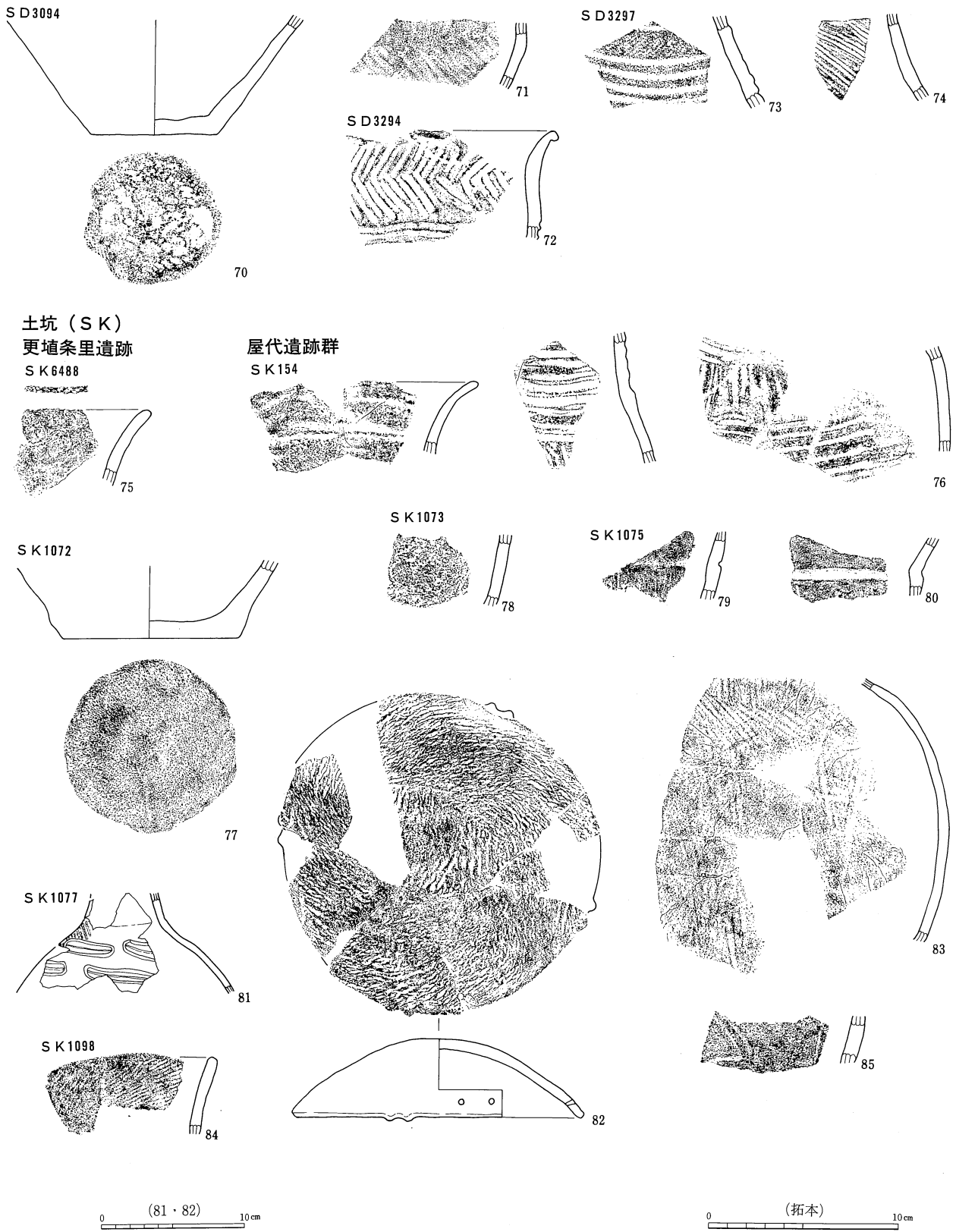


図25 弥生時代の土器 3 (更埴条里遺跡SK・屋代遺跡群SD・SK)

包含層ほか 更埴条里遺跡

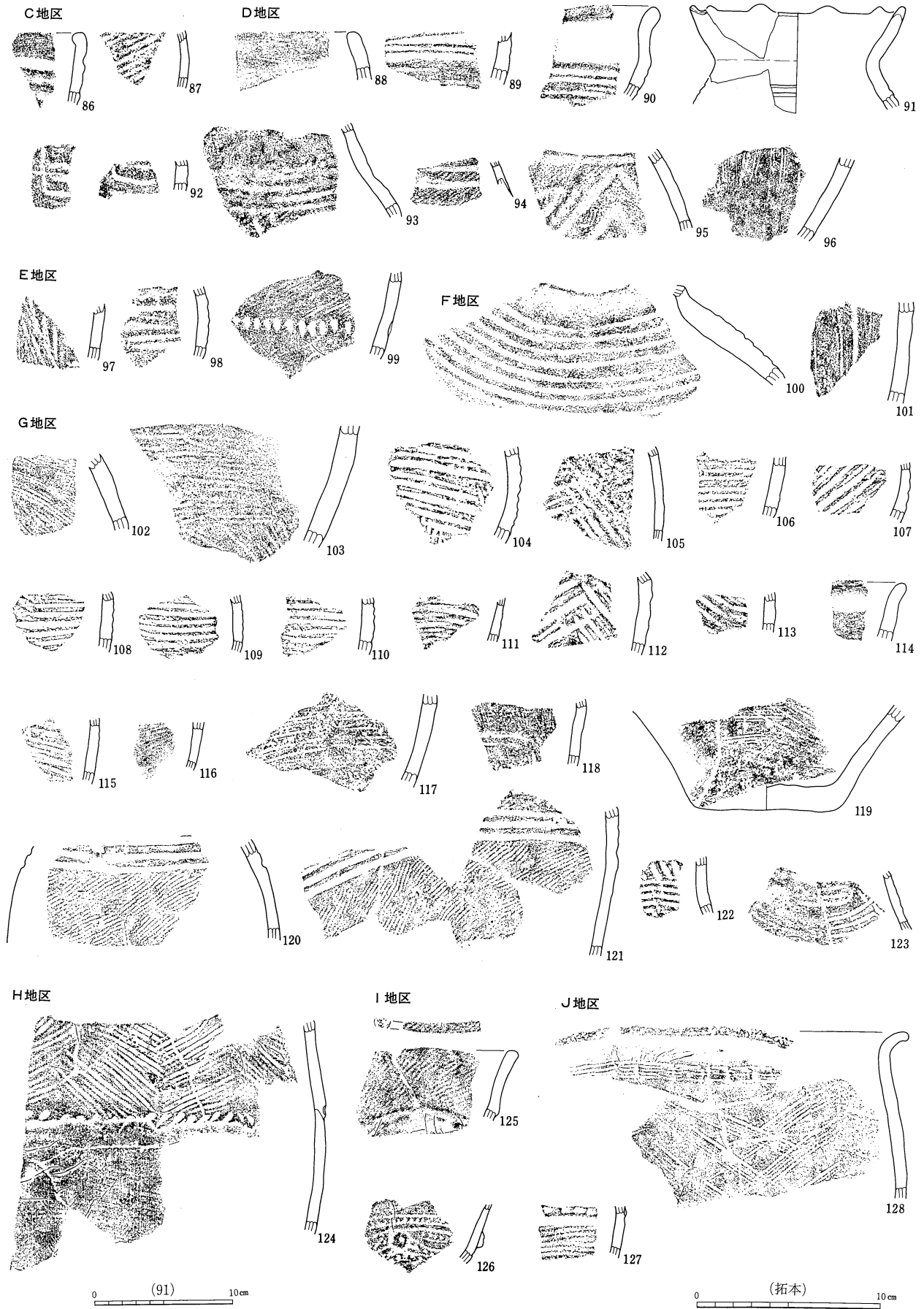
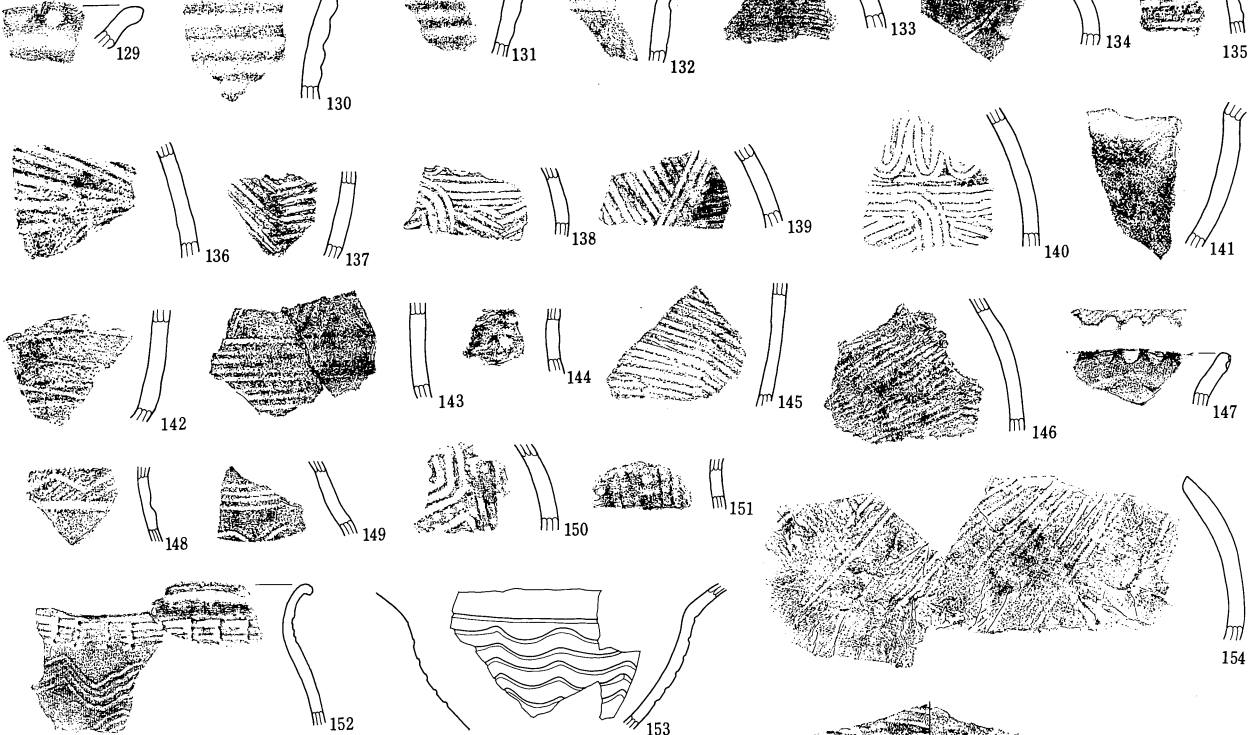


図26 弥生時代の土器 4（更埴条里遺跡包含層）

屋代遺跡群

①区



②区

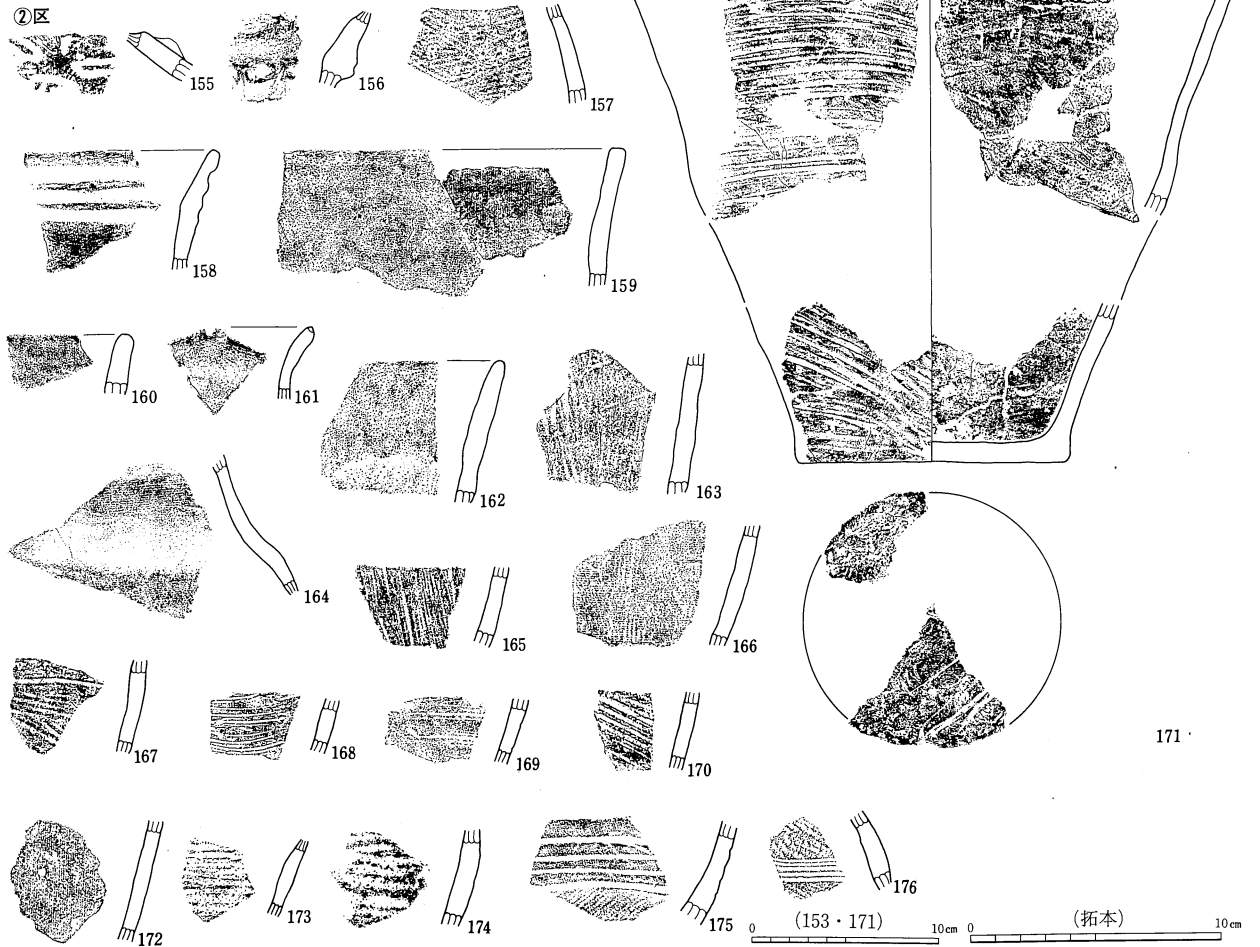
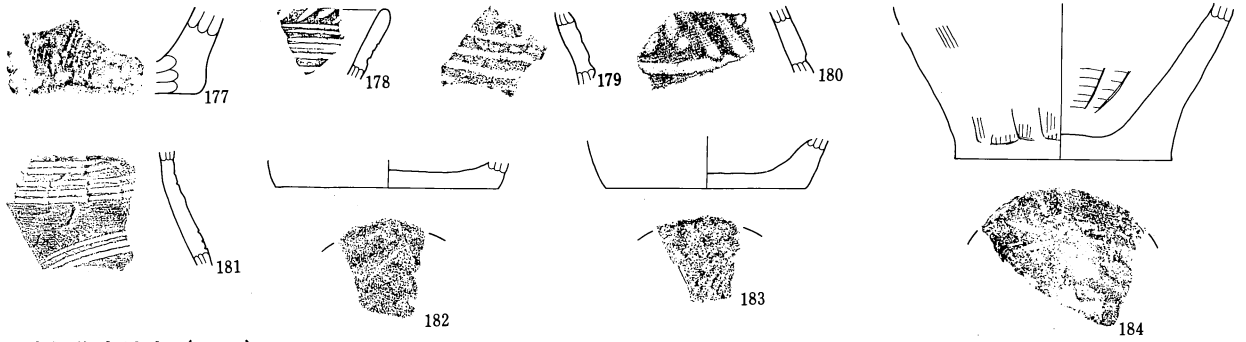


図27 弥生時代の土器 5 (屋代遺跡群包含層)



遺物集中地点（S Q）③a区

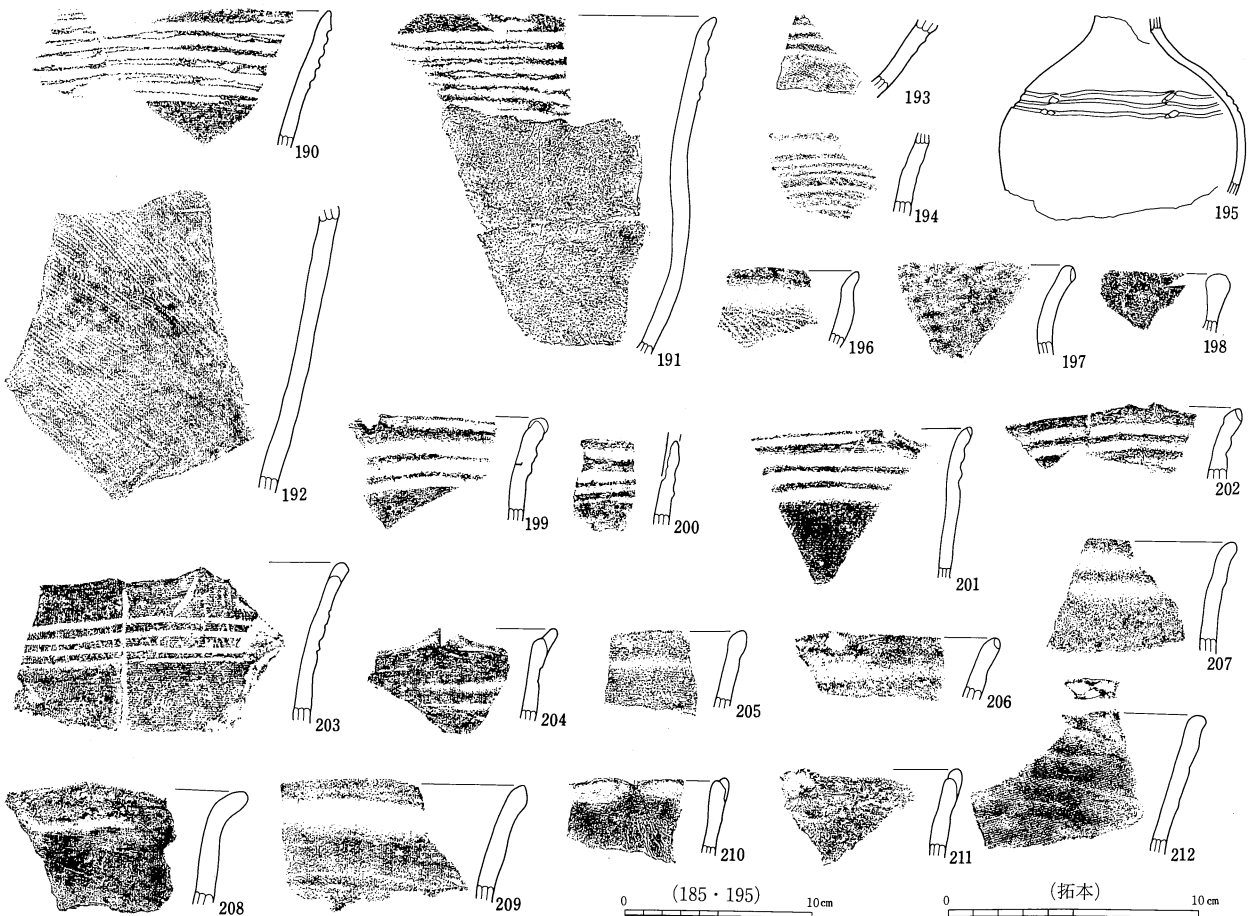


図28 弥生時代の土器 6（屋代遺跡群③a区遺物集中地点ほか）



図29 弥生時代の土器 7 (屋代遺跡群㉓a区遺物集中地点)

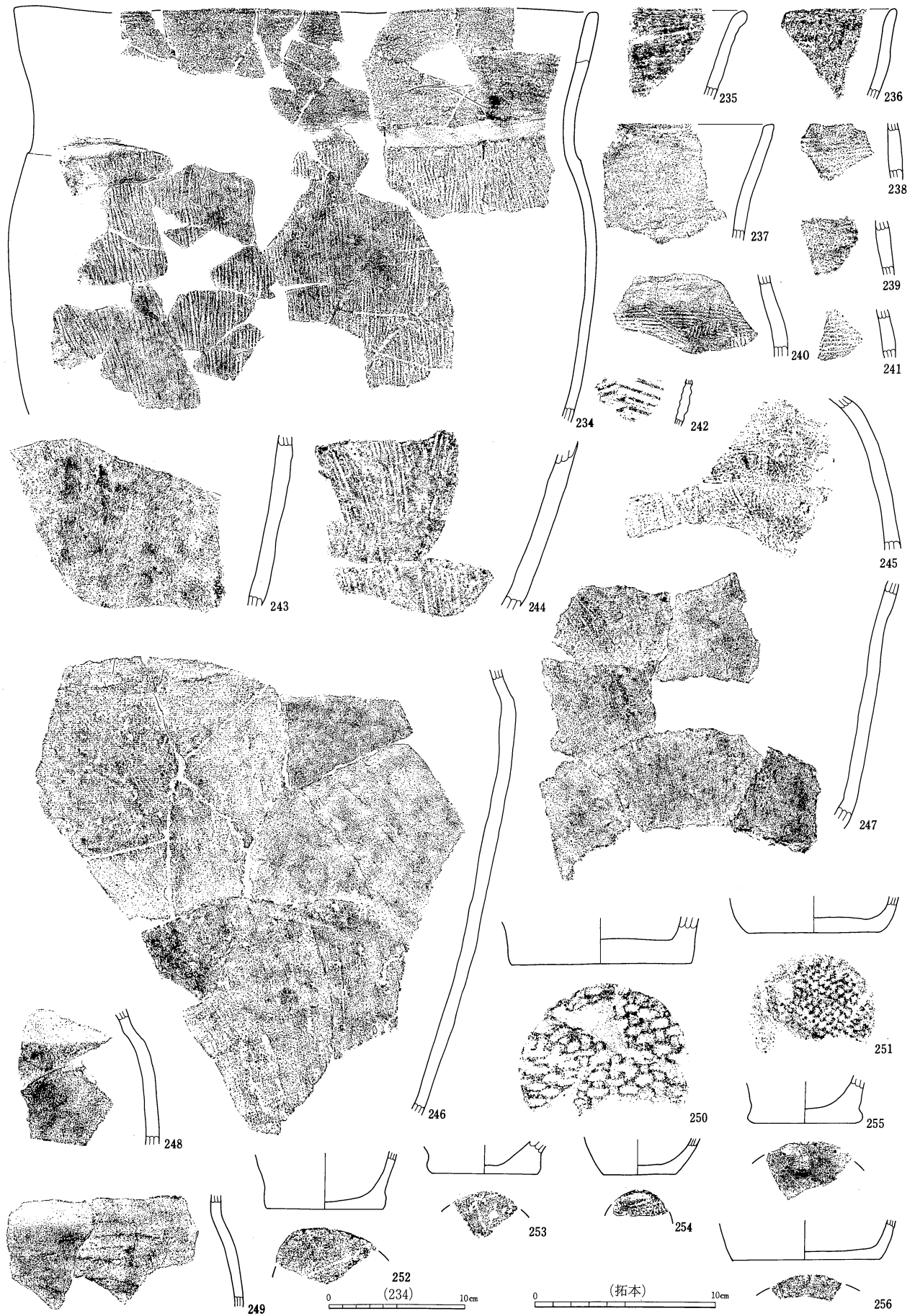


図30 弥生時代の土器 8（屋代遺跡群③a区遺物集中地点）

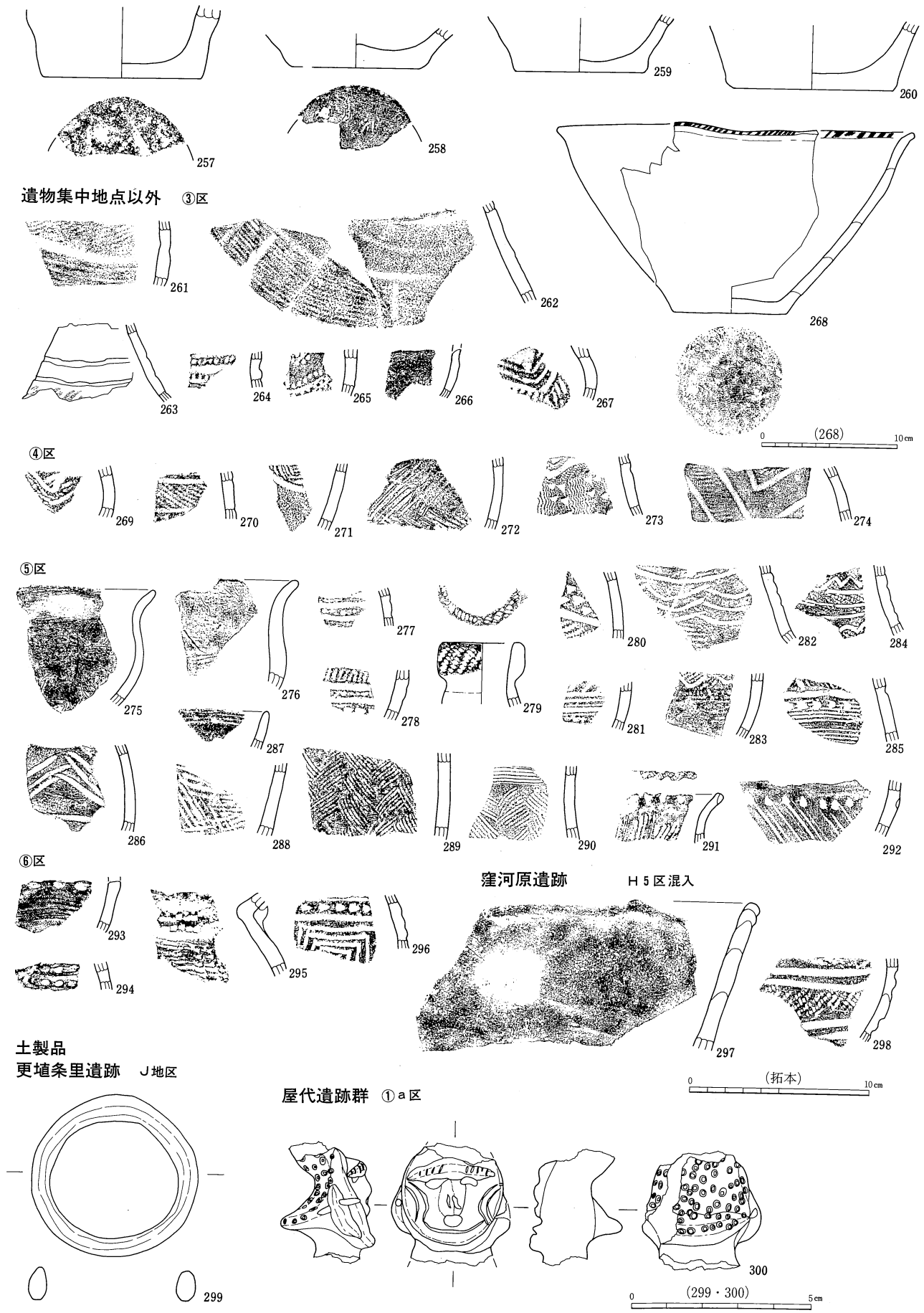


図31 弥生時代の土器 9 (屋代遺物集中地点ほか)、土製品 (更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡)

2 石器・石製品

(1) 概要（図32～39、P L 9・10）

弥生・古墳時代の遺構・包含層から出土した石器および上層から出土した石器のうち、弥生・古墳時代に属する可能性のあるものを、まず抽出した（表6）。これらを、その出土層位を重視して弥生関連（第2章第3節）、古墳関連（第3章第3節）、古代以降関連に区分して報告する。

弥生時代の遺構及びVI層中～下面にて収集された石器297点を該期遺物として扱う。したがって、石器の形式的な所属時期が弥生相当であっても、出土遺構及び検出面の時代により、区別して扱うことにした。遺物中、121点が石器製作に伴い石屑として弾き出された資料で、道具として認定できる資料は176点である。その内訳については表7に示す。

	母岩	石屑		狩猟具	漁労具	採集具	調理具			
	原石	石核	大形剥片/小形剥片	石鏃	石錐	打製石斧	磨石	凹石	敲石	台石/石皿
弥生関連	0	0	109/12	40(打39・磨1)	—	38(24)	22	10	1	0/—
古墳関連	1	0	24/5	19(打18・磨1)	—	14(7)	61	3	5	5/—
古代関連	1	4	7/9	18	—	4	29	3	3	0/—
合計	2	4	140/26	77	—	56(31)	112	16	9	5/—
<不明>	1	0	2/1	4	—	1	2	0	0	0/—
<合計>	3	4	142/27	81	—	57(31)	114	16	9	5/—

	調理具			加工具					紡錘具	装飾具	総数
	石匙	石包丁	大形刃器/小形刃器	磨製石斧	石錐	砥石	軽石	R・F	紡錘車	玉類	
弥生関連	1	20	31/7	4	0	0	2	0	—	—	297
古墳関連	0	7	15/10	4	0	12	18	0	3	178	384
古代関連	0	4	5/10	7	1	2	1	1	—	23	132
合計	1	31	51/27	15	1	14	21	1	3	201	813
<不明>	0	4	3/2	0	1	0	0	0	0	0	21
<合計>	1	35	54/29	15	2	14	21	1	3	201	834

表6 弥生時代以降の石器一覧表

名称 数量	総数	石屑		狩猟具	採集具	調理具		加工具				武器形
		剥片ほか	打石鏃	打製石斧	磨石類	石匙	刃器	磨製石包丁	磨製石斧	軽石品	磨石鏃	
297	121	39	38(24)	33	1	大31・小<微>7	20	4	2	1		

表7 VI層下面出土石器組成表（ ）は欠損により1個体と認定不能な数で内数

掲載方法 以下出土資料について報告するが、記述は5つの項目につき実施した。

①材質、②製作法、③分類（形態的類別・機能的類別）、④法量（大きさ）、⑤遺存状態である。③機能的類別についてはルーペ（Vixen×3.5倍）にて全資料を、金属顕微鏡（OLYMPUS BX60M×200倍まで）にて石鏃・石錐・刃器・打製石斧・磨製石斧を観察した。④では属性グラフ・平均値・石器観察表を作成した。属性表中の（ ）は破片資料の意味である。

(2) 各器種の属性

① 剥片・破片

剥片剥離作業において加工の施される属性を担った対象を剥片とし、これが剥離される過程において産出された、石器製作に不適な資料を破片とする。具体的には石鏃を第一義的な製作物とする目的的な素材剥片から、刃器そして石錐にいたる道具類の生産に要する剥片までを包括し、製作途上での出現段階と素材部位を考慮し、2種4類に区別する。すなわち原石の表皮が片面1/2以上認められる剥片を1種、表皮

が1/2以下の剥片を2種(図37-33)とし、各々で両極剥離痕を有する剥片をA類、石鏃製作などに関与する素材用剥片をB類として抽出した。剥片A類はなく、B類が1点(3.1g)のみ収集された。石鏃など小形の剥片石器製作に関わる石屑では、剥片1種4点(33.8g)・剥片2種1点(9.1g)・碎片6点(7.3g)である。また打製石斧や石包丁など、大形の剥片石器製作に関わる石屑では剥片1種34点(1,847g)・剥片2種27点(1,289g)・碎片38点(154g)がある。

() 内は重量 <g> を示す

出土地	分類 石材	剥片1種						剥片2種				碎片			
		安山岩	頁岩	粘板岩	凝灰岩	閃緑岩	珪質岩	安山岩	頁岩	粘板岩	砂岩	頁岩	粘板岩	凝灰岩	砂岩
1区		1(2.8)	—	—	1(48.7)	—	—	—	—	3(69.2)	—	—	—	—	
2区		1(7.1)	—	9(707.9)	—	2(153.8)	—	—	1(41.0)	5(290.1)	—	2(2.0)	16(50.9)	1(3.1)	—
3区		4(389.7)	3(45.8)	8(298.4)	—	—	1(87.3)	1(18.0)	1(36.0)	11(443.6)	2(162.0)	—	15(78.1)	—	2(12.7)
D区		—	—	1(7.0)	—	—	—	—	1(23.8)	—	—	—	—	—	—
E区		—	—	1(45.2)	—	—	—	—	—	2(52.1)	—	—	—	—	—
F区		—	—	2(65.3)	—	—	—	—	—	4(218.6)	—	—	1(1.9)	—	—
H区		—	—	—	—	—	—	—	—	1(64.4)	—	—	3(9.6)	—	—
J区		—	1(11.6)	1(7.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	1(1.4)	—	—
合計		6(399.6)	4(57.4)	22(1131.6)	1(48.7)	2(153.8)	1(87.3)	1(18.0)	3(100.8)	26(1138.0)	2(162.0)	2(2.0)	36(141.9)	1(3.1)	2(12.7)

表8 大形剥片地区別出土数量(石材別)

② 石鏃

刺突・殺傷が想定できる資料。製品38点・失敗品2点・合計40点を収集。火成岩を主体とし黒曜石26点・硬質頁岩7点・チャート4点・安山岩2点・頁岩1点である。形態的視点から全体形が無茎なI類3点(打製のみ)と有茎なII類34点(打製のみ)を大別し、基部及び側辺部の形状に基づき細別する。

《形状》

I B類—基部が内湾する例4点。挟りが浅く全長の1/6以下で、脚部の開き角が120度以上をB1類1点(図38-46)とし、挟りが深く開き角が120度以下をB2類2点(図36-3、図38-60)とする。

II A類—平らで直線的な基部を呈する平基例6点(図36-14、図37-30、図38-40・41・56)。

B類—基部が内湾する凹基例26点(図36-4・5・11、図37-25、図38-42~45、57~59、図39-66・67、83・85)。

C類—基部が外湾する凸基例2点(図37-29、図38-55)。

以上のほか、形状不明1点がある。

上記類別を補佐する側辺部の形状には、外湾例10点(図37-25・29、図38-45・46・55・56)と直線的な例27点(図36-3~5・11・14、図37-30、図38-40~44・57~60、図39-66・67・83・85)がある。また側辺部が屈折し張り出し部状となったいわゆる「飛行機鏃」(図38-57)が4点含まれる。

《大きさ》

大形—長さ2.5cm以上の例(I B類1点図36-3、II A類5点図36-14、図37-30、図38-40・41・56、II B類11点図36-4、図38-42・43・59、図39-66・67・83・85、II C類2点図37-29、図38-55)

中形—長さ1.5cm以上2.5cm未満の例(II B1類1点図38-46、II B2類1点図38-60、II B類7点図36-11、図37-25、図38-44・45・57・58)

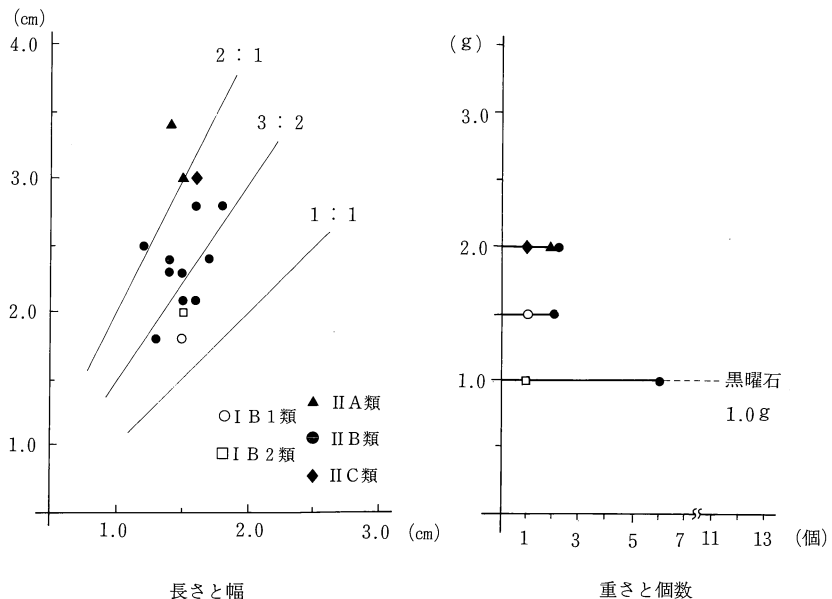


図32 石鏃法量相関グラフ (VI層下面出土)

機能的側面は使用による先端部の損傷・装着痕跡・付着物について観察した。機器は金属顕微鏡（×200・×500）の各適応倍率を使用し、全資料につき実施した。結果9点（36％）に先端部の損傷が、3点（12％）に装着を考えさせる痕跡が確認できた。法量については類型別に表9に平均値を提示した。形態的類別から除外した資料に、技術的に製作途中の失敗品と考えられる例がある。製作の進行度合いにより細別し、素材の全体成形時に留まる資料を失敗品1（磨製1点）、成形後基部の意識的作出のある資料を失敗品2（打製1点）とする。欠損は部位としてFが、状況でハが多く、欠損率は62.5％である。

平均値	法量（最大値）				計上数	機能部										装着痕有	基部形態						側辺部形態		欠損部位						自然面有	総数									
	長さ <cm>	幅 <cm>	厚さ <cm>	重さ <g>		長さ <cm>	幅 <cm>	先端角 <度>	抉り長 <cm>	抉り幅 <cm>	茎長 <cm>	使用痕					a	b	c	d	f	茎有	外	直	A	B	C	D	E	F			完								
												有	摩	線	光																			欠							
IB1	1.8	1.5	0.4	1.0	1	1.0	0.9	49	0.2	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1						
IB2	2.0	1.5	0.4	0.7	1	1.2	0.9	40	0.4	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2						
IIA	3.2	1.5	0.6	1.8	2	1.4	0.8	31	-	-	0.6	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	2	2	6	2	6						
IIB	2.3	1.9	0.4	0.9	10	1.1	0.9	42	0.2	1.4	0.3	7	7	3	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	10	5	26	10	26					
IIC	3.0	1.6	0.5	1.6	1	0.8	0.7	46	-	-	1.6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2	1	2					
失敗品1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	1				
失敗品2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1		
不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1

表9 石鏃属性表

③ 打製石斧

大形の打製石斧で、主に掘削等の作業が想定できる資料。堆積岩である頁岩（≒粘板岩）38点を収集する。製作法は、採集岩より剥片を剥取し敲打剥離する例に限られる。石器の形態的類別は全体形とその構成要素（頭部・胴部・刃部の形状）に基づき実施する。概括し全体形を類別すると2類4細別となる。

《形状》

B類－全体の形状を撥形・台形様に整える例11点（図36-2、図38-47）。撥形をB1形態4点（図36-6、図39-81）とし、台形様をB2形態5点（図37-28・31・36、図39-69・70）とする。

C類－全体を8の字形に整える例3点（図38-48、図39-68）。この内、いわゆる分銅形をC2類1点（図37-32）とする。

上記のほか、欠損し全体形が不明な資料24点（図37-23・27・35）がある。

頭部の形態には、素材剥離時の縁辺をそのまま残す例と加工整形する例2者があり、両者を区別することなく類型化すると4類ある。直頭状の1類3点（図38-48）、尖頭状の2類6点（図36-6、図37-28・35・36、図39-70）、円頭状の3類3点（図37-23）、斜頭状の4類3点（図37-32、図39-81）である。刃部の形態は使用状況を反映し、類別は使用後の形状変化を示すと考えられる。直刃4点、円刃5点、斜刃1点である。刃部の作出は原則的に剥離時の片面・片刃（2点）を利用すると推定できるが、鋭利な刃部を残す例は少なく、刃部再生に際し両面・両刃（8点）と化したものが大半である。以上各類別と全体形との相関は表10に示す。

機能的視点では刃部に摩耗・線状痕を基部（胴部・頭部）に装着痕を確認した。観察はルーペ（×5

平均値	法量（全体値）				計上数	機能部値		使用痕跡				平面形		断面形		基部形				素材		自然面有	欠損状況								総数						
	長さ <cm>	幅 <cm>	厚さ <cm>	重さ <g>		刃幅 <cm>	刃部角 <度>	長さ <cm>	幅 <cm>	刃角 <度>	有	装着	平刃	円刃	尖刃	片刃	両刃	1	2	3	4		縦	横	1	2	3	5	6	7		8	完形				
B1	18.6	6.0	2.1	252.0	2	5.6	18	1.9	3.2	32	2	1	2	-	-	-	2	1	1	-	2	-	1	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	2	4		
B2	12.5	4.3	2.4	141.6	2	3.0	21	2.0	3.2	49	2	2	1	1	1	-	3	-	4	-	-	1	1	5	-	1	1	1	-	-	-	-	-	2	5		
B?	-	-	-	-	-	6.1	13	1.3	4.8	25	2	-	2	-	1	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	2	2	
C2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
C	-	-	-	-	-	8.6	12	-	-	30	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	1	1	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	2
不明	-	-	-	-	-	5.3	16	4.1	-	43	2	-	1	1	-	1	2	1	1	3	-	1	6	5	2	3	-	1	5	9	4	-	-	-	24	24	

表10 打製石斧属性表

~20) を使用し、全資料に対して実施した。刃部では8点に摩耗・線状痕が観察できた。また装着痕と考えられる基部の摩耗痕跡は3点に確認できた。法量については表10に形態別の平均値を示した。完形の数値では長さ14cm(幅6cm)以上の特大例(図39-81)と、12cm以上14cm未満(幅4cm)の大形例(図39-70)がある。欠損資料が全体の6割を占める。

④ 磨石・凹石・敲石

する・たたく等の作業を想定できる資料。特徴的で最も頻繁な用法に基づき磨石・凹石・敲石を類別する。総数33点を収集。火成岩を主体とし、安山岩26点・砂岩3点・閃緑岩2点・凝灰岩2点である。明らかな製作痕跡を確認できる資料はなく、河原石を直接使用する例に限られる。形状と大きさから類別を行い、2類・12細分する。

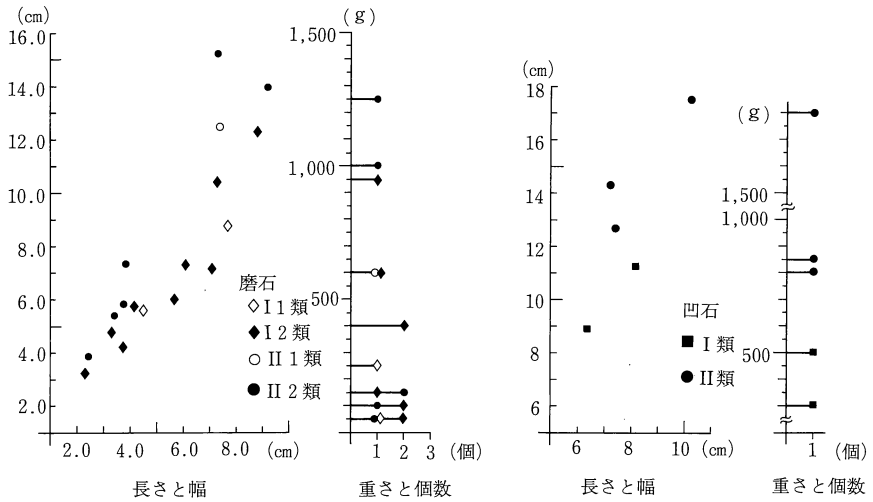


図33 磨石・凹石法量相関グラフ (VI層下面出土)

《形状》

I類一長幅比で1:1から3:2までに該当する例。平面形状は円形・楕円形を呈する。細別は扁平率を換算し、幅厚比で0.55未満を1類3点(図39-72・73)、0.55以上を2類10点(図36-8・13、図37-34、図38-37)とする。
II類一長幅比で3:2より長さの比率が高い例。楕円形で棒状を呈する。幅厚比で0.55未満を1類1点、0.55以上を2類9点(図36-10、図37-24、図38-61、図39-74・82)とする。
そのほか、形態不明のもの10点(図36-9・15、図39-71)がある。

《大きさ》

a類一長さ7.0cm以上14点(図36-8~10・13・15、図37-34、図38-37・61、図39-71~73・82)。

器種名	平均値 属性分類	法量(全体値)				計上数	摩耗面				敲打面(凹部)				磨面のみ	凹面のみ	磨凹複合	磨敲複合	凹敲複合	全て複合	欠損状況						総数		
		長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>		片面	両面	複合	片面		両面		側							1/2	1/3	2/3	1/4	3/4	完形			
										1	2	11	24															44	4
磨石	I	1 a	8.7	7.7	2.4	228.0	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
		1 c	5.6	4.5	1.7	43.7	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
		2 a	9.3	7.3	5.6	549.5	4	1	2	1	-	-	-	-	-	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4
		2 b	6.0	5.7	3.4	143.6	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
		2 c	4.9	3.7	2.6	62.8	3	1	1	1	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3
	2 d	3.2	2.3	2.1	25.5	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
	II	1 a	12.5	7.4	4.0	574.0	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
		2 a	12.3	2.3	5.3	789.3	3	3	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3
		2 c	5.6	3.6	3.5	109.1	2	-	1	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
		2 d	3.9	2.5	2.0	25.0	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
不明	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	1	-	-	-	3	-	-	-	1	-	4		
凹石	I	1 a	11.3	8.1	4.4	480.0	1	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
		2 a	8.9	6.4	4.4	298.0	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
	II	2 a	14.8	8.3	7.6	1136.7	3	1	-	-	2	-	-	1	-	1	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	3	3	
	不明	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	3	2	-	-	-	2	1	1	1	-	-	5		
敲石	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1		

表11 磨石類属性表

b類—長さ6.0cm以上7.0cm未満1点。

c類—長さ4.0cm以上6.0cm未満6点（図37-24、図39-74）。

d類—長さ4.0cm未満2点。

機能的視点からの類別は、する・たたくの大別が可能である。観察は肉眼主体で資料によってはルーペ（×5）を併用し、この時点で使用面の不確かなものは本器種から除外した。

〈摩耗面〉

すべての資料が面全体に広がるもので、局所的な使用例は認められなかった。摩耗面が片側のみに認められる例は12点あり、両面に認められる例は10点ある。

〈敲打面〉

1類—小さな粒状の凹み単位（0.1～0.5cm）が集合し、凹部を形成する例（4点）。

2類—アバタ状を呈する例（2点）。

4類—すり鉢状を呈する例（4点）。

5類—小剝離痕を伴う例（1点）。

7類—礫の割れ口面を使用する例（1点）。

以上、機能部の属性は1個体1対応とは限らず、複数箇所存在する。摩耗面のみ有する磨（擦）石が19点、磨石で敲打部を伴う例が3点、敲打面（凹部）のみ有するか、摩耗面の複合した凹石が8点、凹石で敲打部を伴う例が1点、すべての機能部が複合した例が1点である。これら以外が敲石に相当し、1点ある。

量量は各類別ごとに、平均値を表11に示す。欠損状況では圧倒的に完形資料が多く、磨石で82%、凹石で50%が完形である。

⑤ 刃器

項目中提示した器種以外で、機能部として刃部を有する資料。加工を伴う資料と伴わない資料の2者がある。打製石斧など大型の剥片石器製作と同材を用いる資料を大形剥片素材の刃器とし、石鏃などと同材（黒曜石・チャート）の資料を小形刃器と呼称する。大形刃器は堆積岩を主体とし、頁岩（粘板岩）25点・硬質頁岩24点・砂岩1点・安山岩1点・総数51点である。この内、大形刃器には素材と考えられる剥片1点が含まれる。また小形刃器例（微細な剝離痕跡を有する石屑含む）は8点あり、黒曜石5点・硬質頁岩3点である。硬質頁岩製の石匙1点を含む。

以下、形状・加工状況・大きさの視点から類別する。

《形状》

1類—剥片をそのまま使用する例14点。

a類 半月形状（あるいは貝殻状）を呈する例4点（図39-79）。

b類 楕円形あるいは長方形を呈する例9点（図39-77・78）。

c類 石鏃状を呈する例1点（図38-38）。

2類—剥片に加工を施す例の内、素材の形状をそのまま生かす例が14点あり、加工により全体形を変形

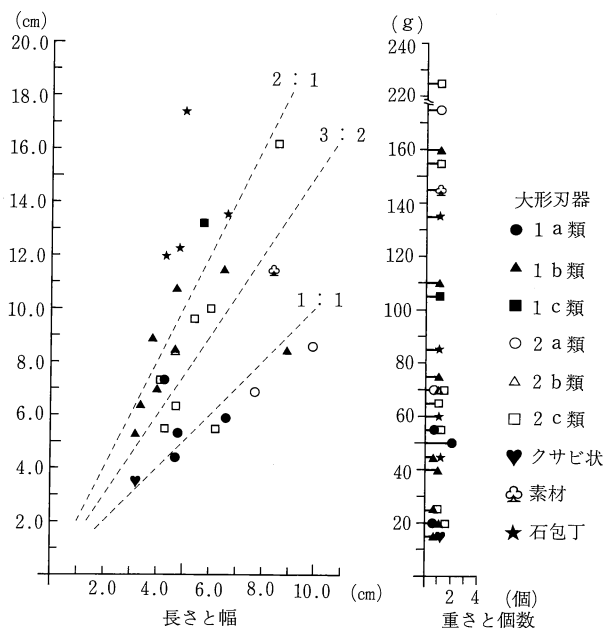


図34 大形刃器・石包丁法量相関グラフ（VI層下面出土）

平均値 属性分類	法量(全体値)				計上数	刃部											背部加工有	自然面有	欠損						総数									
	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>		数			刃長<cm>	刃幅<cm>	加工	刃付片	刃角<度>	刃部角<度>	平面形				使用痕				部位			状況								
						1	2	4							外	直			内	◎	○	△	摩	光		A	D	E	F	完	ロ	ハ		
1	a	6.2	5.1	1.3	41.0	4	4	-	-	6.0	0.8	-	2	-	13.7	13.7	1	3	-	-	1	-	-	-	1	4	-	-	-	4	-	-	4	
	b	8.4	4.9	1.2	58.9	8	8	1	-	5.5	1.5	-	3	1	13.8	13.8	2	6	1	-	2	-	-	2	2	5	1	-	-	-	8	-	1	9
	c	13.2	5.7	1.6	100.5	1	1	-	-	8.0	-	-	-	1	13.5	13.5	1	-	-	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	1	
2	a	7.8	8.8	1.8	121.1	2	2	-	-	7.6	0.6	-	-	2	13.8	13.8	1	1	-	-	1	-	-	1	-	2	-	-	-	2	-	-	2	
	b	8.4	4.7	1.8	66.5	1	2	1	-	5.8	2.5	-	-	1	13.3	13.3	-	1	-	-	1	1	-	2	1	-	-	2	-	1	-	2	3	
	c	8.8	5.7	1.5	87.0	7	8	-	-	7.2	3.6	8	7	-	30.5	13.8	2	6	-	1	2	1	-	4	-	7	-	1	-	7	-	1	8	
	d	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1.0	1	-	1	28.0	13.7	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	
3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	1		
クサビ状	-	3.5	3.2	0.7	10.8	1	-	-	1	3.2	-	1	-	-	36.0	13.8	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	
素材	-	11.5	8.4	1.3	141.3	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1	

表12 大形刃器属性表

平均値 属性分類	法量(全体値)				計上数	刃部											背部加工有	自然面有	欠損						総数							
	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>		刃長<cm>	刃幅<cm>	穴径の幅		加工	刃付片	刃角<度>	刃部角<度>	使用痕					部位		状況											
								左	右					◎	○	△			摩	光	A	D	F	完		ロ	ハ	他				
直線刃	I	-	-	-	-	-	2.2	1.4	0.7	0.7	-	1	-	34.0	13.7	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1
半月形	II	12.0	4.6	0.6	49.9	2	11.1	0.5	1.0	0.7	0.7	-	2	39.5	13.9	1	-	1	-	2	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	
外湾杏	不	-	-	-	-	-	0.7	1.5	0.9	0.8	-	-	10	36.1	14.8	-	2	4	1	6	1	1	3	6	1	-	-	9	1	10		
内湾半	I	17.4	5.0	0.7	82.4	1	16.9	0.9	1.1	0.8	0.8	-	1	35.0	18.8	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	
失敗品	2	13.6	6.6	1.2	135.0	1	13.0	-	-	-	-	-	-	25.0	13.7	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	
不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	2	-	-	-	-	-	1	2	-	1	2	3

表13 磨製石包丁属性表

させる例が18点ある。後者については、別に3類・5類として類別する。

- a類 切断を伴い板状を呈する例2点(図37-19、図38-64)。
- b類 背部に加工を施す例3点。
- c類 刃部を剥離加工により作出する例8点(図36-7・12、図38-62・63、図39-80)。
- d類 刃部に研磨を施す例1点(図37-20、図39-84・86)。

3類-石鎌状を呈する例1点。

5類-磨製石包丁20点(図36-1・18、図37-22・26、図38-52~54・65)。

6類-小形刃器(≒微細な剥離痕跡を有する石屑)7点(図36-17、図38-39、図39-75)、石匙1点(図38-51)。

《大きさ》

特大形I類-長さ13.0cm以上の例。1c類1点(図38-38)・2c類1点(図36-12)・2d類1点(図37-20)・5類3点(図36-1、図37-26、図38-52)。

大形II類-長さ9.0cm以上13.0cm未満の例。1b類2点(図39-77、78)・2c類2点(図38-62)・5類2点(図38-53)・素材1点。(cm)

中形III類-長さ7.0cm以上9.0cm未満の例。1a類1点・1b類4点・2a類1点(図38-64)・2b類1点・2c類2点(図39-80)。

小形IV類-長さ4.0cm以上7.0cm未満の例。1a類3点・1b類2点・2a類1点(図37-19)・2c類3点(図36-7、図38-63)。

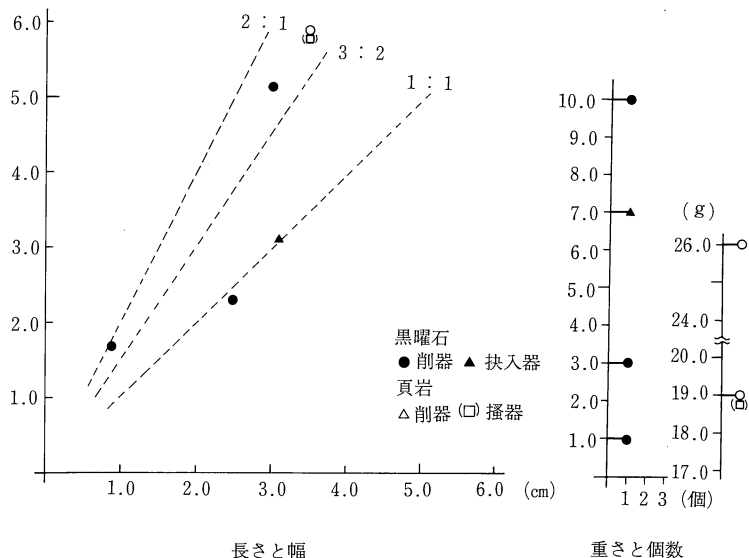


図35 小形刃器法量相関グラフ (VI層下面出土)

以上のほか、楔状を呈する例1点（図39-76）と刃器素材と考えられる資料1点、欠損により分類不能な資料20点がある。小形刃器は長さ4.0cm未満の極小例が4点（57%）と主体を占める。細別は技術形態的視点から行い、剥片の長軸と平行に刃部を有する例が5点、抉り状の刃部を有する例が1点、直行して刃部を有する例を含め複合する例が1点ある。石匙1点は長さ4.9cmの横形例である。

機能的視点では、石器の表面観察を実施した。金属顕微鏡（～×500）を用い、全資料に対して観察を行った。刃部と器体部を区別せずに使用痕跡を観察しており、観察表中に装着痕についての記述はしない。また6類微細な剥離痕を伴う資料（いわゆる使用痕有る石屑を含む）については、顕微鏡で痕跡の有無のみを観察し、結果2点に確認した。

⑥ 磨製石斧

伐採・切断・加工（鑿・削）の作業を想定できる資料。総数4点を収集、両刃石斧4点である。火成岩を主体とし、頁岩1点・ハンレイ岩2点・緑色片岩1点である。形態的な視点から形状・大きさの属性を類別の要点とし細分する。

《形状》

両刃石斧（I類）－表裏両面に刃区の作出が認められる例4点（図37-21、図38-49・50）。

《大きさ》

大形（a類）－長さ12.0cm以上20.0cm未満の例2点（図37-21、図38-49）。

以上のほか、欠損による形状不明2点がある。

頭部の形態は、尖頭状の2類1点、円頭状の3類1点である。刃部形態は円刃が4点ある。

機能的視点では刃部に摩耗・線状痕を、基部（胴部・頭部）に装着痕を観察した。機器はルーペ（～×20）を使用し全資料に対して実施した。結果刃部3点に痕跡が確認できた。

すべて欠損例で、法量等は各類別ごとに平均値を表14にまとめた。

平均値	法量（全体値）				計上数	機能部値			刃部平面形		刃部断面形		使用痕跡					基部形態		再生有無	装着痕跡	付着物	敲打痕跡	自然面有	欠損状況					総数		
	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>		刃長<cm>	刃幅<cm>	刃部角<度>	平刃	円刃	片刃	両刃	長さ<cm>	幅<cm>	刃角<度>	有無	種類	2	3						4	6	7	8	完形			
I a	-	-	-	-	-	3.0	3.7	56	-	2	-	2	1.3	3.8	70	-	2	2	1	1	-	-	-	2	2	1	-	1	-	1	-	2
不明 I	-	-	-	-	-	-	4.7	-	-	2	-	2	1.3	5.0	74	-	2	2	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	2	

表14 磨製石斧属性表

⑦ 軽石製品

収集された浮岩（軽石）の内、研磨痕跡や穿孔痕跡など、明らかに使用ないしは加工の痕跡の認められる資料が2点ある。形状と大きさの視点からの類別は磨石類に準じる。

《形状》

形状は2点とも長幅比1:1から3:2のI類に該当する。扁平率により細別し、0.55以上0.70未満を2類1点、0.70以上を3類1点とする。

《大きさ》

c類－長さ4.0cm以上6.0cm未満の例（I2c類1点・I3c類1点）。

機能的視点では、外面に磨面の認められる例2点がある。

自然流路・水路 (SD)
更埴条里遺跡

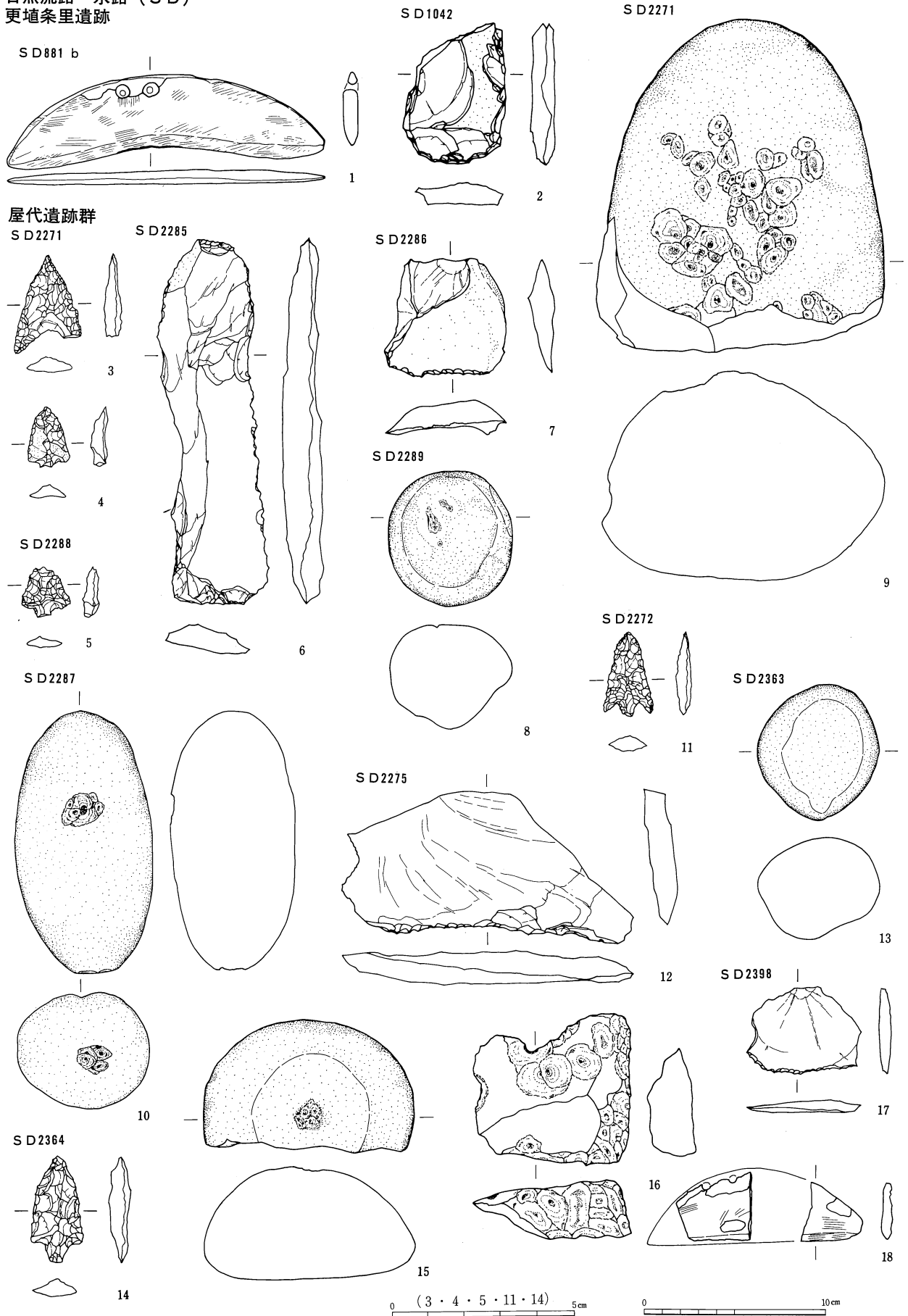


图36 VI層下面出土石器 1 (更埴条里遺跡・屋代遺跡群SD)

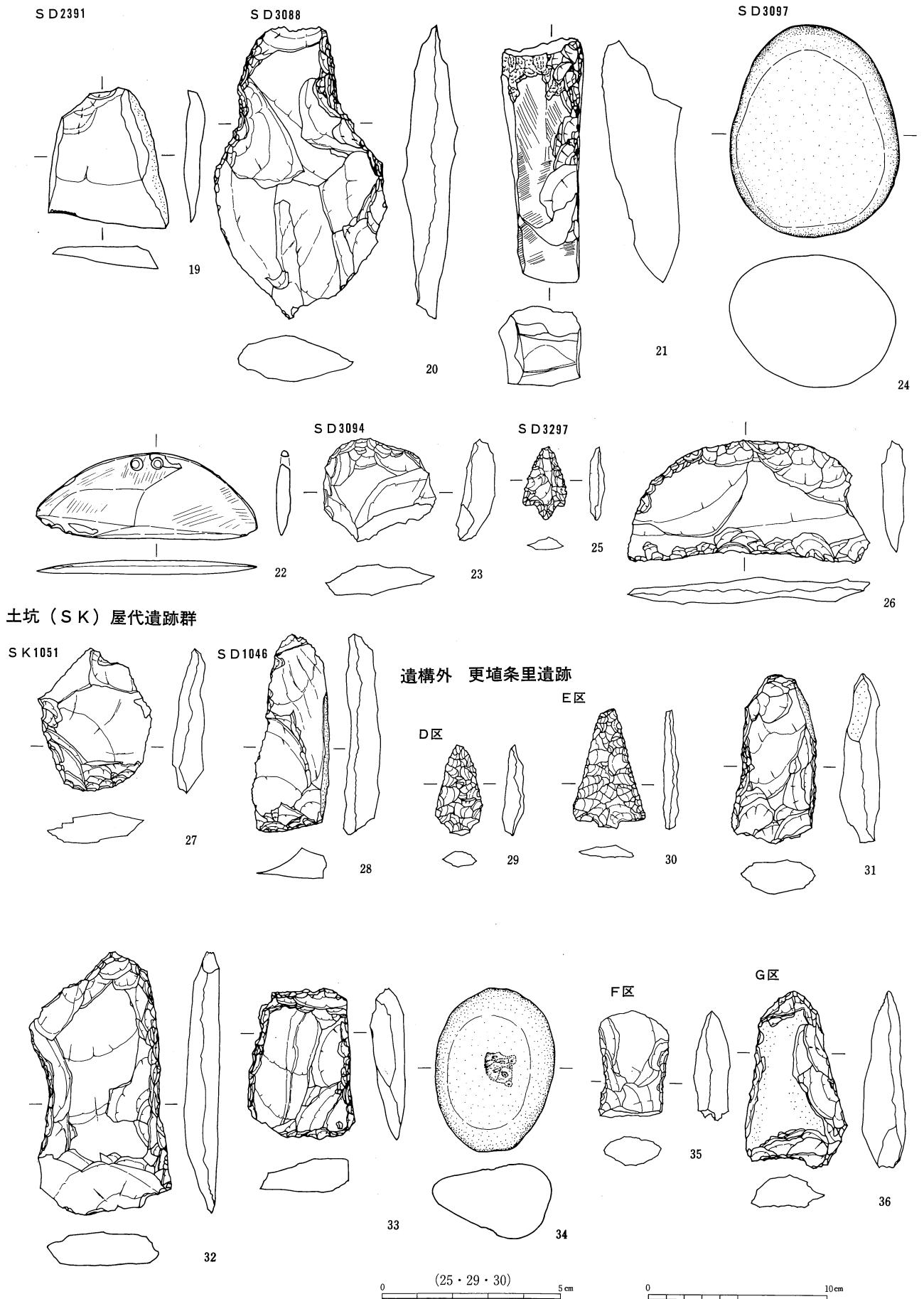


図37 VI層下面出土石器 2 (更埴条里遺跡、屋代遺跡群SD・SK・遺構外包含層)

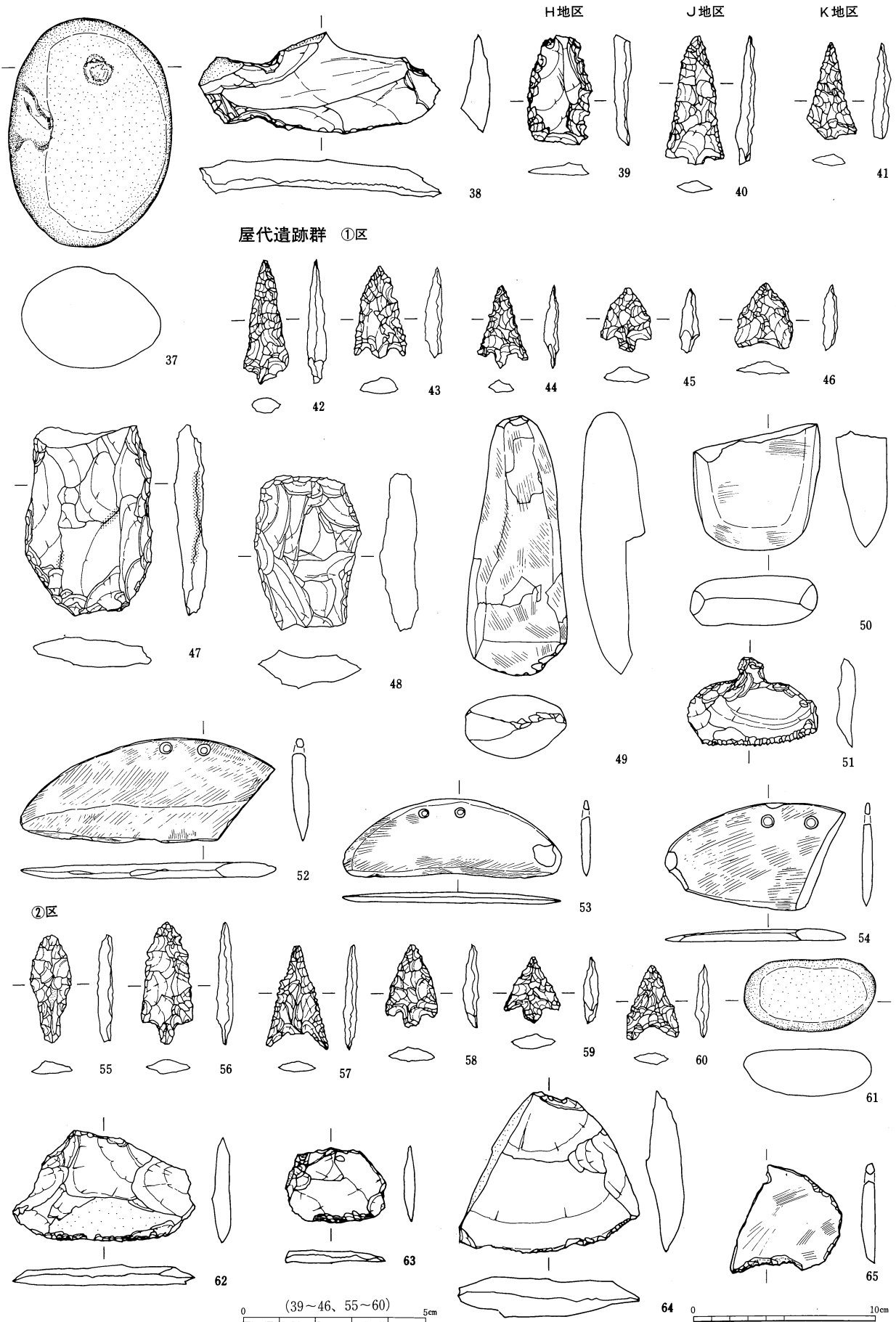
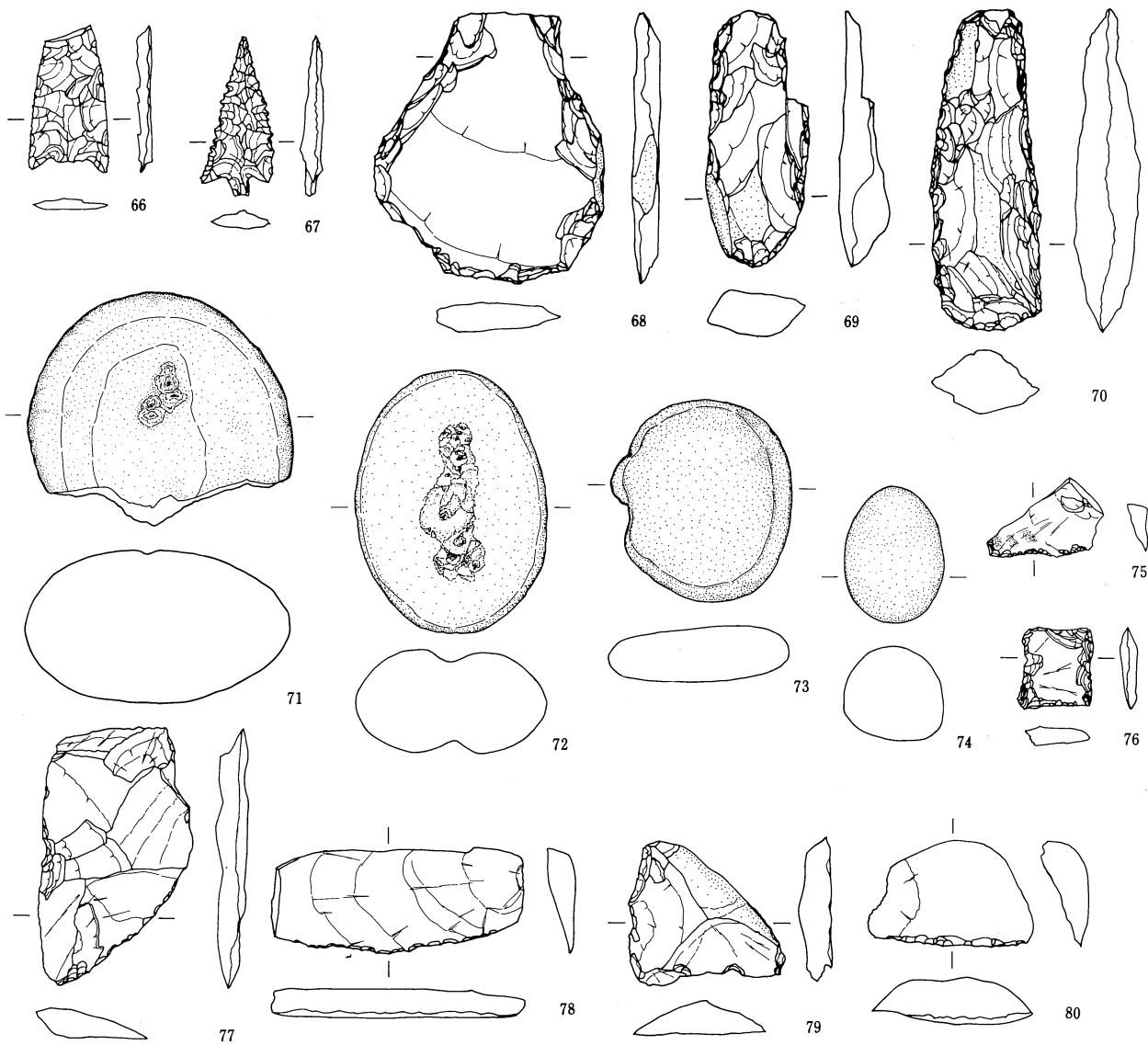


图38 VI層下面出土石器 3 (更埴条里遺跡·屋代遺跡群)

遺物集中地点 ③a区



集中地点以外 ③区

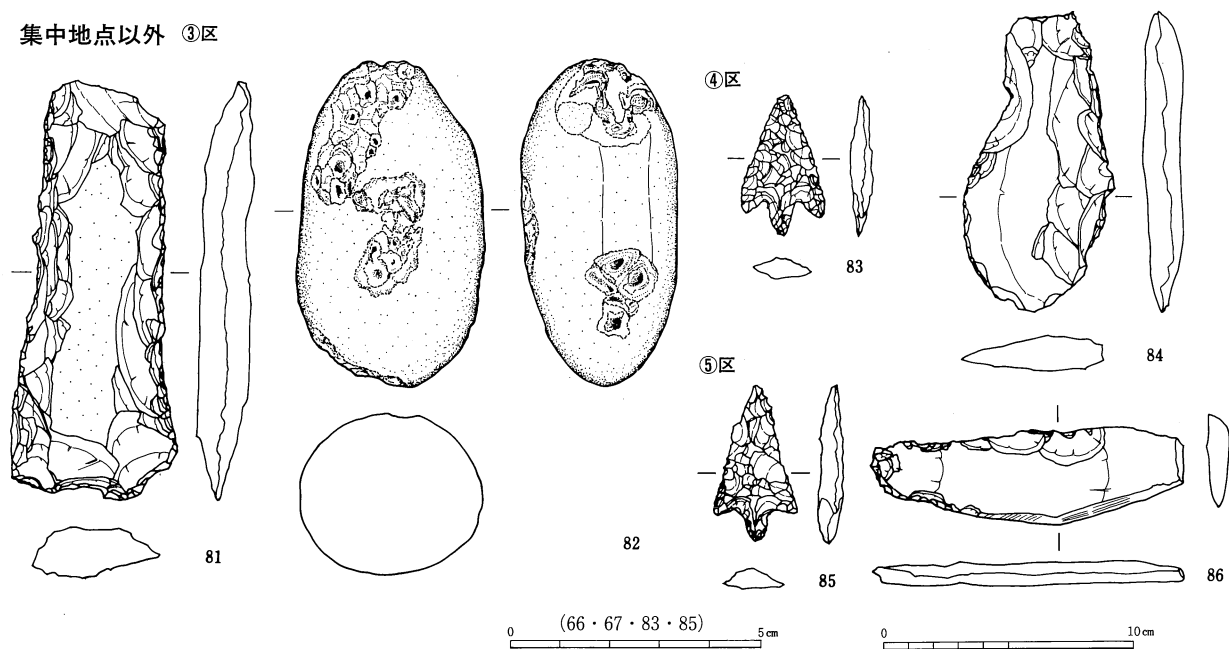


図39 VI層下面出土石器 4（屋代遺跡群③a区遺物集中地点ほか）

第3章 弥生時代後期～古墳時代(VI層上面検出)の遺構と遺物

第1節 概 観

本節ではVI層上面で検出された水田跡と、VI層を埋土にもつ遺構、および古墳時代の遺物を伴出した遺構を掲載した。遺構の広がり、以下の(a)～(c)に大きく分けられる。

- (a) 更埴条里遺跡D～J地区、屋代遺跡群①～④区の水田・水路を中心とした地区
- (b) 低地域内の微高地で、井戸跡などが見つかっている更埴条里遺跡K地区
- (c) 自然堤防の高所に位置する集落跡と北側の河川跡を含めた屋代遺跡群⑤～⑥区

掲載遺構の総数は、竪穴住居跡(SB)117軒、掘立柱建物(ST)6棟、溝跡(SD)72条、土坑139基、水田跡1面である。

弥生5～古墳1期 屋代遺跡群⑤区に集落が形成される。水田域では水路・遺物ともに前時期より少なくなる。一部で水田が営まれていたものと考えられる。

古墳2～3期 屋代遺跡群⑤区では、竪穴住居内(SB5039)に礫敷遺構が作られるなど、集落内での祭祀遺構が出現する。また、更埴条里遺跡K地区では井戸が見つかり、近辺に集落が形成された可能性を示している。屋代遺跡群①区には、自然堤防全域を潤す基幹水路SD258が掘削され、大規模な水田開発が始まったと考えられる。

古墳4～6期 屋代遺跡群⑤区の集落が発展をとげ、玉類などを多く出土した大型住居が見られる。また、集落内の礫敷遺構(SH5001)、集落北側の河川斜面の導水・礫堤を伴う遺構(SD7068・SX7038)などの祭祀施設が充実してくる。更埴条里遺跡D～G地区には水路が新設され、屋代遺跡群①～④区では水田跡が見つかるなど、水田域の拡大がうかがえる。水田域と集落域の間に位置する屋代遺跡群④区では、平行する溝が数条見つかり、畠跡の可能性が考えられる。

古墳7・8期 屋代遺跡群⑤区の集落は継続する。水田跡は②区の断面観察で畦畔らしき高まりを確認したものの、時期は特定できていない。

以下、(a)(b)(c)の地区ごとに遺構と遺物出土状況を記述し、個々の遺物については主として素材別に説明を加える。

第2節 水田域の遺構と遺物出土状況

1 概要

水田域の範囲 水田域で取り上げる地区は、VI層の確認されなかったA～C地区、水田遺構や関連する溝跡が確認されていないK地区の微高地を除く更埴条里遺跡全域、および、水田遺構が確認された屋代遺跡群①～④区である。屋代遺跡群④区では、④a・b区を北流した水路が、自然堤防の高所にさしかかった地点で東へ屈曲する場所があり、それ以北を自然堤防上の集落域として扱っている。

主な遺構・遺物出土状況 ほとんどの地区で水田跡や畦畔状遺構が見つかっている。また、水田が確認されなかった地区でも水路と考えられる溝が検出されており、水田が存在していたと考えられる。水路から、小型丸底壺・ミニチュア土器、あるいは勾玉など祭祀に関連すると思われる遺物がまとまって出土しているほか、水田面や畦畔からも小型丸底壺、管玉などが見つかっている。

2 遺構各説

(1) 水田跡

① 更埴条里遺跡（BK S） E・F地区 畦畔状遺構（図41・42、PL11）

検出：更埴条里遺跡の古墳水田は、条里水田の耕作で削平されており残存していない。ただし、E・F地区のVII層上面で酸化鉄・酸化マンガンが帯状に集積する状態を平面的に確認した。この「帯状集積」は直線的に延び、区画が想定されたため、畦畔の下部（痕跡）と認定した。本報文では畦畔状遺構と呼称する。

遺構の状況：帯状集積のなかには、わずかに高まりを持ち、擬似畦畔B（斎野ほか1987）と見られる部分がある。集積の幅は20～100cmで、方向はSC423が異なるが、座標北から22～26°ほど西に振れており、条里水田と方向を異にする。なお、屋代遺跡群の古墳水田とは若干ズレがあるが、基本的には一致する。

区画：F地区のSC513・514・515とそれに交差するSC519が比較的良好に検出された。交差部分は溝状（SD514）をなしており、区画の基準となっていたと考えられる。これらを基準とすると、南北275～331m・東西223～233mの規模で、北西～南東方向に長軸をもつ長方形の区画を想定できる。屋代遺跡群の水田跡と比べて区画が大きい。

水田域：E・F地区全域。少なくともVI層の確認できるD地区までの広がりがあったと考えられる。

標高と傾斜：E・F地区の地形は、北西から南東方向へ緩やかに傾斜し検出面での比高は約20cmを測る。畦畔はこの傾斜に平行もしくは直交する方向で配置されている。なお、等高線に平行する畦畔に見られる途切れる部分は水口と推定できる。畦畔の痕跡であるため、水田面の標高、および区画内での比高差は不明である。

土層断面の状況：VII層全体に酸化鉄・酸化マンガンの斑紋集積がある。詳細に観察すると、密集する部分がVII層上部と下部にあり、集積の盛り上がり確認された。これは、VI層に作られた古墳水田の畦畔芯央部の集積が沈着した結果であろう。

出土遺物：なし。

② 屋代遺跡群（BYS） ①・②区水田跡（図46～48、54、PL12、巻頭2）

被覆層と水田の検出状況：古墳水田層に相当するVI層は、①区では基本的に耕作土（VI-Y1-1層）と母材層（VI-Y1-2層）に分層され、畦畔はVI-Y1-2層が盛り上がる。VI層上面には、①区SD258付近と②区SD2381付近に被覆砂層の堆積がある（図54中央）。2地点とも溝（水路）に近接しており、小規模な洪水による被覆砂層の可能性が強い。その結果、畦畔の残存状況が比較的良好であった。また、砂層によって被覆されている地点では、耕作土も残存している。これに対し、砂層のない地点では上層からの影響を受けており、耕作土が捉えにくく、水田面を特定することが困難である。調査では、耕作土上部まで剥ぎ平面精査を行ったが、耕作土が残存しない地点では畦畔は検出できなかった。

水田域：畦畔の検出範囲から、①・②区の全域が水田域として考えられる。

水田土壌：VI層の堆積は、ほぼ全域に及んでおり、畦畔が検出された①f区から②区にかけては上層と下層に分層できる。②b区（図54上）の土層断面では、畦畔はVI-Y2-7（母材層）が盛り上がり、母材層直上にVI-Y2-6層（耕作土）が認められる。耕作土は暗灰褐色、母材層は黒褐色土で、色調で区別できるが土

質はかなり酷似する。VI-Y2-6層は、本来、黒褐色である母材層が灰色化した層と考えられる。なお、図54上の土層断面ではVI-Y2-6層上部に複数の薄い黒色層があり、畦畔状に盛り上がる箇所が見られる。被覆砂層がないため洪水との前後関係は不明であるが、部分的に畦畔をつくり直した形跡であろう。

水田域の傾斜：発掘調査に伴う排土の土圧による不等沈下によって、②区北端は傾斜を正確に捉えられないが、等高線からすると、ほぼ中央に位置するSD2270以南は、SD258の西端付近が最も高く、西から東にかけて傾斜する。一方、SD2270以北の地形は、SD2381付近が最も高く、北東に向かい傾斜する。このように、②区ではほぼ中央部を境に南北の傾斜が異なり、水路の可能性のあるSD258とSD2381は地形が最も高まる地点に位置する。

畦の走向と水田区画（図146）：SD258付近から北側は、広範囲にわたって水田の畦畔が確認された。畦畔から想定される水田一筆は、形状と規模が一定ではないが、等高線に沿って基軸となる畦畔が配置されており、規則性をもった小区画水田が展開していたことがわかる。なお、水田区画のなかには、極めて細長い区画がある。これは本来内部を細分する畦畔が存在していたと考えられる。さらに、②区南側には小畦と同軸の「L」字状の畦畔がある。規則的に大畦に相当すると考えられ、交差部分に水口をもつ構造である。また、SD258・SD2381は大畦・小畦と主軸が一致し、SD2270は位置的に大畦の下部施設に相当する。したがって、大畦とこれら水路により大区画が形成されていたと推定される。なおSD258、2381は大畦を付設した水路と考えられる。②区の水路と畦畔の多くは、N55°WおよびN36°Eの方向で、主軸は座標北から40°ほど東に振れている。しかし、①f区SD258と周辺の畦畔は、ほぼ東西南北を向き、両者の主軸方向には30°ほどのズレが見られる。このズレは、VI層上面の傾斜に起因しており、水田区画が微地形（地形の傾斜）を利用して形成されていたことを物語っている。

畦畔：②区の北西部と、①区のSD258付近の畦畔で盛り上がり確認されたにすぎないが、60～70cm（下端）・30～60cm（上端）で、6cm程度高まる状況であった。なお、盛り上がりがない畦畔痕跡は、30～70cmの幅で、ばらつきがあるものの、相対的に約50cmが多く、畦畔より若干小さい傾向がある。

取配水の方法：基幹水路に想定される遺構に、①f区で東西に走るSD245・258と②i区北西隅のSD2381がある。地形の傾斜から、SD245・258は西から東に、SD2381は北東に向けて流れていたことがわかる。両遺構とも①・②区のなかで最も高い場所に設けられており、溝を覆う砂層の一部が周囲の水田跡を埋没している。この状況から、水田内へ引水する取水水路の可能性が強い。大畦下部施設に想定したSD2270は、地形の傾斜から、取水を主目的とした水路の可能性もある。なお、水口が確認されていないが、②区の水田跡はSD245・258とSD2381から取水して北東に向けて水口を媒介とした畦越し灌漑が行われていたと推定できる。

水田の面積（図148）：水田一筆が想定できる198枚を計測した。畦畔の残存状況が悪く、本来の水田一筆を示しているものが少ないため、10～40㎡とばらつきが見られた。しかし、10～20㎡が多数を占め、水田一筆の規模と捉えてよからう。

出土遺物：VI層上面およびVI層中から、古墳2～6期の遺物が出土している。図89～48は①e区SD70わき畦畔上から出土し、高杯（図89～41）や管玉（図129～170）も畦畔上であった可能性が高い。また、田面から小型丸底壺が比較的多く見つかった。

③ 屋代遺跡群（BYS） ③・④区水田跡（図49～51、PL12）

被覆層と水田の検出状況：VI層上面には明確な砂の堆積がなく、水田はVI-Y2～Y6層上面において鉄分集積による帯状の広がり、溶脱をあまり受けていない黒色土（母材層）の帯状の広がりが検出された（以下、畦畔と呼称）。

水田域：④区中央から自然堤防の高所（③区）にかけては、地形が緩やかに高まっており、ここからは畦畔が検出されていない。そのため、③区と④区中央付近までが水田域と考えられる。③区・④区ともに畦畔を検出しているが、④区ではIV層～VI層の堆積が薄くなるためはっきりとしていない。また、水路であるS D 3078-S D 3290-4046の西側において畦畔が不明瞭であった。この水路を境に東西で土地利用が異なっていた可能性がある。**水田土壌**：基本的には①・②区と同様の、VI層であるが、②区に比べ溶脱層と集積層が明瞭でない。**水田域の傾斜**：VI層上面の等高線からすると、ほぼ南北に延びるS D 3078-3290付近が最も低く、その両側が高まる地形である。畦畔はS D 3078-3290東側から検出されている。VI層上面には凹凸がある。③a区南東付近と北西隅付近が最も高く、③b区に向かい傾斜する。④区では北へ向かって高まる。

畦の走向と水田区画（図146）：ほぼ中央部には、②区のS D 2381（水路）から続き北方に延びるS D 3078-3290があり、S D 4046へつながる可能性が高い。水田面との高低差からすると、③区では排水を主目的とした水路の可能性が高い。畦畔はS D 3078ほかと主軸方向が一致し、この水路に規制されて水田区画がなされていたようである。水田区画はS D 3078ほかと③b区の大畦で大区画が形成され、内部に小区画水田が展開する。畦畔はN54°WおよびN35°Eの方向を示し、①・②区のように傾斜変換点を境に主軸がズレる状況はない。しかし、③a区の畦畔が座標北より40°ほど東に振れるのに対し、③b区の畦畔は若干座標北に戻る傾向がある。全体的に③区の水田はかなり主軸が整った区画である。水田一筆は、③b区で南北に長辺をもつ長方形の区画があるが、正方形をなす区画が多数を占める。

畦畔：水田面を覆う砂層は部分的に残り、畦畔の規模が把握できたものはごく一部である。畦畔の規模は、①・②区の畦畔とはほぼ同じ数値を示す。なお、③b区の東西畦畔のなかには、比較的規模の大きい畦畔が1条ある。高まりが残存しないため詳細な規模は不明であるが、大畦の可能性が高い。

取配水の方法：水田への取水の施設は検出されていない。しかし、地形の傾斜から水田の水はS D 3078-3290に排水されたと考えられる。これらの溝は、後世の溝に切られて残存状況が悪く、畦畔と水路の関係は明確にできないが、②区同様、大畦を付設する水路と考えられる。

水田の面積：水田一筆が想定できる88枚を計測したが、畦畔の痕跡であるため本来の面積を示しているとはいえない。全体的に12～15㎡が多数を占め、①・②区と比較して若干小さい傾向がある。

出土遺物：VI層上面より小型丸底壺やミニチュア土器（図89-4）が出土しているが、水田との関係は不明である。

（2）溝・自然流路（S D）

① 概要（図53～55、表18、PL11・12）

掲載方法 VI層が落ち込んでいる溝・自然流路、あるいはVI層下面検出の溝のうち、遺物から古墳時代と判断されたものを掲載した。時期判別の困難な例については一覧表にその旨を明記した。個別の属性は表18に記載した。個別図は原則として断面図のみを掲載し、平面図は1/500とした。

分類基準 VI層下面検出溝と同一基準を用いた。この時期のS Dはその大半が人工的な水路I群である。

概略 弥生5期～古墳1期については明確な溝がほとんど見つからない。数少ない溝の一つである屋代遺跡群S D 4530例では、導水は自然堤防上を通す弥生時代の経路を踏襲している。本格的に水路網の再編が行われるのは、古墳3期～4期である。更埴条里遺跡の低湿地では水田の方向と一致する北西→南東、あるいは南西→北東方向の水路が設置される。一方、屋代遺跡群側では、①区に本線と考えられる大規模な東西水路が掘削され、ここから扇状に幹線水路網が敷かれる。ここに、弥生時代とは全く異なった水路体系が完成し、これらの多くの水路は、現代まで受け継がれることとなる。

②溝・自然流路の変遷（個別例）

ここでも、溝一条ごとの記載は表18を参照していただき、関連性の高い溝の変遷について代表的な例を取り上げておくこととする。

更埴条里遺跡 S D 302・303（図53）

初源：S D 302溝底から小型丸底壺やミニチュア土器が出土しており、古墳4期に水田への配水のため、掘削されたものと考えられる。**他水路との関連**：S D 304溝群からの分水と見られる。このように、更埴条里遺跡では、前時代から踏襲される東西流路とそこから水田畦畔の方向に沿って斜め方向に分水される流路がセットで見られる。**上層水路**：確認されていない。少なくとも条里地割の完成以前に消滅している。

屋代遺跡群 S D 258・235溝群（図54・55）

初源：S D 258溝底出土遺物から少なくとも古墳3期には掘削が完了していたと考えられる。断面観察から、流速の速い時期と遅い時期が存在したことがわかる。また、埋没途上で、溝底をさらっている様子が窺える（図55参照）。**構造と役割**：それ以前の水路とは規模が大きく異なっている。「V」字状に深く掘削されており、それまでの浅い水路に比べ莫大な水量を有していたと考えられる。調査区内では、直接合流した水路を確認できていないが、方向から見てS D 267、S D 2381などの幹線水路への配水は本水路から行われたものと考えられる。よって屋代地区の基幹水路と捉えることができよう。**上層水路**：水田土壌に類似した堆積土が覆土中ほどに見られ、その後、同時期の洪水砂を被っている。この洪水砂堆積以後にS D 258に代わって掘削されたのがS D 235である。溝底から多量の勾玉などが出土している。この溝は遺物から5世紀代に比定されており、基幹水路が掘削し直されていたことがわかる。その後、この地区に集落の形成される8世紀末まで、水路は小規模ながら継承されてゆく。

屋代遺跡群 S D 2381-3078-3290-4046溝群（図54・55）

初源：遺物が少なく限定はできない。ただし、5世紀代の水田畦畔に沿っており、その時期には完成していたと考えられる。**構造と役割**：本線であるS D 258から分水し、自然堤防側の水田への給水を担った幹線水路と考えられる。この経路は弥生時代の水路網とは大きく異なっている。**上層水路**：条里水田に対応する溝まで踏襲される。

以上、古墳時代に再編された水路網は、屋代遺跡群側では古代の条里水田、あるいは現代の水路網へと踏襲されている。これに対し、更埴条里遺跡側では古代において再度、水路網の編成替えが行われる。

(3) 土 坑 (SK)（図55、表17）

水田域からは2基が見つかっている。いずれも単独である。S K 5109からは底部穿孔の土器（図89-30）、S K 7214からは小型丸底壺（31）が出土している。性格は不明である。

参考文献

斎野裕彦ほか 1987『富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市教育委員会

第3節 更埴条里遺跡微高地（K地区）の遺構と遺物出土状況

1 概要

更埴条里遺跡と屋代遺跡群の低地部には、手の指状に微高地が張り出している。その大半が古墳時代には水田化しているが、この地区では水田は検出されず井戸などが見つかっている。また、遺物の説明は第5節にまとめて記載した。

2 遺構各説

(1) 掘立柱建物跡 S T 926 (図56)

遺構属性：一覧表。**時期認定：**VII層上面で検出されているが、柱穴埋土からは判断できない。ただし、古墳時代中期以降明確となる黒色化した土が含まれておらず、それ以前に掘られた可能性が高い。調査時には1間×1間としたが、VII層上面検出のピットを拾うと1間×2間の可能性もでてくる。**遺物出土状況：**明確に伴う遺物は確認されていない。しかし、この付近には弥生時代の遺物はなく、古墳2期～4期にかけての遺物が見られる。特に、1間×2間とした場合、その平面形中に入ってくるS K 9426から古墳2・3期の遺物がまとまって出土している。このS K自体は古代の覆土を有しているが、本来S T関連の遺物であったものが流れ込んだ可能性もある。

(2) 井戸跡 S K 9512 (図56、P L 13)

位置と残存状況：本調査区内の高所である北西隅に位置する。遺構は、排水用のトレンチによって削られているが、底部の残存状況はよい。**形状・規模：**一覧表参照。**覆土：**8層に分層され、ブロック状の土を多く含むため人為的埋め戻しと考えられる。**出土遺物：**古墳3期の土器が井戸底面と埋土中層に分かれ一括廃棄されている。また、さらに上層の4層からは炭化物とともに土器片が多く出土している。こうした状況から、井戸の廃棄に伴い何らかの祭祀行為がなされた可能性がある。

第4節 集落域および旧河道域の遺構と遺物出土状況

1 概要

縄文中期後葉以降約2,200年間の断絶を経て、屋代遺跡群の⑤区に再び集落が形成されるのは弥生5期に下る。弥生の遺構は竪穴住居跡(SB)3軒(内1軒は古墳時代までの幅を持つ)、土坑8基でありいずれもかなり分散している。古墳時代になると住居跡の数は106軒(内10軒は古代までの幅をもつ)、溝跡15本、土坑・井戸跡52基となり⑤区の全域に拡大する。この他に弥生～古墳とした土坑が76基、溝跡が2本に上る。集落の南限は土口バイパスライン(④f・g区)のやや南であるが、東西は調査区外にも遺構が続いていく。特に⑤区北東側は古墳中～後期の遺構が密集しており、さらに東側に連続する可能性が高い。

古墳時代は出土土器から1～8期に大別される。土器型式から段階が確定した住居の数は、古墳1期が

9軒、2期0軒、3期0軒、4期6軒、5期9軒、6期9軒、7期4軒、8期7軒で、その他52軒は中期を中心にした時期、10軒は古代まで下る可能性を有するもので、出土土器の検討からは確定し得なかった。集落構造としては古墳1期が前期の、5期が中期の、8期が後期のピークとなる。

集落の北側には4m以上の崖があり、その崖の途中で祭祀遺構が検出された。崖の下には西から東の流れが推定される河道が確認されている。

2 遺構各説

遺構の概要は表15に示した。ただし遺構の構造および廃絶の状況が複雑であるため、説明を簡略化できないものについては、ここで番号順に解説を加えることにする。

(1) 竪穴住居跡 (SB)

SB5009a・b (図68、PL14)

本住居跡の埋土の状況は不明である。ただし貼床とカマドおよび炉、柱穴の配置から最低2段階の変遷がたどれる。新しい方を5009a、古い方を5009bとし、別住居として記載する。

SB5009a 構造：西壁面中央にカマドの片袖のみが残存し、その北側に焼土・炭化物の詰まったP16が検出されている。4本の主柱穴はいずれも厚さ10cm程度の礎盤を有し、特にP23にはぐり石が残存する。中央部にはVII層を固めたと推測される厚さ約2cmの堅緻な貼床がみられる。**床下ピット：**この貼床下からは焼土や灰を伴う炭化物の詰まったピットが8基検出された。**遺物：**埋土中出土遺物は白玉9点と管玉の未製品を含むものの極めて少ない。**時期：**埋土中出土土器から古墳6期と認定される。

SB5009b 構造：上記のピット検出面から約10cm下の部分的な貼床を、5009bの床面として認定した。やや北より主柱穴の可能性が高いP36・P39とP38・P42の間からこの床面に対応する地床炉が検出された。検出レベルから推測したこの段階に相当するピットは17基。柱穴の位置からは、この段階の住居跡のプランは第1段階とは異なる可能性も否めない。**遺物：**本住居跡の床面出土遺物は白玉1点のみである。**時期：**地床炉を有することからSB5009aよりもかなり時期が遡る可能性がある。

SB5039 (図70、PL14)

同一プランで2段階の変遷を追うことができる。以下新しい方から順に第1段階・第2段階とする。

第1段階 灰・炭化物の堆積：VII層を固めた貼床を有する。西側全域では貼床直上に1cmほどの厚さで純粋な灰が堆積している。南壁東よりに強く被熱した火床面がみられ、灰と炭化物に覆われている。埋土2層は灰と土が何回も交互に投棄されたことによって形成されたと推定される。1・2層の層理面には約5mmの厚さで炭化物が廃棄されている。**遺物：**埋土1層からは白玉類、炉の炭化物・灰中から土器No.2・3が出土している。第1・2段階床面の間には2～4cmの砂質シルトの間層が入る。

第2段階 灰と礫集中：第2段階の床面は第1段階の床面と同様に灰によって覆われている。本段階の特徴は、南西コーナー灰下と東壁際に0.5～10cm大の川原石903点、合計15.85kgを敷き詰めた礫集中部分が見られることである。前者には北側のP2と南側の炭化物集中が伴う。ただしP1は炭化物および礫の下から検出されており更に前の段階に属する。**遺物：**西側周溝脇の土器No.1、土玉、石No.1である。本住居跡の時期は第1段階が5世紀、第2段階が土器No.1などから古墳2～3期と認定される。

SB5054 (図71、PL14)

カマド：長胴甕(135)中に埴形土器(130)が入り、その上に鉢(133)が載った状態の一群がカマド左袖の芯材となっている。本住居跡では杯E2類の出土は無いものの、130の器形、133の形態が古墳7期に類

第3章 弥生時代後期～古墳時代（VI層上面検出）の遺構と遺物

根拠：「土」は土器による時期比定、「切」は切り合い関係による。

遺構記号	番号	旧遺構名・番号	時期	実年代比定	根拠	大地区	中地区	図番号	平面形	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	床面積(m ²)	炉・カマド	炉・カマド位置	柱穴(主柱穴)数	付属施設・掘方	カマド構築材
SB	4814		古墳4期～6期	5C前～6C初頭	土切	I	R21	57	—	(N33°E)	—	—	0.2	—	—	—	1	掘方のみ	—
SB	4815		古墳6期以前	6C初頭以前	切	I	R22	57	—	(N53°W)	—	—	0.25	—	—	—	—	掘方のみ	—
SB	4820		古墳8期(新相)	6C末～7C初	土切	I	R21・22、W2	57	—	N42°E	—	(3.0)	0.35	—	K1	西壁中央	—	掘方のみ	土
SB	4823		古墳6期	5C末～6C初頭	切	I	R22	57	—	N60°W	3.5	—	0.15	—	—	—	3	掘方のみ	—
SB	4829		古代0期以前	7C前以前	切	I	R21	57	—	(N25°W)	—	—	0.2	—	—	—	—	なし	—
SB	5009a	SB5009	古墳6期	5C末～6C初	土切	I	S7・8・12	57・63・68	隅丸長方形	N56°W	(7.30)	6.1	—	40.1	K1	西壁中央	10(4)	床下炭化鏡、土坑。床下ピット8基	—
SB	5009b	SB5009	古墳6期以前	5C末～6C初以前	切	I	S7・8・12	63・68	—	—	—	—	—	—	F1	P36・38間中央東より	17	掘方のみ	—
SB	5014	SB5014・SB5015	古墳4期(新相)～6期(古相)	5C中～5C末	土切	I	O1	66・69	方形	N2°E	(5.25)	(4.53)	0.55	(21.3)	F1	北壁中央西より	10(4)	掘方。東に張出部	—
SB	5032a		古墳7期～古代4期	6C前～8C後	土切	I	N14・19	65・69	方形	N116°E	(4.35)	(4.05)	0.35	(15.3)	K1	東壁南より	1	なし	—
SB	5032b		古墳7期～古代4期	6C前～8C後	土切	I	N14・19	65・69	長方形	N23°E	(6.10)	(4.67)	0.30	(24.0)	—	—	3	掘方なし	—
SB	5039		第1床：5世紀 第2床：古墳2～3期	4C前～5世紀	土切	I	O1・2・7	66・70	—	N33°E	7.05	—	第1床：0.45・ 第2床：0.50・ (第3床：0.75)	— — —	F1 — —	南壁東より — —	第1床：掘方。東壁敷設。西壁敷設。周溝。 第2床：— 第3床：—	— — —	
SB	5042		古墳7期	6C前～中	土切	I	O7・12	66・69	—	N79°W	(6.51)	—	0.10	—	K1	西壁中央	2(1)	掘方不明	地山・粘土
SB	5047		古墳6期(古相)	5C末	土切	I	S16・17・21	62・70	長方形	N53°W	(6.20)	6.07	0.10	(34.94)	K1	西壁中央	6	掘方。あみ周溝。柱支脚	粘土
SB	5049		古墳7期～古代2期	6C前～8C前	切	I	O12	66	—	—	—	—	—	K1	北壁西より	—	掘方不明	—	
SB	5050		古墳1期～6期	3C後～6C初	切	I	S16・17	62	—	N50°W	(3.20)	—	0.15	—	—	—	—	掘方不明	—
SB	5054		古墳7期	6C前～中	土切	I	O16・21 N20・25	65・71	方形	N18°W	—	(5.52)	0.30	(26.7)	K1	北壁中央	6(4)	掘方不明	土器・土
SB	5062	SB5062・SB5070	古墳6期	5C末～6C初	土切	I	N10・15	65・66・71	—	N15°W	5.30	—	0.15	—	—	—	4(2)	掘方のみ	—
SB	5069	SB5069・SB5007	古墳7期(古相)	6C前～6C中	土切	I	O6・11	66・71	—	N17°E	—	(5.23)	0.30	—	K1	北壁中央	3(2)	掘方なし。カマド前に灰捨土坑	—
SB	5075		古墳7期～古代2期以降	6C前～8C前以降	切	I	O12	66	—	N26°E	—	—	0.20	—	—	—	—	掘方なし	—
SB	5088		古墳4期	5C前	土切	I	N22、S2	67・72	方形	N22°E	(3.57)	3.37	0.13	(11.01)	K1?	北壁中央	2	掘方。床下ピット3基	—
SB	5094		古墳5期	5C中～5C後	土切	I	O6・11・16、N20	65・66・72	—	N22°E	(6.98)	—	0.13	—	F2	F1:床下、P2中央西より F2:床下、P7・P10西壁より	11(4)	掘方。床下ピット7基	—
SB	5097		古墳8期(古相)	6C後	土切	I	O6、N10・15	65・66・73	—	N57°W	6.95	—	0.30	—	K1	西壁中央	10(3)	掘方不明	地山を残して石を入れ、上に粘土を貼る。
SB	5102		古墳7期～8期	6C前～7C初	土切	I	N19・24	65	—	N1°E	(6.45)	—	0.25	—	(K1)	(北壁中央)	9(6)	掘方なし	—
SB	5111		古墳3期～4期	4C後～5C前	土切	I	O16	65	—	(N54°W)	—	—	—	—	—	—	—	掘方不明	—
SB	5112		古墳4期	5C前	土切	I	S10	64・72	—	N73°W	—	—	0.45	—	—	—	2(1本に柱痕あり)	—	—
SB	5113		古墳1期(古相)	3C後	土切	I	S11・12	63・74	長方形	N51°W	(6.70)	5.03	0.23	(30.5)	F2	F1:P1・P7間中央 F2:P1・P7間壁より	10(3)	掘方のみ	—

表15- (1) 弥生時代後期～

第4節 集落域および旧河道域の遺構と遺物出土状況

特徴	色調	土色帳記号	埋土の特徴	遺物出土状況	遺物	遺物図	切合関係(古)	切合関係(新)
堅固な床	黒褐色	10YR2/3	1層	床面・埋土とも少ない	土器・石器	91	—	SB4813・SB4820
堅固な床	黒褐色～明褐色	10YR3/2～3/4	2層	床面にはコモ編み石8点のみ、埋土中ほとんどなし	石	—	—	SB4813・SB4817・SB4818・SB4823
堅固な床	暗褐色～にぶい黄褐色	10YR3/4～4/3	4層(カマド炊口に床面焼土)	カマド崩落土中、カマド南側床面に破片	土器・石器	91	SB4813・SB4814	SB4818・SK4843
堅固な貼床	にぶい黄褐色	10YR4/3	1層	床面なし、埋土中少ない	土器	—	SB4815	SB4813・SB4815・SB4821・SB4827
床面軟弱	暗褐色～褐色	10YR3/3～4/4	2層	—	—	—	—	—
堅固な貼床	—	—	不明	埋土中少ない	土器・石器・玉	91	—	SB5008・SB5120・SB5151
堅固な貼床	—	—	不明	埋土中少ない	土器・石器・玉	91	—	SB5009A
北東隅に支柱穴2基あり、建て替えか?。南側床直に焼土と炭化物が投棄	暗褐色～黒褐色	10YR3/3～3/2	3層(カーボン粒多量混入)	床面・埋土中層ともに破片が多い	土器・骨	91	—	SB5013・SB5159・SK5220・SD5007
カマドは破壊され、焼土中に土器散在	褐色～にぶい褐色	10YR4/4～5/4	4層(焼土炭化物全体に広がっている)	床面南西隅に高杯など	土器	—	SB5032B・SK5052	SB5003・SB5065・SB5141
—	褐色	10YR4/4	1層	—	—	—	—	SB5003・SB5065・SB5141・SK5052
1床から2床の変遷が追え、3床も可能性あり。1床・2床ともに堅固な床面	灰黄褐色～褐色	10YR4/2～4/4	4層(2回の床使用後、人為的埋め戻しによって1・2層が堆積。1・2・3・4層理面には、灰が堆積)	埋土1層から玉類。第2床面南側に器台。第3床面西側に甕	土器・玉・骨	92	SB5157・SB5160・SB5162	SD5007
床面はカマドの周辺のみ堅固。カマドは天井が落ちている	にぶい黄褐色	10YR4/3	1層(人為的埋め戻しととれる)	カマド焼土中に土器片集中。カマド支脚に土器底部、床面土器片ややあり	土器・石器・玉・骨	92	SB5117・SB5157・SB5160・SK5062	SK5054
床は壁際深く土俵状。カマド上部の破壊土が全面に広がり、中に土器が投棄されている	褐灰色～黄橙色	10YR6/1～7/8	2層(床面、カマド面に焼土)	カマド破壊土中床面から土器・石器多数出土。埋土中は少ない	土器・石器	92・93	—	SB5004・SB5045・SD5002・ST5002・S16P2
煙道のみ。床、火床付近は堅固	にぶい黄褐色	10YR4/3	不明(煙道のみにつき)	カマド前方床面にあり。埋土中遺物少ない	土器	—	SB5042	SB5075・SD5006
—	にぶい黄褐色	10YR5/4	1層	床面・埋土中とも少ない	土器	—	—	SB5014・SB5045
カマド左袖(芯材)に長胴甕と埴形土器・鉢。脇に杯が正置	黒褐色～灰黄褐色	10YR3/2～4/2	1層	カマド西側床面に台付甕など	土器・石器・玉	93	SB5195	SB5053・SB5055・SB5101・SK5265・SK5294・SK5312・SK5341
焼失住居。床は堅固	暗褐色～明赤褐色	10YR3/3～5/6	2層(地山の黄色シルトで埋め戻している)	甕(138)は、床面出土。2層下部に遺物多い	剣形模造品・土器・玉・鉄滓・骨	93	—	SB5006・SB5097・SB5134・SK5263
第2層に灰が集中廃棄。	黒褐色～褐色	10YR3/2～4/4	3層(2層は特に灰の集中する層)	カマド破壊土中に、土器破片散在	土器・石器・玉・骨	93	SB5136	SB5005・SB5056・SB5073・SB5074・SB5081・SB5097・SB5098・SB5115・SD5010・O11P1
床軟弱で一般住居でない可能性あり	にぶい黄褐色	10YR4/3	1層	床面なし。埋土中少ない	土器	—	SB5049・SB5136	SB5169
カマドは破壊された上、古代の住居に切られている	褐色	10YR4/4	1層(人為的埋没)	カマド破壊土中床面に土器。埋土中央部に土器破片集中	土器・石器	94	SB5145	SB5079・SB5096
西壁際の炉は、カマドの可能性あり。その北側に異常に堅硬	黒褐色～灰黄褐色	10YR3/2～4/2	1層	炉周辺の床面に土器。床下に土器多い	土器・石器・玉・鉄・骨	94	SB5174・SK5255・SK5256・SD5020	SB5056・SB5057・SB5069・SB5073・SB5092・SB5136・SB5181・SK5092・SK5194・SK5195・SK5222・SK5240・SK5261・SD5011
カマドは住居廃棄後に天井が落ち、その上に焼土・炭化物が堆積し、破壊された状態	暗褐色～にぶい黄褐色	10 YR 3 / 4 ~4/3	6層(東側は埋め戻し)	住居廃絶時にカマド東側に土器を遺棄し、VII層で埋め戻している。カマド破壊土中にも土器が潰された状態で集中	土器・石器・玉・骨	94・95	SB5062・SB5068・SB5136・SB5158・SK5094・SK5231・SK5272・SK5274・SK5279・SD5019・ST5011P4	SB5073・SB5074・SK5127・SK5128・SK5129・SD5009・SD5010
—	暗褐色	10YR3/3	1層	埋土中少ない	土器・石器・玉	95	SB5190・SK5300・SK5353・SK5354・SK5355・SK5357	SB5119・SK5308・SK5313・SK5336・SD5004
—	暗褐色	10YR2/3	1層	埋土中少ない	土器・石器	95	—	SB5109
—	黒褐色～暗灰黄色	10YR3/1～2.5Y4/2	5層(自然埋没)	床面に、壺(190)と甕(191)	土器・石器	96	—	SB5178・SK5154
床は中央部が高い。貼床上検出の炉は有段口縁壺の口縁部を切断して、埋甕炉として使用。貼床下の炉は地床	灰褐色～にぶい黄褐色	10YR5/1～6/4	2層	床面南壁際に土器破片集中	土器・石器	96	—	SB5114・SD5002

古墳時代 堅穴住居跡(SB)一覽

第3章 弥生時代後期～古墳時代（VI層上面検出）の遺構と遺物

遺構記号	番号	旧遺構名・番号	時期	実年代比定	根拠	中地区	図番号	平面形	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	炉・カマド数	炉・カマド位置	柱穴 (付属施設・掘方)	柱穴 (付属施設・掘方)	カマド構
SB	5116		古墳1期(古相)	3C後	土切	S16・17・22	62・74	長方形	N48°W	6.40	4.90	0.40	29.06	F2	F1:P3東より F2:P1南	11(1)	掘方。床下北壁溝状遺構あり	-
SB	5117		古墳5期～6期	5C中～6C初	土切	O6・7	72	-	N57°W	-	3.37	0.15	-	-	-	2(何れも柱あり)	掘方のみ	-
SB	5118		古墳4期～6期	5C前～6C初	土切	N10	66	-	(N18°W)	(6.10)	-	0.20	-	-	-	7(4)	掘方不明	-
SB	5121		古墳1期	3C後	土切	S19	63・73	-	N35°E	(4.34)	-	0.15	-	-	-	-	掘方不明	-
SB	5124		古墳1期	3C後	土切	S18・23	62・63・74	長方形	N23°E	(4.10)	(3.85)	0.30	(15.2)	-	-	3(2)	掘方なし	-
SB	5125		弥生5期～古墳1期	弥生後期後半～3C後	土切	S14・19	63	-	-	-	-	-	-	F1	北より	-	掘方のみ	-
SB	5132		古墳4期～6期	5C前～6C初	切	N9・10	66	-	(N24°E)	-	(2.70)	0.25	-	-	-	-	掘方不明	-
SB	5136		古墳5期	5C中～5C後	土切	O6・7・11・12	75	隅丸方形	N56°W	9.75	9.30	0.30	(44.2)	K1、F1	K1:南東壁中央 F1:南東壁中央	16(4)	掘方のみ	粘土
SB	5142		古墳1期	3C後	土切	N19・23・24	65・74	-	(N19°E)	-	-	0.15	-	-	-	-	掘方なし	-
SB	5143	SB5143・SB5139	古墳4期	5C前	土切	N18・19・23・24	65・76	-	N22°E	(7.15)	-	0.10	-	-	-	2	掘方のみ	-
SB	5145		古墳1期	3C後	土切	N22	76	-	N67°W	(4.17)	-	0.30	-	-	-	9(4)	掘方なし。炭化物・灰捨ビット4	-
SB	5147		古墳4期(新相)～6期(古相)	5C中～6C初	土切	N10、O6	66	-	(N62°W)	-	-	0.13	-	F1	中央北より	-	掘方不明	-
SB	5148		弥生5期	3C前	土切	S11・16、R15・20	62・76	-	(N38°E)	-	-	0.50	-	-	-	2	掘方あり	-
SB	5152	SB5152・SB5154	古墳6期	5C末～6C初	土切	S1	67・76	-	N99°E	3.50	-	0.15	-	K1	東壁中央	2	掘方なし	粘土
SB	5153		古墳6期以降	5C末以降	土切	S1	67	-	N16°E	(4.85)	-	-	-	-	-	-	掘方なし	-
SB	5156		古墳1期	3C後	土切	S13	63・76	-	N30°E	5.15	-	0.32	-	F1	P7東より	8(4)	-	-
SB	5157		古墳1期～2期	3C後～4C前	土切	O1・2・6・7	66	-	N25°E	4.75	-	0.2	-	-	-	2	掘方なし	-
SB	5158		弥生5期	弥生後期後半	土切	N10、O6	66	-	(N62°W)	-	-	0.05	-	-	-	-	掘方あり	-
SB	5160		古墳1期～2期(古相)	3C後～4C前	土切	O2・7	66	-	(N62°W)	-	-	-	-	-	-	5	掘方。粘土の貯蔵穴あり	-
SB	5162		古墳1期～2期	3C後～4C前	土切	O7	66	-	(N10°W)	-	-	-	-	-	-	-	掘方なし	-
SB	5166		古墳7期～8期	6C前～7C初	土切	S14	63	-	(N72°W)	-	-	0.15	-	-	-	5	掘方不明	-
SB	5167	SB5167・SB5131	古墳4期(新相)～6期(古相)	5C前～6C初	土切	N10	66	-	(N28°E)	-	-	0.15	-	-	-	-	掘方不明	-
SB	5168		古墳4期～古代2期	5C前～8C前	土切	N23	64	-	(N72°W)	-	-	0.1	-	-	-	-	掘方不明	-
SB	5169		古墳4期～6期	5C前～6C初	土切	O12	66	-	(N10°E)	-	-	0.15	-	-	-	-	掘方なし	-
SB	5170		古墳5期～6期	5C中～6C初	土切	O12	66	-	(N9°E)	-	-	0.10	-	-	-	1(1)	掘方なし	-
SB	5172		古墳4期	5C前	土切	N15・20、O16	65・77	-	(N41°W)	-	-	0.22	-	-	-	4(2)	掘方のみ	-
SB	5178		古墳7期	6C前～6C中	土切	S9・10	64・77	-	(N35°E)	-	-	0.25	-	F1	P2西より	2	掘方(平面的に掘り下げている)	-
SB	5179		古墳6期～古墳8期	5C末～7C初	土切	S3	64	-	(N33°E)	-	-	0.22	-	-	-	3	掘方。浅い掘り込み	-
SB	5180		古墳7期以前	6C前～6C中以降	土切	S9	64	-	(N86°E)	-	-	-	-	-	-	-	掘方なし	-
SB	5181		古墳4期以前	5C前以前	切	O16	65	-	(N21°E)	-	-	0.20	-	-	-	1	不明。南壁際に凹溝	-
SB	5182		古墳4期～6期	5C前～6C初	切	O16・21	65・77	-	N24°E	(4.30)	-	0.35	-	-	-	4(2)	掘方不明	-
SB	5183		古墳4期	5C前	土切	O16・21	65	-	(N18°E)	-	-	0.15	-	-	-	-	掘方不明	-

表15-(2) 弥生時代後期～

第4節 集落域および旧河道域の遺構と遺物出土状況

特徴	色調	土色帳記号	埋土の特徴	遺物出土状況	遺物	遺物図	切合関係(古)	切合関係(新)
炉1の周辺に部分的な貼床。貼床の下に炉2	黒褐色～灰黄褐色	10YR3/1～10YR5/2	4層(自然埋没)	床面南壁際に土器破片集中	土器・石器	96	—	SB5004・SB5040・SB5045・SB5050・SK5064・SK5087・SD5012・ST5002P3
住居中央西寄りに焼土と灰の投棄が見られ、炉の可能性あり	暗褐色	10YR3/4	1層(人為的埋没の可能性あり)	西壁際、床面に土器破片	土器	97	SK5229-1・SK5236・SD5020	SB5042
中央やや西よりに、焼土集中	黄褐色	10YR4/3	4層	焼土集中部に散在	土器・石器・骨	97	SB5132・SB5167	SB5036・SB5163・SB5171・SK5262
床面に灰。埋土に炭化物集中	にぶい黄褐色～黒色炭層	10YR5/3	1層(人為的埋没の可能性あり)	床面から器台など。埋土上層に破片多い	土器	97	—	SB5024・SK5014・SK5019・SK5028・SK5102・SK5103・SK5106・SK5115
中央に焼土の混じった炭層(2層)	褐灰色～にぶい黄褐色	10YR4/1～5/3	3層	床面に潰れた状態で土器2個体。埋土上層に破片多い	土器・骨	97	—	SB5029P1・SB5123
堅固な貼床	灰褐色	10YR5/2	1層	埋土中少ない	土器	97	—	SB5121・SB5126・SB5128
—	—	—	1層	床面に土器破片やや多い	石器・玉・鉄	—	SB5167	SB5037・SB5171
堅固な貼床	暗オリーブ褐色～黄褐色	2.5Y3/3～5/4	3層	カマド破壊土中に完形土器集中。埋土・床面ともに遺物多い。床下に玉類多い	土器・石器・玉・鉄・骨	97・98	SB5075・SK5179・SD5020	SB5042・SB5069・SB5097・SB5117・SB5135・SB5177・SK5195・SD5010
床は軟弱	褐灰色	10YR4/1	1層	床面に土器3点など。埋土下層に土器片	土器	99	—	SB5143・SK5038・SD5004・ST5014P1・ST5014P2・ST5014P3
堅固な貼床	—	—	1層	東壁埋土下部に土器片。埋土中は少ない。東側壁際床面に少量	土器・骨	99	SB5142	SB5033・SB5058・SB5059・SB5140・SB5141・SK5038・SK5252・SD5004
堅固な貼床	暗褐色	10YR3/4	1層(床面上面に灰が広がる)	床面土器2点と石3点。床面やや上に土器集中	土器・石器	—	—	SB5079・SB5080・SB5088・SK5152-1・SD5002
地床炉あり	暗灰黄色～黄褐色	2.5Y4/2～5/3	1層(床面上に2cm厚の炭化物が全域にかぶる)	床・埋土中ともに少ない	土器	99	SB5158・SK5231・SD5019	SB5013・SB5037・SB5044・SB5069・SB5097
—	明黄褐色～黒褐色	10YR7/6～3/1	6層(自然埋没)	床面南壁際に土器破片	土器・石器	99	—	SD5016
左カマド袖は切られる。支脚石が右袖上から検出。P3、P4には焼土30%、灰40%つまる	にぶい黄褐色	10YR4/3	1層	カマド焼土内に破片集中	土器	99	SK5334・SK5335	SB5151・SB5153・SK5202・SD5002
床軟弱で柱も不明のため、住居の可能性低い	—	—	—	—	—	—	SB5152・SK5334・SK5335	SK5202・SD5016
北側主柱穴間に地床炉	黄灰色～にぶい黄色	2.5Y4/1～6/4	4層(自然埋没)	埋土中少ない	土器	99	—	SB5021・SB5072・SB5085・SB5095・SB5155・SB5165・SB5166・SK5104・SK5170・SK5192-1・SD5012
—	暗灰黄色	2.5Y4/2	1層	床面に土器2点。埋土中は少ない	土器・石器・玉	99	—	SB5039・SB5042・SK5054・SK5200
上部にSB5147が重なっているため、埋土は不明。床面西側に炭化材	灰黄褐色～黒褐色	10YR4/2～3/1	1層	床面になし。埋土中は少ない	土器	100	SK5232	SB5013・SB5037・SB5044・SB5069・SB5097・SB5147・SK5182・SK5186・SD5019
上部に堅固な貼床。SB5157・5162が重複し埋土の詳細は不明	灰黄褐色～黒褐色	10YR4/2～3/2	1層(床は堅固)	床面に土器(295～297)とベンガラ塊。埋土中破片多い	土器・石器・ベンガラ塊	100	SD5020・ST5009P4	SB5039・SB5157・SB5162・SK5238・ST5009P1・ST5009P5・ST5013P4
堅固な貼床	—	—	1層(床は堅固)	床面になし。埋土中は少ない	土器	100	SB5160・SK5237・SK5238・SD5020・ST5009P4	SB5039・ST5009P5・ST5013P4
—	—	—	1層(中心に貼床)	—	土器・石器	100	—	SB5019・SB5084・SB5155・SK5104・SK5170・SK5189・SK5190・SK5191・SK5215・S14P1・S14P2・S14P4
埋土に炭化物多量混入。掘方が6層に分かれ、焼土含む	褐灰色	10YR5/1	2層	床面に土器少量	土器・石器	100	—	SB5037・SB5132
床軟弱	褐灰色	10YR5/1	1層	床面になし。埋土中少ない	—	—	SB5184	SB5140・SB5200・SK5345・SD5004
床面に焼土散乱	褐灰色	10YR5/1	1層	床面になし。1層に破片少量	土器	—	—	SB5075
床は部分的に堅い	暗褐色	10YR3/4	1層	床面に土器1個体。埋土下層には土器片	土器	100	—	SB5093・SK5257
床は部分的に堅い	褐灰色～灰黄褐色	10YR4/1～4/2	2層(床中央部堅固人為的埋没)	床面は少ない。埋土全体に破片多い	土器・石器	100	—	SB5092・SB5094・SB5183・SB5195・SD5009
堅固な貼床。住居中央の炉は、還元部分、酸化部分に分かれ堅く焼きしめる。特異な地床炉	黒褐色～明黄褐色	10YR3/2～7/6	1層	床面炉南側に土器破片。埋土中は少ない	土器・玉	100	—	SB5112・SB5177・SB5180・SK5275・SK5276・SK5291
—	黄褐色～暗褐色	10YR5/6～3/3	1層(床は堅固な貼り埋土中部分的に炭)	—	土器・玉	100	—	SB5173・SB5175・SB5176・SK5316
切られているため詳細不明	—	—	1層(床に部分的に炭化物)	床面はなし。埋土中は少ない	—	—	SB5178	SK5276
貼床あり	にぶい褐灰色～褐灰色	10YR5/3～4/1	2層	—	—	—	—	SB5092・SB5094・SB5183・SK5222
—	黒褐色～灰黄褐色	10YR3/2～4/2	2層	P1.P2内に土器	土器	101	—	SB5054・SB5101
—	—	—	1層	—	土器	101	—	SB5055・SB5092・SB5109・SB5181・SB5182

古墳時代 堅穴住居跡(SB)一覽

第3章 弥生時代後期～古墳時代（VI層上面検出）の遺構と遺物

遺構記号	番号	旧遺構名・番号	時期	実年代比定	根拠	大地区	中地区	図番号	平面形	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	炉・カマド数	炉・カマド位置	柱穴 (主柱数)	付属施設・掘方	カマド構築材
SB	5184		古墳4期以前	5C前以前	土切	I	N23	64	—	(N42°W)	—	—	0.08	—	—	—	1	掘方なし	—
SB	5185		古墳6期	5C末～6C初	土切	I	N23	64・77	—	(N47°W)	—	—	0.12	—	—	—	6(1)	掘方なし	—
SB	5187		古墳4期～6期	5C前～6C初	土切	I	S10	64	—	(N9°E)	(2.80)	—	0.20	—	—	—	—	掘方不明	—
SB	5189	SB5077・SB5078・SB5086・SB5087・SB5161・SB5189	古墳5期	5C中～5C後	土切	I	N14・15・19・20・24	64・65・78	方形	N29°E	(10.74)	10.6	0.45	(53.2)	—	—	9(4)	掘方のみ	—
SB	5190		古墳5期	5C中～5C後	土切	I	N24・25・S4・5	64・65・79・80	方形	N18°E	(10.2)	(9.8)	上床：0.12・下床：0.25	(48.5)	F3	上上床：P2・P4間。上床：中央やや南より。下床：P1・P6間中央に地床炉	上床：5(4) 下床：12(4)	掘方のみ	—
SB	5191		古墳1期	3C後	土切	I	S4	64	—	(N16°E)	—	—	0.30	—	—	—	—	掘方のみ	—
SB	5194		古墳3期～4期	4C後～5C前	土切	I	N20・25	65	—	—	—	—	0.20	—	F1	—	2	掘方なし	—
SB	5195		古墳4期～6期	5C前～6C初	切	I	N20	65・77	—	N60°W	(4.85)	—	0.25	—	F1	南壁やや中央よりに地床炉	1(1)	掘方のみ	—
SB	5200		古墳4期～6期	5C前～6C初	土切	I	N23	64	—	(N46°W)	—	—	—	—	—	—	—	掘方不明	—
SB	5210		古墳4期～6期以前	5C前～6C初以前	土切	I	S5・10・T1	64・65	—	(N58°W)	—	—	0.20	—	—	—	3	掘方不明	—
SB	5212		古墳4期～6期	5C前～6C初	土切	I	S5	64	—	(N76°W)	—	—	0.11	—	—	—	1	掘方不明	—
SB	6001	SB6001・SB7001	古墳5期	5C中～5C後	土切	I	H24・25・M4・5	61・81	隅丸方形	N68°W	6.4	(3.0)	0.35	—	F2	F1：北壁中央やや西より。 F2：北西部分	11(4)	なし	—
SB	6003		古墳8期(新相)	6C末～7C初	土切	I	N11・M15	60	隅丸方形	N47°W	3.7	3.3	0.3	11.02	K1	北西壁中央	—	なし	基部にVII層に近い土。
SB	6004		古墳4期～8期以降	5C前～7C初以降	切	I	M8・9・13・14	60	隅丸方形	N18°E	6.1	—	0.1	—	—	—	1(1)	掘方。貯蔵穴P1。	—
SB	6008		古墳4期～8期以前	5C前～7C初以前	切	I	M8・9	60・61	—	N66°E	3.3	—	—	—	—	—	1	なし	—
SB	6009		古墳5期～6期(古相)	5C中～5C末	土切	I	M8・9・13・14	60・80	隅丸方形	N37°E	7	6.7	0.1	44.84	—	—	12(4)	掘方のみ	—
SB	6010		古墳4期(新相)～6期(古相)	5C前～5C末	土切	I	M4・9・10	60・61	隅丸方形	N18°E	7.15	6.5	0.1	45.03	—	—	22(4)	掘方。東西壁から南壁にかけて床下U字状溝	—
SB	6011		古墳5期以前	5C中～5C後以前	土切	I	M9・14・15	60	隅丸方形	N21°E	—	—	0.2	—	—	—	4(4)	なし	—
SB	6012		古墳5期	5C中～5C後	土切	I	M10・N6	60・61・81	—	N35°W	4.8	—	0.25	—	K1	南壁中央	7(4)	なし	地山+粘土
SB	6019		古墳4期～5期	5C前～5C後	切	I	H24・M4・5	61	—	(N30°E)	—	—	0.1	—	—	—	—	なし	—
SB	6020		古墳5期以前	5C前～5C後以前	切	I	H24・M4	61	—	—	—	—	—	—	—	—	—	なし	—
SB	6024		古墳5期	5C中～5C後	土切	I	M19・20・24・25	59・82	隅丸方形	N33°E	(7.70)	7.25	0.2	(49.26)	F1	中央やや北より	10(4)	掘方凹凸あり	—
SB	6031		古墳6期	5C末～6C初	土切	I	R5	59	—	(N45°W)	—	—	0.15	—	—	—	—	なし	—
SB	6032		古墳4期(新相)～5期	5C前～5C後	土切	I	M24・R4	59	—	N64°W	4.8	—	0.1	—	—	—	4(4)	掘方なし	—
SB	6034		古墳4期～6期	5C前～6C初	土切	I	R4・5	59	—	N63°W	—	—	0.2	—	—	—	5	なし	—
SB	6037		古墳5期	5C中～5C後	土切	I	M19・20	59・60	方形	N28°E	4.4	4.3	0.3	17.41	—	不明	7(3)	掘方(工具痕あり)	—
SB	6041		古代0期以前	7C前以前	切	I	R3	59	—	(N23°E)	(2.8)	—	0.25	—	—	—	—	なし	—
SB	6042		古代0期以前	7C前以前	切	I	R2・3	58	—	(N70°E)	—	—	—	—	—	—	—	なし	—
SB	6047		古墳6期	5C末～6C初	切	I	R3・4	58・59・82	—	N76°W	(5.3)	(4.6)	0.25	—	K1	西壁中央	6(2)	掘方不明	粘土
SB	6048		古墳6期	5C末～6C初	土切	I	R3・4・8・9	58・83	—	N45°W	(6.55)	(5.9)	0.15	(37.88)	K1	西壁中央	5(3)	掘方のみ	地山+粘土
SB	6050		古墳8期以前	7C前以前	切	I	R9・10	58	—	(N60°W)	—	—	0.3	—	—	—	—	なし	—
SB	6051		古墳8期	6C後～7C初	土切	I	R9・10・14・15	58・83	—	N59°E	5.5	4.45	0.2	22.19	K1	東壁中央	7(4)	掘方のみ	粘土

表15- (3) 弥生時代後期～

第4節 集落域および旧河道域の遺構と遺物出土状況

特徴	色調	土色帳記号	埋土の特徴	遺物出土状況	遺物	遺物図	切合関係(古)	切合関係(新)
床面軟弱	暗褐色 ～黄褐色	10YR3/3 ～5/6	1層	床面西側に土器と玉。埋土中は少ない	土器・玉	101	—	SB5079・SB5080・SB5168・SB5185・SB5200・SD5004
—	暗褐色	10YR3/3	1層(住居床中央堅固)	床面に高杯、玉など。埋土中は少ない	土器・石器・玉・鉄	101	SB5184・SB5200	SB5079・SB5140・SB5176・SK5343・SK5344
—	灰黄褐色	10YR5/2	1層	床面壁際に甗	土器	101	—	SK5147・SD5001
部分的に堅固な貼床。床面に焼土塊・灰が散布	明黄褐色 ～暗褐色	10YR6/6 ～3/3	6層	床面焼土内に土器破片多い。埋土下層・掘方から白玉	石器・玉・鉄・骨	101	—	SB5030・SB5031・SB5032(A)・SB5032(B)・SB5062・SB5133・SB5134・SK5052・SK5292・SK5305・ST5011P12・ST5011P13
堅固な貼床が3枚あり。主柱穴内に礎盤あり	黒褐色 ～にぶい黄褐色	10YR3/2 ～5/4	3層	第3床面直上に土器破片多い。北側主柱穴間に白玉集中	土器・石器・玉・骨	101・102	SB5212	SB5102・SB5119・SB5177・SB5198・SB5211・SK5104-1・SK5313・SK5314・SK5322・SK5327・SD5001・SD5004
—	黒褐色～褐色	10YR3/2 ～4/4	3層(床に面的に炭化物)	床面炭層上部に器台脚部。埋土中はほとんどなし	—	102	—	SB5173・SB5177・SB5190
明確な貼床。堅く焼きしめる地床炉	暗灰黄色	2.5YR4/2	1層	床面・埋土中ともに少ない	—	—	—	SB5053・SB5054・SB5103・SB5119・SB5190
床面軟弱	灰黄褐色～ にぶい黄褐色	10YR4/2 ～5/4	5層(自然埋没1・4・5層に炭化物少量)	床面遺物少量で破片のみ。埋土中は少ない	土器	102	SB5172・SB5183・SB5194	SB5054・SB5101・SK5294
床軟弱	暗褐色	10YR3/3	1層	—	—	—	SB5168・SB5184	SB5140・SB5185
—	暗褐色 ～黄褐色	10YR3/4 ～5/6	1層(床面に焼土炭化物、 床下に炭化物)	—	—	—	—	SB5189・SD5001
—	—	—	1層	—	—	—	—	SB5177・SB5190P4・SB5211
堅固な貼床	灰黄褐色	10YR5/2	1層	北西部床面から甗など。埋土中は破片	土器・玉・鉄	102・103	SB6006・SB6019・SB6122	—
堅固な貼床。カマドは基部を残して破壊され、火床もなし	黒褐色	10YR3/1	1層	カマド脇に完形甗など。南壁際床面に土器	土器・玉	103	SB6098	SK6069
部分的に堅固な貼床。他の遺構に切られ、埋土・カマドは不明	—	—	—	床面遺物ごく少量	土器	103	SB6008・SB6009	SK6420・SK6421
床面堅固	不明	—	—	遺物なし	—	—	—	SB6004・SK6034・SK6037・SK6442
中央やや南よりに貼床	暗褐色	10YR3/3	1層(P2南側に床面焼土)	P9中およびP9東側床面から甗1点ほか	土器	104	SB6008・SB6010・SB6011・SK6541	SB6004・SK6009・SK6445
床面堅固。東壁中央に床面焼土・主柱穴の立て替えあり	黒褐色	7.5YR3/2	1層	床面になし。埋土中は少ない	土器	104	SB6011・SK6539・SK6543・SK6544	SB6009・SK6036・SK6540
床面堅固	暗褐色	10YR3/3	1層	支柱穴P3埋土上部に甗が潰れた状態で出土	土器	104	SK6544	SB6009
焼失家屋。ごく薄い貼床	灰黄褐色	10YR4/2	7層(床面焼土、炭化物)	カマド東側と住居北側床面に土器大量出土	土器・玉・鉄	104・105・106	—	SB6005・SB6007・SB6013・SB6121・SK6424
床面は軟弱	褐色	7.5YR4/6	1層	埋土中から少量	土器・玉	106	SB6020・SK6476・SK6534	SB6001・SB6006
床面のみ検出、堅固な貼床	—	—	—	遺物なし	—	—	SK6001	SB6019・SB6021
住居廃絶後、P3.5は柱を抜いて埋め戻し、遺物とともに廃棄	—	—	4層(自然堆積)	P3.5から高杯脚部など炭化物を伴って出土。床面中央に台付甗つぶれた状態	土器・石器	106・107	SB6096	SB6033・SB6071・SK6204・SK6216・SK6352・SK6353・SK6354・SK6355・SK6457
床面堅固	黒褐色	10YR3/2	1層	床面に土器破片。隅に円礫。埋土中に破片	土器	107	—	SB6023・SK6050
床面堅固。支柱穴P1に柱痕あり。支柱穴間の焼土の詰まったP2は炉の可能性あり	暗褐色～褐色	10YR3/4 ～4/4	2層	埋土中は破片多い。SK6286内の遺物はカマド破壊時のもので本住居に帰属する可能性あり。脇に骨	土器	107	SB6025	SB6033・SB6035・SB6067・SB6102・SK6286
堅固な床	暗褐色	10YR3/3	1層	床面・埋土中に破片少ない	土器	108	—	SB6025
床面軟弱。床面焼土があるが炉か、カマドかは不明	黒褐色 ～灰黄褐色	10YR3/1 ～4/2	5層(うち2、3層は北壁近くの焼土ブロック)	埋土中破片が多い。北壁近くの床面焼土ブロック周辺に甗・高杯・杯など投棄	土器・石器・玉	108	SK6464	SB6027・SK6040・SK6044・SK6222・SK6226・ST6004P4・ST6004P5・ST6004P6・ST6005P4
床面堅固	暗褐色	10YR3/3	1層	埋土中破片3片のみ	土器	—	—	SB6040・SK6090・SK6313
床面軟弱	—	—	1層	床面壁際に高杯。埋土中は少ない	土器	—	—	SB6040・SB6044・SB6119・SK6093
中央に貼床	—	—	1層(カマド炊口に焼土、炭化物)	床面から鹿角。P1底部から壺。埋土中に破片少量	土器・角	108	—	SB6035・SB6048・SB6067・SK6208・SK6211・SK6228・SK6344・SK6345・SK6348・SK6379・SK6448・SK6467・SK6468・SD6003
貼床堅固。カマド袖は幅40cm×130cmと巨大。掘りこみは30cm。火床は強く被熱	—	—	1層	P2に甗片。カマド左袖脇に杯。燻焼部と前方床面に甗片と鉄銹。埋土中破片多い	土器・鉄	108	SB6068・SK6338・SK6380・SK6381・SK6390	SB6043・SB6047・SB6049・SB6067・SB6069・SK6103・SK6208・SK6379・SK6382・SK6389・SD6003
床面堅固	—	—	—	埋土中に少量	土器	—	—	SB6025・SB6051・SK6109
堅固な貼床2枚	—	—	3層(含貼床)	床面西壁際に甗3、杯1。埋土中は下層のみ	土器	108	SB6050・SK6469	SB6052・SK6110・SD6002

古墳時代 竪穴住居跡(SB)一覽

第3章 弥生時代後期～古墳時代（VI層上面検出）の遺構と遺物

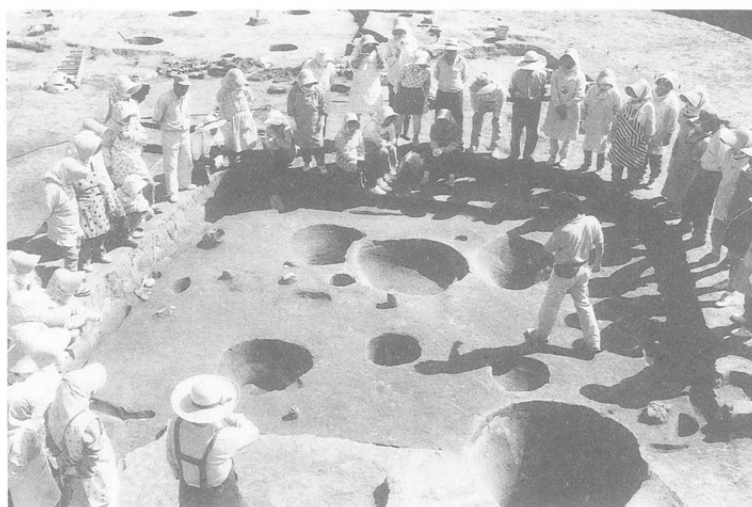
遺構記号	番号	旧遺構名・番号	時期	実年代比定	根拠	大地区	中地区	図番号	平面形	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	床面積(m ²)	炉・カマド数	炉・カマド位置	柱穴(主柱穴)数	付属施設・掘方	カマド構築材
SB	6057		古墳4期(新相)	5C前	土切	I	M18・19	59・62・82	—	N29°E	4.95	4.65	0.2	20.9	—	—	7(4)	掘方。溝が体下を全周する	—
SB	6058		古墳4期～6期	5C前～6C初	土切	I	M23	59	—	N20°E	—	4.2	0.3	—	—	—	1(1)	なし	—
SB	6065		古墳4期～6期	5C前～6C初	切	I	M13・14・18・19	59・60	正方形	N58°W	6.1	5.5	0.1	30.93	K1	西壁中央	27(4)	掘方のみ	Ⅶ層の黄褐色土を含む土
SB	6068		古墳4期～6期	5C前～6C初	土切	I	R8・9	58	—	N8°E	(5.2)	—	0.1	—	—	—	4	掘方のみ	—
SB	6070		古墳8期	6C後～7C初	土切	I	R7	58	正方形	N64°W	3.6	3.4	0.2	11.81	K1?	西壁	4(4)	掘方あり	—
SB	6072		古代0期以前	7C前以前	切	I	R1・2	58	—	(N32°W)	—	—	—	—	—	—	—	なし	—
SB	6073		古墳8期	6C後～7C初	切	I	R7・8・12・13	58	隅丸方形	N54°E	6.7	6.25	0.15	(39.24)	—	—	8(4)	掘方のみ	—
SB	6078		古墳5期	5C中～5C後	土切	I	M18	59	—	N23°W	—	—	0.25	—	—	—	5(2)	なし	—
SB	6079		古墳5期以前	5C中～5C後以前	切	I	M18	59	—	(N38°W)	—	—	0.2	—	—	—	—	なし	—
SB	6080		古墳4期～6期以前	5C前～6C初以前	切	I	M18・23	59	隅丸長方形	N59°W	(5.2)	4.5	0.2	(24.23)	K1?	(西壁)	3(3)	掘方のみ	—
SB	6083		古墳5期以前	5C中～5C後以前	切	I	M18・23	59	—	N60°W	(4.95)	—	0.05	—	—	—	1(1)	掘方のみ	—
SB	6084		古墳8期	6C後～7C初	土切	I	R8・12・13	58	方形	N137°E	(5.35)	(4.95)	0.2	(25.76)	K1	東壁中央	14(4)	掘方あり	地山
SB	6096		古墳4期～5期	5C前～5C後	土切	I	M19・20・24・25	59	隅丸長方形	N43°W	4.65	3.8	0.35	16.65	F1	中央やや東より	3	掘方のみ	—
SB	6098		古墳1期	3C後	土切	I	M15、N11	60・83	—	N51°W	5.9	4.75	0.45	26.54	F1	P9・P10の間	10(4)	掘方なし。周溝が全周	—
SB	6122		古墳5期以前	5C中～5C後以前	切	I	M5	61	—	(N45°W)	—	—	0.17	—	—	—	4(4)	なし	—
SB	6129		古墳8期以前	6C後～7C前以前	切	I	R2・7	58	—	N49°W	(4.14)	—	0.1	—	K1	西壁	3(2)	掘方のみ	—
SB	6130		古代1期以前	7C後以前	切	I	R18	57	—	—	—	—	0.2	—	—	—	—	掘方のみ	—
SB	6134		古墳5期以前	5C中～5C後以前	切	I	M18	59	—	(N13°W)	—	—	0.2	—	—	—	1(1)	掘方のみ	—
SB	6135		古墳4期～6期	5C前～6C初	土切	I	M23・24、R3・4	59	—	N52°E	3.75	—	0.1	—	—	—	1(1)	なし	—

表15- (4) 弥生時代後期～

第4節 集落域および旧河道域の遺構と遺物出土状況

特徴	色調	土色帳記号	埋土の特徴	遺物出土状況	遺物	遺物図	切合関係(古)	切合関係(新)
堅固な貼床	—	—	1層(住居直後に炭層)	床面では北壁付近に破片多い。埋土下層の炭化物中に土器破片。床下にも破片	玉・骨	109	—	SB6060・SB6063・SK6074
床面軟弱	暗褐色	10YR3/3	1層	埋土中に少量	土器	109	SB6080・SB6083・SK6075・SK6357・SK6359・SK6364・SK6518・SK6519	SB6056・SB6060・SK6079・SK6080・SK6376・SD6001
貼床あり。カマド前方に焼土。柱は3回の建て替えを推測	黒褐色～褐色	7.5YR3/2～4/4	2層	埋土中に破片少量	土器・玉	—	—	SB6038・SB6039・SB6059・SB6063・SB6064・SK6057・SK6070・SK6078
堅固な貼床	褐灰色	10YR5/1	1層	埋土中に破片少量	土器	109	—	SB6043・SB6052・SB6069・SK6103・SK6104・SK6395・SK6396・SK6397・SK6398・SK6399・SK6401
堅固な床面。SK6241に切られた西壁際に床面焼土あり。カマドが推測される	黒褐色	10YR3/2	2層	床面・埋土中ともに破片少量	土器	109	SB6129・SB6133・SK6454・SK6470	SB6046・SB6116・SK6241・SK6249・SK6251・SK6253・SK6284・SK6297・SK6377・SD6007・SD6009
矢板のノリ面につき、検出のみ	—	—	—	—	—	—	SD6013	SB6119・SK6236・SK6238
堅固な貼床。(P2に柱痕跡あり)	黒褐色	10YR3/2	1層	床面中央に破片多い。埋土中に破片少量	土器	—	SB6084・SK6448・SK6459・SK6473	SB6061・SB6074・SB6089・SB6097・SB6115・SK6097・SK6098・SK6114・SK6115・SK6116・SK6122・SK6123・SK6136・SK6308・SK6309・SK6310・SD6004・SD6012
床面は堅固	暗褐色～明黄褐色	10YR3/3～7/6	3層(自然埋没)	床面北側に破片と逆位の勝。埋土2層中に破片多い	土器・玉・骨	109	SB6083・SB6134・SK6365・SK6366・SK6367・SK6369	SB6036・SK6073
床面は堅固	—	—	1層	埋土中なし	—	—	—	SB6039・SK6071・SK6072・SK6365
床面は堅固。煙道の残部から西壁にカマドが推定される	黒褐色	10YR3/2	1層	北壁付近の床面に土器	土器	—	SB6083・SK6357・SK6517・SK6518	SB6036・SB6056・SB6058・SB6060・SK6079・SK6080・SK6359・SK6360・SK6361・SK6362・SK6364・SD6001
中央部に堅固な貼床。その上に炭がのる	にふい黄褐色	10YR4/3	1層	埋土中に少量。床面壁際に炭が付着した土器片	土器	—	—	SB6036・SB6058・SB6060・SB6078・SB6080・SB6134・SK6075・SK6376
堅固な貼床	黒褐色	10YR3/2	1層	床面主柱穴の内側に破片多い。埋土中破片が全体に多い	土器・石器	110	SK6459・SK6473	SB6054・SB6073・SB6074・SK6098・SK6123・SK6124・SK6136・SK6414・SK6415・SD6004
堅固な貼床	褐灰色～明黄褐色	10YR4/1～7/6	3層(床面直上南側4/5全面に炭層)	床面炭層中に破片	土器	110	—	SB6024・SB6071・SK6351・SK6352・SK6353
炉周辺に貼床	—	—	3層	ほぼ完形の甕が西壁際床面で出土。埋土中は少ない	土器・石器	110	—	SB6003・SB6026・SB6076・SB6077・SK6016・SK6068・SK6069・SK6203・SK6207
床面堅固	褐色～黄褐色	10YR4/4～5/4	2層(P1には炭、焼土30%)	遺物なし	—	—	—	SB6001・SB6006・SB6007
堅固な貼床。(西側中央の床面に炭化物が貼り付く部分をカマドと推定した)	黒褐色	10YR3/2	1層	カマド左側の床面炭化物上に甕片。埋土中遺物少ない	土器	—	—	SB6044・SB6046・SB6070・SB6116・SB6119・SB6133・SK6240・SK6384・SK6385
堅固な貼床	—	—	1層	埋土中に破片少量	土器	—	—	SB6053・SB6062・SB6074・SB6101・SB6117・SK6137・SK6141
床面は軟弱。主休は調査区外	黒褐色	10YR3/1	1層	埋土中に少量	土器	—	SB6083	SB6036・SB6078・SB6085・SK6369
堅固な貼床	明褐色	10YR3/3	1層(自然堆積)	埋土中に少量	土器	—	—	SB6035・SB6047・SK6056・SK6081・SK6227・SK6342・SK6343・SK6344

古墳時代 竪穴住居跡 (SB) 一覧



例が多いこと、135も胴部に最大径をもつことから、これらカマド芯材土器のセットは古墳7期と認定される。それはすなわち本住居跡の構築年代として捉えられる。

S B 5097 (図73、PL15)

カマド：本住居跡のカマドは地山を袖として掘り残し、更にその上に粘土を積み上げて構築されている。カマド検出段階で、袖、火床、燃焼部内壁の焼土が残存し、焼土を挟んで火床の上部に天井が崩落している様子が観察された。カマドの構築粘土の崩落土と推定される1層中には杯類が廃棄され、支脚石は抜き取られている。**床面遺物**：カマド両脇の床面直上からは甕、杯、高坏などが押し潰された状態で石器や炭化材とともに検出され、古墳8期の良好なセットを構成している。完形土器が多く検出された住居跡北側は、VII層に類似した土が厚く堆積しているため、土器を遺棄したまま埋め戻したものと推測される。

S B 5102 (図65)

本住居跡は北側に破壊された状態と推測されるカマドを有し、その西側床面に炭化物の廃棄場が検出されている。床面から数cm浮いた状態で直径5cm程度の礫がカマドの西側に集中している。西壁南より床面にも10cm程度の石が7点まとまっている。

S B 5136 (図75、PL16)

建て替え：本住居跡は堅固な貼床を一枚有するだけであるが、支柱穴がそれぞれ柱痕を2つ以上もつことから柱の立て替えが推定される。P1・P3・P4はいずれも内側の柱痕が外側の柱痕よりも古いことから内側から外側へ柱だけが立て替えられたと推定されるが、P2は逆に外側の柱痕の方が古い。4本とも古い方の柱痕には非常に堅い灰色粘土が礎盤の代わりもしくは根固めとして用いられている（P1の4・5層、P3の6・7層、P4の4・5層）。P2の埋土からは高坏の脚部、骨、鉄製品が出土している。**炉とカマド**：住居跡中央部に炭化物を伴う焼け面、P1周辺および西壁中央部に焼土廃棄ブロックが見られることから中央部の施設は炉と判断される。更に住居跡東壁ではカマドが完全に破壊された状態で検出され、中央部に支脚石を抜いた穴が確認された。カマド破壊土中に高坏・杯・壺などが折り重なった状態で廃棄されている。**床面遺物**：床面からは土器破片の他に白玉・棒状鉄製品が出土している。**時期**：カマドおよび床面の土器から本住居跡は古墳5期と認定される。**掘方**：掘方は外周部が10cmほど深く掘られており（図153）、この溝状の部分の南側から2点、東側から6点、北側から1点、西側から1点白玉が出土している。イノシシ・ニホンジカ・トリの骨も床下で多く出土している。

S B 5189 (図78、PL13)

規模：本住居跡は本集落最大規模で10.74m×10.6mを測る。**カマドほか**：カマドは住居跡の北側を切るSB5134床下で検出された焼土だまりが該当する可能性があるが、床面北側および南西隅を中心に炭化物を伴わない焼土塊が、南東部分には灰が多量に検出されている。**遺物**：中～下層に多く焼土内からも出土しているが、床面のものは極めて少ない。また埋土からは白玉4点、管玉1点が出土した。このことから本跡では家屋の廃棄時に家屋を意図的に焼く行為が行われたか、あるいは多量の焼土塊や灰が廃棄された可能性を有する。**掘方**：床下には南東コーナーにはL字状を呈する溝状遺構が検出されており、掘方の特殊なものと考えられる。掘方からは白玉が2点とウマの骨が出土した。

S B 5190 (図79・80、PL13)

床の貼り替え：本住居跡は床面の貼り替えから同一プランで3段階の変遷を追うことができる。以下調査順に新しい方から第1段階・第2段階・第3段階と仮称する。**第1段階**：貼床は住居跡中央部に限定され、地床炉を伴うが所属施設は不明。**第2段階**：床面は厚さ2cm程度の貼床で、第3段階の柱穴であるP5を埋め戻して掘り直したP2および第3段階の支柱穴であるP1・P3・P4のうち新しい柱痕部分が支柱穴である。炉は中央やや西よりに1基。**第3段階**：貼床は2～4cm程度で支柱穴よりも内側に貼られて

いる。ただしP6は柱の部分避けて柱穴の上まで貼られている。本段階の主柱穴はP1・P3・P4・P6でいずれも直径40cm程度の礎盤を有する。P1では廃絶時の抜き取り痕が観察された。炉は中央東よりに1基あり、火床部分はかなり堅く焼けている。床面南西隅には炭化物が廃棄されている。**遺物と時期**：本住居跡の遺物は第3段階床面直上で土器破片が多く古墳5期と認定している。また北側の主柱穴と炉に挟まれた部分の床直からは白玉が集中的に出土している。更に⑥区湧水坑から持ち込まれたと考えられる摩耗土器片が1点出土している。本住居跡の埋土中出土遺物も古墳5期が多くを占めるため、第1段階・第2段階とも古墳5期の範囲内で捉えられる。**掘方**：掘方はやや外側が深いものの、SB5136やSB5189のような定型的な溝ではない。ただし掘方からイノシシ・ニホンジカの骨・歯類が多く出土している点でSB5136に共通する。

SB6012 (図81、PL17)

焼失状況：本住居跡は焼失住居である。主柱穴であるP4からは炭化した柱(カエデ属)が立った状態で検出された。また、その他の住居構築材(カエデ属・コナラ属)も炭化して中央を向いて放射状に倒れている。カマド前方部床面には焼土が面的に広がる。**遺物**：床面出土土器はカマドの東脇とその延長の北側に集中する。これらはつぶれた状態であるもののかなり細かく割れた状態で、大量に出土している。カマド西脇からも少量の土器が出土しているがいずれも破片である。**カマド**：カマドは袖を残して既に破壊されており、明確な火床は存在しない。ただし高坏を逆さにして2点重ねた支脚(443・448)が残存している。

(2) 掘立柱建物跡(ST) (図84・85、表16)

掘立柱建物跡の記載はすべて表16に示した。

(3) 土坑(SK) (図85、表17)

土坑は⑤区集落のほぼ全域に分布する。弥生・古墳期土坑の詳細な説明は表17に掲載したが、このほかに古墳～古代の時期幅で捉えられるものもある(『古代編』掲載予定)。井戸跡は東側のSK5179とSK5465の2基のみで、そのほかは柱穴や貯蔵穴などになる可能性があるものが含まれる。

(4) 溝(SD) (図86、表18)

集落域の溝のうちSD4051は、④区から⑤b区中央を北北東から南南西へ縦断する。南側は緩やかに傾斜するが、北側はかなり平坦である。時期的には⑤区北側のSD5019かSD5020に連結する可能性があるが埋土の比較からは明確には断定しがたい。この溝の南側では東西方向に交わる平行な溝が3本検出されている。

(5) 祭祀関連施設(SH・SK・SD・SX) (図86・87、PL19)

ここでは、その立地や形態から生活および生産活動に直接関わるとは判断できない特殊なものを祭祀関連遺構として取り上げることとする。

SH5001・SK5038 (図86)

位置：集落域である⑤区で確認された、土坑(SK5038)の周囲に礫敷(SH5001)を伴う遺構である。**属性**：一覧表参照。**特徴**：土坑を中心として周囲に浅い掘り込みがみられ、東南東方向を開放するC字状に礫が敷かれている。礫は、0.4～11cm、0.1～345gを測り、合計3342点、41.1kgに達する。礫敷の下にベンガラ集中域が2カ所確認されている。おそらく礫を敷く前段階で意識的に配されたものと思われる。土坑は素掘であり、掘り込みの浅さと堆積状況からみて井戸としては機能していない。**遺物**：土坑中から小型丸

底壺（630～632）、礫敷中から土製丸玉（玉NO.167）が出土している。**時期**：古墳4期。**所見**：SB5039床面にも礫が敷かれている部分がある。このように礫を敷き詰める行為はこの2遺構のみに認められ、ある種の祭祀的な施設と考えられる。

SD7068・SX7038（図87）

SD7068

概要：屋代遺跡群⑥区の千曲川旧河道への傾斜地に位置する。SD7068は、縄文面の平行調査と後代の遺構による削平によりその全貌を知ることはできなかったが、素掘の溝の一部とそこに連結して設置された大小の木樋2基が確認できた。**植物体**：検出時点では木樋直上に植物体の堆積が認められた（PL19）。風化が進んでいたためサンプルのみ採取したが、細い丸木と板状のものが組まれた状況が見てとれ、ある段階で人為的に木樋の上を覆ったものと考えられる。**導水**：木樋は板材や杭などが補助材として設置されており、水が小木樋から大木樋へ導水され、下方に設営されたSX7038に至る構造となっている。水は湧水坑から取水されたものと思われるが、前述のように縄文面を先行して調査したために特定することができなかった。よって直接湧水坑から小木樋に導水されたか、器物などによって流されたかは不明であるが、木樋の規模からみて流量はそれほど多くなかったものと思われる。**遺物**：遺物は溝上部に木製刀形（図130-1）が確認され、大木樋の脇に須恵器甕（図112-613）が置かれた状態で出土した。両者とも祭祀的な要素をもつものであり、この遺構の性格付けの上で重要な資料である。他に土師器などが数点出土したが、出土状況から木樋に覆いながされた段階のものである可能性が高く目立った廃棄の状況は見られない。おそらく木樋が機能していた段階では周囲が清浄にされていたものと思われる。

SX7038

概要：SD7068の下方は一旦傾斜が緩やかになったテラス状の部分がある。そこを直径4～5mほどの範囲で浅く掘り、再び川に向かって傾斜が急になる境に礫を堤状に積んだ施設が確認された。堤は土盛りと礫積みが併用されており、おそらく漏水防止を目的にしていたものと思われる。一部柱材などの木製品が構築に利用されている。**属性**：一覧表参照。**構造**：上方のSD7068と一体の施設と考えられ、木樋によって導水された水を一度堤内に貯水する役割をもっていたようである。**時期**：古墳5～6期。**遺物・所見**：遺物は堤内に混じった土器片や木製品のほかはほとんどなく、SD7068同様に周囲が清浄に保たれていたようである。

この導水・貯水施設は立地からみて生産や生活に直接関わるものとは考えにくく、出土遺物などからみて湧水に関わる祭祀施設であったと思われる。

SD7072

概要：⑥区傾斜面に確認された湧水坑である。これを起点にして下方に溝が掘られていたと考えられるが、検出段階で湧水坑が出てしまったことと、古代の湧水施設（SX7035）に切られていたことによりその全貌は不明である。**属性**：一覧表参照。**時期**：SD7068・SX7038とSX7035の間に古墳後期の土器を含む堆積層（SD7055）があり、この段階に掘られたものと考えられる。あるいはSX7035の段階でも湧水坑として機能していたかもしれない。**遺物**：遺物は湧水坑脇に体部穿孔がなされた土師器壺（図112-626）が1点確認された。**所見**：やはり湧水に関わる祭祀と関連がありそうである。

遺跡記号	仮地区	遺構記号	遺構番号	旧遺構名・番号	時期	大地区	中地区	図番号	棟方向	桁×梁(間)	桁(m)	梁(m)	面積(m ²)	柱礎跡	遺物出土状況	切り合い関係(古)	切り合い関係(新)	特徴
BKS	K	ST	926		弥生~古墳	IX	O23.T3	56	E-W	(1×1)~(2)	3.2~(6.4)	3.2	10.24~(20.48)	なし	なし			伴出遺物なく時期不明、ただし隣接する土坑や包含層に古墳2~4期の土器が見られる。
BYS	5b	ST	5009	SK5227・SK5260・SK5266・SK5267・SK5268・SK5269・SK5286・SK5287・SK5298	古墳2期	I	O2-7	84	N25°E	(1×1)	(4.46)	(4.22)	(7.38)	なし	-	SB5039・SB5157・SB5162		P7から古墳1・2期の土器。P2から古墳2期の土器が出土。かなり大型の建物が予想される。
BYS	5b	ST	5011	SB5062P・SB5134床下P・SB5134P・SK5119・SK5130・SK5271・SK5278・SK5283・SK5297・SK5304・SK5306・SK5397・SK5398・SK5406・N-15P1・N-15P4	古墳4期~6期	I	N14・15・19-20-07	85	N70°E	3×2	8.45	6.3	44.25	P2にあり	-	SB5172・SB5189・SB5189のP8	SB5062P4・SB5097・SB5134・SK5122・SD5009	北側は一部礎石を有する小型ピットによる柱列。南側は大型ピットによる柱列であるため、建物が2棟になる可能性あり。
BYS	5b	ST	5013	SK5096・SK5097・SK5181・SK5239・SK5258	古墳1期~5期	I	O7.S19	84	N13°W	(2×1)	(5.34)	(3.50)	-	なし	-	SB5162・SK5227	SB5042・SB5136・SK5235	P4は北側に抜き取り痕あり。
BYS	5b	ST	5014	SB5102P下・SB5102床下P・SB5141P下・SB5190P1下・SK5249・SK5250・SK5251・SK5338	古墳4期	I	N19・24・25	84	N65°W	2×2	7.05	3.9	21.43	なし	P5埋土から礎・小型丸底土器が重なって出土。	SB5142	SB5102のP6・SB5119・SB5141のP・SB5190P1・SK53037	切り合いから古墳1~8期の幅で捉えられるが、P5から古墳4期の礎・小型丸底がつぶれた状態で出土しているため、4期に比定している。

表16 弥生・古墳時代 掘立柱建物跡 (ST) 一覧

凡例

A = 急なU字形 B = 急なU字形 C = 落ち込みが直で、底面がほぼ平ら D = 底面の凹凸が激しいもの
 E = 中央部に凹があるもの F = 壁際に凹があるもの G = その他



※時期は、土器細片の混入で記した例がある。また、ことわりのないものは古墳時代に相当する (例 1期=古墳1期)。

遺跡記号	仮地区	遺構記号	遺構番号	報告時期	遺構図	大地区	中地区	平面形	断面類型	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	色調	土色帳記号	堆積状況(シルト以外の場合のみ)	遺物	遺物図	備考
BKS	F	SK	5109	-	55	XIV	V16	円形	B	0.38	0.34	70	オリーブ黒	5Y3/1	砂を多く含む		89	
BKS	H	SK	7214	3~4期	55	XII	V21	楕円形	B	0.94	0.78	75	褐灰色		ブロック混入		89	
BKS	K	SK	9512	3期	56	IX	O16	楕円形	B	(0.75)	(0.65)	3.57	黄灰色~浅黄色	2.5Y5/1~7/3	ブロック多く埋め戻し、4層に土器片と炭化物	土器が中層から下層で集中出土	90	
BYS	4f	SK	4842	1期	57	I	R21	楕円形	A	0.6	0.6	0.21	不明	不明	1層		112	
BYS	5b	SK	5038	4期	19-86	I	N18-19-23-24	円形	B	0.5	0.5	0.71	黒褐色~にぶい黄褐色	10YR3/2~4/3	2層(砂質土)		112	
BYS	5b	SK	5043	2期~3期	65	I	N24	円形	A	0.55	0.5	0.47	褐色	10YR4/4	1層(むずかぬれ土含む)		112	

表17- (1) 弥生時代後期~古墳時代土坑 (SK) 一覧

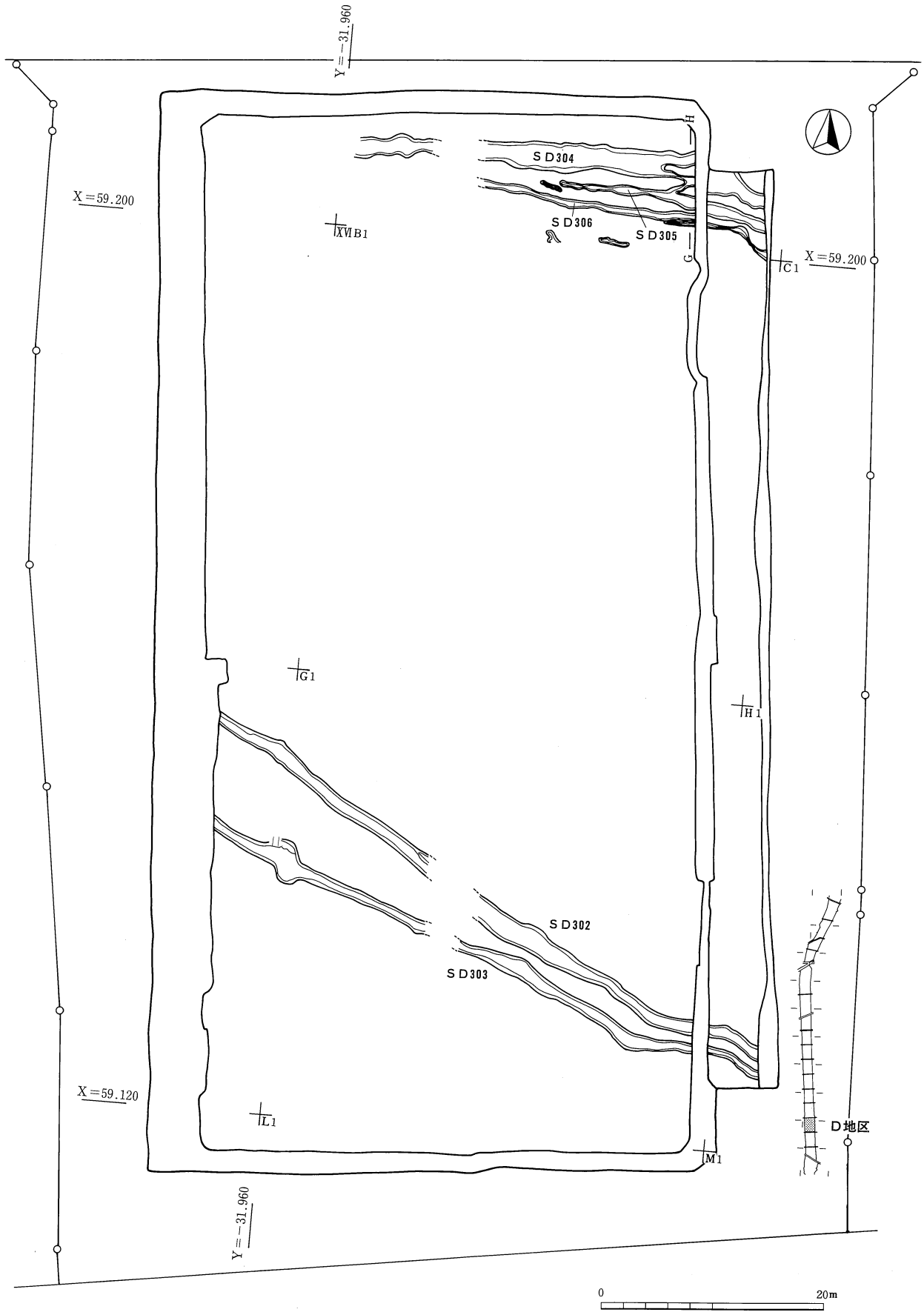


図40 古墳時代遺構分布図 1（更埴条里遺跡D地区）

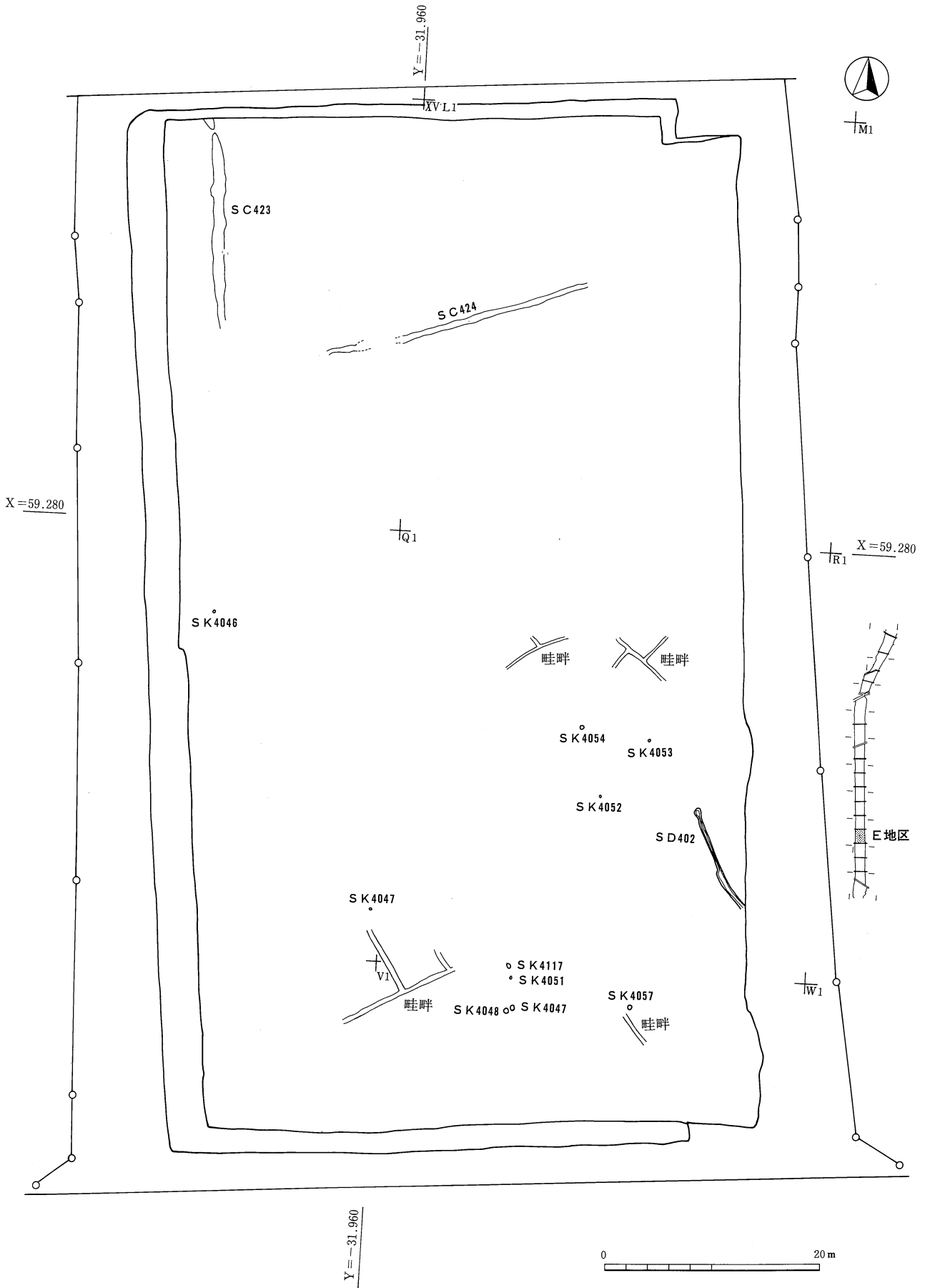


図41 古墳時代遺構分布図 2 (更埴条里遺跡E地区)

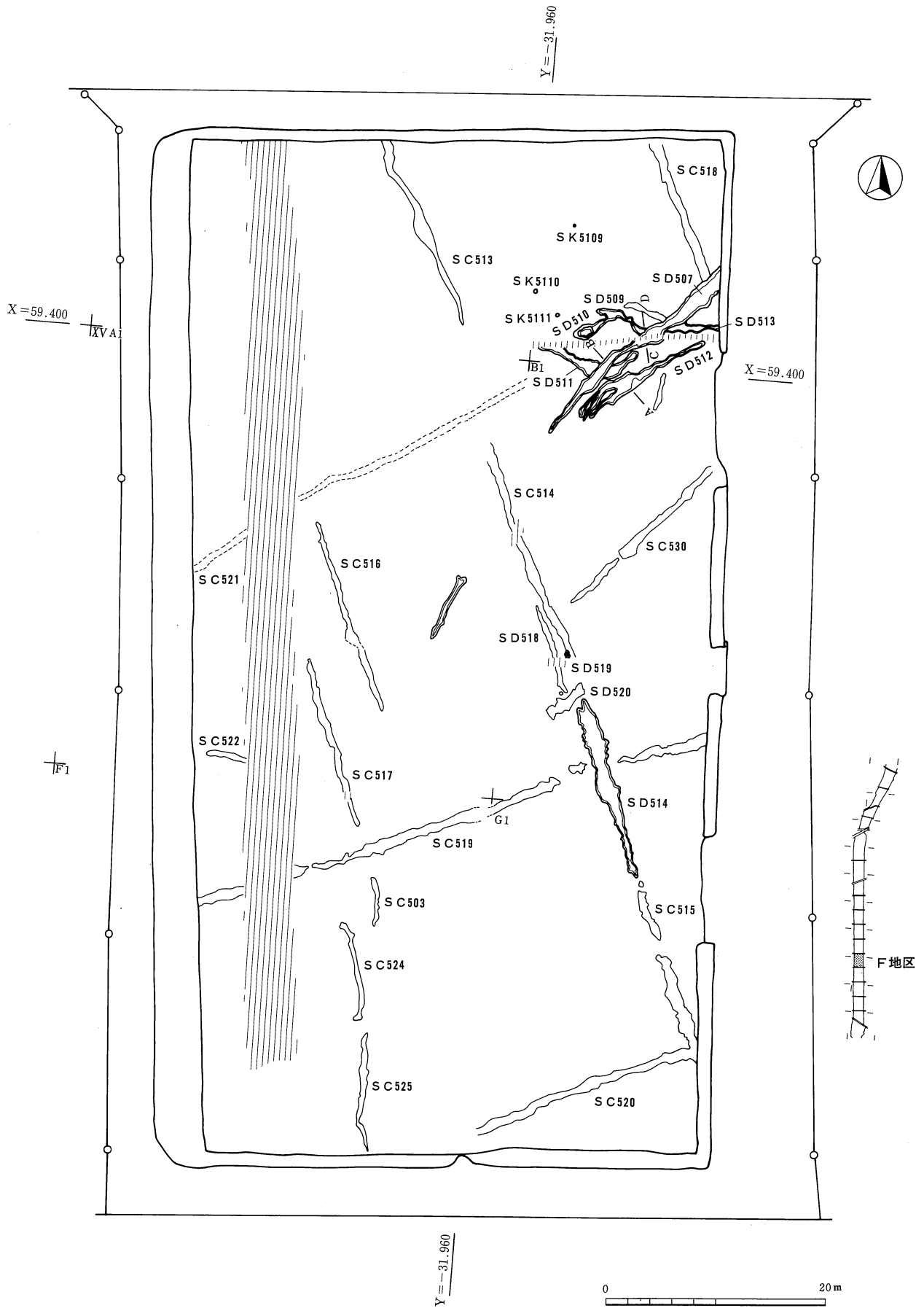


図42 古墳時代遺構分布図 3 (更埴条里遺跡F地区)

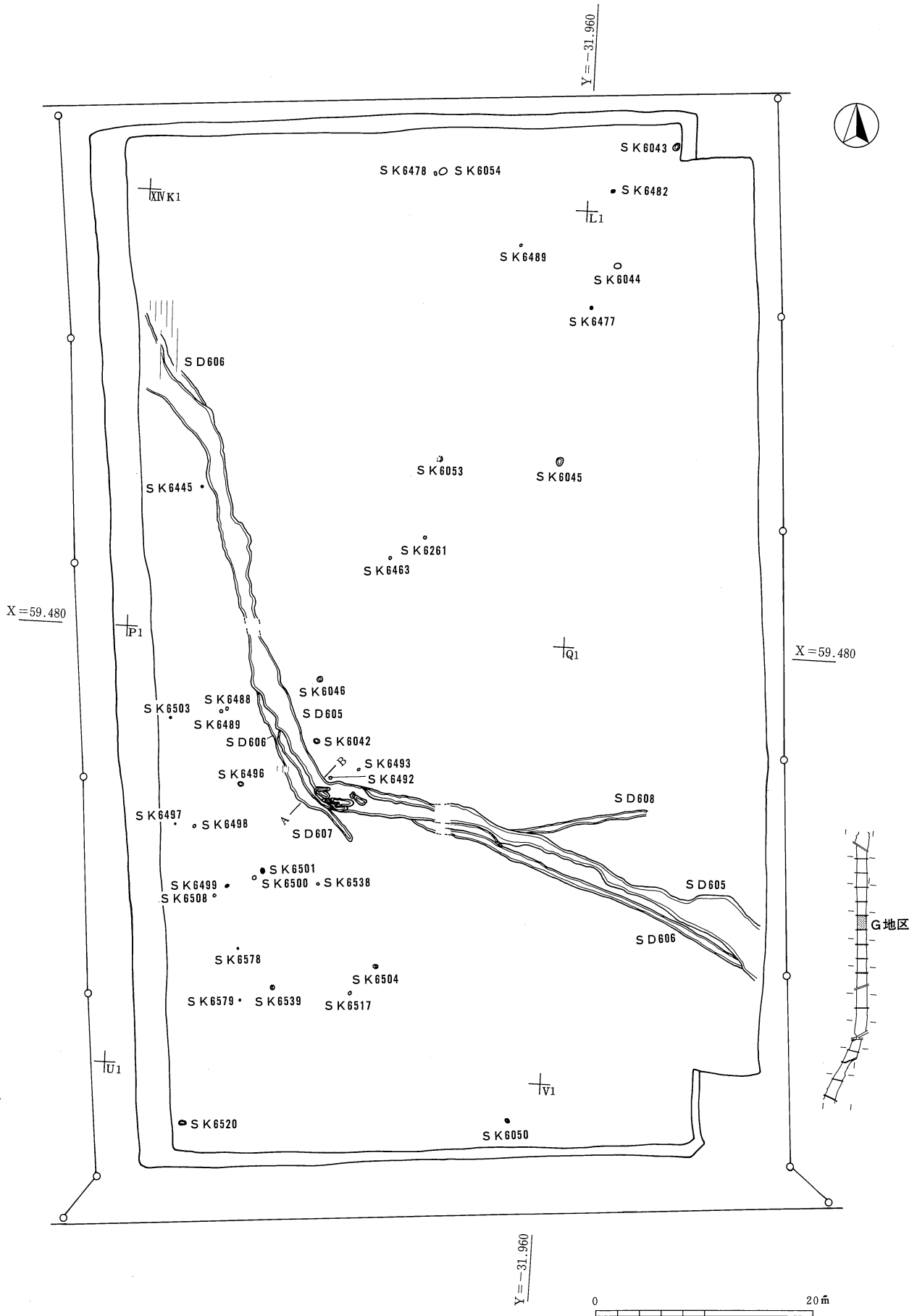


図43 古墳時代遺構分布図 4 (更埴条里遺跡G地区)

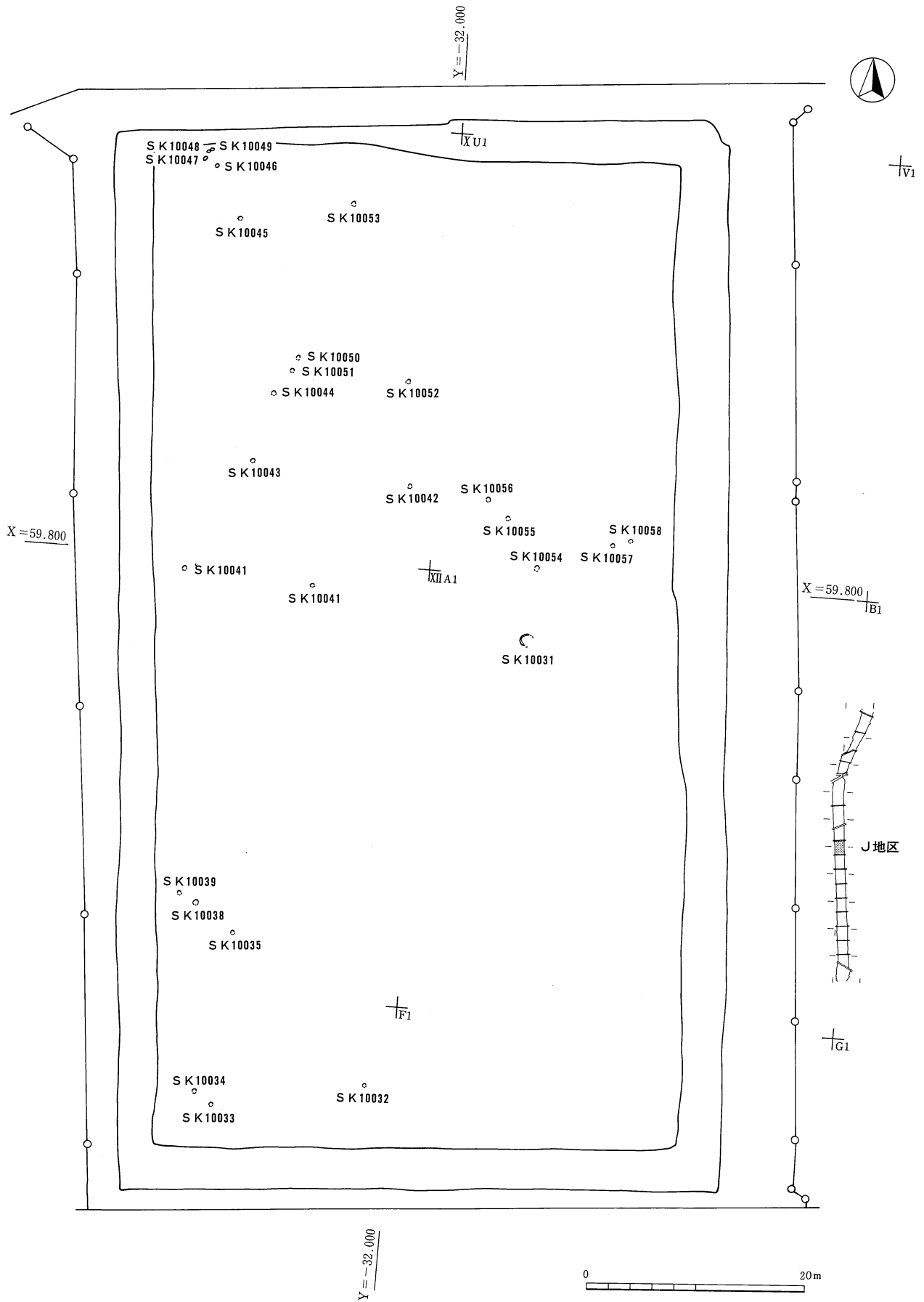


図44 古墳時代遺構分布図 5 (更埴糸里遺跡J地区)

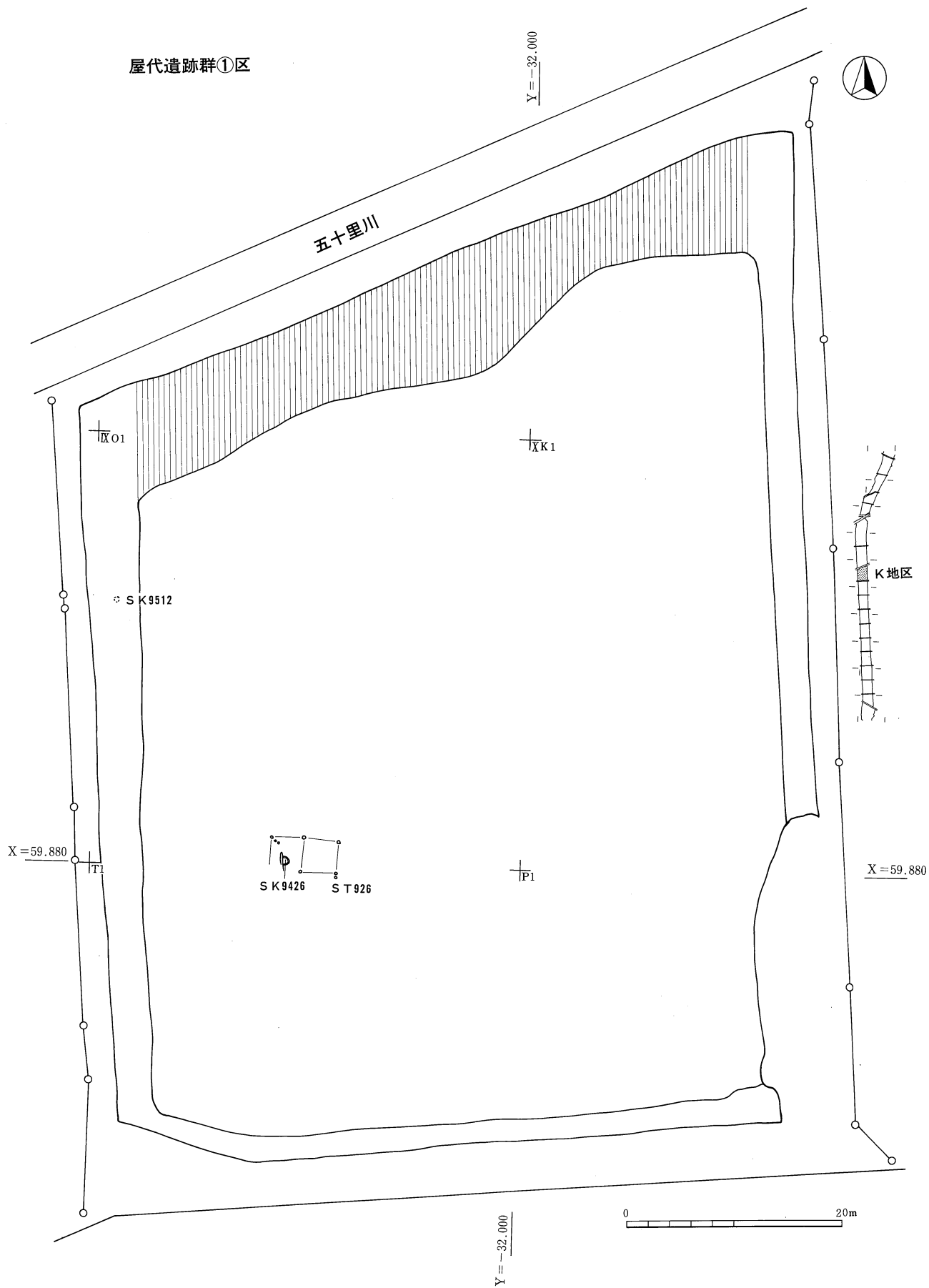


図45 古墳時代遺構分布図 6 (更埴条里遺跡K地区)

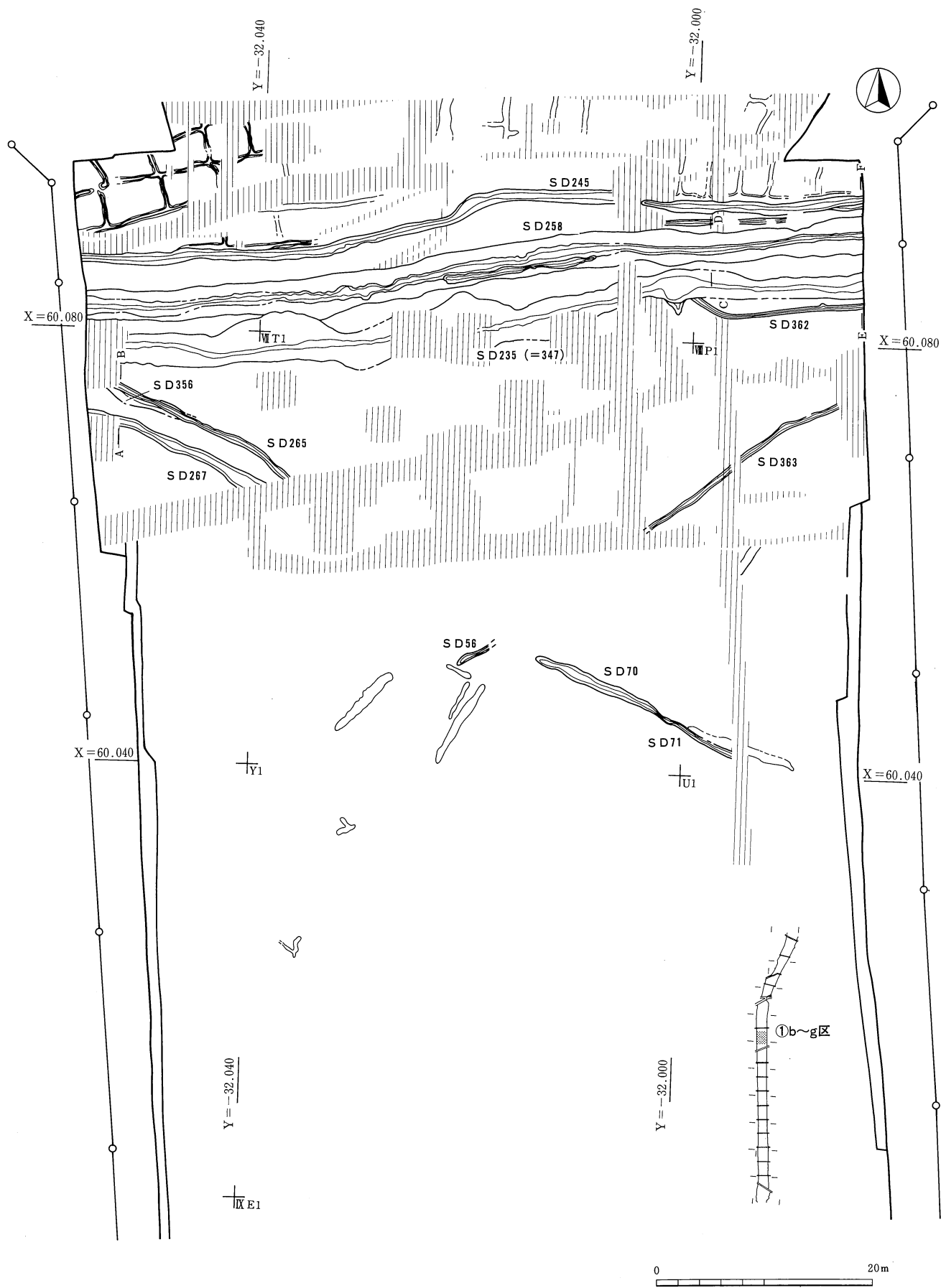


図46 古墳時代遺構分布図 7 (屋代遺跡群①区)

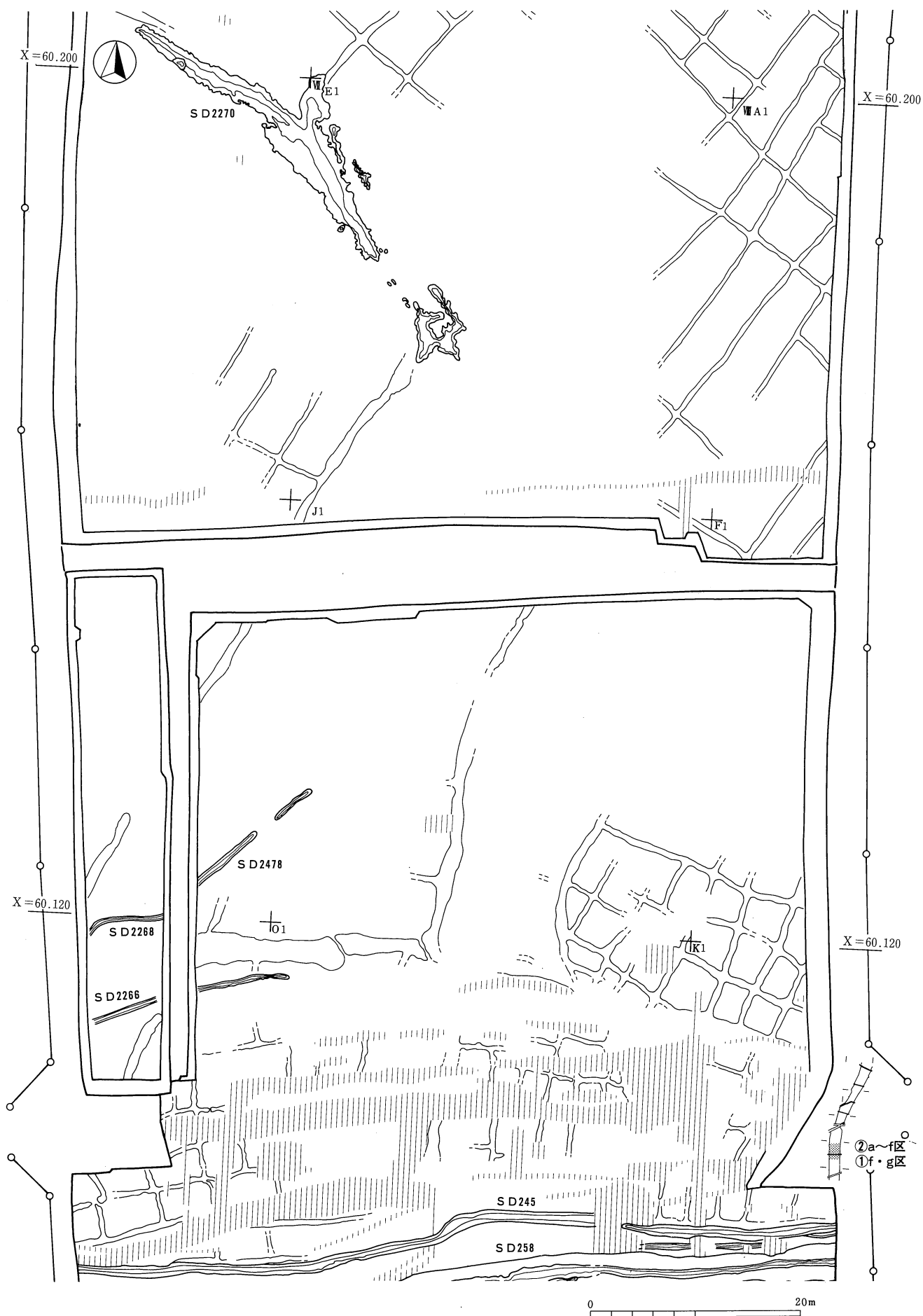


図47 古墳時代遺構分布図 8 (屋代遺跡群①f~②区)

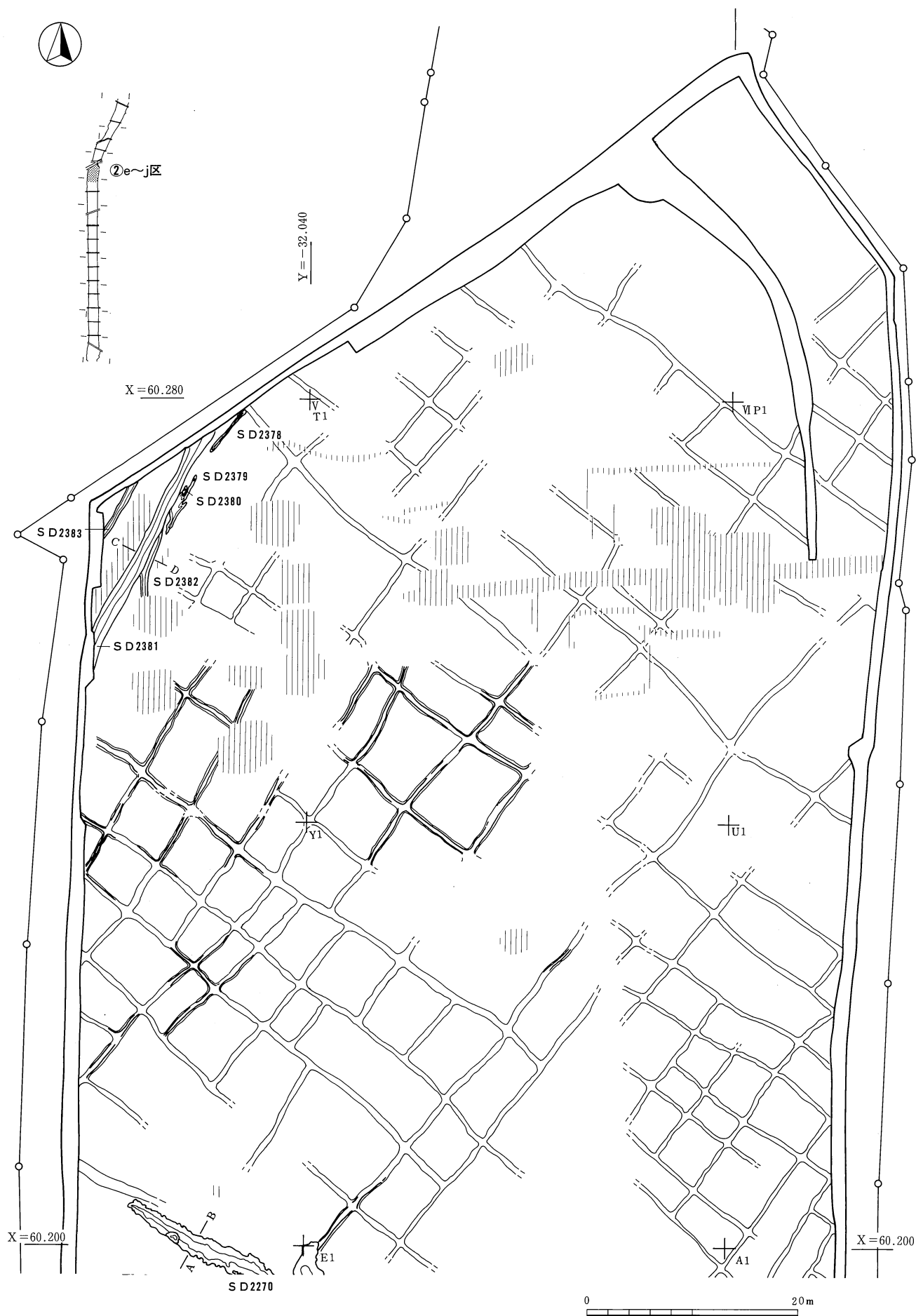


図48 古墳時代遺構分布図 9 (屋代遺跡群②区)

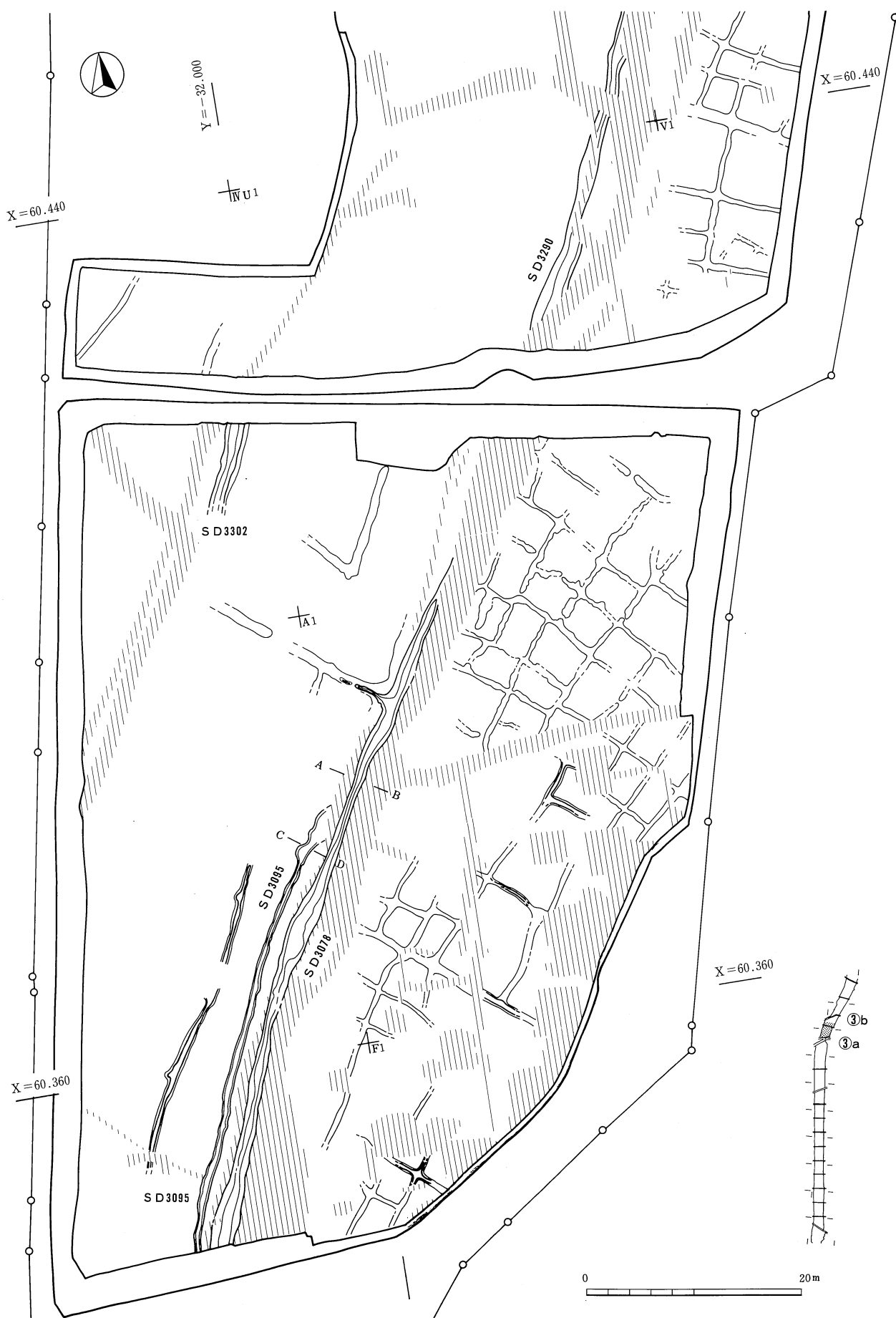


図49 古墳時代遺構分布図 10 (屋代遺跡群③区)

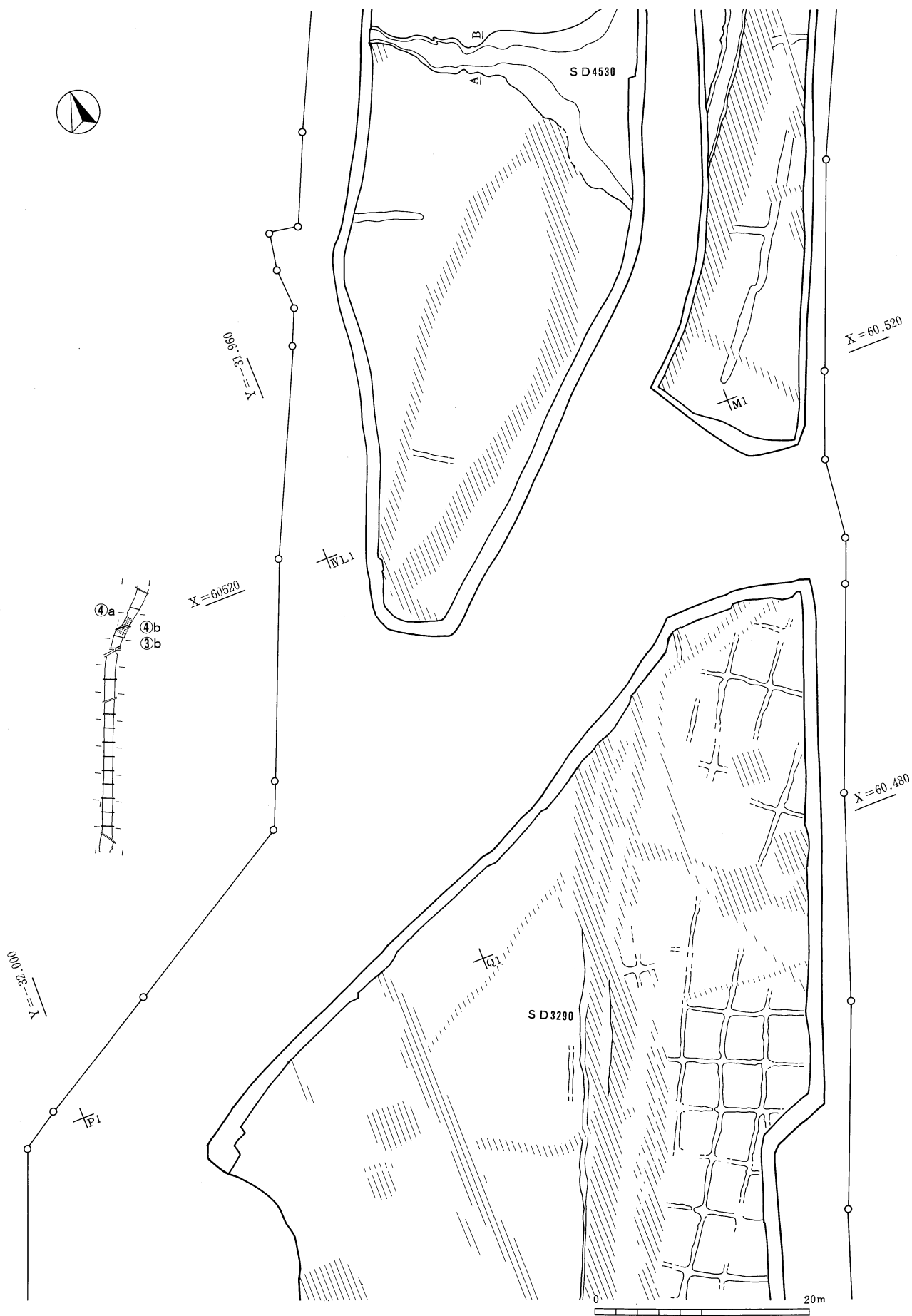


図50 古墳時代遺構分布図 11 (屋代遺跡群③b～④b区)

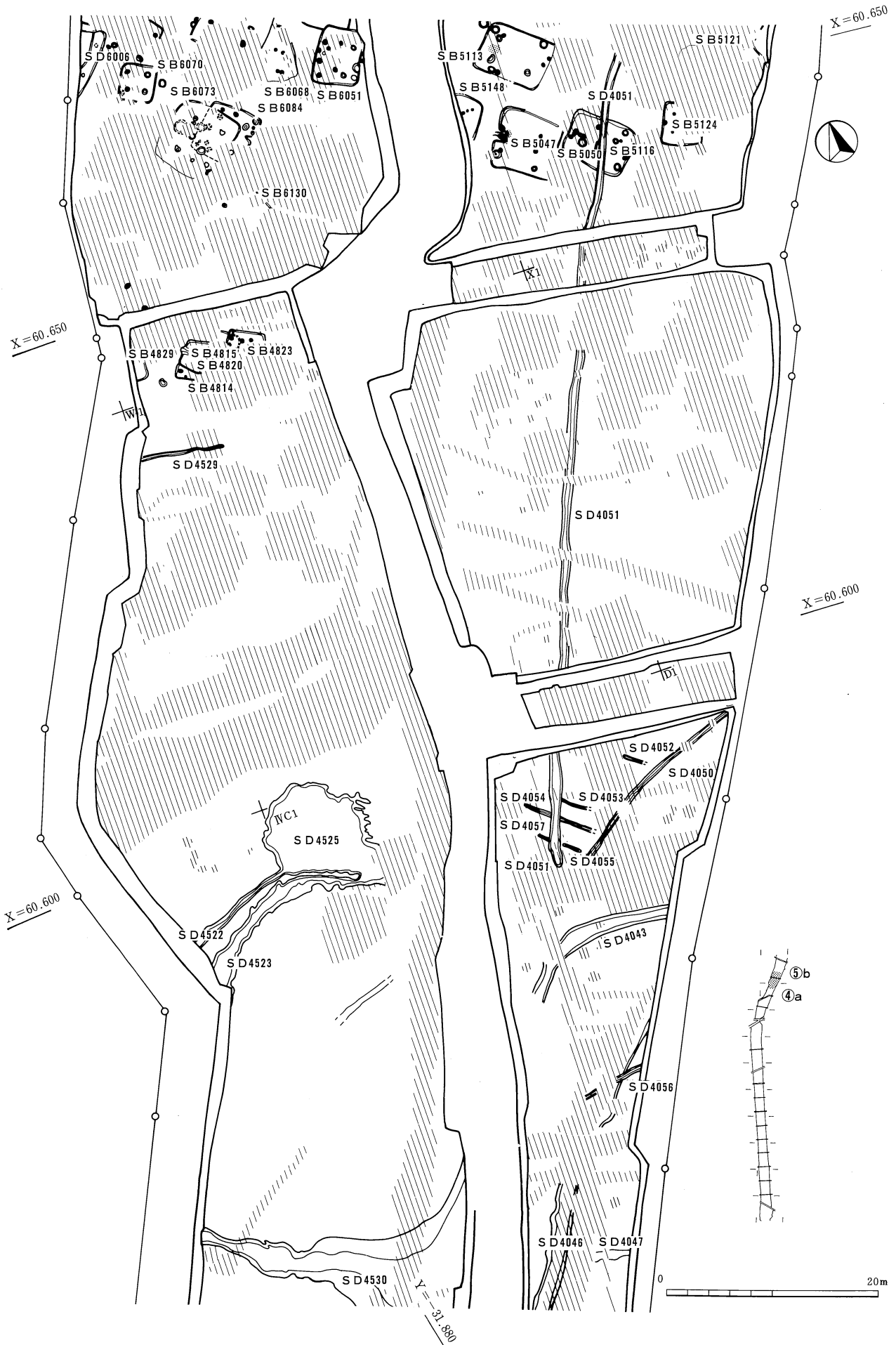


图51 古墳時代遺構分布图 12 (屋代遺跡群④~⑤b区)



図52 古墳時代遺構分布図 13 (屋代遺跡群⑤~⑥区)

溝・自然流路 (SD) 更埴条里遺跡

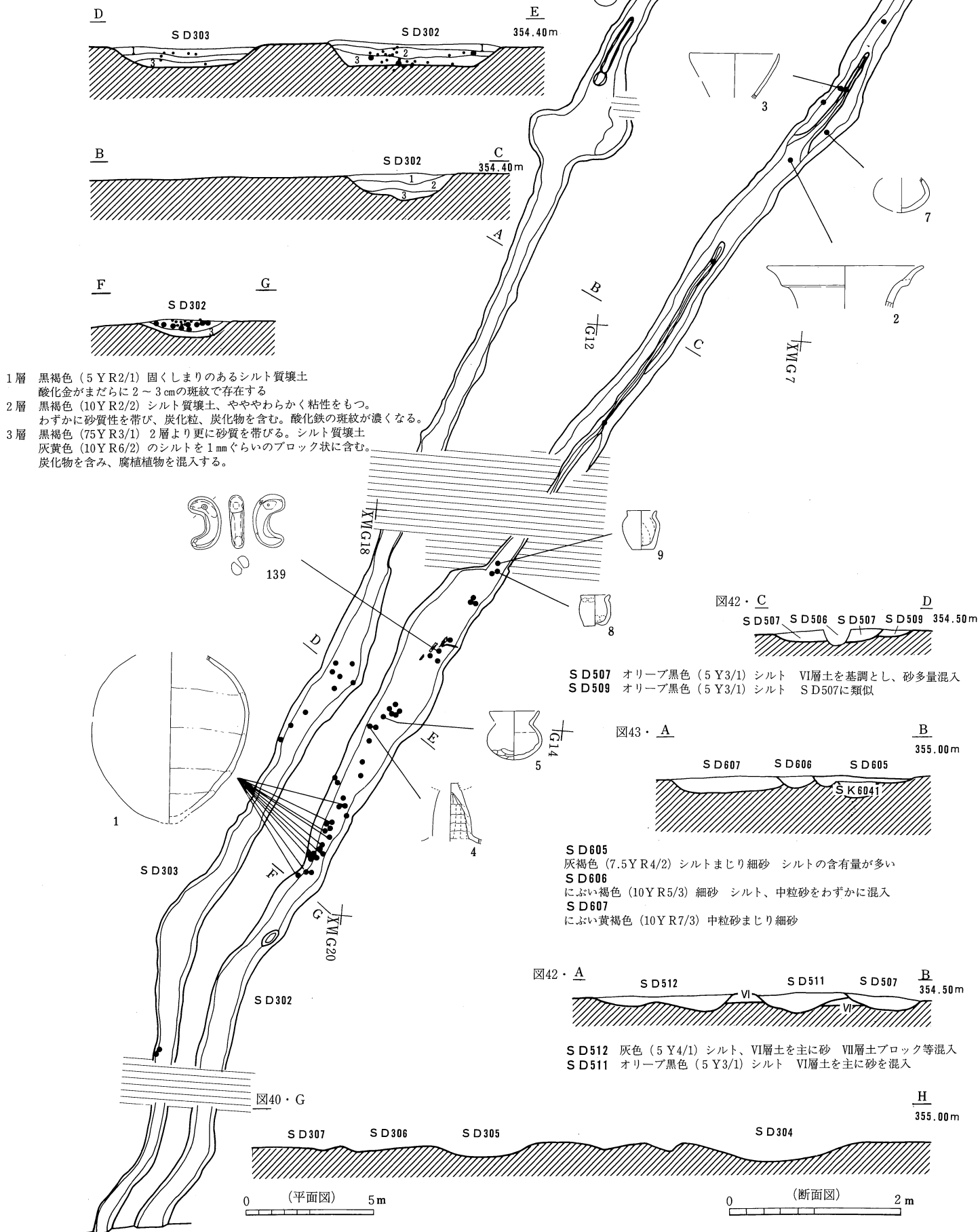
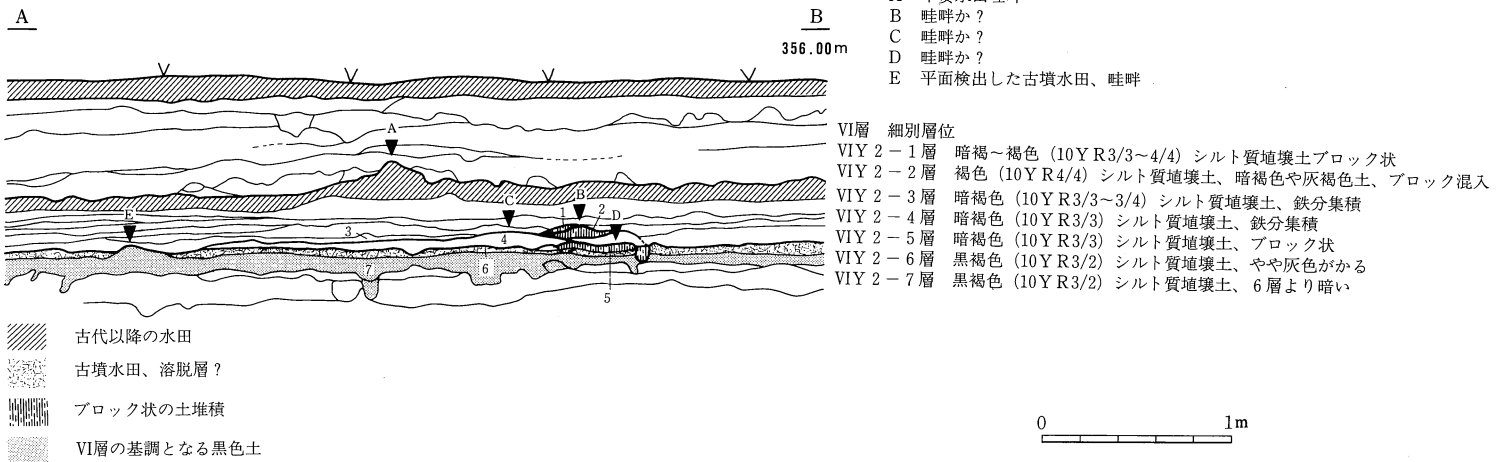


図53 古墳時代遺構個別図 1 (更埴条里遺跡水田域SD)

水田域 水田 (SC他) 屋代遺跡群②b区東壁断面



屋代遺跡群③b区東壁断面

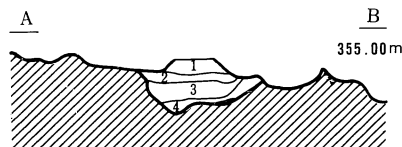
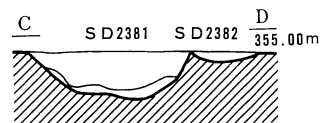
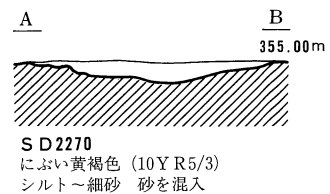
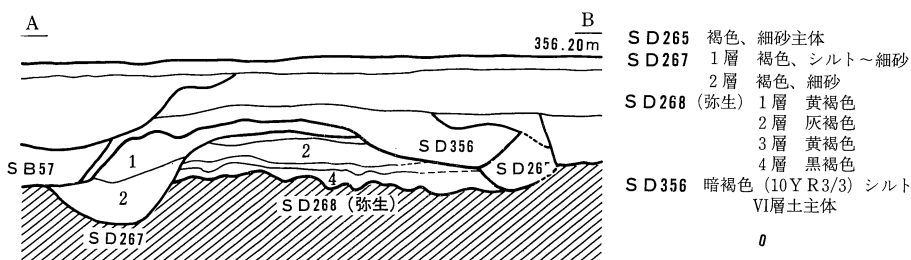
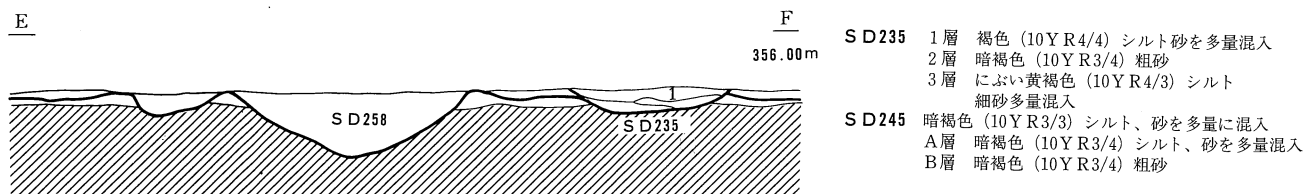
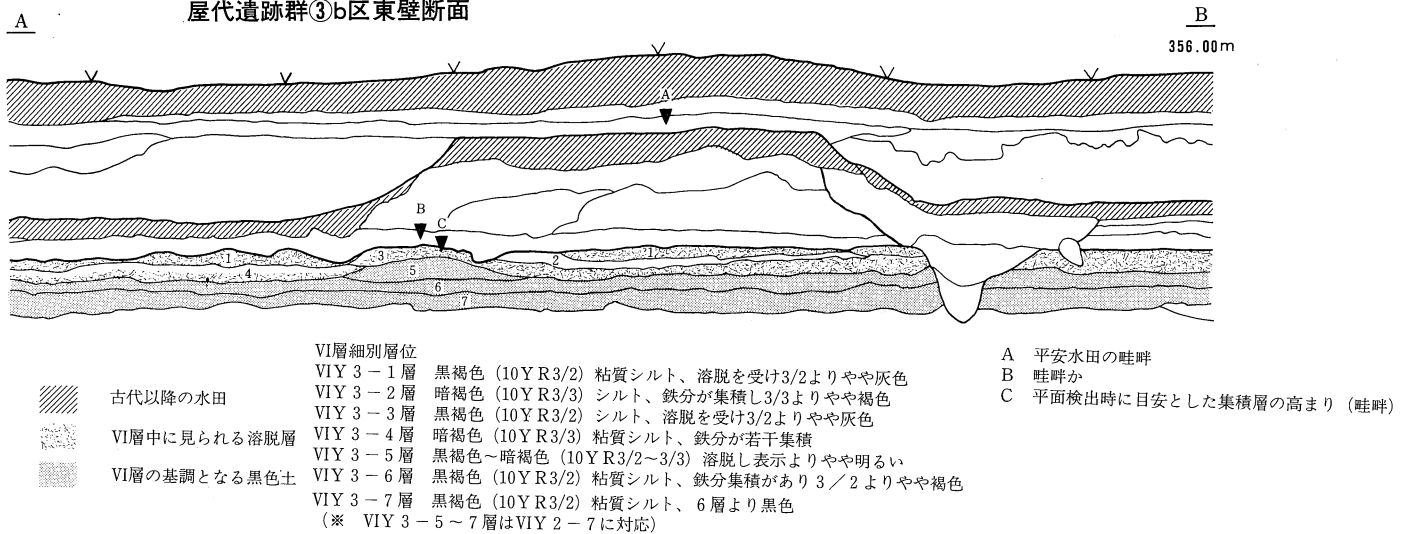
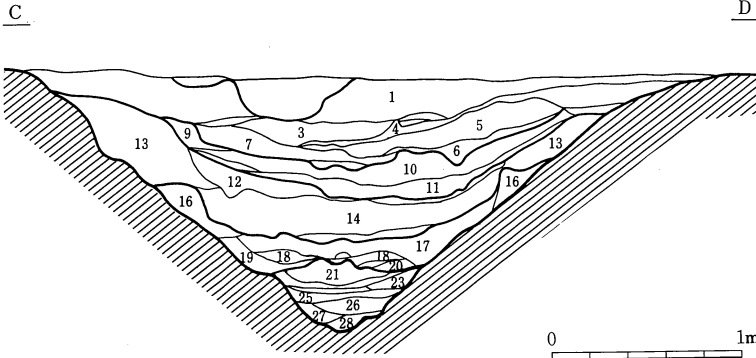


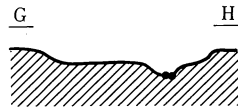
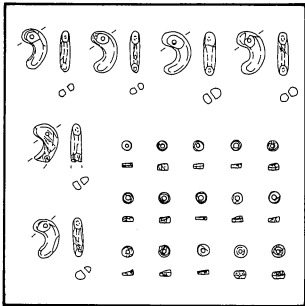
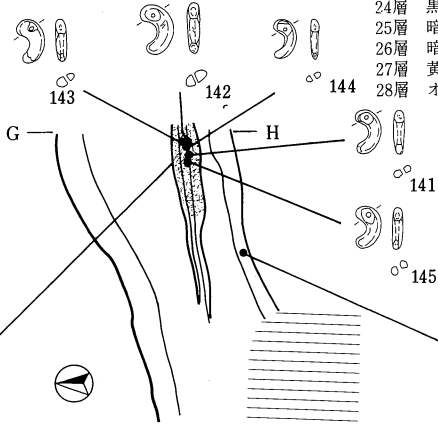
図54 古墳時代遺構個別図 2 (屋代遺跡群畦畔SD)

- S D 258**
- 1層 灰黄褐色 (10Y R6/2) 細砂 軽石粒微量混入
 - 2層 黄褐色 (2.5Y5/3) 中粒砂 4層粗砂と同時堆積の最上層か
 - 3層 におい黄褐色 (10Y R5/3) 中粒砂 粗砂がブロック状に入る部分有り
 - 4層 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗砂 下部に鉄分が集積
 - 5層 暗褐色 (10Y R3/4) 中粒砂 粗砂微量混入
 - 6層 黄灰色 (2.5Y4/1) 中粒砂 10層の粘質土を混入
 - 7層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 純粋な砂層
 - 8層 灰色 (5Y5/1) シルト~細砂 6層より粘性が弱い
 - 9層 におい黄褐色 (10Y R4/3) シルト~細砂 VI層土など混入
 - 10層 灰黄褐色 (10Y R5/2) 粘土 しまりよく、きめ細かい。植物遺体混入。下部から11層にかけて鉄分集積
 - 11層 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂
 - 12層 灰黄褐色 (10Y R4/2) シルト~細砂 VI層類似の土と砂が混在
 - 13層 灰黄褐色 (10Y R5/2) 細砂~粗砂 軽石粒混入
 - 14層 灰色 (5Y4/1) シルト 砂が少量混入
 - 15層 灰黄褐色 (10Y R4/2) 粗砂 粘質土微量混入
 - 16層 におい黄褐色 (10Y R4/3) シルト 砂やVI・VII層の土を混入する
 - 17層 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土~細砂 粘土と細砂がブロック状に混在
 - 18層 灰黄褐色 (10Y R5/2) 中粒砂
 - 19層 褐灰色 (10Y6/1) 粘土 砂微量混入
 - 20層 褐灰色 (10Y R4/1) 中粒砂 粒子のそろった砂層
 - 21層 におい黄褐色 (10Y R4/3) 粗砂 下部ほど粒子が粗い
 - 22層 灰黄褐色 (10Y R4/2) 粘質土 泥の堆積か
 - 23層 褐灰色 (10Y R4/1) 粘質土 砂とVII層の土が混在部分有り。
 - 24層 黒褐色 (10Y R3/1) 極粗砂 上・下部に鉄分集積有り
 - 25層 暗灰黄褐色 (7.5Y R3/3) 中粒砂
 - 26層 暗褐色 (7.5Y R3/3) 極粗砂 23層に比べ小円礫が入っていない
 - 27層 黄灰色 (2.5Y4/1) 細砂 24層よりやや細かい
 - 28層 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粗砂 砂利層



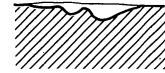
S D 235

Ⅲ 0.25



0 1m

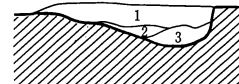
D 355.00m



S D 3095

暗褐色 (10Y R3/3) シルト VI層土が主体

355.00m



S D 4043

- 1層 褐灰色 (10Y R5/1) シルト 褐色土粒・ブロック混入
- 2層 暗灰色 (10Y R4/1) シルト
- 3層 暗灰色 (10Y R4/1) シルト 褐色土粒子混入

A B 355.00m



S D 4530

灰色 (——) 細砂 炭化物、灰白色細砂ブロックなど混入

355.00m



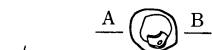
S D 4046

- 1層 暗褐色 (10Y R3/3) シルト
- 2層 褐色 (10Y R4/6) シルト~粘質土 底部に鉄分集積

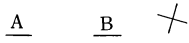
土坑 (SK)

更塚条里遺跡 水田域

Ⅲ VA 20

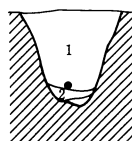
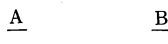


Ⅲ VB 3



SK 5109

オリーブ黒色 (5Y3/1) VI層を基調砂多量混入



SK 7214

- 1層 褐灰色 VI層土が灰色がかり ブロック混入
- 2層 —— 1層より粘質となる
- 3層 —— 粗砂

0 2m

図55 古墳時代遺構個別図 3 (屋代遺跡群SD、更塚条里遺跡SK)

更埴条里遺跡K地区 微高地
掘立柱建物跡（ST）

ST 926

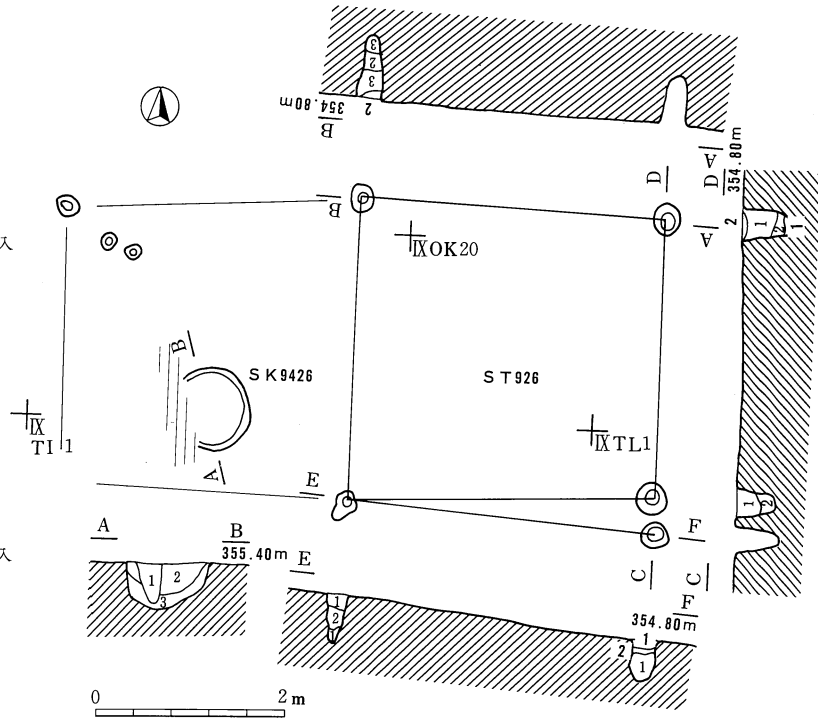
- 1層 褐灰色（10Y R5/1）シルト主体 褐色土ブロック混入
- 2層 灰褐色（7.5Y 4/2）シルト 粗い砂を混入する
- 3層 褐色（10Y R4/6）シルト主体

土坑（SK）

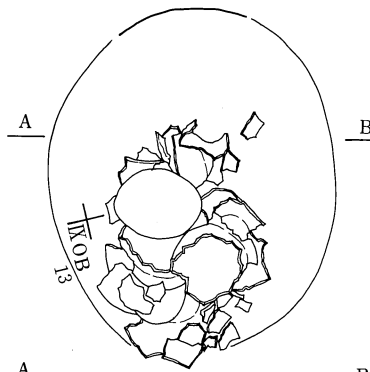
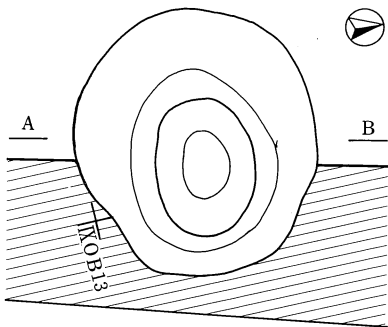
SK 9426

（古代参考資料）

- 1層 灰褐色（7.5Y 4/2）シルト VI層土ブロック混入
- 2層 灰褐色（7.5Y 4/2）シルト VI層土ブロック減少
- 3層 黒褐色（10Y R3/2）シルト VI層土を基調とする、
灰褐色土ブロック混入



SK 9512



SK 9512

- 1層 黄灰色（2.5Y 6/1）シルト～粘土
灰色粘土ブロック、酸化鉄斑紋含む
- 2層 浅黄色（2.5Y 7/3）シルト～粘土
灰色粘土ブロック、酸化鉄斑紋含む。1層より明るく、砂が増加。
- 3層 黄灰色（2.5Y 6/1）シルト～粘土
灰色粘土ブロック多量、酸化鉄斑紋含む
- 4層 浅黄色（2.5Y 7/3）シルト～粘土
炭化物粒子、灰色粘土ブロック、酸化鉄斑紋含む。
- 5層 黄灰色（2.5Y 5/1）シルト～粘土
黄灰色粘土ブロック、酸化鉄集積あり
- 6層 黄灰色（2.5Y 5/1）シルト～粘土
黄灰色粘土ブロック、酸化鉄集積あり。
5層より砂質になる
- 7層 黄灰色（2.5Y 5/1）シルト～粘土
黄灰色粘土ブロック、酸化鉄集積あり。
- 8層 黄灰色（2.5Y 5/1）シルト～粘土
黄灰色粘土ブロック、酸化鉄集積あり。
7層より暗い。

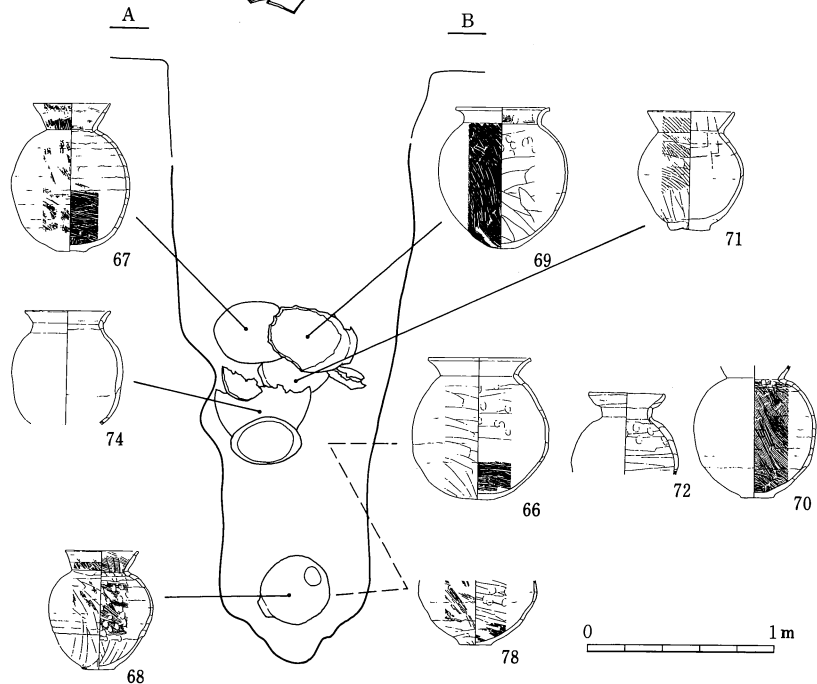
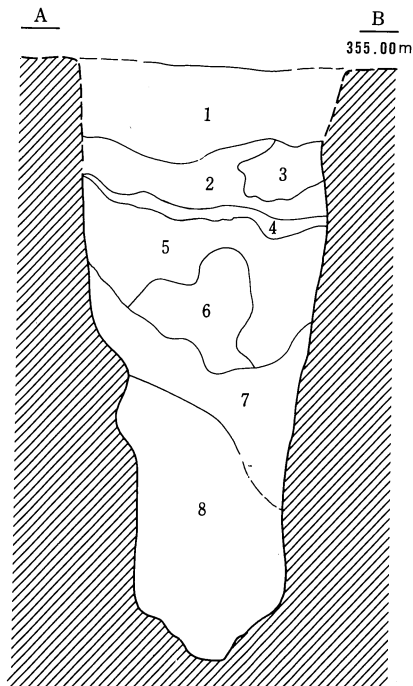


図56 古墳時代遺構個別図 4（更埴条里遺跡ST・SK）

第4節 集落域および旧河道域の遺構と遺物出土状況

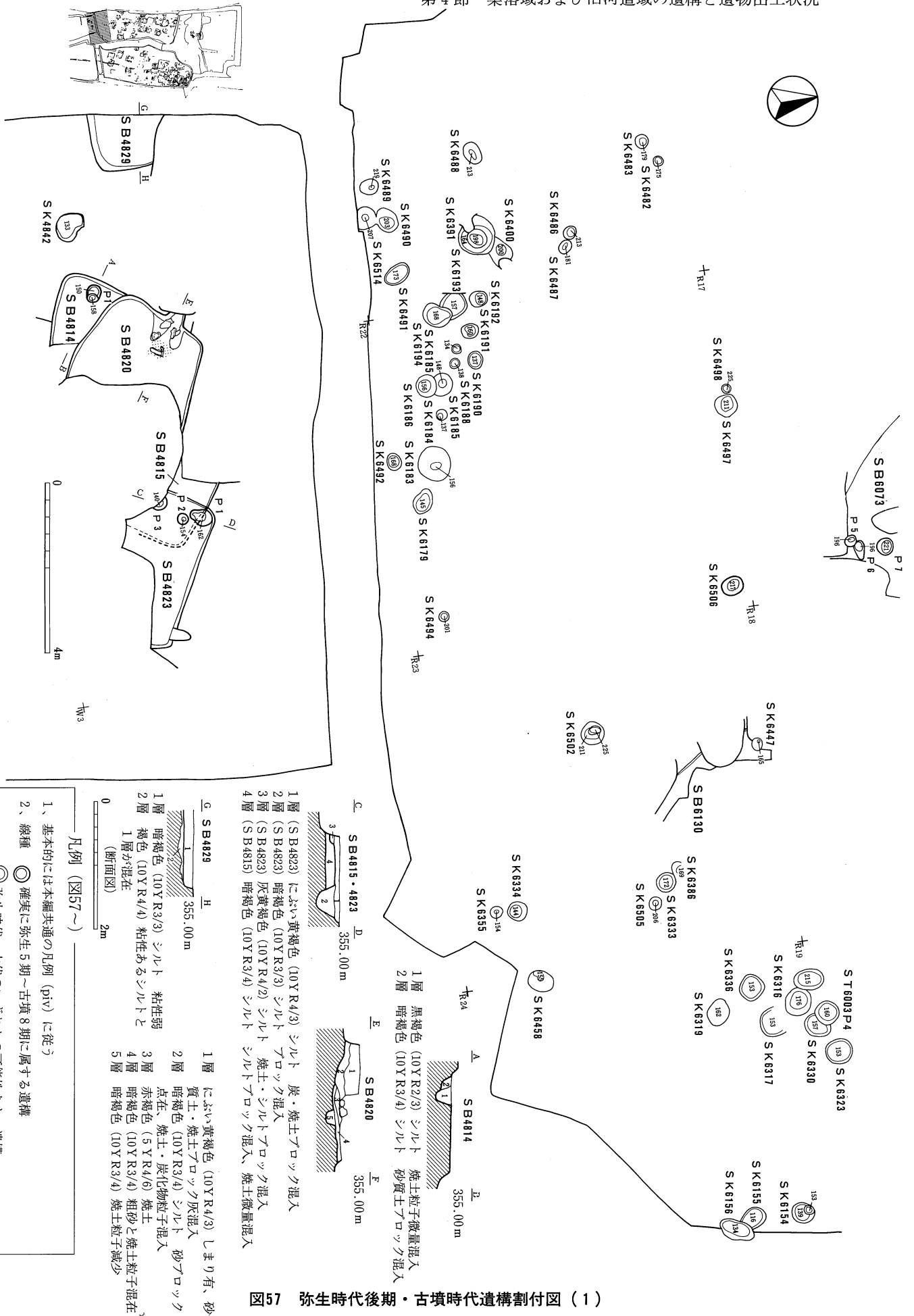


図57 弥生時代後期・古墳時代遺構割付図(1)

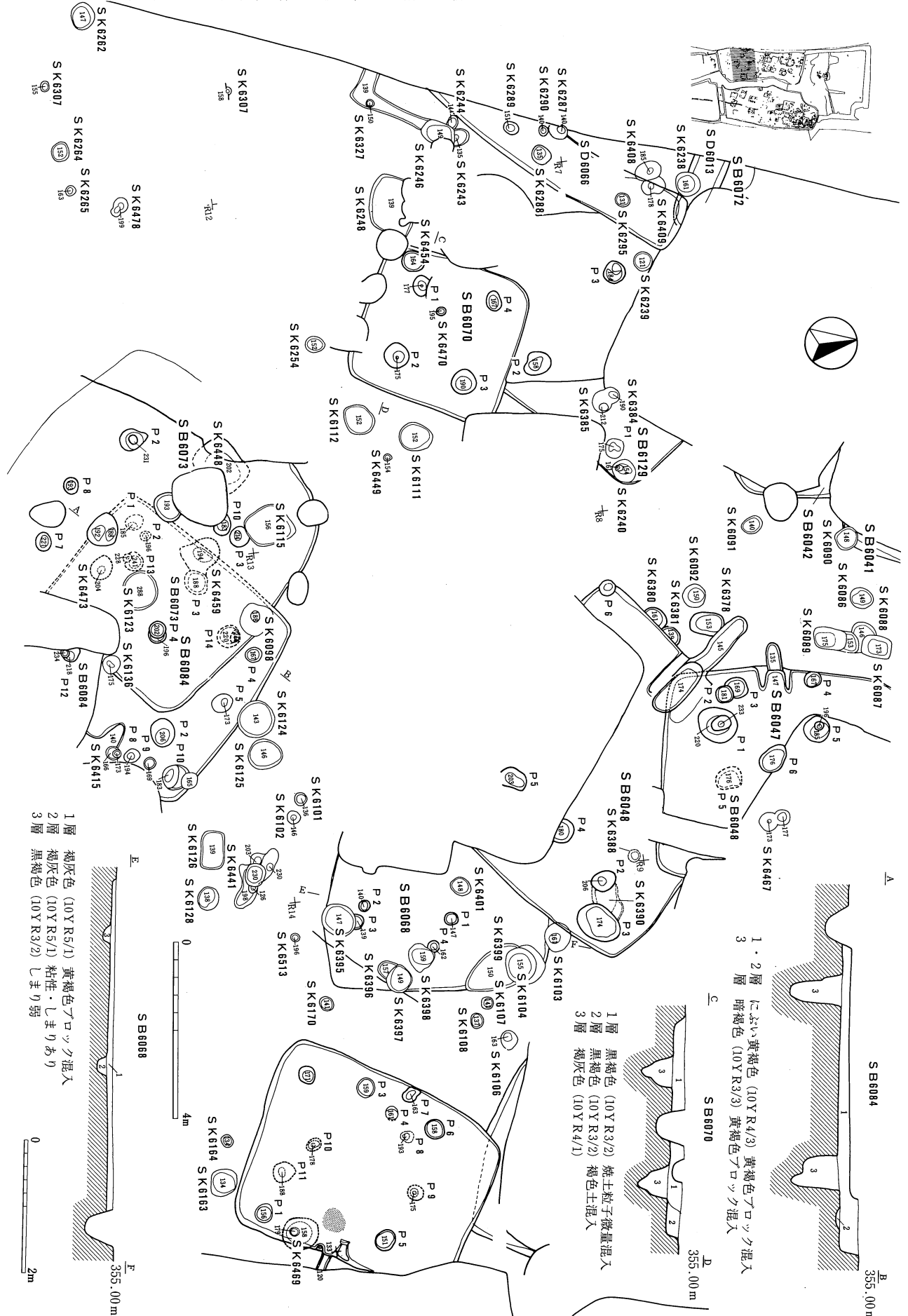


図58 古墳時代遺構副付図（2）

第4節 集落域および旧河道域の遺構と遺物出土状況

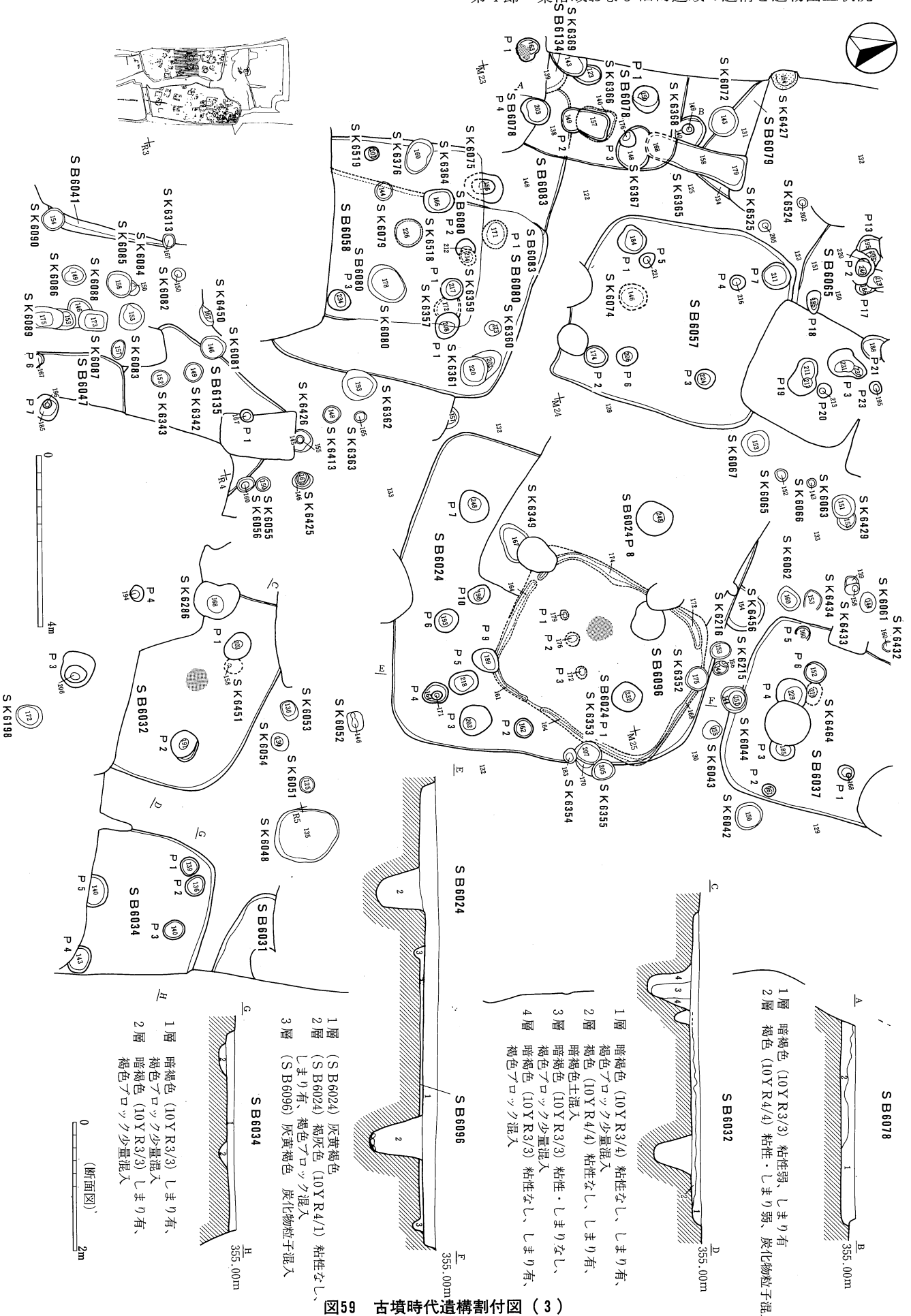
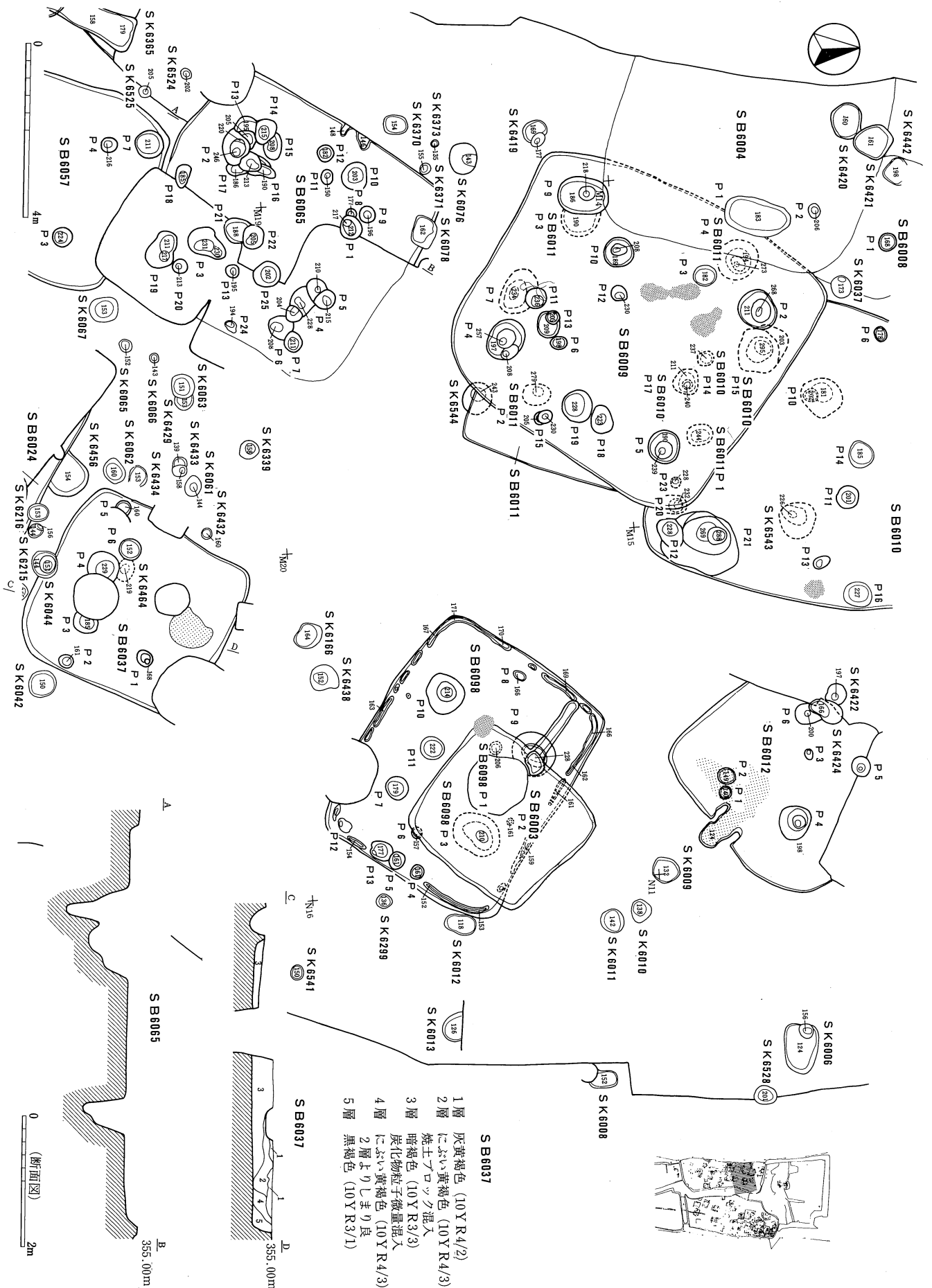


図59 付録3 付録4 遺構と遺物出土状況



(4) 図 弥生時代後期～古墳時代（VI層上面検出）の遺構と遺物

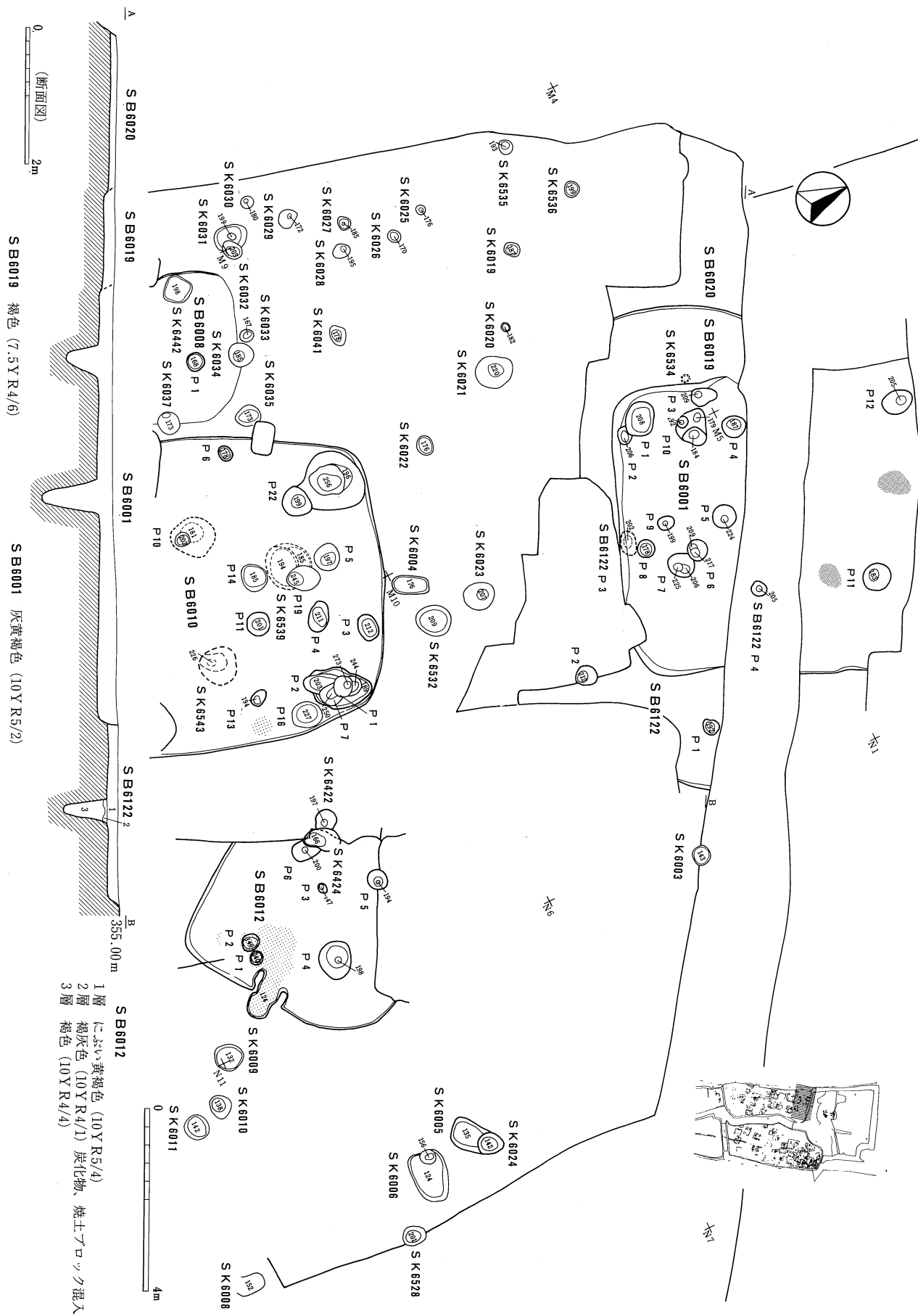


図61 古墳時代遺構副付図(5)

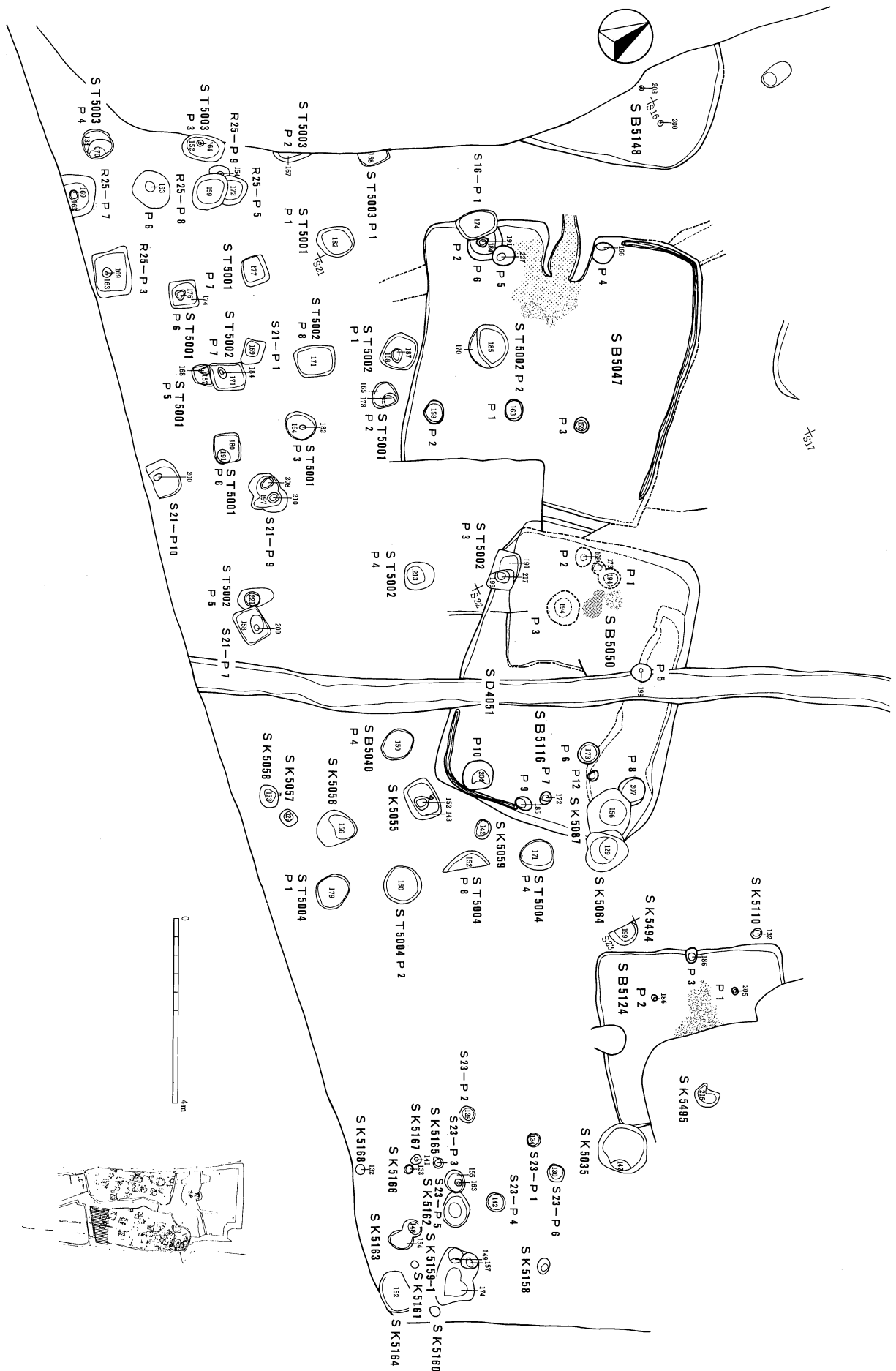


図62 古墳時代遺構副付図(6)

第4節 集落域および旧河道域の遺構と遺物出土状況

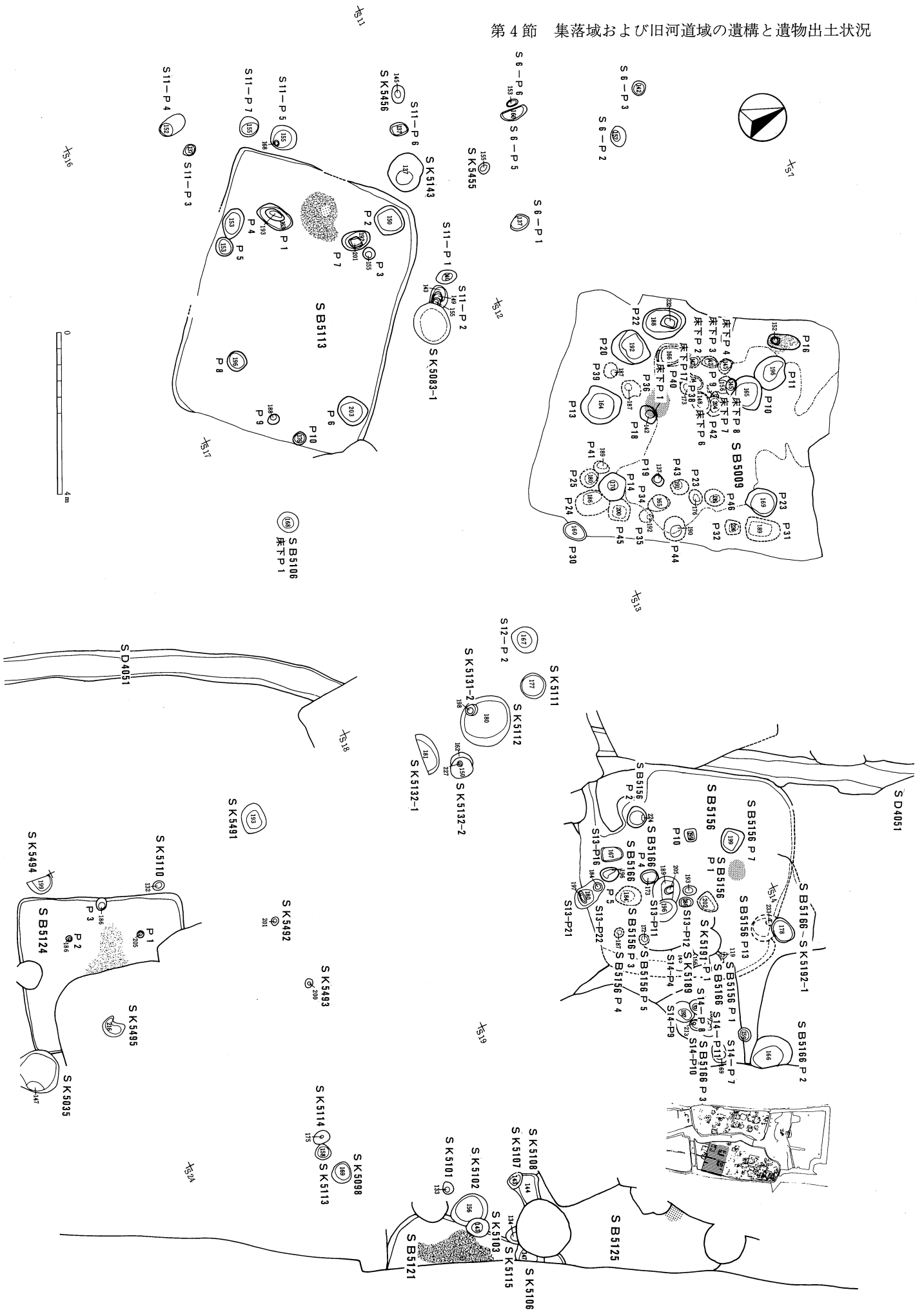


図63 古墳時代遺構配置図(7)

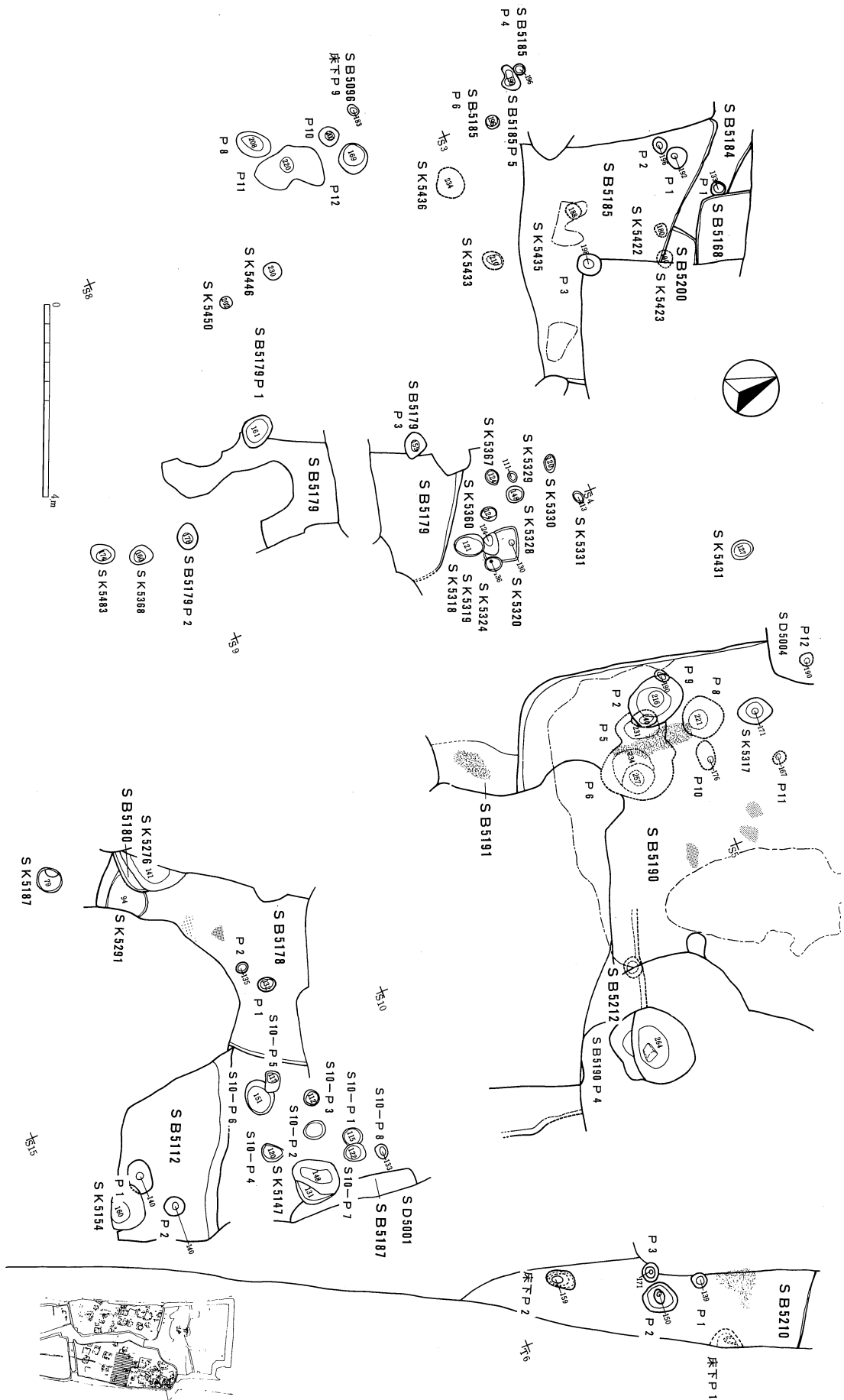


図64 古墳時代遺構割付図（8）

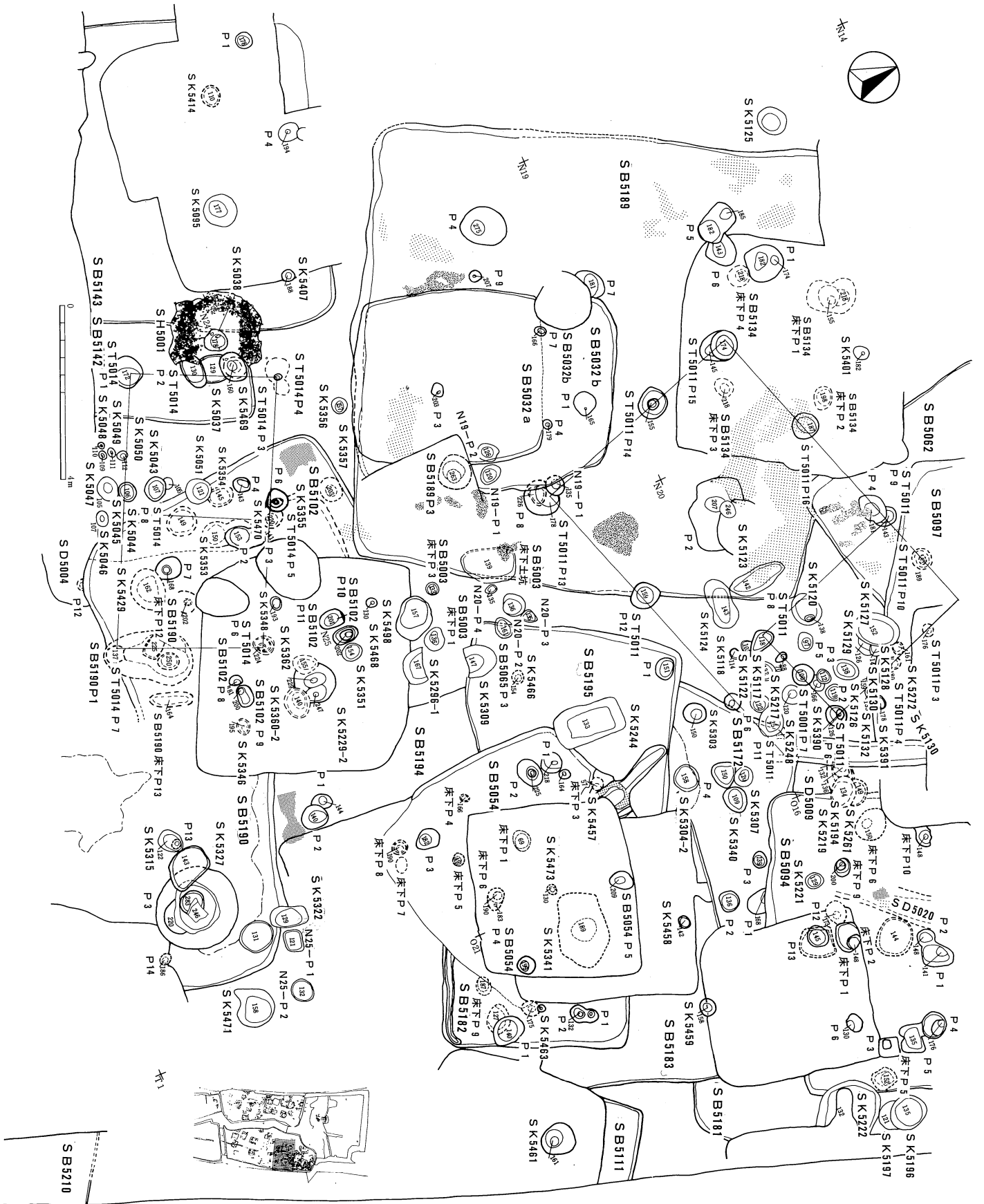
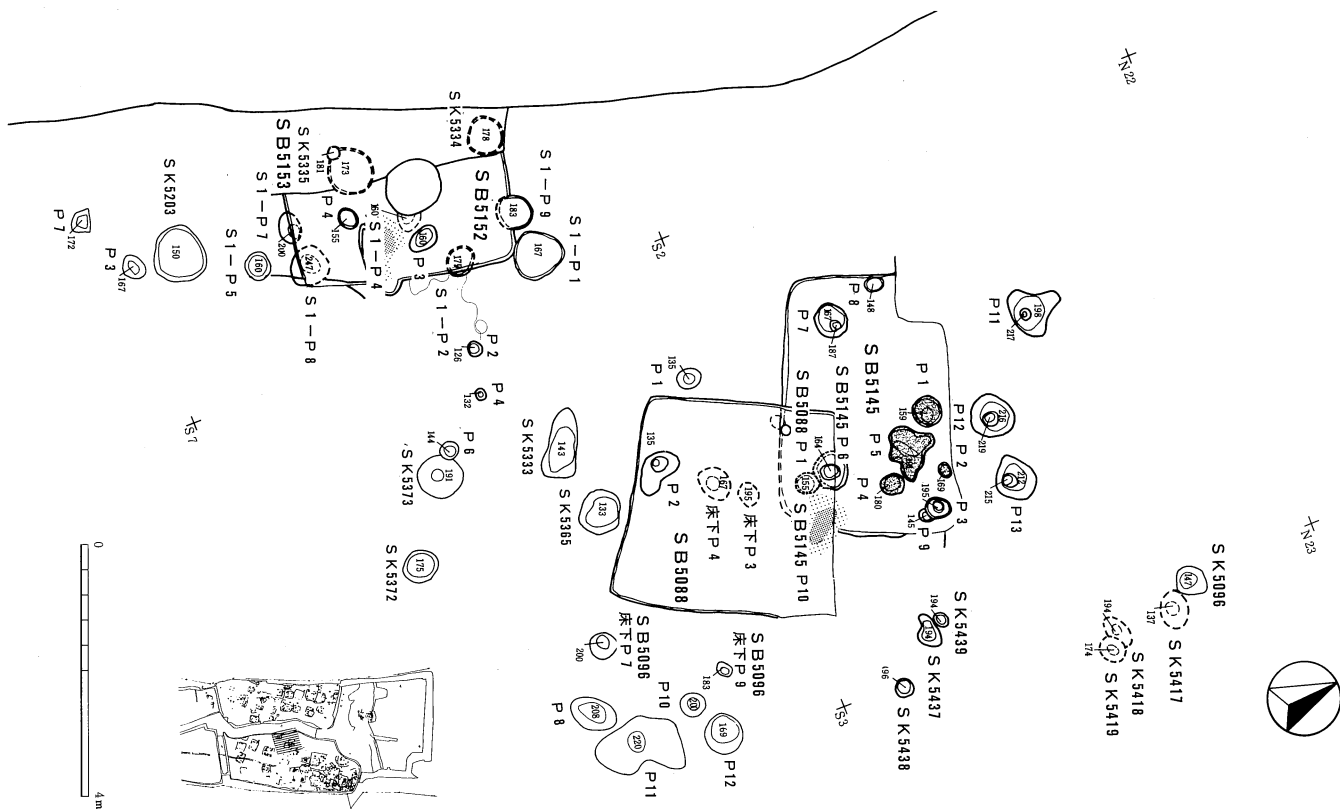
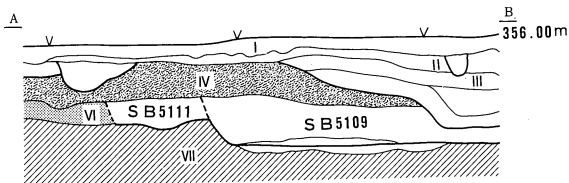


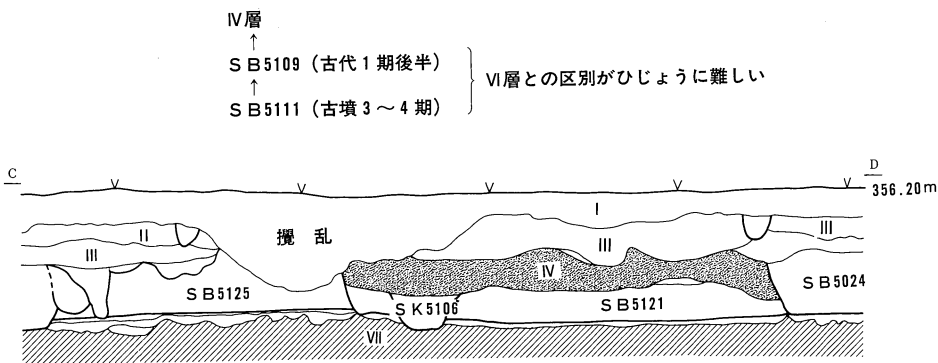
図65 古墳時代遺構割付図(9)



屋代遺跡群⑤b区 東壁 基本土層図



- I 層 現耕作土および攪乱
- II Y 5層 黒褐色 (10Y R3/2) シルト～砂 粘性しまりなし
- III Y 5層 黒褐色 (10Y R2/3) シルト～砂 粘性しまりなし
他地区で見られた 洪水砂III-2層がなく、
全て黒色化している。中世遺構の埋土
- IV Y 5層 黒褐色 (10Y R3/2) シルト～砂 粘性なし しまり有 他地区の
IV-1層が全て、水田土壌であるのに対し、
ここでは異なる。砂質が強く、黒色化している。
主に平安時代遺構の埋土
- V Y 5層 暗褐色 (10Y R3/3) シルト IV層に比べ粘性が高い。しまりやや
あり、黒色化していないVI層ブロックおよび
VII層ブロックが混入する。主に古墳時代遺構
の埋土
- VII Y 5層 にぶい黄褐色 (10Y R5/3) 砂～シルト 他地区に比べ砂が多い



- IV層
- ↑
- SB5109 (古代1期後半)
- ↑
- SB5111 (古墳3～4期)
- VI層との区別がひじょうに難しい
- SB5024 (古代)
- ↑
- SB5121 (古墳1期) 廃絶後の凹地にIV層が堆積
- ↑
- SB5125 (古墳1期以前)

(断面図) 4m

図67 古墳時代遺構割付図(11)・集落域基本土層図

集落域 竪穴住居跡 (SB) 屋代遺跡群⑤区

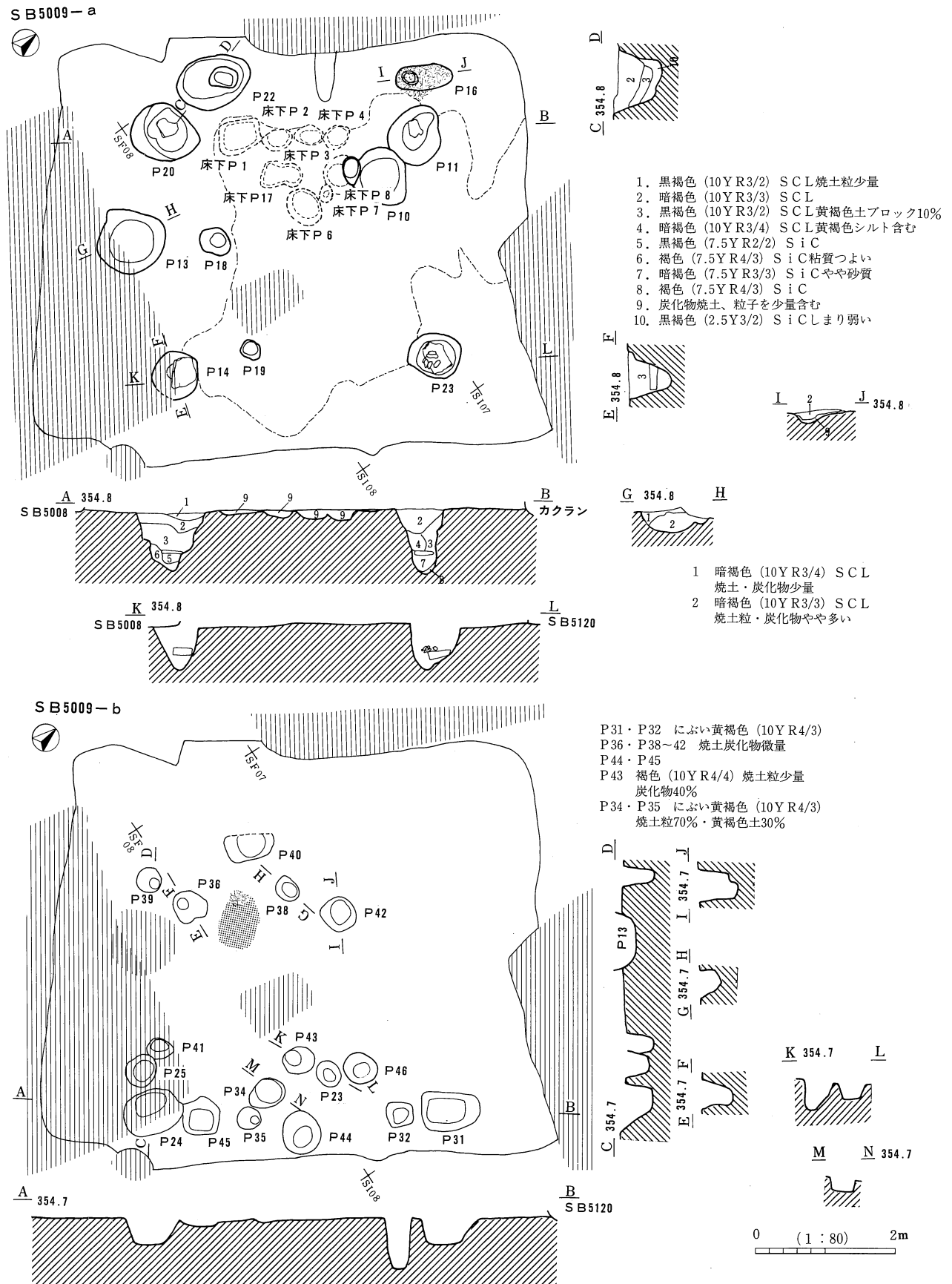


図68 古墳時代遺構個別図 16 (屋代⑤区SB)

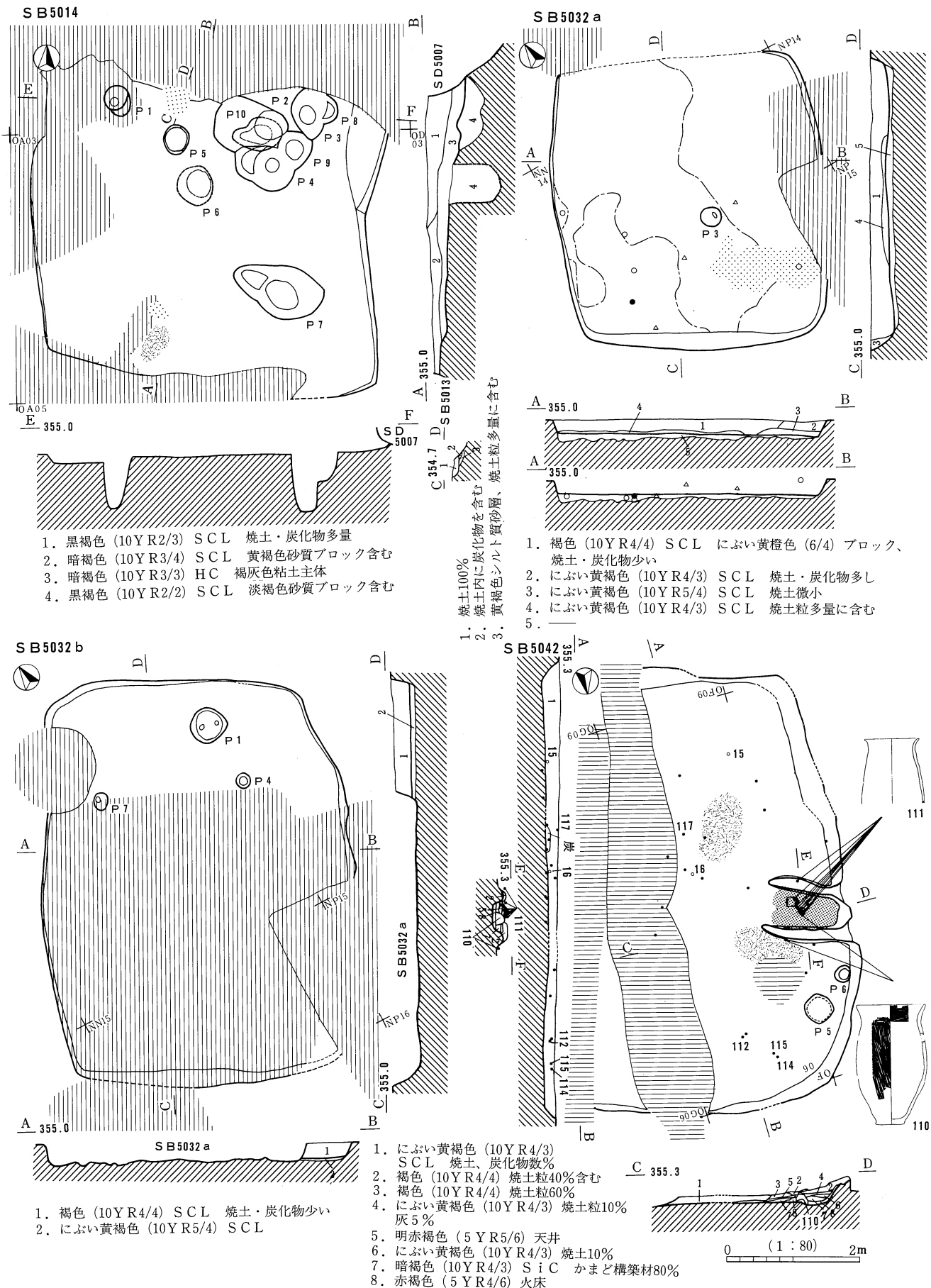


図69 古墳時代遺構個別図 17 (屋代⑤区SB)

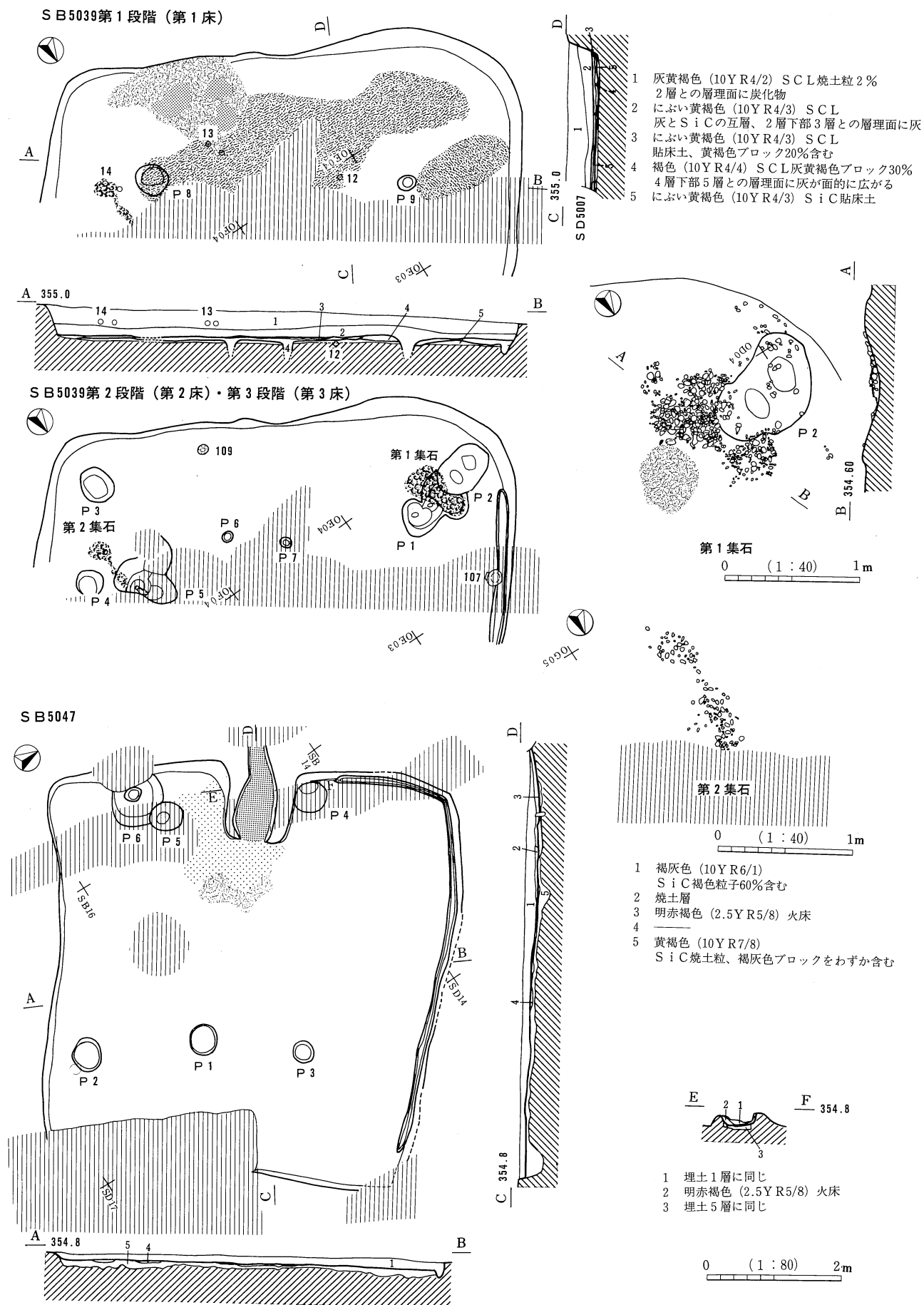


図70 古墳時代遺構個別図 18 (屋代⑤区SB)

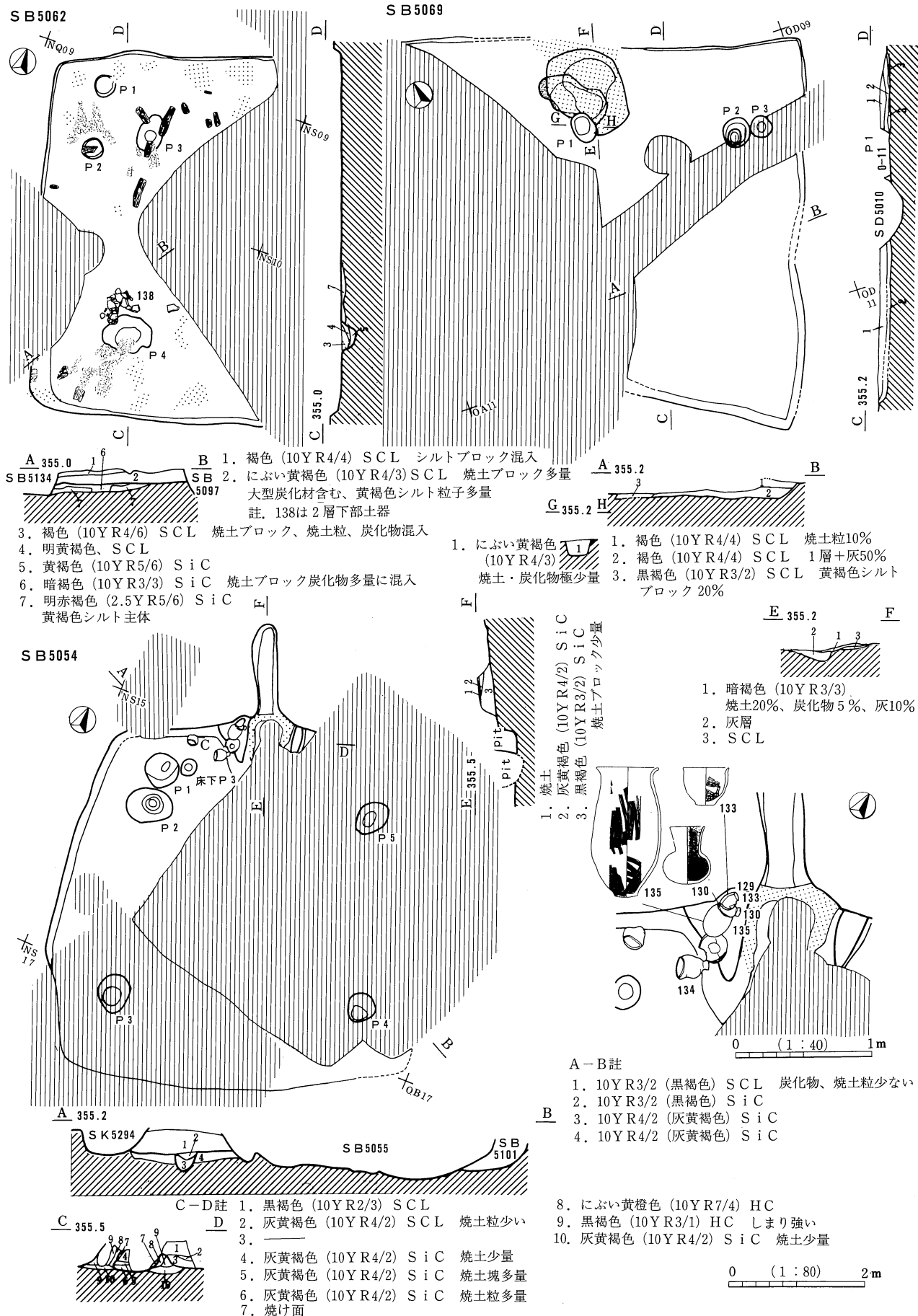


図71 古墳時代遺構個別図 19 (屋代区SB)

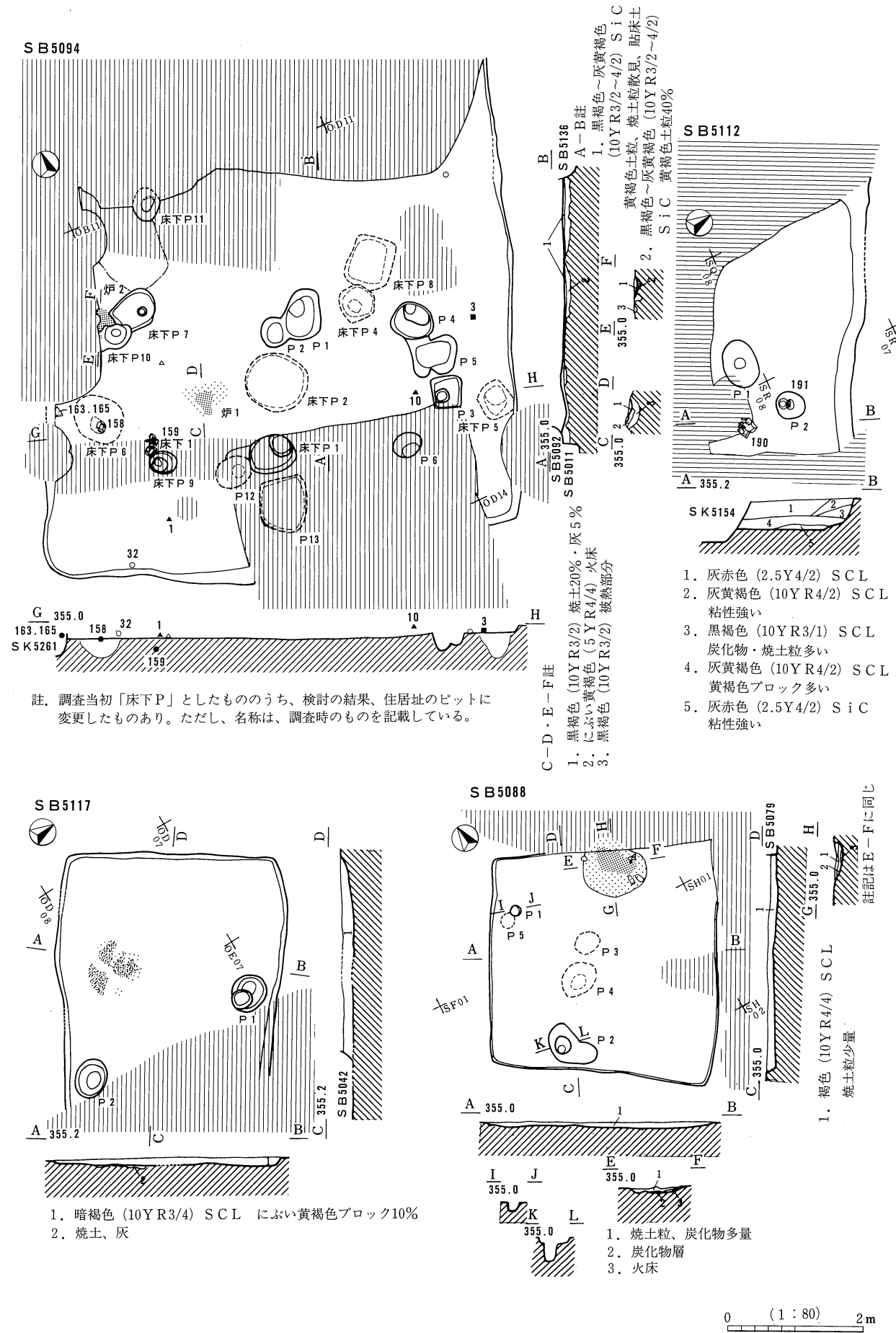


図72 古墳時代遺構個別図 20 (屋代⑤区SB)

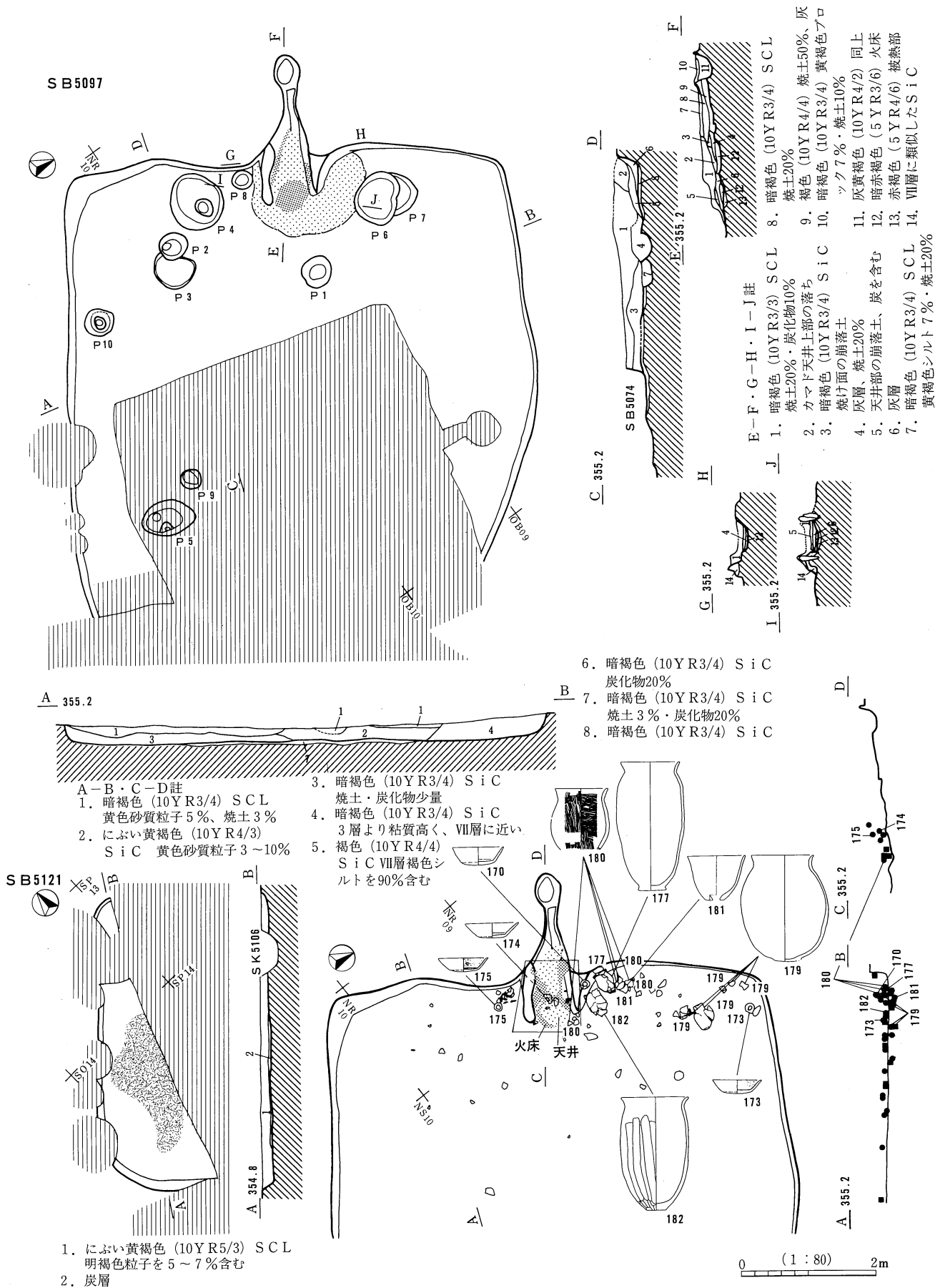


図73 古墳時代遺構個別図 21 (屋代⑤区SB)

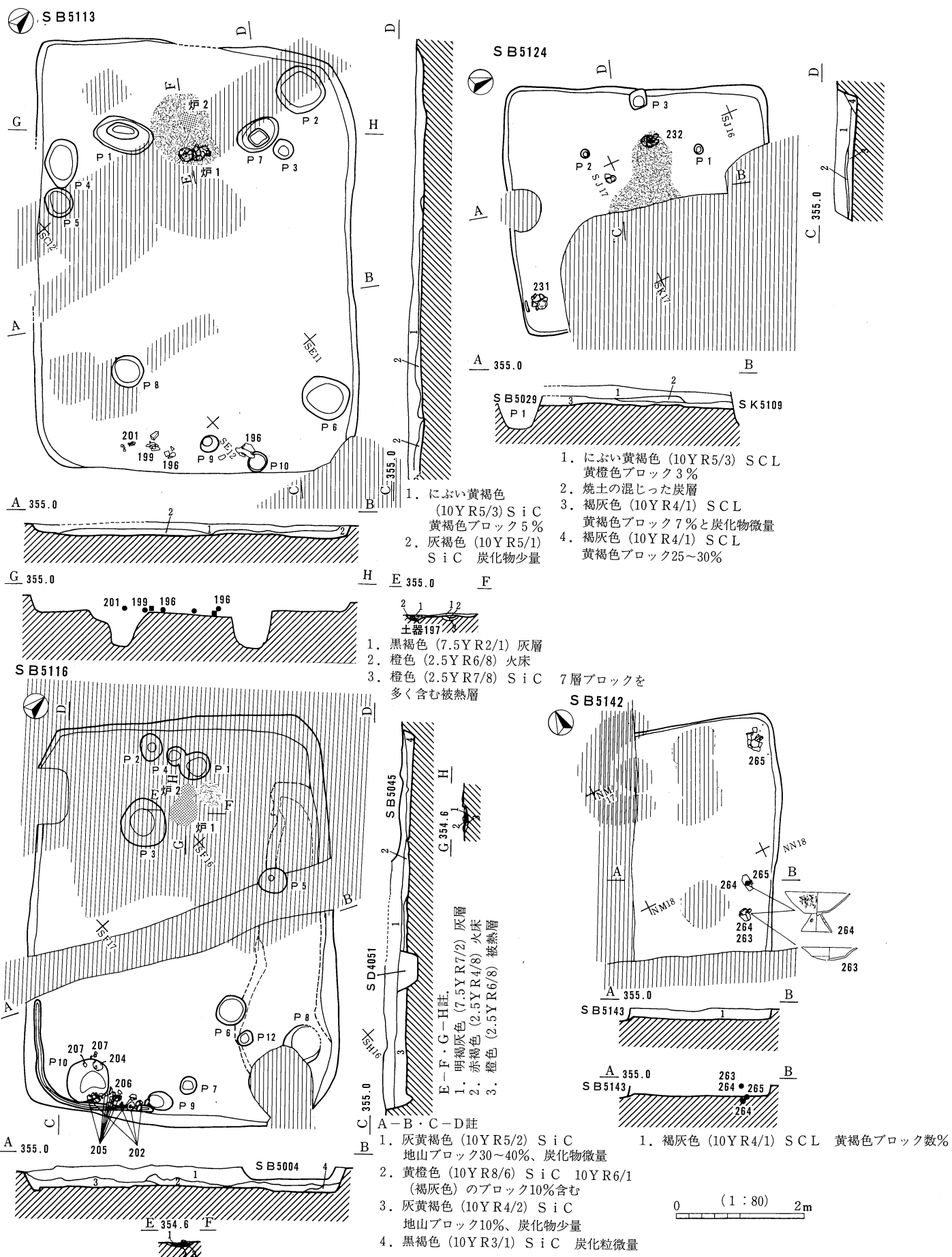
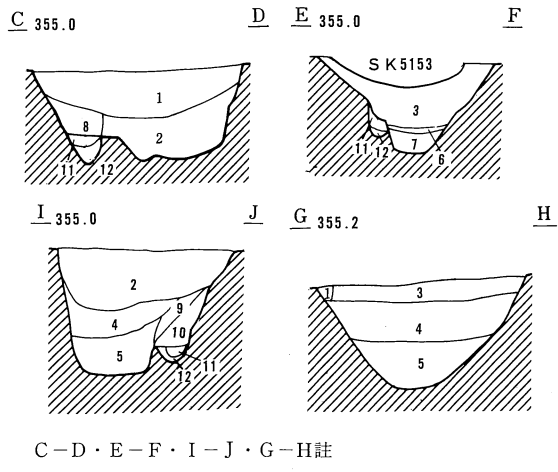
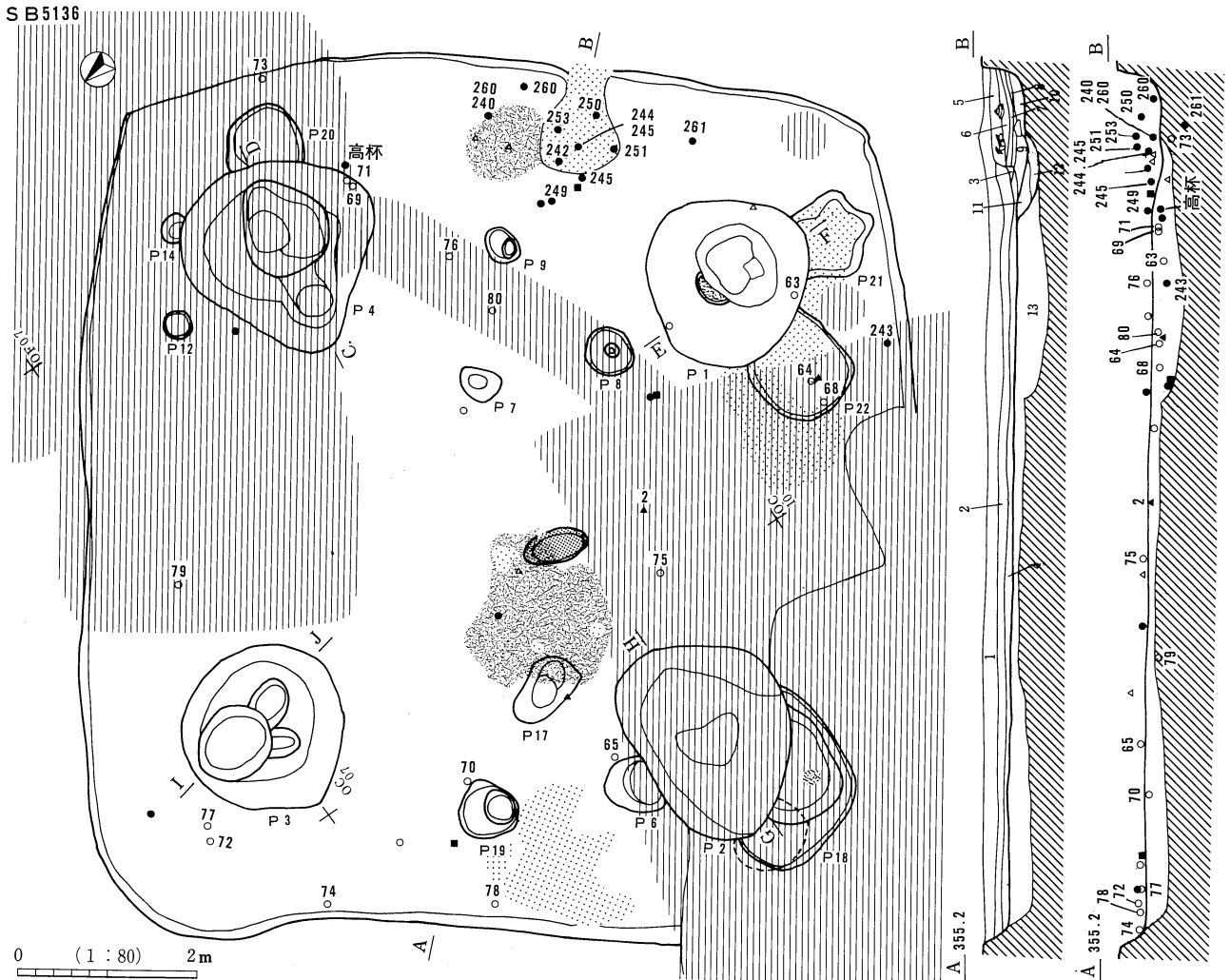


図74 古墳時代遺構個別図 22 (屋代⑤区SB)



- A-B註
1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) SiC 焼土粒・炭化物粒多量、赤褐色土小ブロック含む
 2. 黄褐色 (2.5Y5/4) SiC 暗オリーブ褐色土がブロック状に混在
 3. 黄褐色 (2.5Y5/4) SiC 2層より焼土ブロックを多く含む
 4. 灰色 (5Y5/1) ~ 灰オリーブ色 (5Y5/2) SiC (パウダー状) 粘性がわずか、しまり少々
 5. 黄褐色 (2.5Y5/4) 2層に焼土粒小ブロック含む
 6. 黄褐色 (2.5Y5/4) 5層にさらに多くの焼土粒ブロック含む
 7. 黄褐色 (2.5Y5/3) SiC 炭化物粒・焼土粒ブロック多量
 8. 黒色 (10YR2/1) SiC 炭化物層。粘性少々あり、しまり少い
 9. 明赤褐色 (2.5YR5/8) SiC 粘性あり、しまりつよい
 10. 黄褐色 (2.5Y5/4) SiC 粘性あり、しまりつよい。VII層起源のカマド構築土
 11. 黄褐色 (2.5Y6/4) SiC 粘土状。粘性あり、しまり少い
 12. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) SiC 粘性あり、しまりやわらかい
 13. 黒褐色 (2.5Y3/1)

- C-D・E-F・I-J・G-H註
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) SiC 黄褐色土粒炭化物粒・焼土粒が全体に入る
 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) SiC 黄褐色土混在、1層土とVII層がそれぞれ大小ブロック状に混在
 3. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) SiC 焼土粒、炭化物粒、黄褐色土ブロック点在
 4. 黄灰色 (2.5Y4/1) ~ 黒褐色 (2.5Y3/1) SiC 炭化物粒全体に点在、鉄分斑紋
 5. 黒褐色 (2.5Y3/1) 黄褐色土 (地山土) ブロック多量 粘性しまりあり
 6. オリーブ黄色 (5Y6/3) S 粘性、しまりなし
 7. 黒褐色 (10YR3/1) SiC 粘性あり、しまりなし
 8. 黄灰色 (2.5Y4/1) ~ 黒褐色 (2.5Y3/1) 黄褐色土ブロック
 9. 明黄褐色 (10YR6/6) SiC VII層と同じ、粘性あり
 - 10.
 11. HC 灰色粘土にうすい黄褐色土小ブロック混在、炭化物が入る
 12. HC 灰色粒とうすい黄褐色土がレンズ状に入る

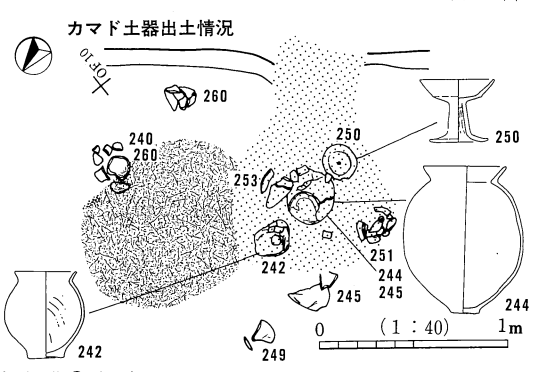


図75 古墳時代遺構個別図 23 (屋代5区SB)

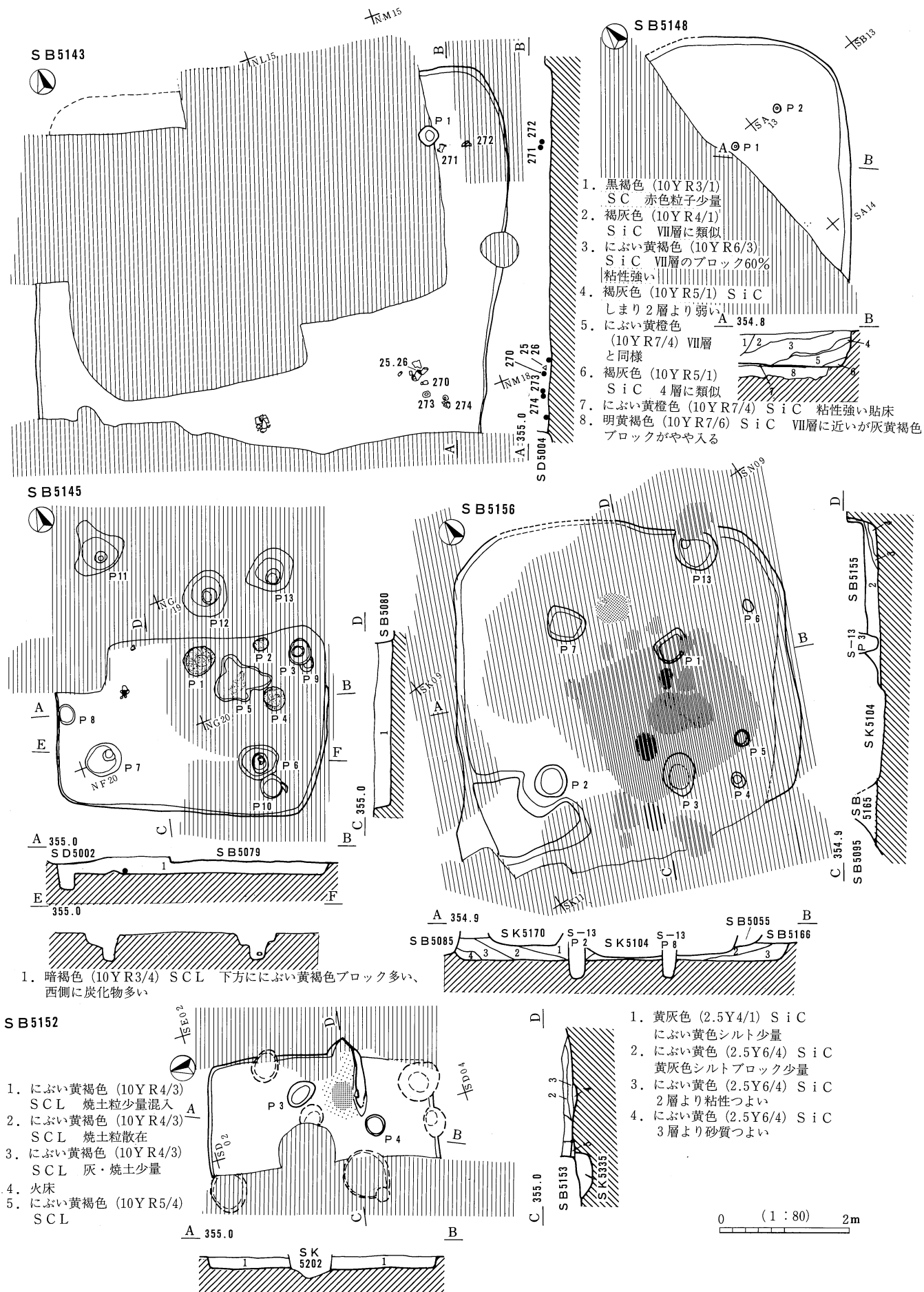


図76 古墳時代遺構個別図 24 (屋代5区SB)

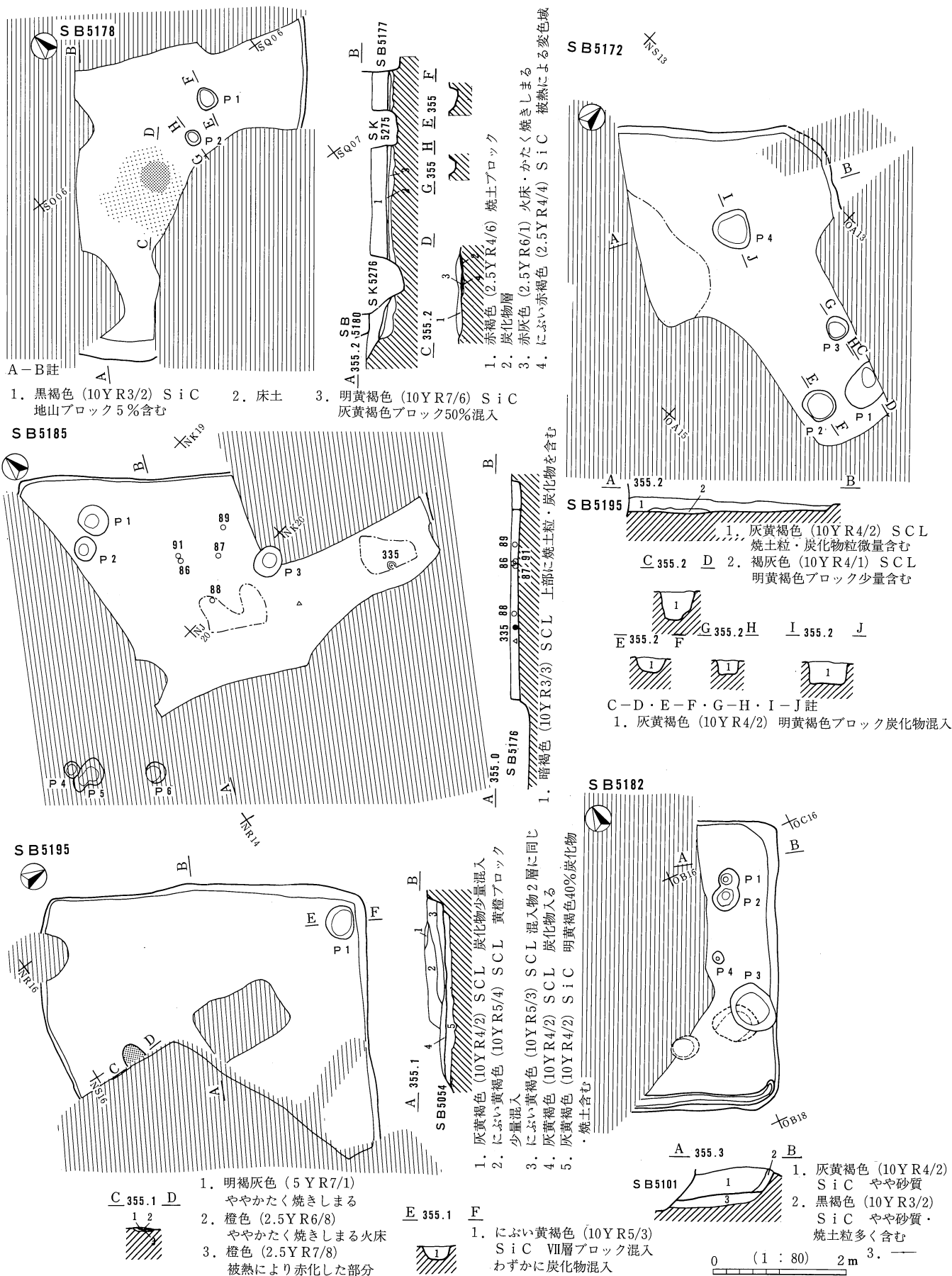
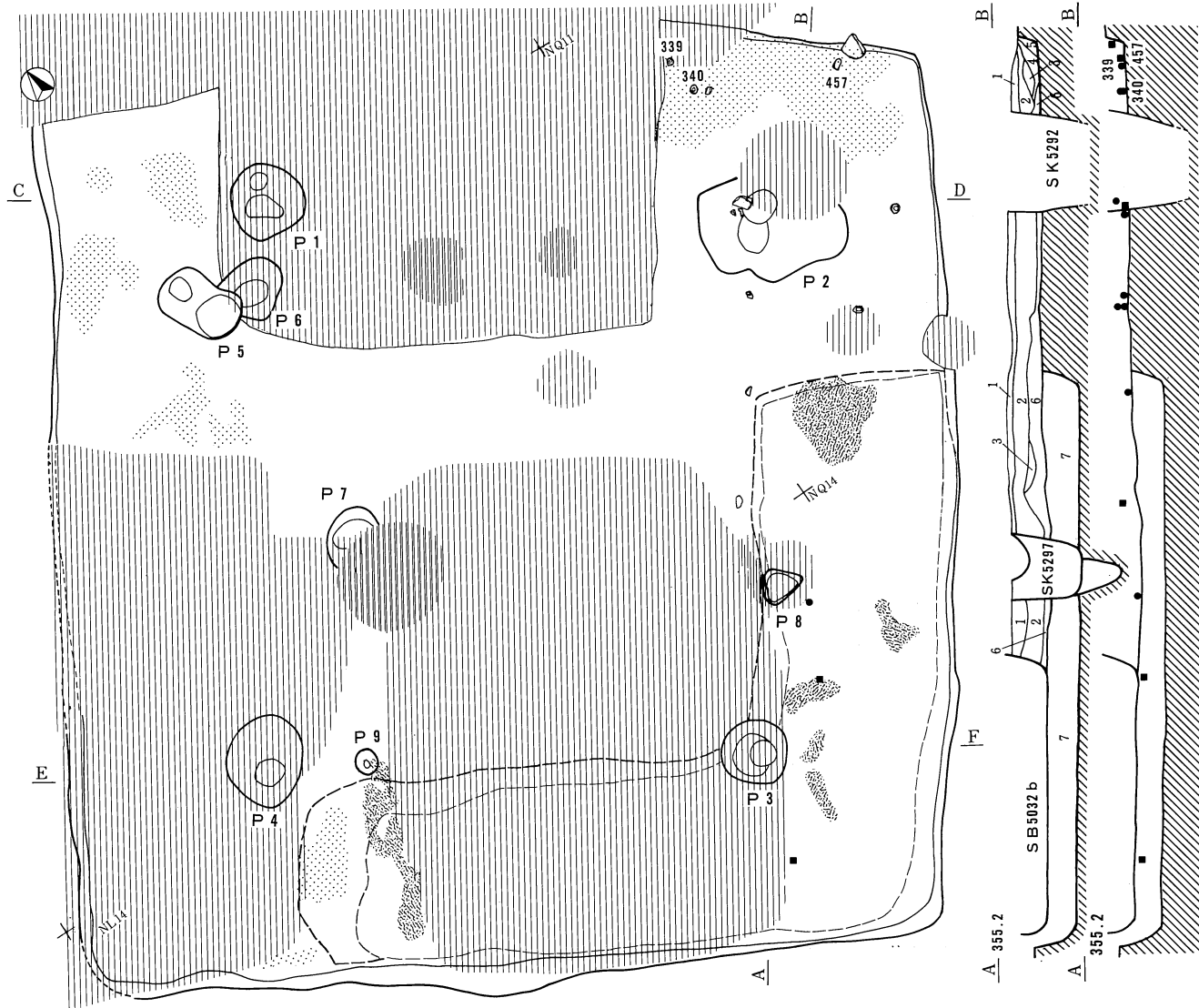
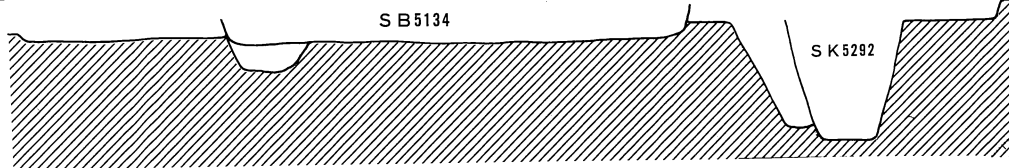


図77 古墳時代遺構個別図 25 (屋代⑤区SB)

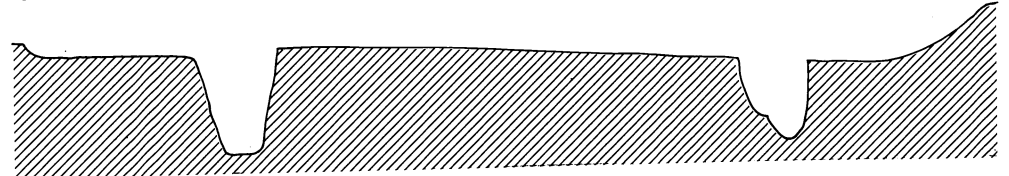
SB5189



C 355.0



E 355.0



- 1 褐色 (10YR4/6) SCL炭化粒、シルト粒少量混入
- 2 黄褐色 (10YR5/6) SiC炭化粒混在。黄色シルトブロック下層に混入
- 3 明黄褐色 (10YR6/6) SiC黄色シルトブロックを主体とする層
- 4 黄褐色 (10YR5/8) SiCシルト粒ブロック多量混入
- 5 黄褐色 (10YR5/8) SiC焼土、炭化粒ブロック多量混入
- 6 明褐色 (10YR3/3) SiC焼土粒、炭化粒ブロック多量混入
- 7

0 (1:80) 2m

図78 古墳時代遺構個別図 26 (屋代⑤区SB)

SB5190第3段階(下床)

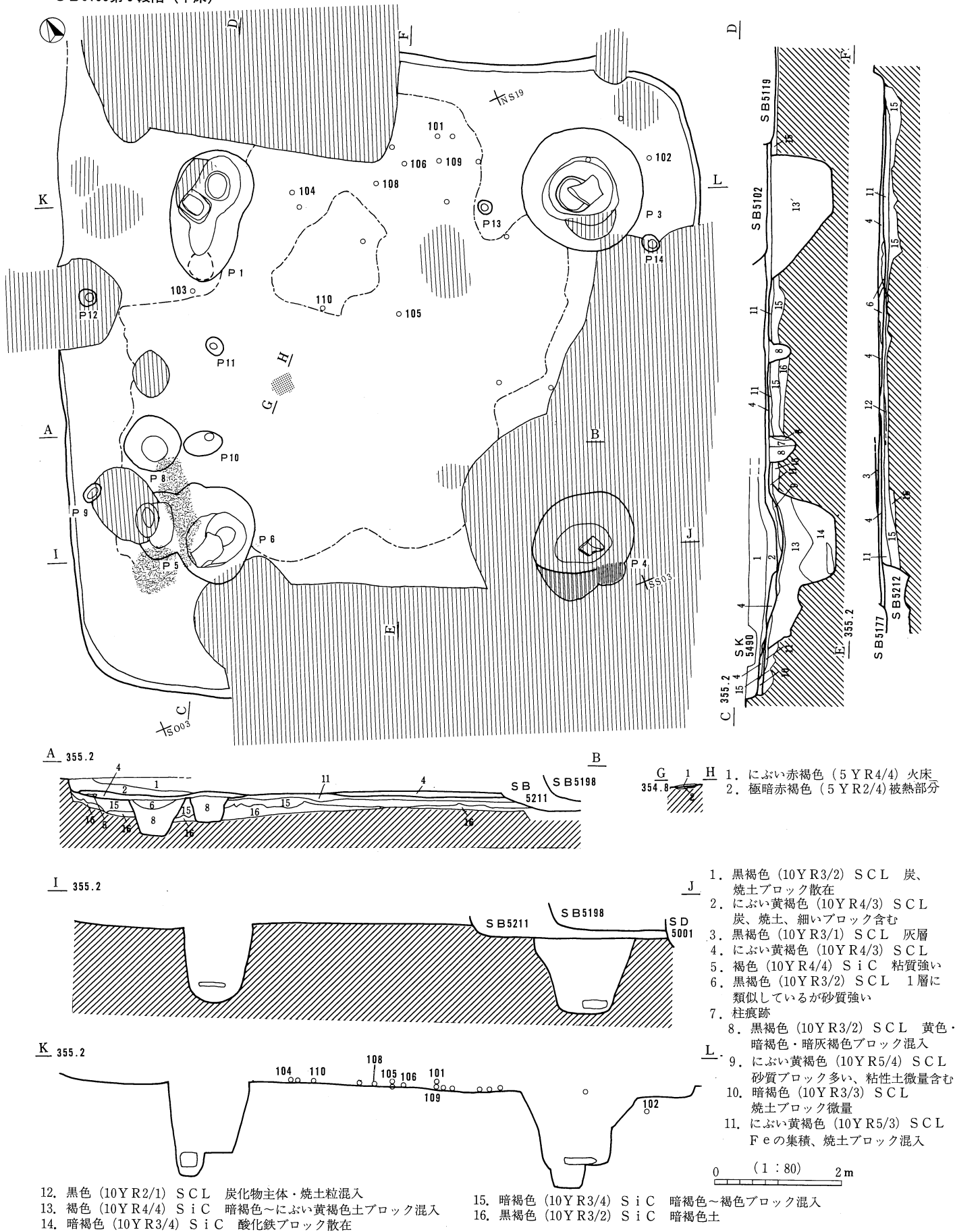
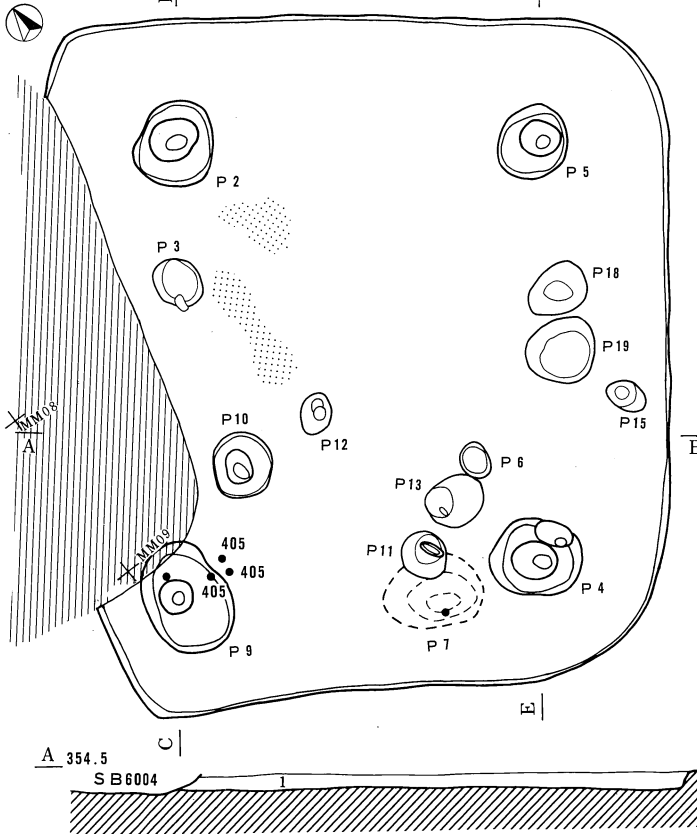


図79 古墳時代遺構個別図 27 (屋代⑤区SB)

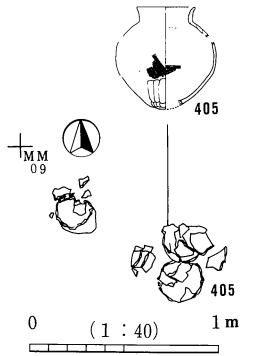


S B 6009



S B 6009

床面土器出土状況 (P 9 付近)

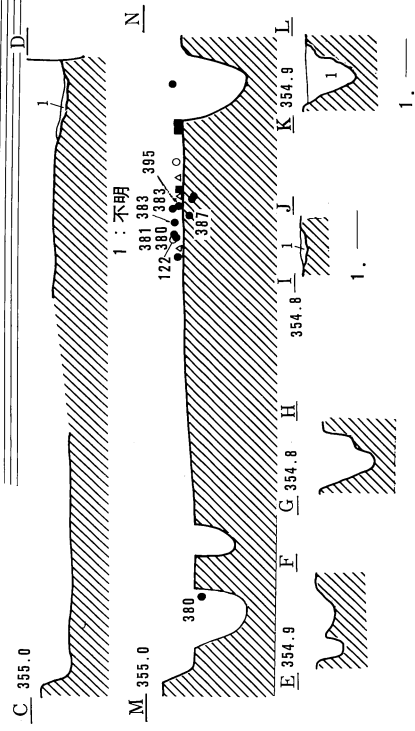
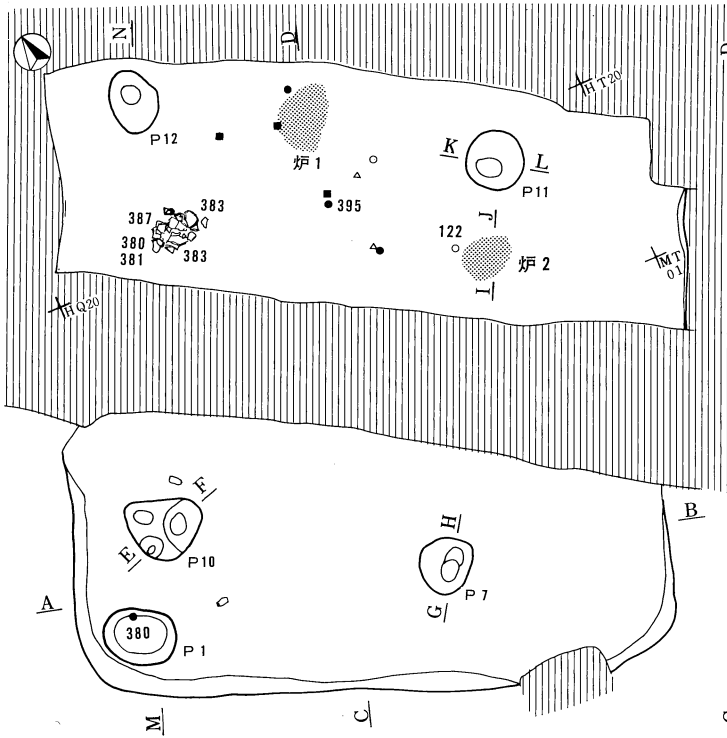


1. 暗褐色 (10YR3/3) SCL
粘性少しあり
2. 黒褐色 (10YR3/2) SCL
しまり良、炭10%
3. 褐色 (10YR4/4) SCL
粘性あり

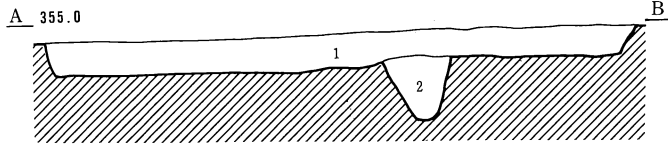
0 (1 : 80) 2m

図80 古墳時代遺構個別図 28 (屋代⑥区SB)

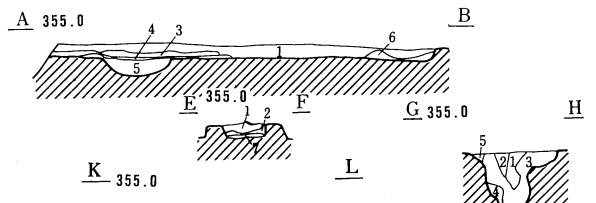
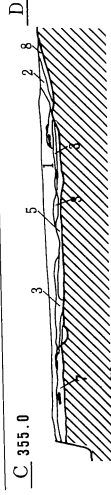
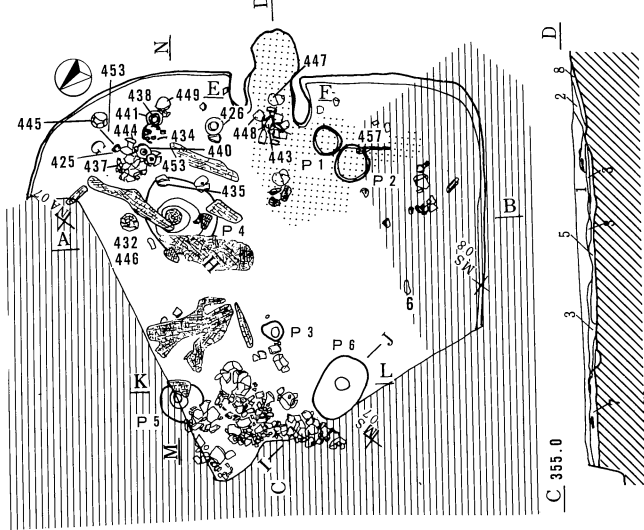
SB6001



1. 灰黄褐色 (10YR5/2) SCL 明黄褐色粒・炭片少量含む
 2. 褐灰色 (10YR4/1) SiC 焼土粒を1~2%含む

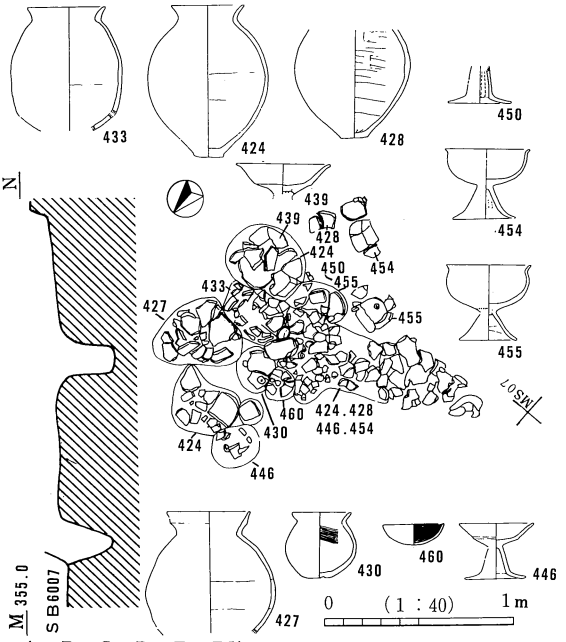


SB6012



SB6007
 1. 黒褐色 (7.5YR3/2) SCL 粒性、しまりあり、炭シマ状に入る
 2. 褐色 (10YR4/4) SCL 粘性あり、炭30%含む
 3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) SCL 地山黄色土5%含む
 4. 暗褐色 (10YR3/3) SCL 粘性あり、地山黄色土50%含む
 5. 暗褐色 (10YR3/4) SCL しまりよく、粘性あり

SB6012西北部土器集中



A-B・C-D・E-F註
 1. 灰黄褐色 (10YR4/2) SCL 黄橙色粒子3~5%含む
 2. 暗褐色 (10YR3/3) SCL 焼土15~20%含む
 3. 褐灰色 (10YR4/1) SCL 焼土粒子・黒色灰20%含む
 4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 焼土屑灰黄褐色ブロック15~20%含む
 5. 灰白色 (10YR7/1) SCL 白色の灰含み、粘性なし
 6. —
 7. 褐灰色 (10YR4/1) SCL 黄橙褐色土がマーブル状に入る
 8. カマドのソデ土

SB6007
 1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) SCL 粘性あり、炭10%含む
 2. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) SCL 粘性あり、焼土粒少量含む

図81 古墳時代遺構個別図 29 (層代⑤区SB)

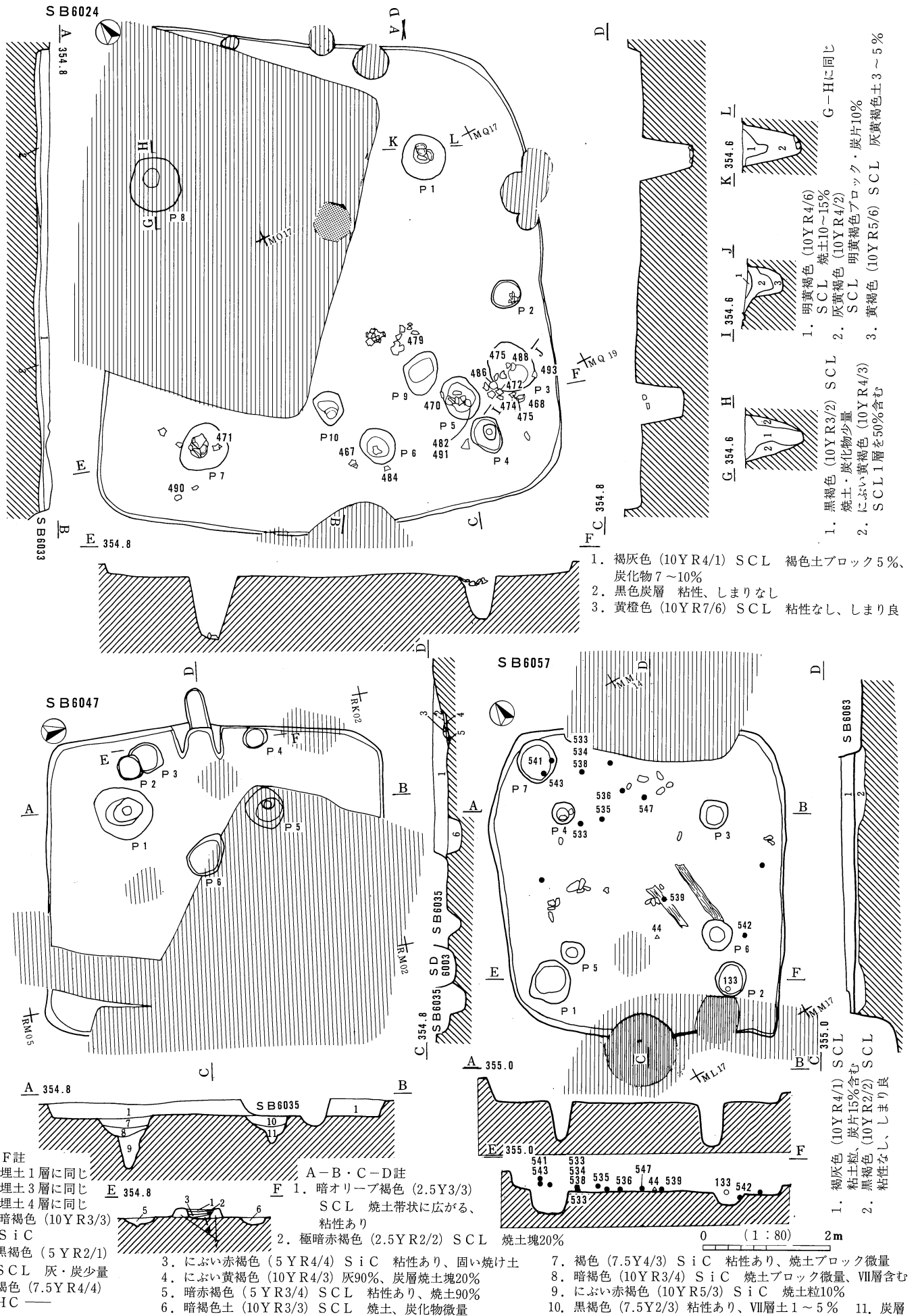
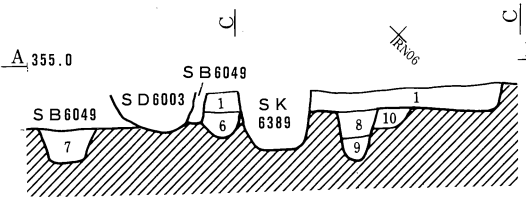
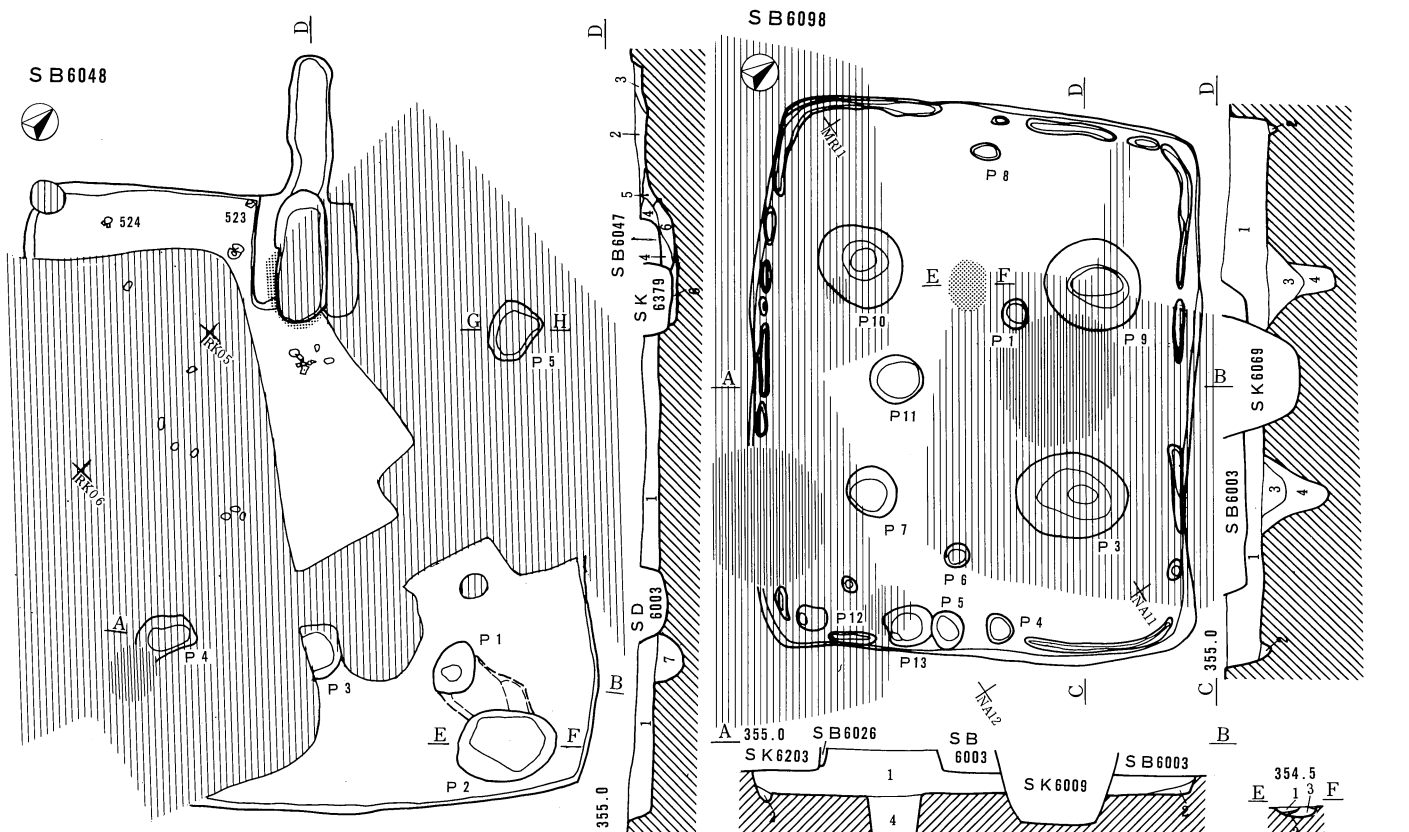
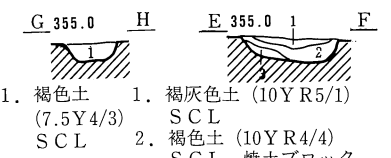


図82 古墳時代遺構個別図 30 (屋代⑤区SB)



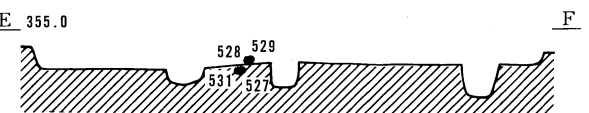
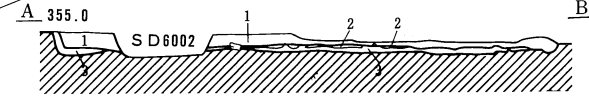
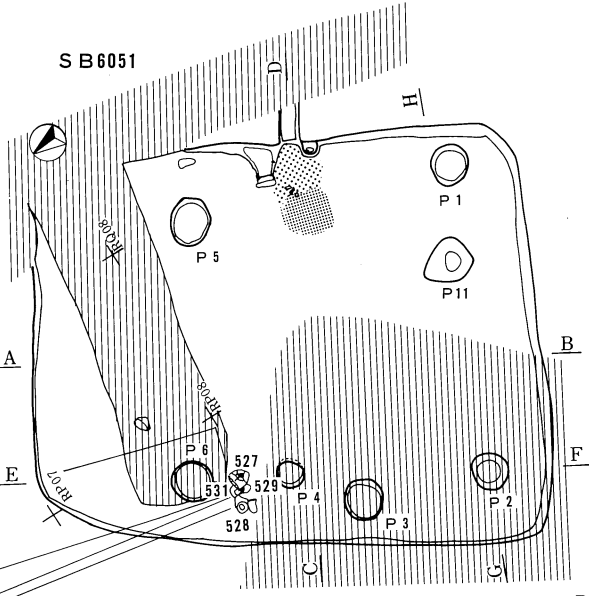
1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) SCL 炭化物・焼土・粘性なし
2. 褐色 (10YR4/4) SCL 褐色埴壤土を40%含む
3. 褐灰色 (10YR4/1) SiC 黄褐色土が40%含む
4. 褐灰色 (10YR4/1) SiC 明黄褐色粒子10~15%含む

1. 灰黄褐色 (10YR6/6) SCL
2. 炭層
3. 橙色 (5YR6/8) 焼土

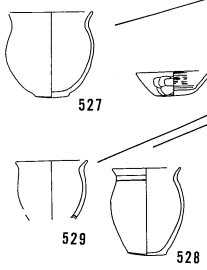


1. 褐色土 (7.5Y4/3) SCL
2. 褐色土 (10YR4/4) SCL 焼土ブロック 3~5%、炭化物10~15%
3. 灰黄褐色土 (10YR6/2) SCL

1. 褐灰色 (10YR4/1) SCL 焼土粒3~5%
2. 焼土粒やが多い
3. 灰色土、炭化物10~15%
4. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性あり、しまり良
5. 褐灰色 (10YR6/1) SCL 明黄褐色土10~15%
6. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし、しまり良
7. 褐灰色土 (10YR4/1) SCL 明黄褐色土10~15%
8. 褐灰色土 (10YR4/1) SCL しまり強い
9. 褐灰色土 (10YR4/1) SCL しまり強い
10. —



1. 黒褐色 (10YR3/2) SCL 焼土ブロック2%含有
2. 褐色 (10YR4/4) SCL 黒褐色土15%含有 (胎床)
3. 黒褐色土 (10YR3/2) SCL 褐色土ブロック25%含有
4. 焼土集中
5. 火床



(1:80) 2m

図83 古墳時代遺構個別図 31 (屋代⑤区SB)

集落域掘立柱建物跡 (ST)・土坑 (SK) 屋代遺跡群⑤区

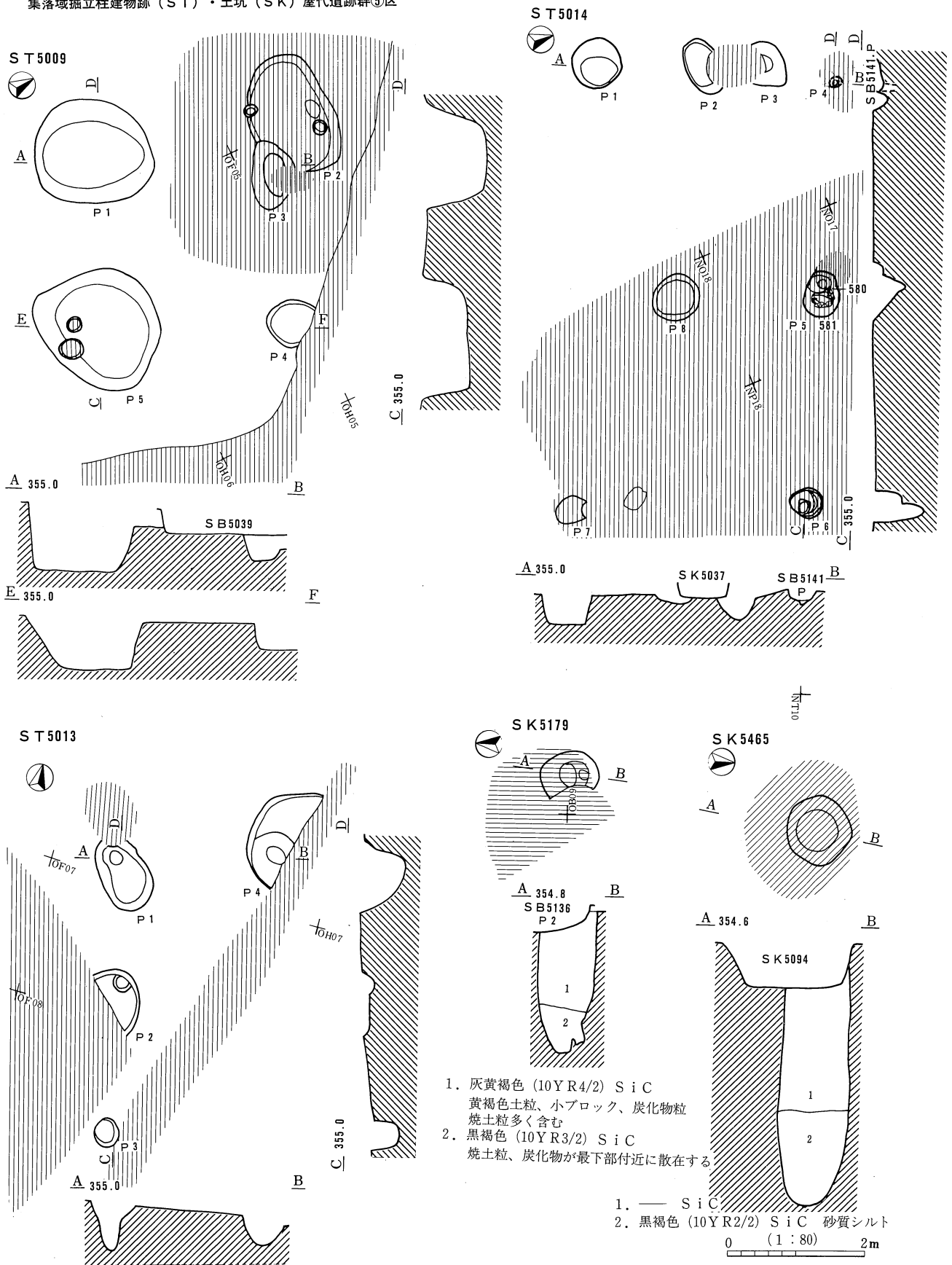


図84 古墳時代遺構個別図 32 (屋代⑤区SB)

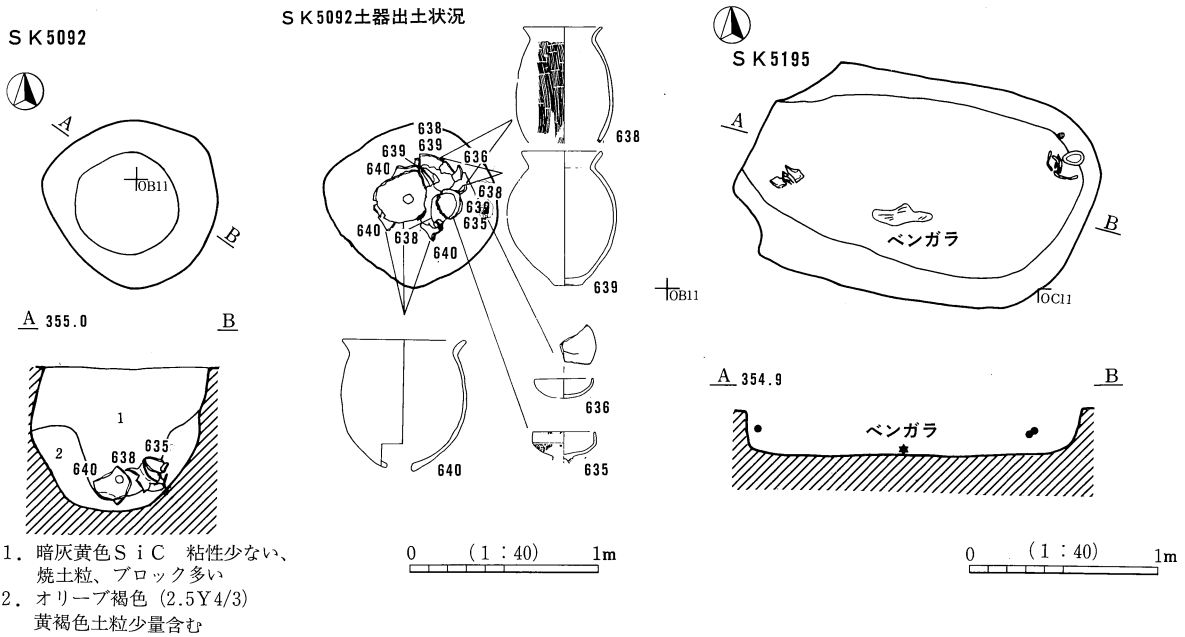
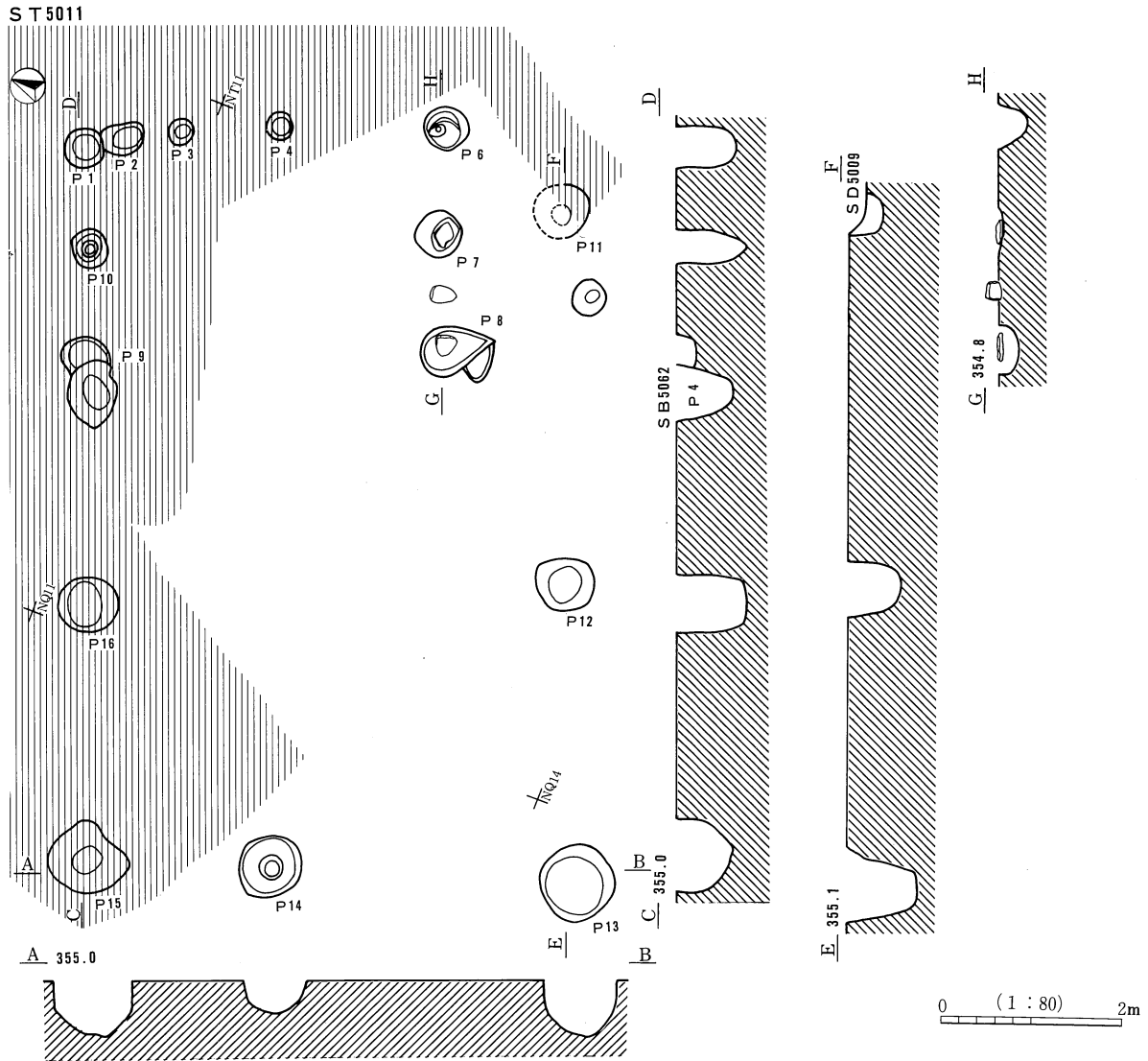
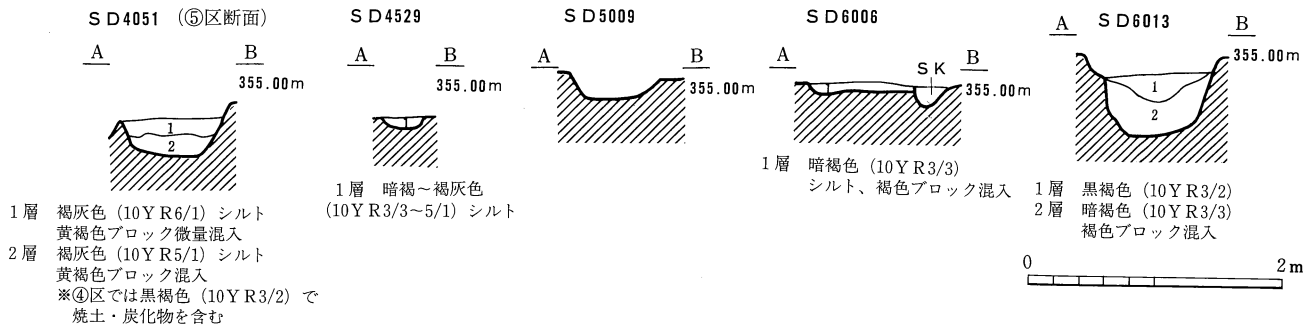


図85 古墳時代遺構個別図 33 (屋代⑤区SB)

溝 (SD)



祭祀関連遺構 (SH5001・SK5038)

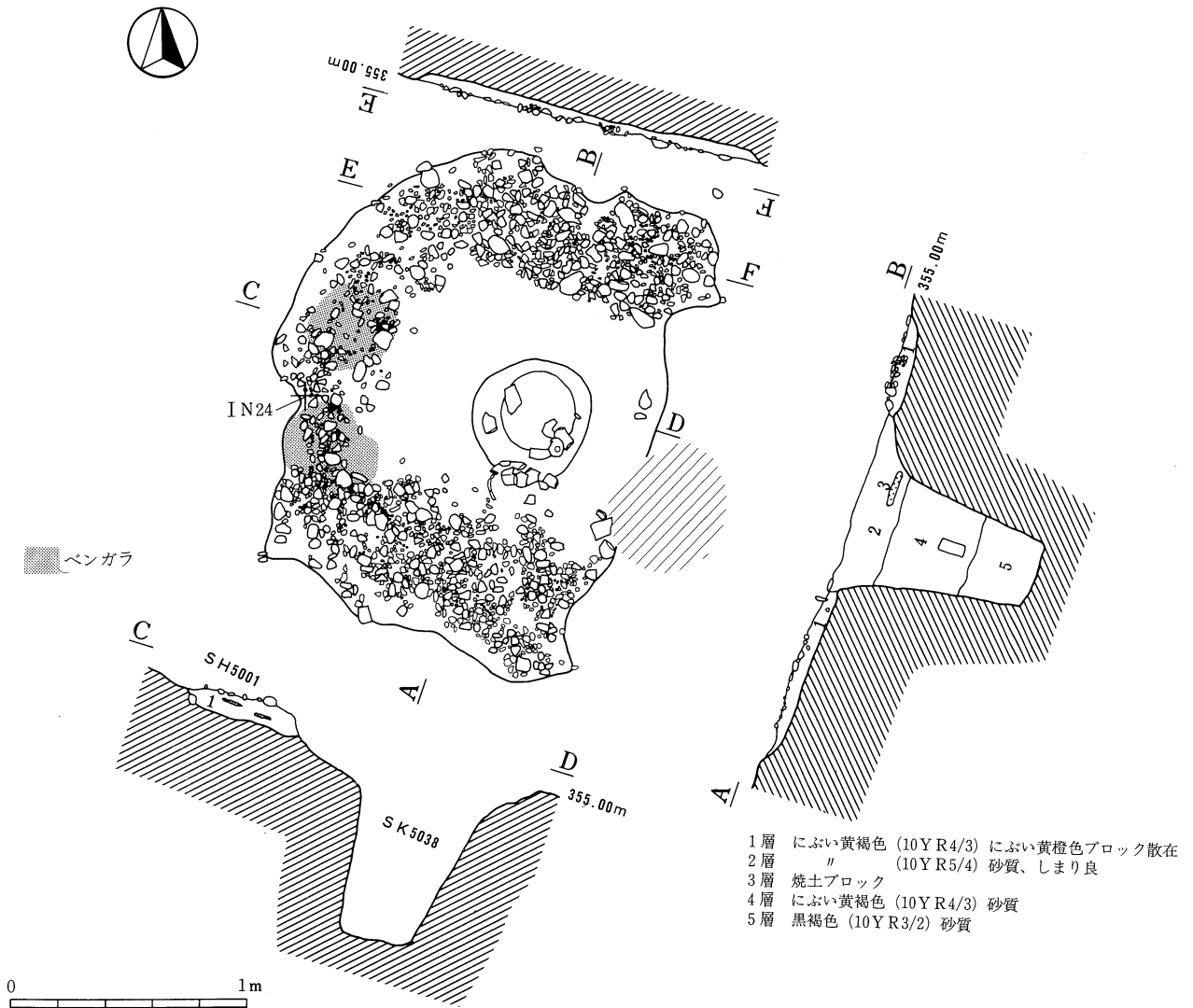


図86 古墳時代遺構個別図 34 (屋代遺跡群④・⑤区SD・SH・SK)

SD7068・SX7038

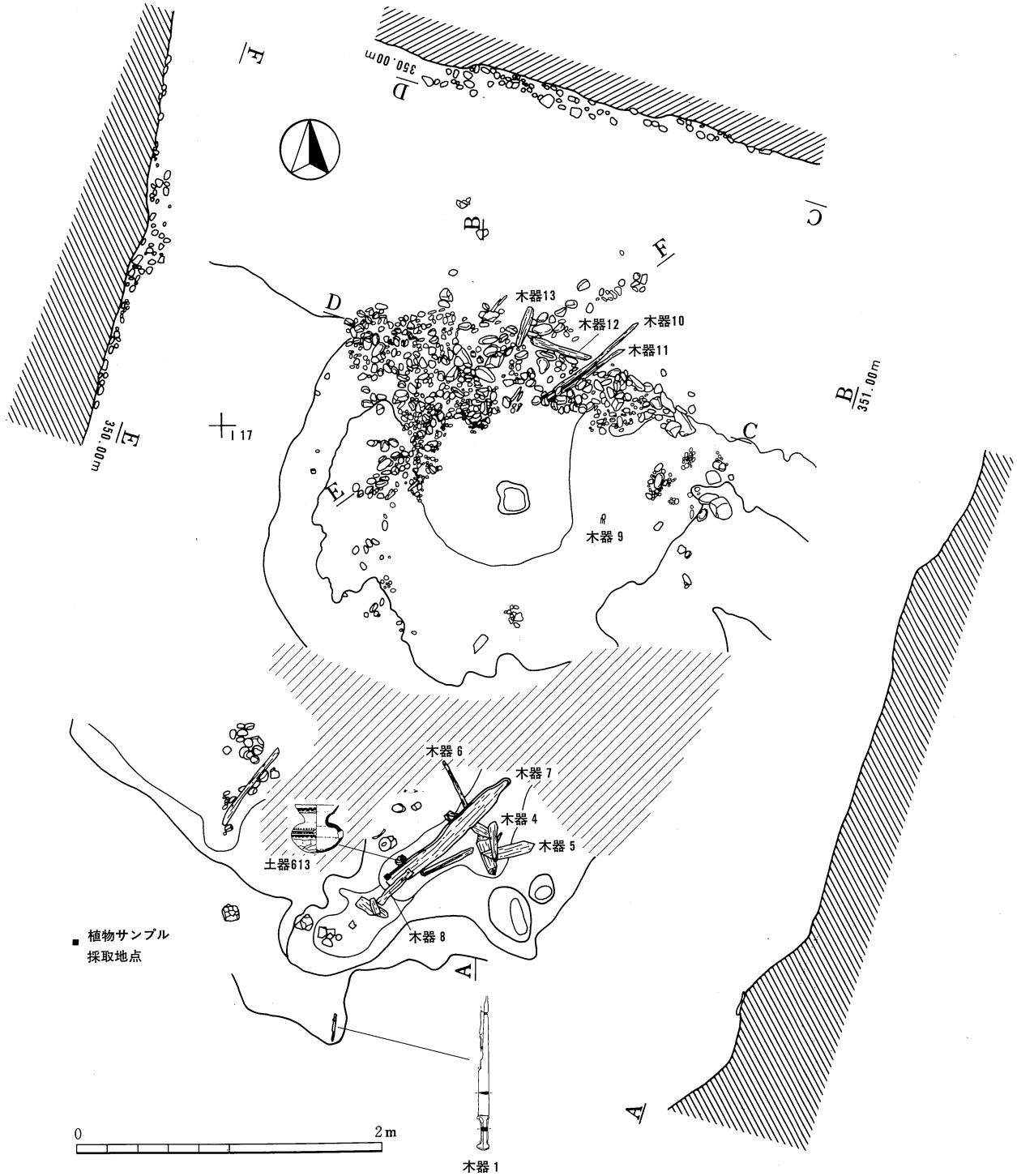


図87 古墳時代遺構個別図 35 (屋代遺跡群⑥区SD・SX)

第5節 遺物

1 土器・土製品

(1) 概要

VI層上面および弥生時代後期から7世紀初頭に至る遺構から出土した土器・土製品は、300箱にのぼる。ここでは、全てを紹介することができないため、各遺構の時期を推定できる資料を中心に図示（図88～117）し、掲載した遺物の属性を一覧表（表19）に示した。対象となる遺物の時期は、弥生5期。古墳時代は1期～8期に区分した。詳細については第5章3節を参照していただきたい。

遺跡記号	遺構記号	遺構番号	図番号	報告番号	出土位置	器種	焼き物種別	口径	底径	器高	残存率	色調	赤彩の有無	外面整形	内面整形	底部整形	備考
BKS	SD	302	88	1	2, 8, 9, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 20, 21, 22, 23, 36, 44, 54	甕A	土師	-	-	-	2/3	にぶい橙		ナデ	ナデ・輪積痕		
BKS	SD	302	88	2	52, 57	有段口縁壺	土師	24.7	-	-	口1/3	橙		摩耗により不明	摩耗により不明		
BKS	SD	302	88	3	60	埴?	土師	14.2	-	-	口3/5	橙		ナデ	ナデ		
BKS	SD	302	88	4	54	高杯	土師	-	-	-	脚3/5	にぶい橙		ハケ→タテミガキ	シボリー→指ナデ すそ部ナデ		
BKS	SD	302	88	5	33	小型丸底2	土師	7.9	-	7.6	9/10	にぶい橙		ナデ 下半へラ削り	口縁ナデ 下半指ナデ	手持ちへラ削り	内面に巻き上げ痕あり
BKS	SD	302	88	6	32	小型丸底2	土師	-	-	-	4/5	にぶい橙		ナデ	口縁ナデ 下半指ナデ		
BKS	SD	302	88	7	58	小型丸底2	土師	-	-	-	胴1/2	にぶい橙		ナデ	指ナデ		
BKS	SD	302	88	8	49	ミニチュア手捏ね土器	土師	4.7	3.5	4.8	10/10	にぶい橙		ナデ	口縁ナデ 口縁以下指ナデ	ナデ	内面に指織全体にすすけている
BKS	SD	302	88	9	50, 53	ミニチュア手捏ね土器	土師	4.2	3.5	6.1	4/5	にぶい橙		ナデ	口縁ナデ 口縁以下指ナデ	ナデ	SD513で取り上げ
BKS	SD	506	88	10		埴	土師	12.8	-	-	口4/5	にぶい橙		ナデ	ナデ		
BYS	SD	235	88	11	347	壺	土師	17.8	-	-	口1/3	にぶい橙		ナデ, ハケ	ナデ		=SD347
BYS	SD	235	88	12	347	小型丸底2	土師	4.1	-	6	1/2	にぶい黄橙		ナデ	ナデ	ナデ	=SD347
BYS	SD	235	88	13	235	埴	土師	-	-	-	1/4	にぶい橙		上半ミガキ 下半へラ削り	上半ナデ 下半ハケ	へラ削り	
BYS	SD	235	88	14	235	高杯	土師	-	-	-	脚1/2	橙		ミガキ	すそ部ナデ シボリー→ナデ		
BYS	SD	245	88	15		壺?	土師	-	4.8	-	底1/5	にぶい橙		ナデ	ナデ		
BYS	SD	258	88	16	MLL	甕	土師	-	9.2	-	底9/10	にぶい橙		かるいミガキ	ナデ	ナデ	底にモミ状圧痕あり
BYS	SD	258	88	17	VII N23 MLL	甕B	土師	23.4	-	-	口1/5	橙		ナデ, ハケ	ナデ		
BYS	SD	258	88	18	MLL	甕F	土師	-	14.6	-	2/3	橙		かるいミガキ	上半ナデ, 下半ハケ	ナデ	
BYS	SD	302	88	19	VIII K21 1	高杯	土師	-	-	-	脚1/2	橙		タテミガキ	シボリー→ナデ		
BYS	SD	2270	88	20		甕A	土師	16.7	-	-	口5/6	にぶい橙		ナデ	ナデ		
BYS	SD	3298	88	21	IV Q16, 4bL上面	高杯	土師	-	10.9	-	脚2/3	明褐色		すそ部ナデ 脚部ミガキ	シボリー→ナデ すそ部ナデ		
BYS	SD	3298	88	22	IV L18, 4bL上面	小型丸底1	土師	10.3	-	8.2	1/2	橙		ナデ	ナデ		
BYS	SD	3098	88	23		有段口縁壺	土師	13.6	-	-	口1/2	橙		ミガキ	ミガキ		
BYS	SD	4037	88	24		高杯	土師	-	-	-	脚1/3	にぶい橙		ミガキ?, 剥落多	シボリー→ナデ		
BYS	SD	4037	88	25		有段高杯	土師	16.8	-	-	口1/8	橙		ミガキ	ミガキ		
BYS	SD	4043	88	26		高杯	土師	-	-	-	脚1/2	内=にぶい橙 外=赤	○	ミガキ→赤色処理	ナデ		3孔
BYS	SD	4525	88	27		甕	土師	-	6.1	-	底10/10	内=黒 外=にぶい橙		ナデ	ナデ	未調整	=SD4523
BYS	SD	4530	88	28		高杯	土師	-	10.2	-	脚9/10	橙		ミガキ	ナデ		
BYS	SD	4530	88	29		甕A	土師	20.6	-	-	口2/5	橙		口縁ハケ, 胴部ナデ	ナデ		
BKS	SK	5109	89	30		瓶	土師	-	9.2	-	底10/10	にぶい橙		ナデ わずかにハケ	へラナデ		底部に焼成後穿孔
BKS	SK	7214	89	31		小型丸底2	土師	9.7	2.9	8.8		橙		胴部下半へラ削り 他ナデ	胴部へラナデ 口縁ナデ	ナデ	
BKS	F区		89	32	SD511	甕	弥生	-	-	-	小片	灰褐			ナデ		拓本
BKS	F区		89	33	SD512	高杯	弥生	-	-	-	脚1/8	外=赤 内=灰黄褐	○	ミガキ→赤色塗彩	ナデ		拓本
BYS	I区		89	34	1	甕	土師	-	-	-	2/5	にぶい橙		ナデ	ナデ		SX6(畦畔)
BYS	I区		89	35	SD258 VIII K17 MLL	壺	弥生	-	-	-	小片	にぶい褐		帯描文, T字文	ミガキ		拓本
BYS	I区		89	36	SD 258 VII O 20 MLL	甕	弥生	-	-	-	口1/12	にぶい橙		帯描波状文 簾状文	ミガキ		拓本
BYS	I区		89	37	SD 258 VII O 20 MLL	甕	弥生	-	-	-	小片	灰褐		帯描波状文	ミガキ		拓本
BYS	SD	258	89	38	MLL	?	土師	-	-	-	小片	内=赤 外=にぶい橙	○	ナデ	ミガキ→赤色塗彩		拓本

表19-(1) 古墳時代土器・土製品一覧表

第3章 弥生時代後期～古墳時代（VI層上面検出）の遺構と遺物

遺跡記号	遺構記号	遺構番号	図番号	報告書番号	出土位置	器種	焼き物種別	口径	底径	器高	残存率	色調	赤彩の有無	外面整形	内面整形	底部整形	備考
BYS	5区		116	718	I NQ20 4CL	杯蓋H	須恵	12.2	-	-	1/3	灰		天井部回転ヘラ削り 他ロクロナデ	ロクロナデ		TK216
BYS	5区		116	719		杯H	須恵	10.8	-	-				上半ロクロナデ 下半回転ヘラ削り	ロクロナデ		
BYS	6区		116	720	SD8044 LL I J16 1	壺	土師	-	4.6	-	4/5	灰褐		ミガキ	下半ハケ、他ナデ	ナデ	
BYS	6区		116	721	SX7038	有段口縁壺	土師	16.2	-	-		にふい褐		粗いミガキ	粗いミガキ		
BYS	6区		116	722		甕	土師	12.2	-	-				ハケ			S字甕
BYS	6区		116	723	SB8032 40L	甕	土師	16.4	-	-	口1/5	灰白		ナデ、一部ハケ	ナデ		S字甕
BYS	6区		116	724		甕	弥生	-	-	-	小片	にふい褐		櫛描波状文	ミガキ		拓本 おりかえし口縁
BYS	6区		116	725	SD8032 45L 5	和泉の高杯	土師	16.8	-	-	杯10/10	橙		ミガキ	ミガキ		
BYS	6区		116	726	SD7030 I I17 4	器台	土師	-	10.3	-	2/3	内=明褐 外=赤	○	ナデ→赤色塗彩	ハケ→ナデ→赤色塗彩		受部1孔、脚部7孔
BYS	6区		116	727	SD8048	杯B類	土師	11.8	-	-	1/8	にふい黄橙		口縁ナデ 下半ヘラナデ	ナデ		
BYS	6区		116	728		杯M+K類	内黒	18.5	-	-							
BYS	6区		116	729	SD8044 LL	杯E類	内黒	14.3	-	-	1/4	内=黒 外=黄褐		ミガキ	ミガキ→黒色処理		
BYS	6区		116	730	SD7045 I I18 23LL	小型丸底 2	土師	-	2.3	-	4/5	内=黒 外=灰褐		上半ハケ 下半ナデ	上半ハケ 下半ナデ	ナデ	
BYS	6区		116	731	SD 8032 I N 3 26L 1	小型丸底 2	土師	-	-	-	3/4	灰黄褐		ナデ	ナデ	ナデ	体部下半穿孔
BYS	6区		116	732	SD8032 1	小型丸底 1	土師	9.5	2.2	6.7	9/10	にふい黄橙		上半ナデ 下半ヘラ削り	ナデ、一部ハケ	ヘラ削り	
BYS	6区		116	733	SD7067 I H 15-21	鷗	須恵	-	-	-	1/3	灰		沈線 2本、矢羽状沈線文、ロクロナデ	ロクロナデ		TK209
BYS	6区		116	734	SD8021	高杯	須恵	15.5	10.2	11.9	1/2	暗灰		突帯 2本、液状文 杯下回転ヘラ削り	ロクロナデ		脚部3方透かし TK23
BYS	6区		116	735	SD7048 I I12	杯蓋H	須恵	12	-	-	1/4	灰		天井部回転ヘラ削り 他ロクロナデ	ロクロナデ		TK23、TK47
BYS	6区		116	736	SD8021	杯蓋H	須恵	12.2	-	-	1/4	灰		天井部回転ヘラ削り 他ロクロナデ	ロクロナデ		6C代
BYS	6区		116	737	SD7046 I I17	杯蓋H	須恵	13	-	5.3	2/3	暗灰		天井部回転ヘラ削り 他ロクロナデ	ロクロナデ		MT15
BYS	6区		116	738	SD5005-1	杯蓋H	須恵	12.7	-	5	1/5	灰		天井部回転ヘラ削り 他ロクロナデ	ロクロナデ		
BYS	6区		116	739	I I22	杯H	須恵 (10.7)	10.2	-	-	1/3	灰		上半ロクロナデ 下半回転ヘラ削り	ロクロナデ		TK216
BKU			117	740		甕	弥生	-	-	-	小片			櫛描文			
BYS	SB	5039	117	741	1	土釜	土師	4.5	-	6.5	1/2	黒褐		ナデ	ナデ		重量185g
BYS	SB	5039	117	742	P.1LL下	土釜	土師	4.3	-	11.6	10/10	灰褐		ナデ	ナデ		重量270g
BYS	SD	7055	117	743	I I17 MLL	土釜	土師	0.7~2.0	-	5.4	ほぼ10/10	灰黄褐		ナデ	ナデ		重量22g
BYS	SK	6368	117	744		土釜	土師	1.0~2.5	-	7	3/4	褐灰		ナデ	ナデ		重量40g
BYS	SK	6369	117	745		土釜	土師	1.0~2.8	-	8.6	10/10	にふい橙		ナデ	ナデ		重量60g
BYS	SB	6065	117	746		土釜	土師	1.2~2.6	-	7.6	10/10	灰黄褐		ナデ	ナデ		重量45g
BYS	SB	848	117	747	5	円筒埴輪	土師	-	-	-	小片	橙		ナデ	ナデ		方形透かし
BYS	I地区		117	748	3L	家型埴輪	土師	-	-	-	小片	橙		ナデ、沈線文	ナデ		
BYS	5区		117	749	SD6001	鳥形土製品	土師	-	-	-	頭部4/5	にふい橙		ナデ			眼部2方向から穿孔
BYS	6区		117	750	SB6009	有段口縁壺	土師	-	-	-	頭部小片	にふい橙		ミガキ、沈線文	ミガキ		
BKU	H5区		117	751	トレ MR 1 レキ MLL	円筒埴輪	土師	-	-	-	小片	橙		突帯、ハケ	ハケ		
BYS	SB	5190	PL29	752		摩耗土器	縄文							※⑥区湧水坑（祭祀関連）から持ち込まれたと考えられる土器			写真のみ

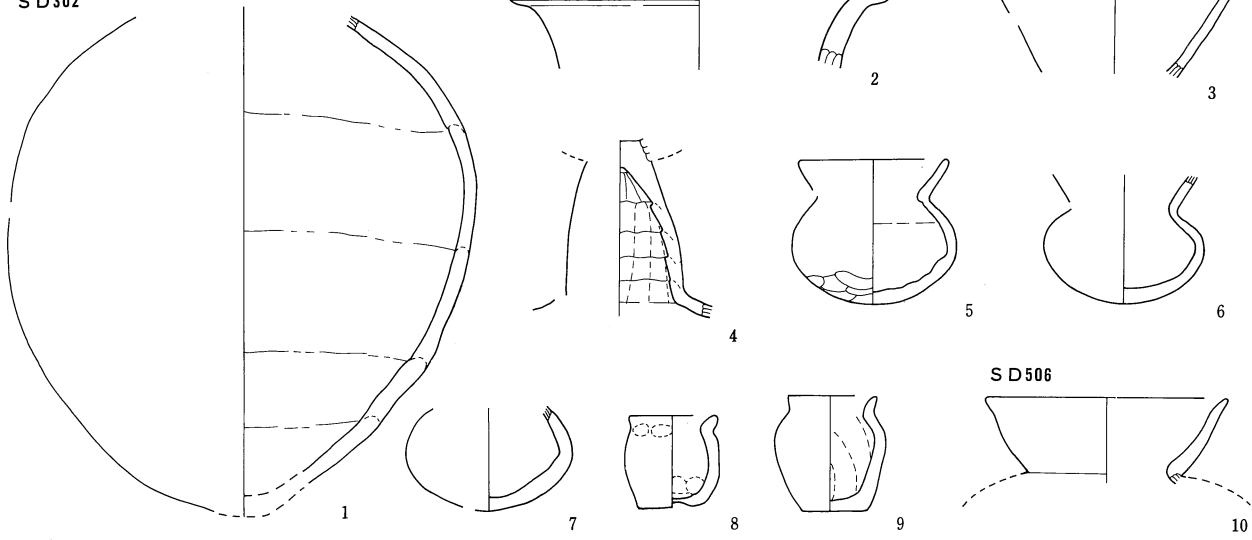
※出土位置略号凡例一覧

L = 層
 UL = 上層
 LL = 下層
 MLL = 最下層
 A I L = A区1層
 K = カマド
 F = 炉
 P 1 = ピット 1
 ホリ = 掘方

表19- (13) 古墳時代土器・土製品一覧表

低地域 更埴条里遺跡

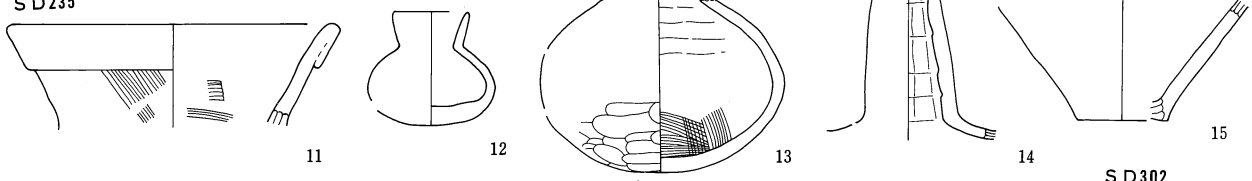
SD302



SD506

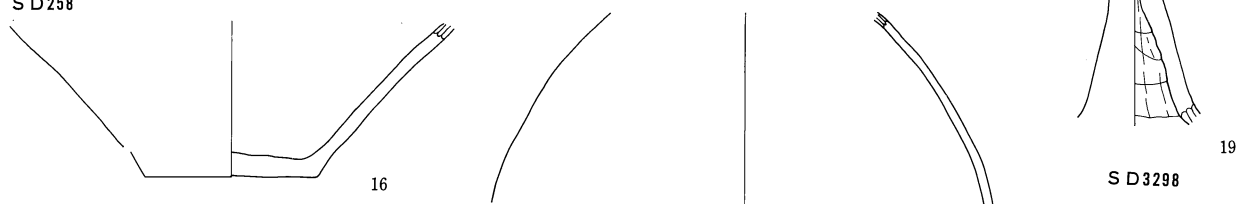
屋代遺跡群

SD235



SD245

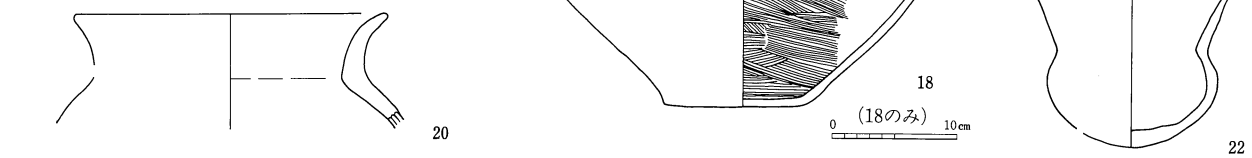
SD258



SD302

SD3298

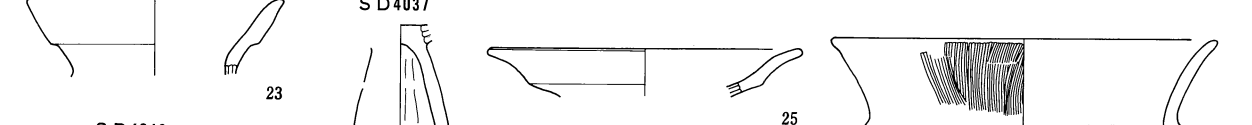
SD2270



0 (18のみ) 10cm

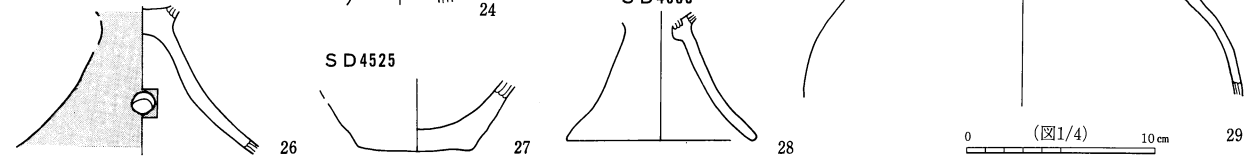
SD3098

SD4037



SD4043

SD4530

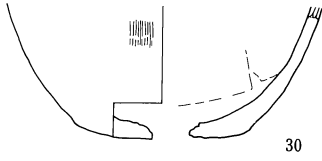


0 (図1/4) 10cm

図88 古墳時代の土器 1 (更埴条里遺跡、屋代遺跡群SD)

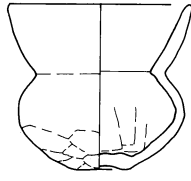
土坑（SK） 更埴条里遺跡

SK 5109



30

SK 7214

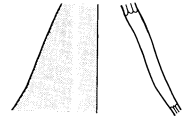


31

包含層F地区



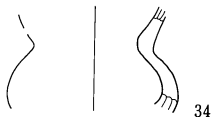
32



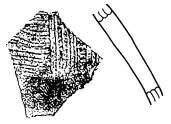
33

屋代遺跡群 包含層ほか

①区



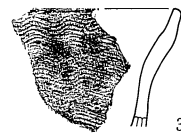
34



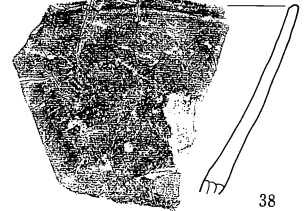
35



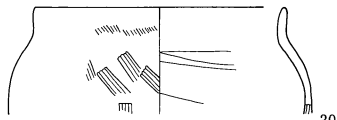
36



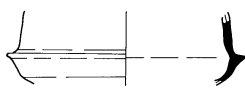
37



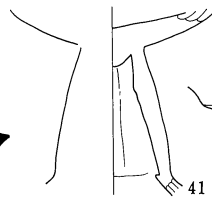
38



39



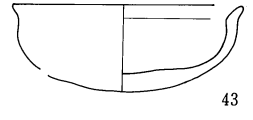
40



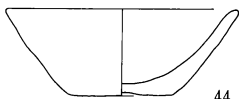
41



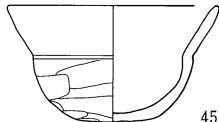
42



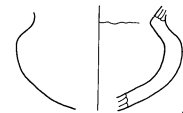
43



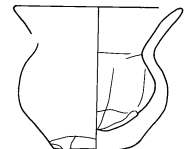
44



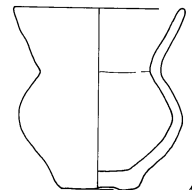
45



46

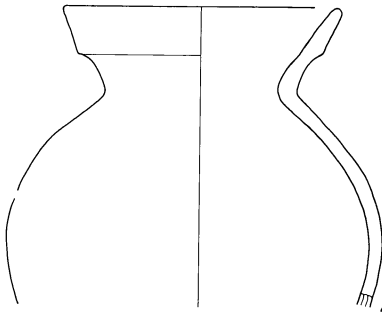


47



48

②区



49



50

③区



51



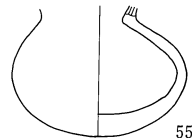
52



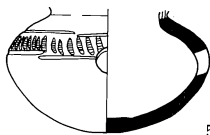
53



54



55



56

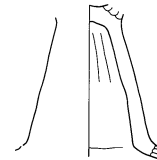
④区



57



58



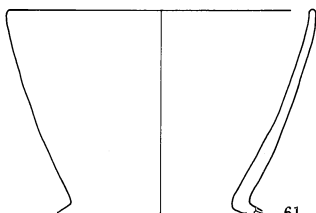
59



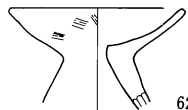
60

微高地域 更埴条里遺跡K地区

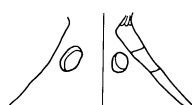
SK 9426



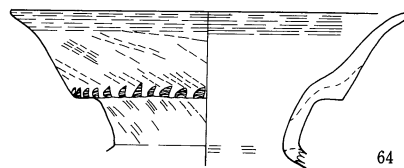
61



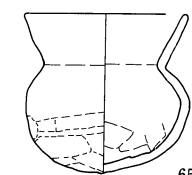
62



63



64



65

0 (拓1/3) 10cm

0 (図1/4) 10cm

図89 古墳時代の土器 2 (更埴条里遺跡・屋代遺跡群 SK・包含層)

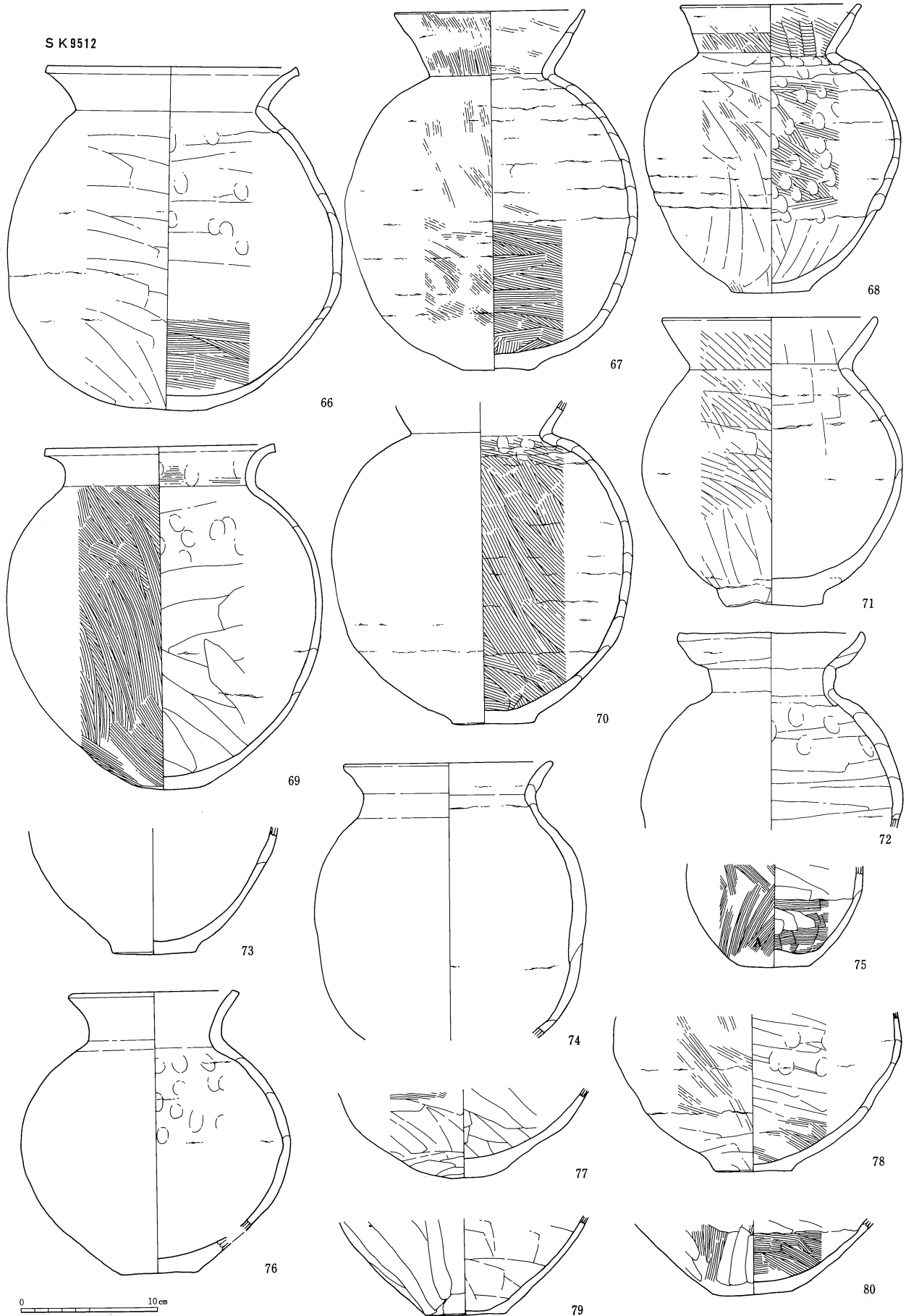
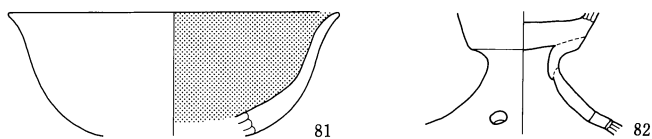


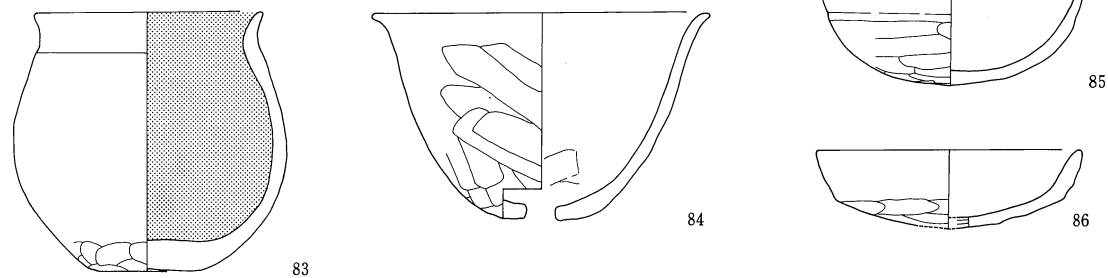
図90 古墳時代の土器 3 (更埴条里遺跡SK)

自然堤防域 竪穴住居跡（SB）

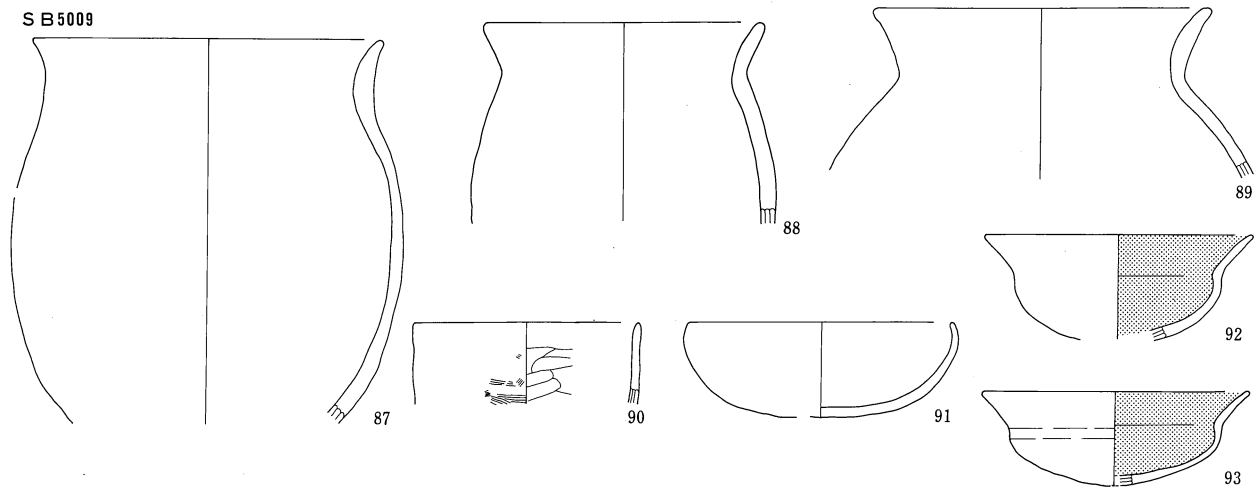
SB4814



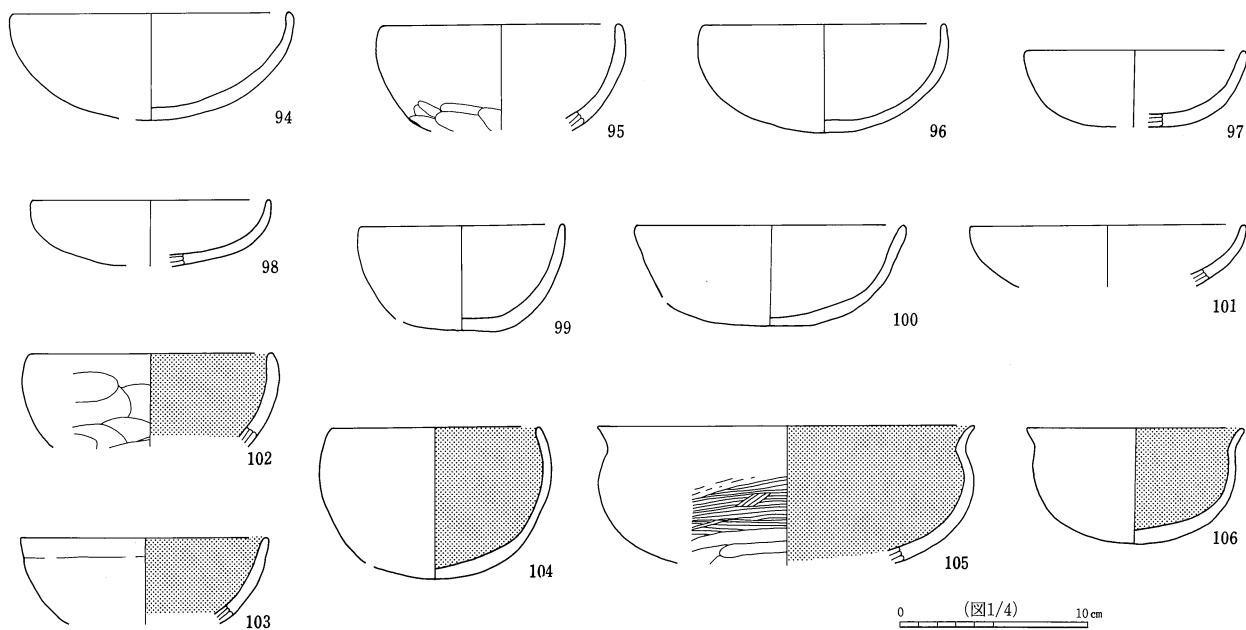
SB4820



SB5009



SB5014



0 (図1/4) 10cm

図91 古墳時代の土器 4（屋代遺跡群⑤区SB）

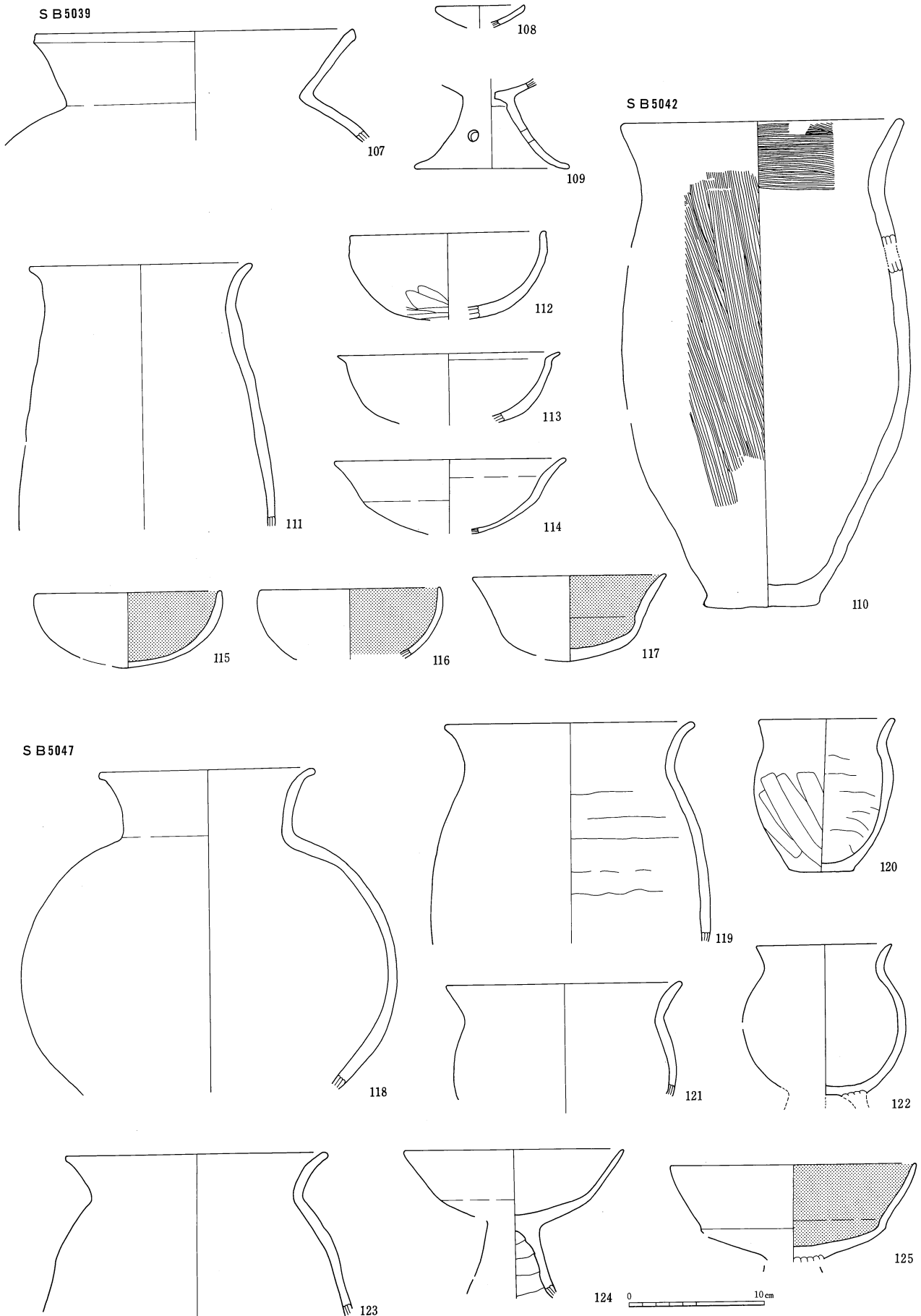


図92 古墳時代の土器 5 (屋代遺跡群⑤区SB)

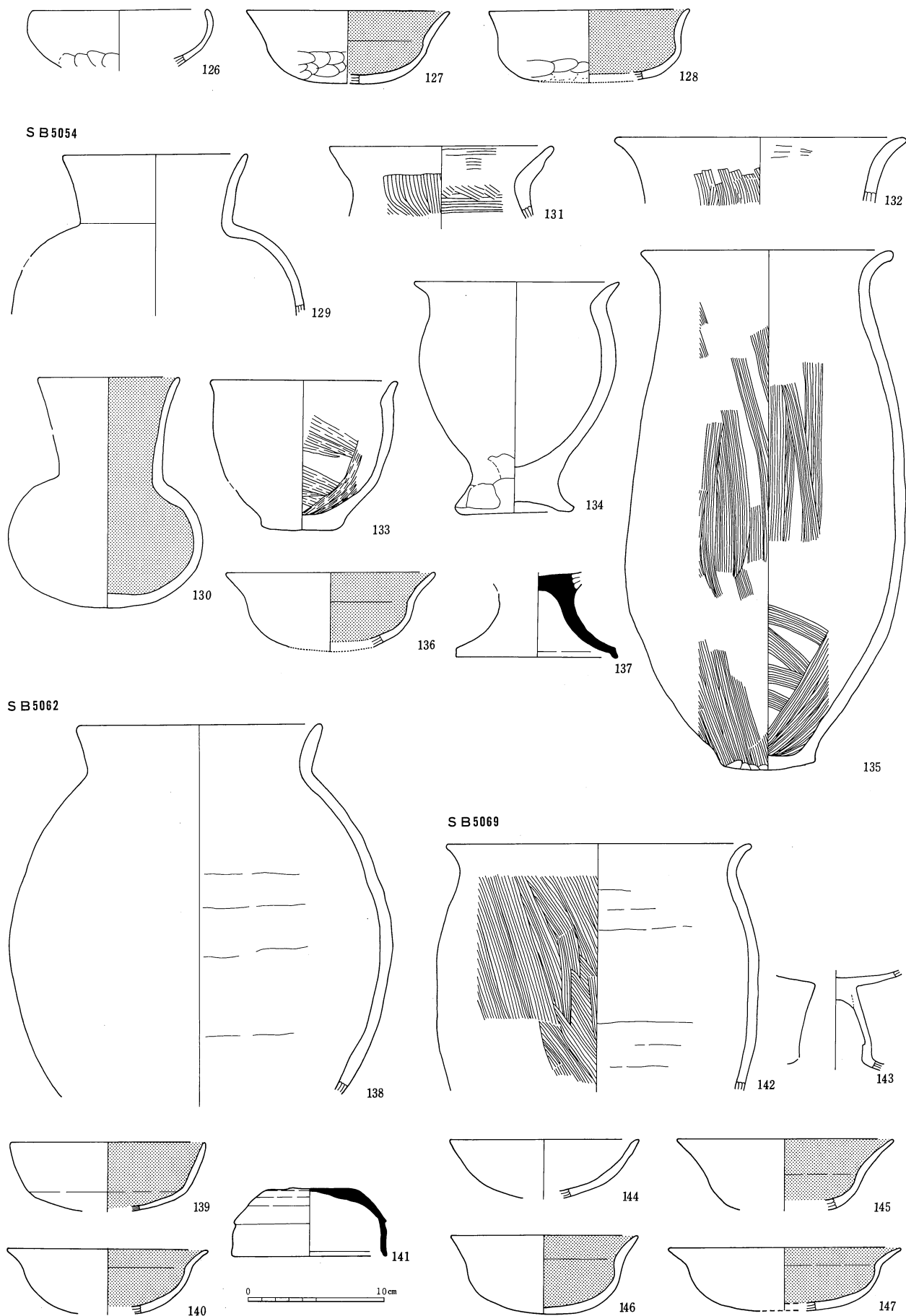
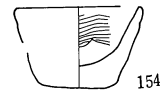
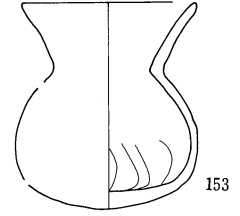
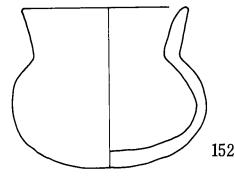
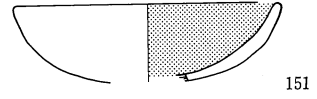
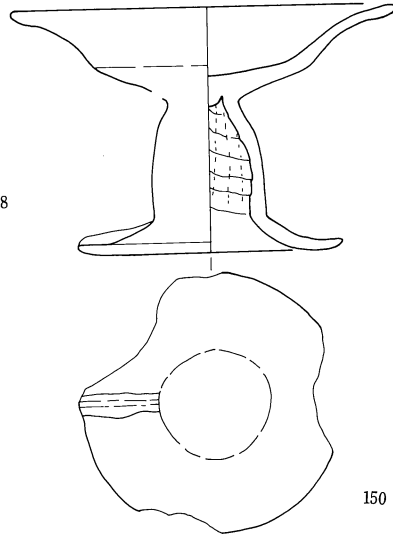
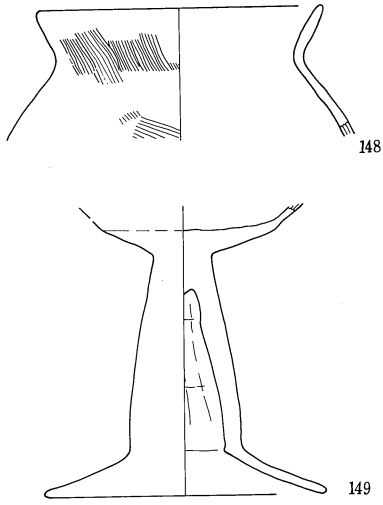
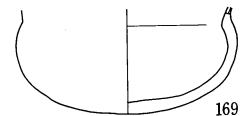
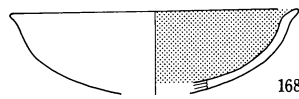
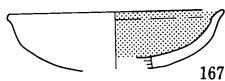
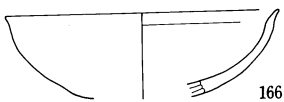
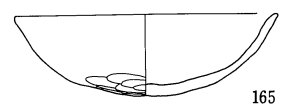
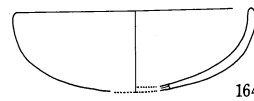
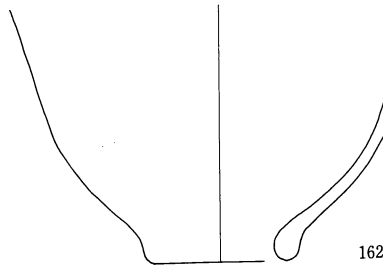
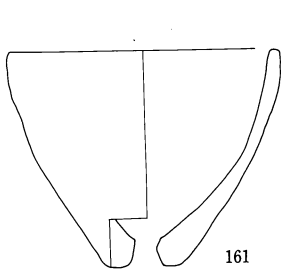
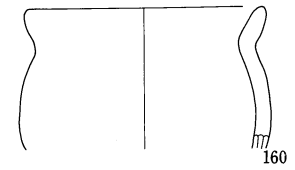
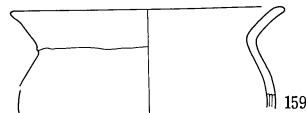
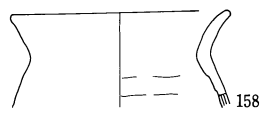
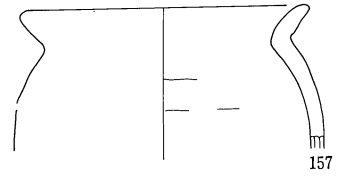
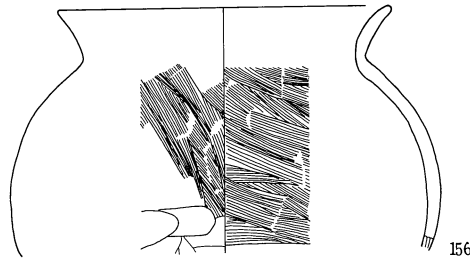
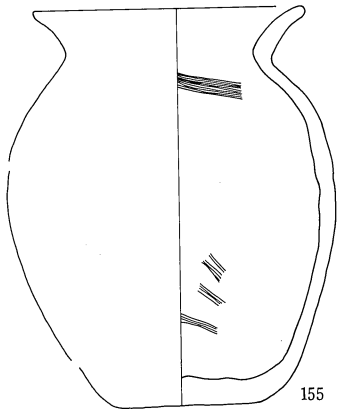


図93 古墳時代の土器 6 (屋代遺跡群㊦区SB)

S B 5088



S B 5094



S B 5097

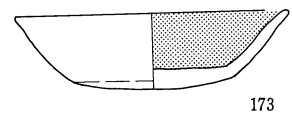
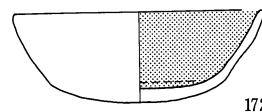
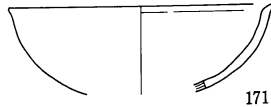
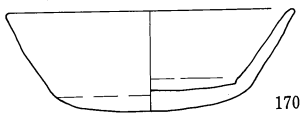


図94 古墳時代の土器 7 (屋代遺跡群⑤区SB)

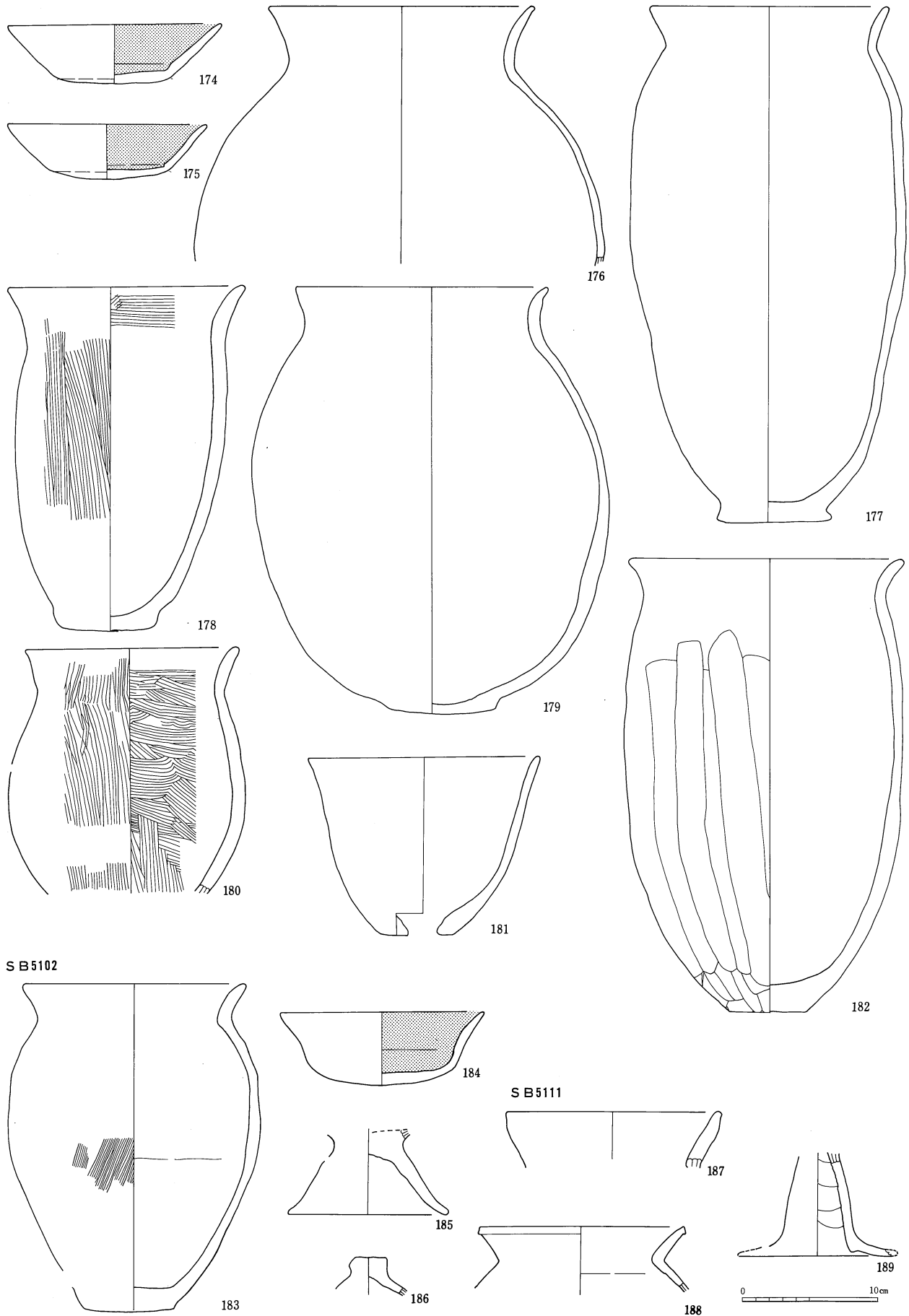


図95 古墳時代の土器 8 (屋代遺跡群⑤区SB)

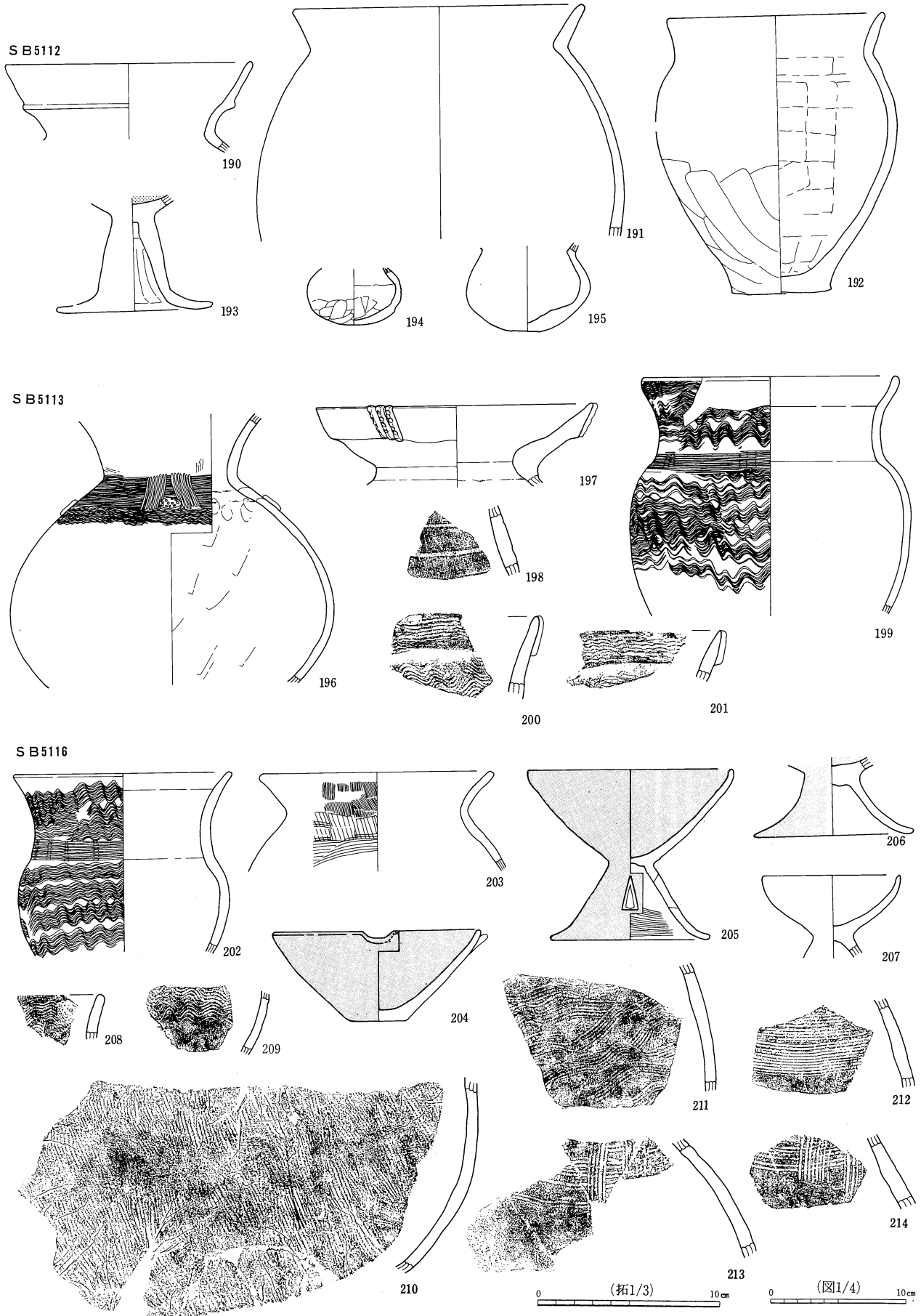


図96 古墳時代の土器 9 (屋代遺跡群⑤区SB)

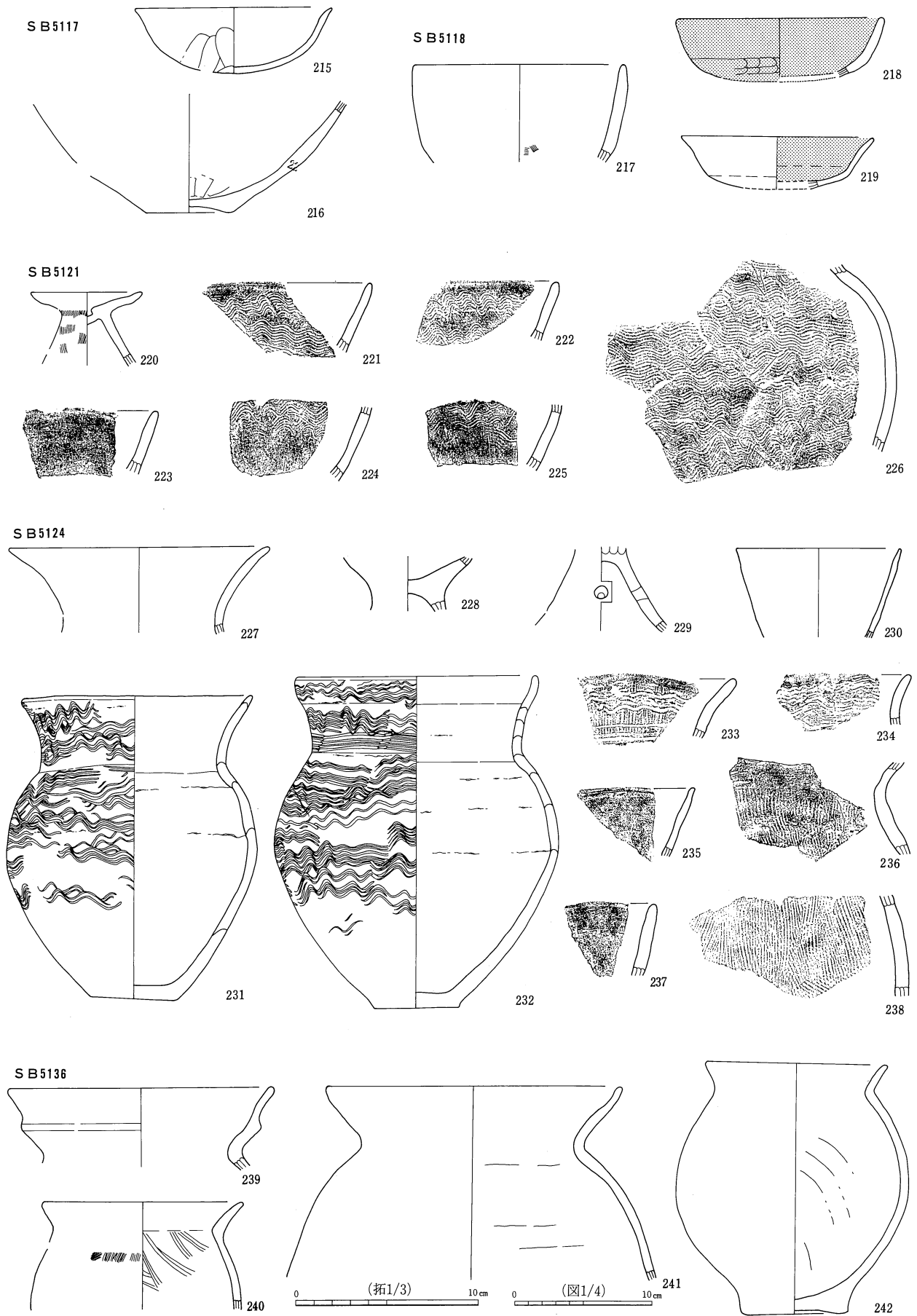


図97 古墳時代の土器 10 (屋代遺跡群⑤区SB)

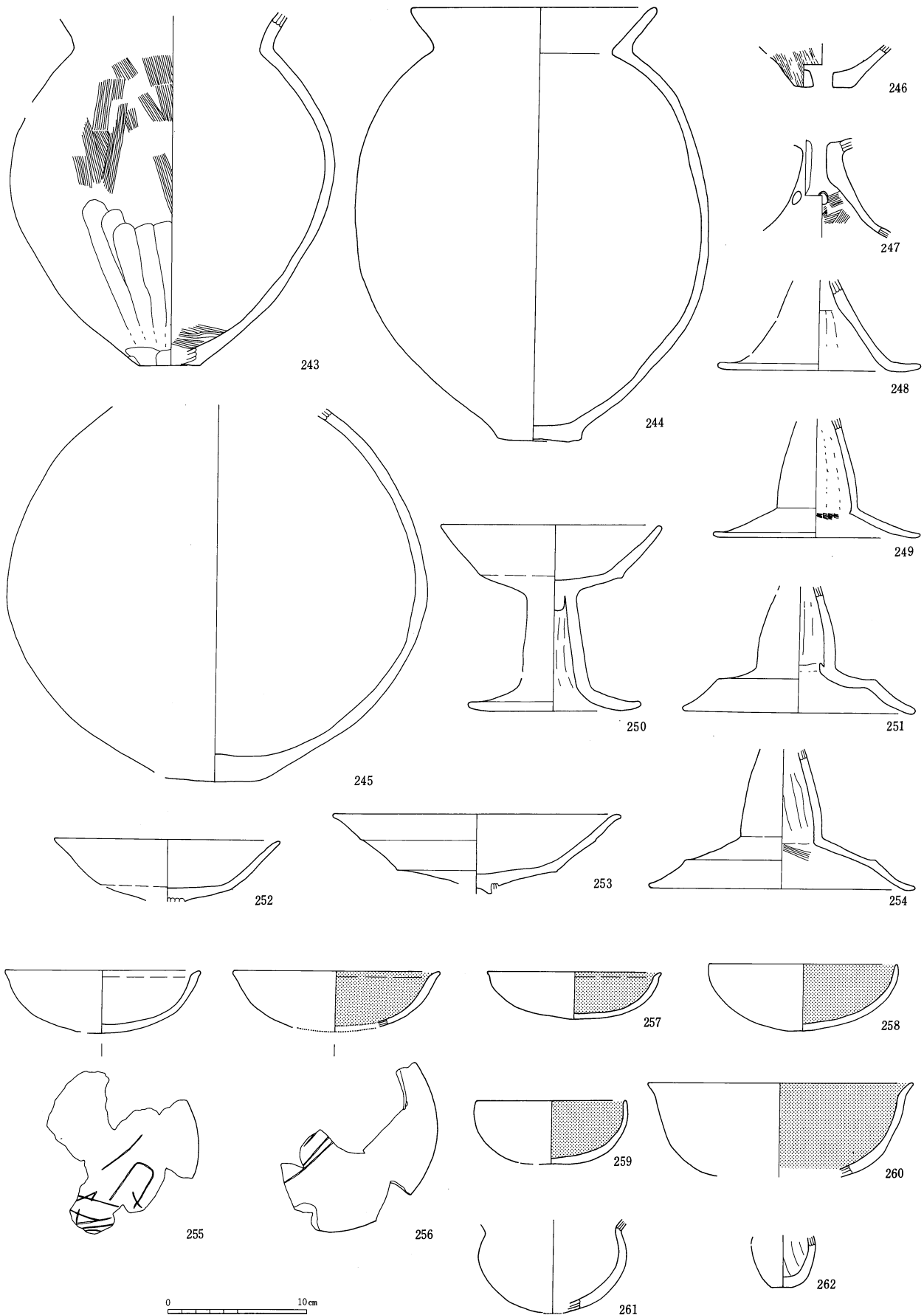


図98 古墳時代の土器 11 (屋代遺跡群⑤区SB)

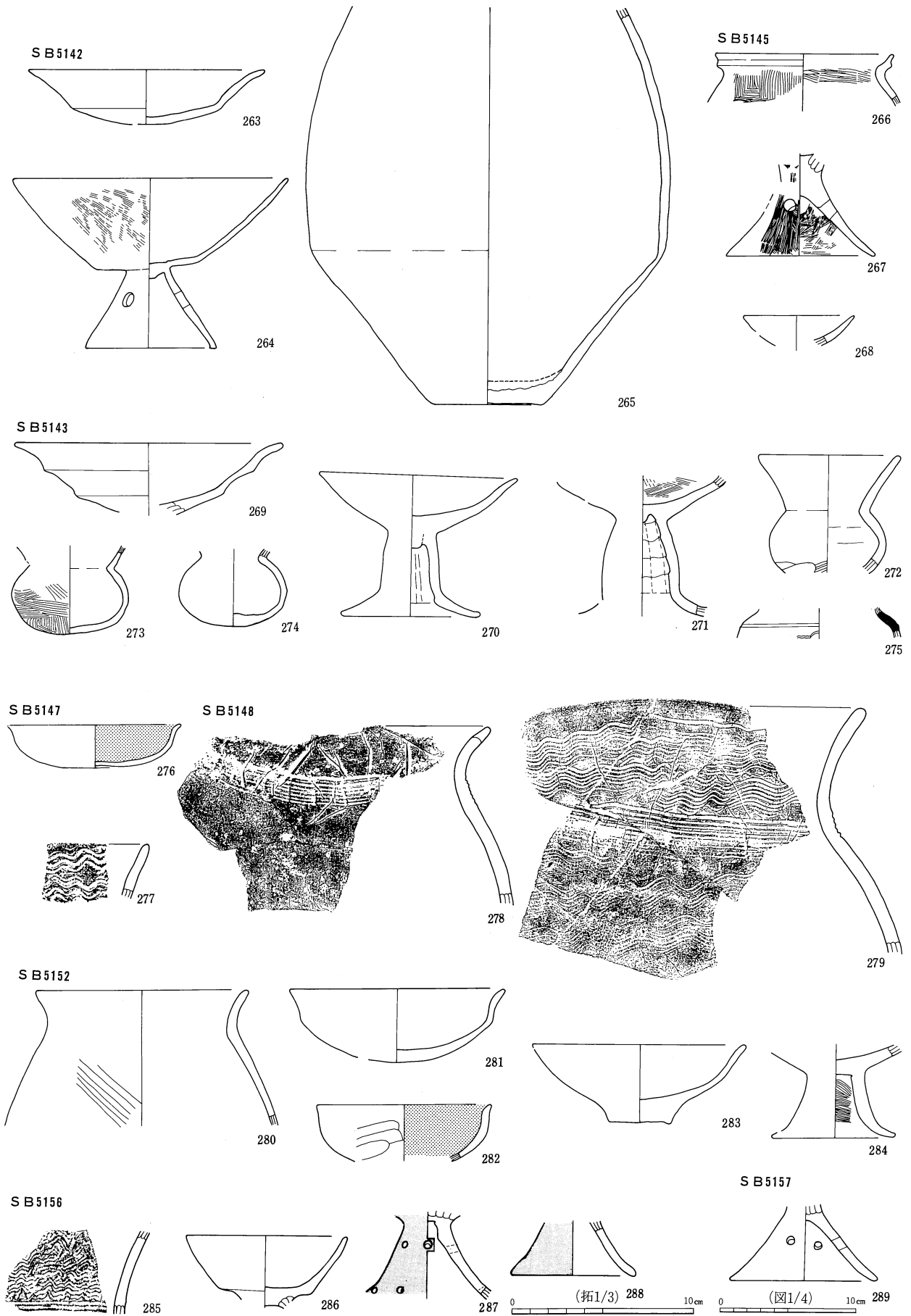


図99 古墳時代の土器 12 (屋代遺跡群㊦区SB)

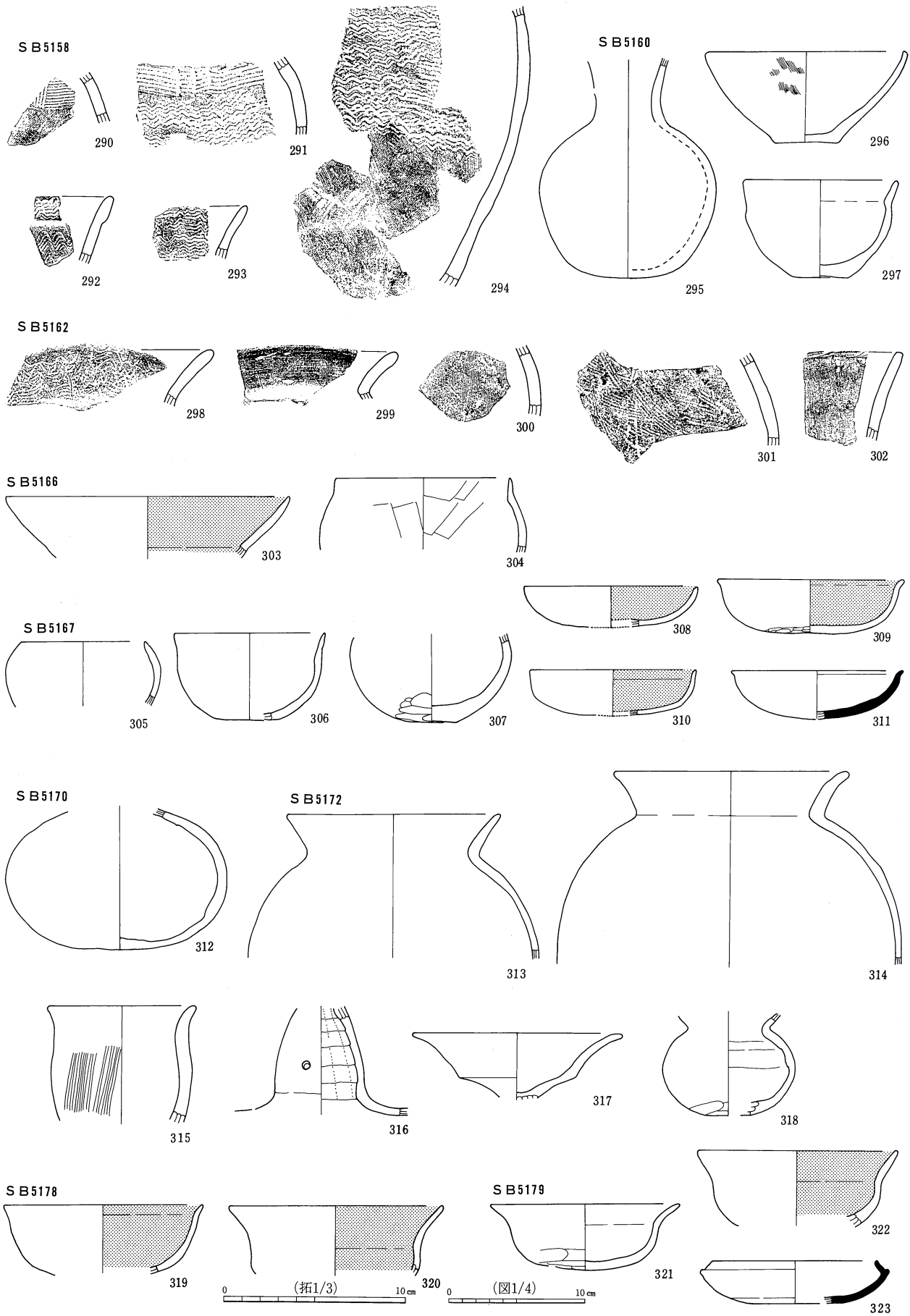


図100 古墳時代の土器 13 (屋代遺跡群⑤区SB)

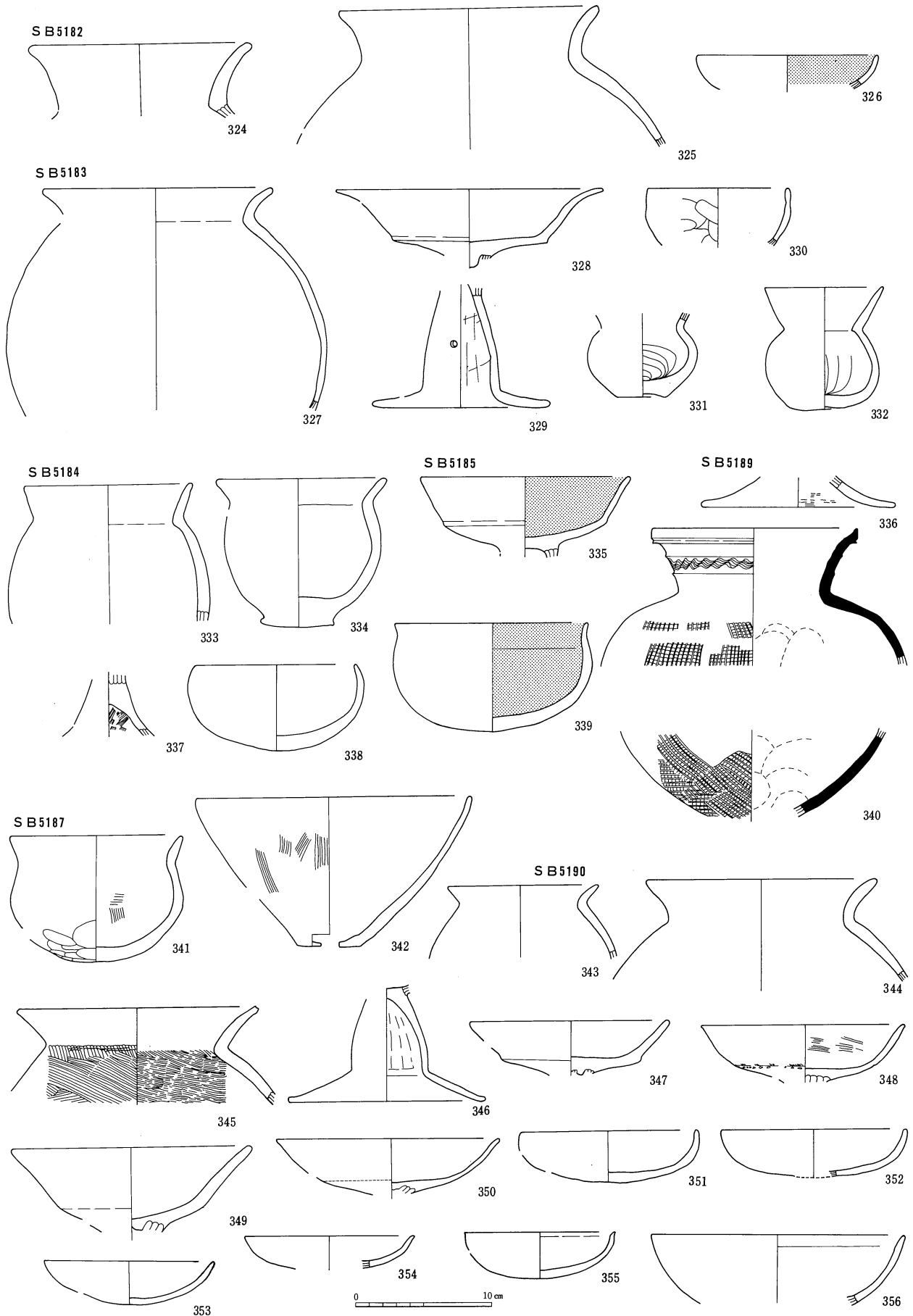


図101 古墳時代の土器 14 (屋代遺跡群⑤区SB)

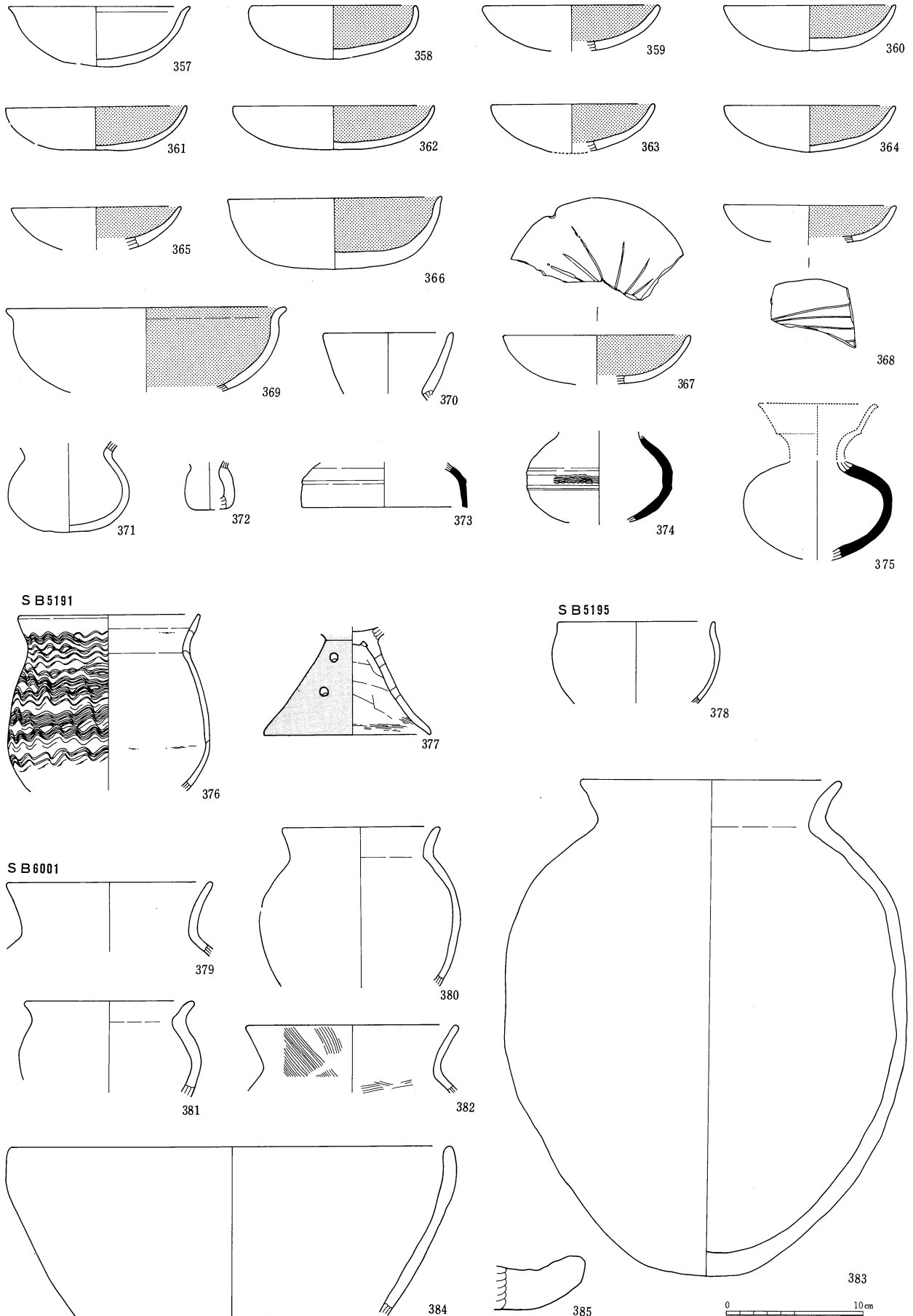


図102 古墳時代の土器 15 (屋代遺跡群⑤区SB)

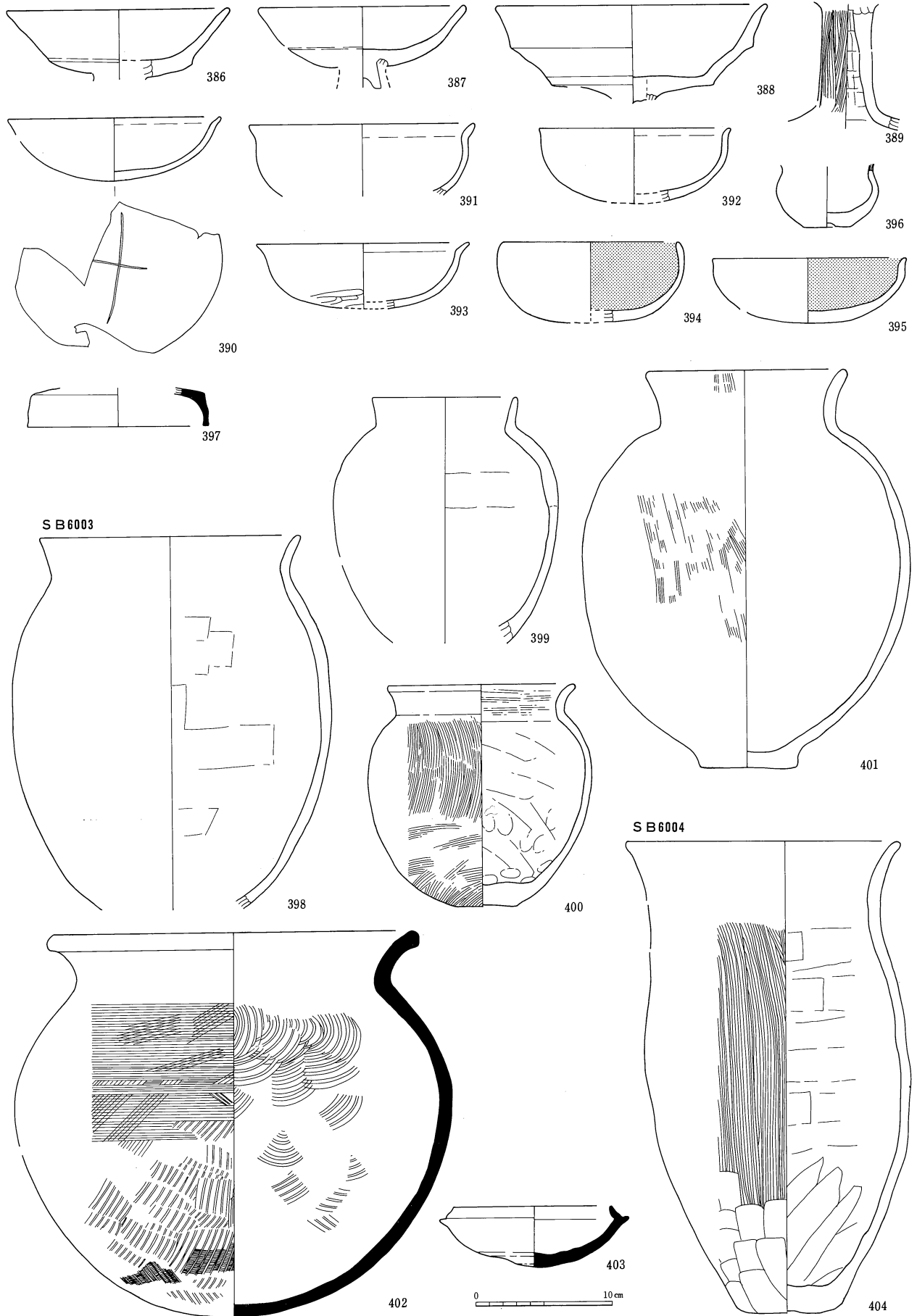


図103 古墳時代の土器 16 (屋代遺跡群⑤区SB)

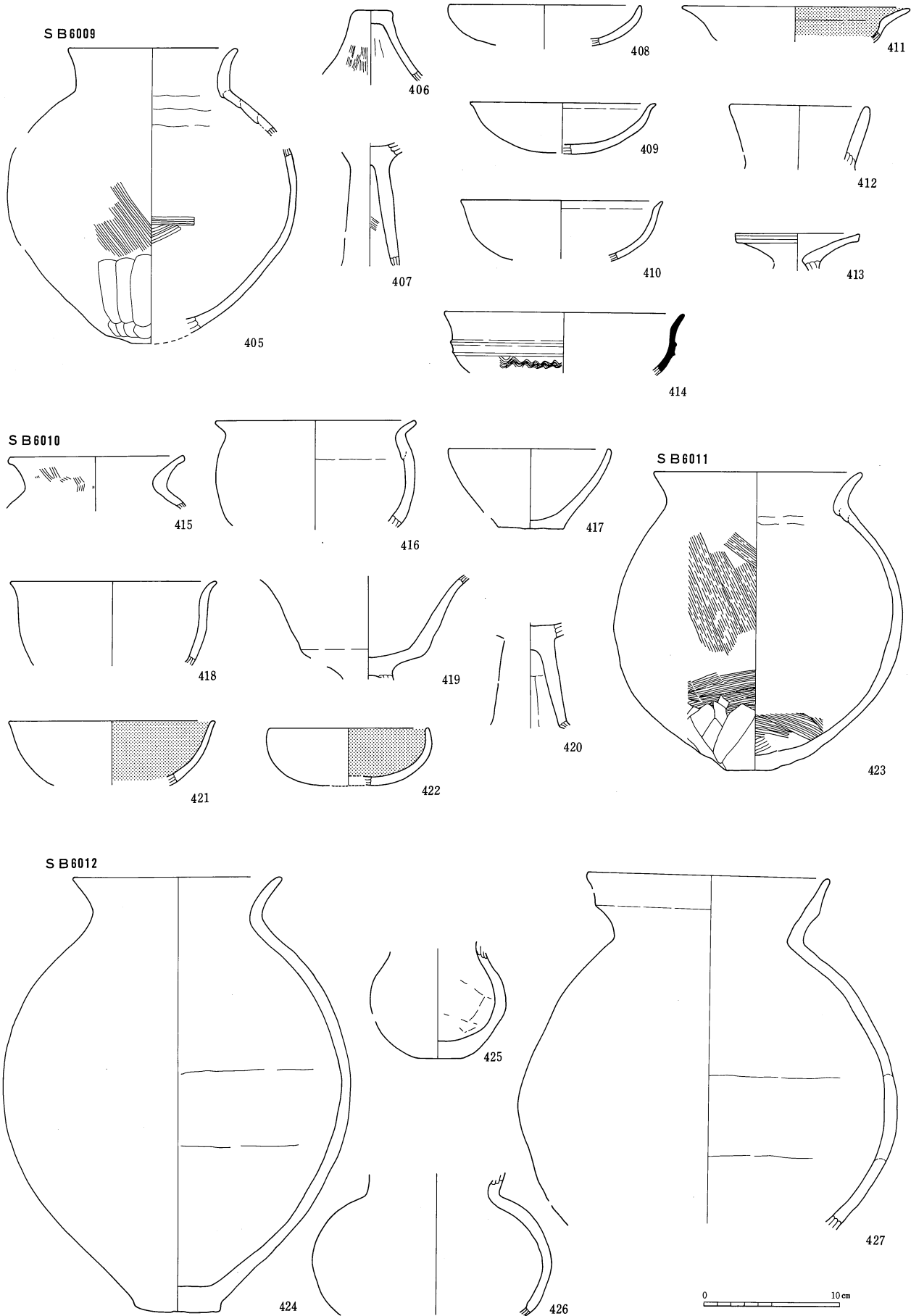


図104 古墳時代の土器 17 (屋代遺跡群⑤区SB)

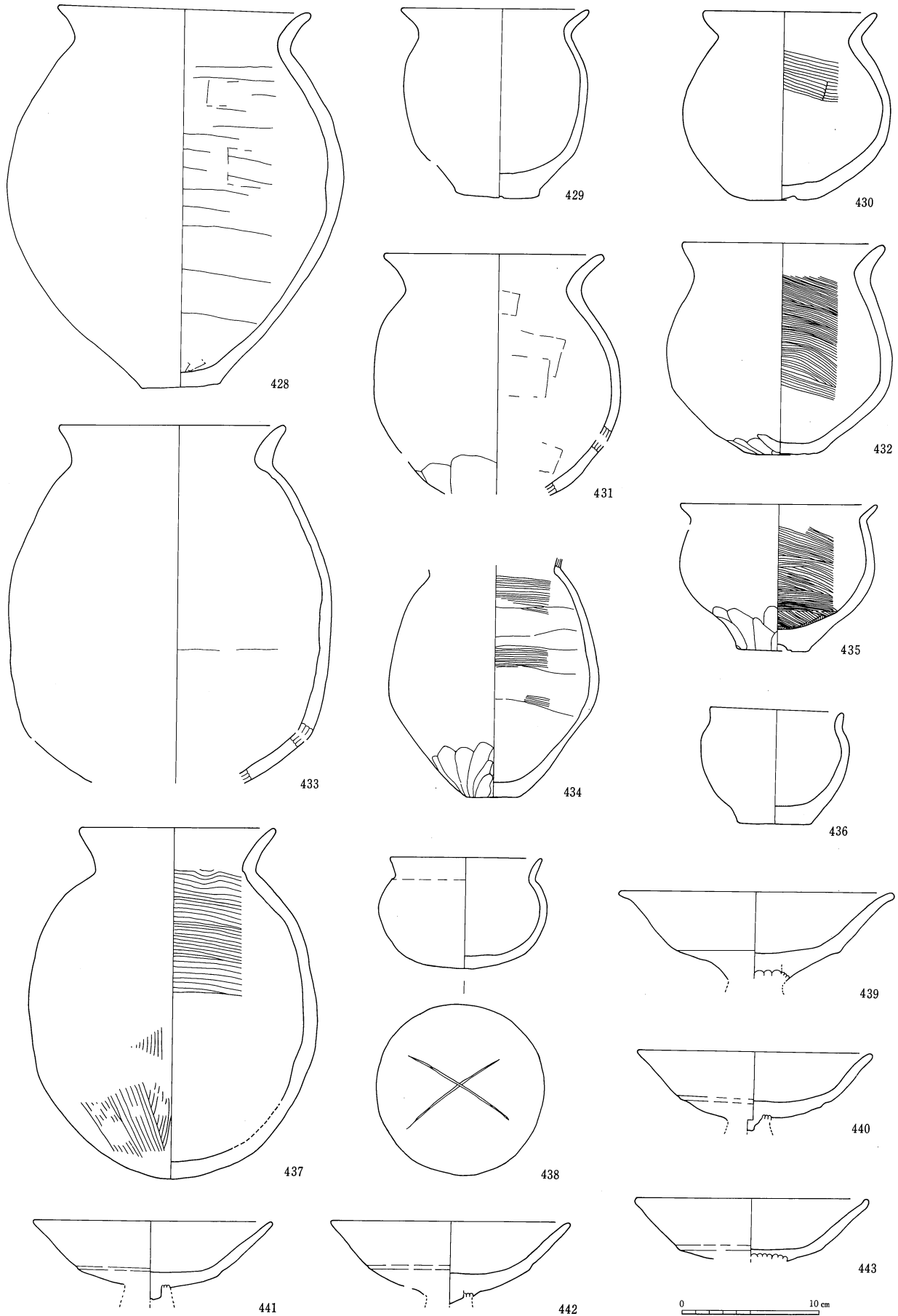


図105 古墳時代の土器 18 (屋代遺跡群⑤区SB)

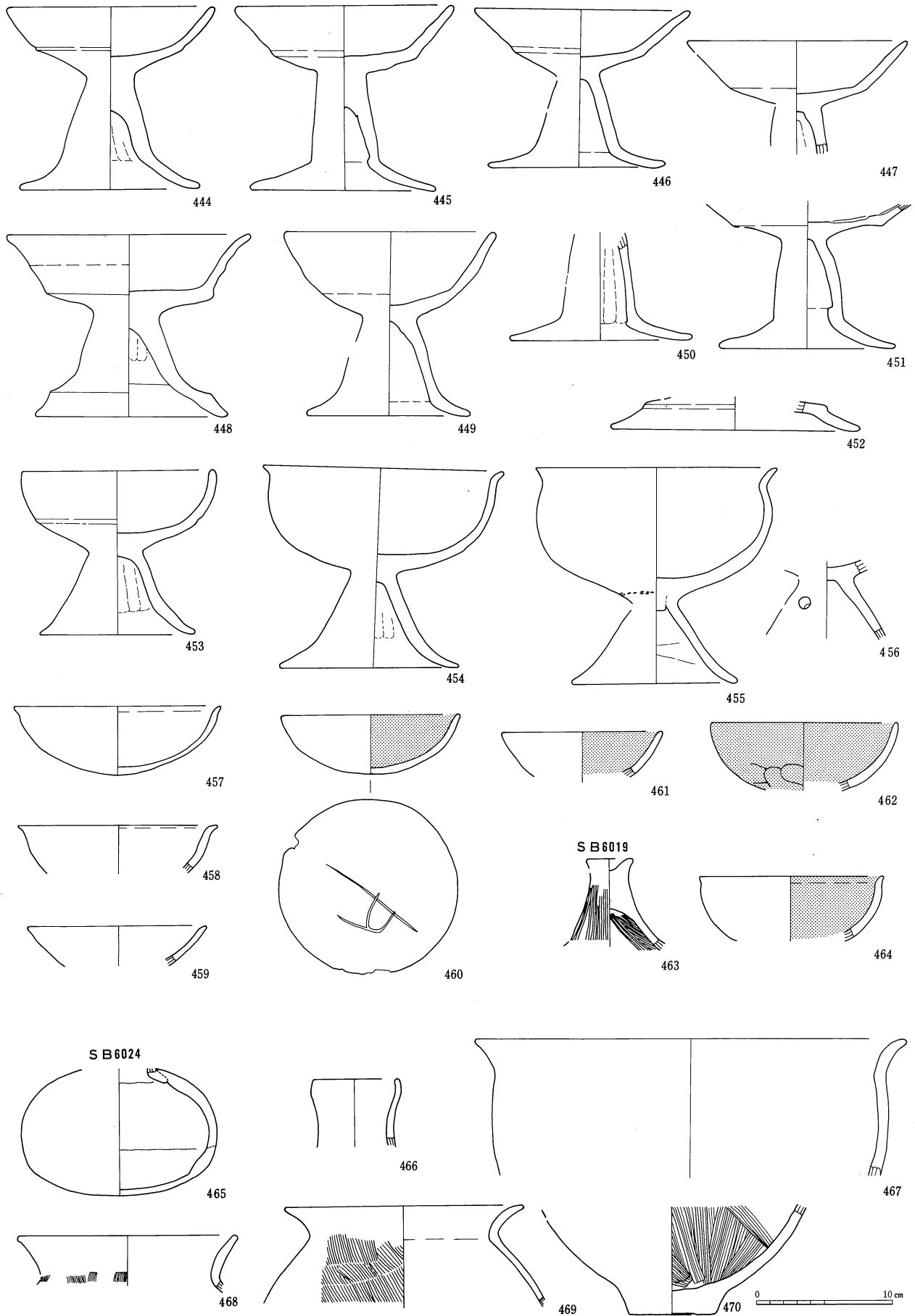


図106 古墳時代の土器 19 (屋代遺跡群⑤区SB)